沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第70集

円覚寺跡(2)

－右掖門地区・南側石牆地区の遺構確認調査報告書－

平成26(2014)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第70集

円覚寺跡(2)

－右掖門地区・南側石牆地区の遺構確認調査報告書－

平成26(2014)年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、平成18年度から22年度及び平成24年度までに実施した円覚寺跡の遺構確認調査の成果をまとめたものです。

昭和47（1972）年５月15日の本土復帰前から園比屋武御嶽石門（昭和32・1957年復元）、守礼門（昭和33・1958年復元）といった首里城周辺の整備事業は進められてきましたが、復帰後において実施された首里城並びに城郭等復元整備に伴って、より広い範囲での首里城周辺整備は進められております。これにより、威容を誇った琉球王国の王城とその周辺が在りし日の姿を蘇らせつつあり、沖縄の観光名所のひとつとして多くの観光客が訪れるようになりました。

首里城跡に隣接する円覚寺跡（1494年建立）は、昭和43（1968）年に総門並びに放生池が整備され、復帰後には国史跡として指定されました。現在、円覚寺一帯は県営公園の範囲に含まれ､国土交通省の国庫補助事業による復元整備が進められています。

復元整備に先立ち、平成９年度から13年度までの５か年間、文化庁の国庫補助事業による遺構確認調査が実施されました。平成18年度からは、前回調査では未調査であった範囲について復元整備に係る遺構確認調査を毎年実施しています。今回の調査により、円覚寺を取り囲む石牆や参道と考えられる遺構などが検出できました。また、出土品も多種に及び､寺院遺跡という性格を示すものの他､日用品などもみられます。

第二尚氏（1470年～1879年）の菩提寺であった円覚寺跡の発掘調査成果をまとめた本報告書が、学術研究などの資料として活用されるとともに、文化財保護への理解を深めることにもつながれば幸いです。

末筆になりましたが、事業の開始から丁寧な指導を頂きました文化庁並びに円覚寺跡復元整備委員会（委員長：福島駿介）、また、現地調査においてご協力下さった一般財団法人沖縄美ら島財団、発掘および資料整理の際にご指導、ご助言を賜りました諸先生方並びに本事業を進めるにあたりご協力を賜りました関係各位に対し、心から御礼申し上げます。

平成26（2014）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　下　地　英　輝

巻頭図版1　航空写真

（沖縄県教育庁文化財課 史料編集班 所蔵）

巻頭図版2　1945 年 4 月 2 日　米軍撮影（CV20-103-63）の首里城周辺

巻頭図版3　遺構検出状況　上：右掖門地区　　下：南側石牆地区

巻頭図版4　出土遺物　上：南側石牆地区出土
下：（左）漆製品・壺（中・右）初期沖縄産無釉陶器・香炉、壺

例　言

１．本報告書は、平成18（2006）年度～平成22（2010）年度及び平成24（2012）年度に実施した円覚寺跡の復元整備に伴う遺構確認調査の成果をまとめたものである。

２．発掘調査は、沖縄県教育庁文化財課の指導の下、平成18～22、24年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。資料整理作業については、平成24（2012）～平成25（2013）年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。両事業とも、文化庁の補助事業である。

３．資料整理作業にあたり、調査体制の項で記した多くの方々に資料の同定・整理指導をいただいた。記して謝意を表したい。

４．本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。

５．本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1／25,000地形図を使用した。

６．本報告書の編集は、調査体制の項で記した多くの方々の協力のもと金城貴子が行い、各章の執筆は次のとおり行った。また、この中で外部執筆及び共著の原稿については、文頭に氏名及び所属を記した。

金城貴子　　第１章、第２章第１節、第３章、第４章第１～２節・第３節14・15、第４節、第６章
山本正昭　　第２章第２節
井上奈々　　第４章第３節１、４～６、25～27
玉城 綾　　第４章第３節２・３・７・８
宮里知恵　　第４章第３節９～13、16・17
山城 勝　　第４章第３節18～24
本多貴之・湯浅健太・宮腰哲雄　第５章

７．本書に掲載した調査時の写真撮影は、各年度の調査担当者が行い、出土遺物の写真撮影は矢舟章浩、伊佐えりなが行った。

８．発掘調査で得られた出土品、図面、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　次

序
巻頭図版
例言

第１章　調査に至る経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1

第２章　位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査経過 …… 11
　第１節　発掘調査（平成 18～22 年度、平成 24 年度） …… 11
　第２節　資料整理（平成 24・25 年度） …… 12

第４章　遺構と遺物 …… 16
　第１節　右掖門地区の遺構と遺物 …… 16
　第２節　南側石牆地区の遺構と遺物 …… 38
　第３節　表土・撹乱層の遺物 …… 100
　　1　中国産青磁 …… 100
　　2　中国産白磁 …… 101
　　3　中国産染付・青磁染付 …… 103
　　4　中国産褐釉陶器・無釉陶器 …… 108
　　5　その他の中国産陶磁器 …… 109
　　6　東南アジア産陶磁器 …… 110
　　7　本土産磁器 …… 110
　　8　本土産陶器 …… 112
　　9　沖縄産施釉陶器 …… 114
　　10　初期沖縄産無釉陶器 …… 119
　　11　沖縄産無釉陶器 …… 120
　　12　陶質土器 …… 124
　　13　瓦質土器 …… 126
　　14　土器・硬質土器 …… 126
　　15　漆製品 …… 126
　　16　石製品 …… 128
　　17　玉製品 …… 129
　　18　骨製品 …… 130
　　19　貝製品 …… 130
　　20　円盤状製品 …… 131
　　21　煙管 …… 132
　　22　銭貨 …… 133
　　23　青銅製品 …… 133
　　24　鉄製品 …… 134
　　25　瓦 …… 135
　　26　塼 …… 143
　　27　ガラス製品 …… 151
　第４節　自然遺物 …… 151

第５章　円覚寺跡の遺物の科学分析の結果 …… 161

第６章　総括 …… 172

引用・参考文献 …… 175
報告書抄録 …… 181

図目次

第 1 図　沖縄本島の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第 2 図　円覚寺跡の位置及び周辺の遺跡・・ 8
第 3 図　首里古地図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第 4 図　円覚寺平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第 5 図　年度別発掘調査箇所・・・・・・・・・・・・ 13
第 6 図　右掖門地区調査箇所・・・・・・・・・・・・ 16
第 7 図　右掖門地区遺構図・・・・・・・・・・・・・・ 17
第 8 図　トレンチ１平面図・・・・・・・・・・・・・・ 20
第 9 図　トレンチ 19 遺構図・・・・・・・・・・・・・ 23
第 10 図　トレンチ 15・16 遺構図・・・・・・・・・ 26
第 11 図　右掖門地区出土遺物１・・・・・・・・・・ 34
第 12 図　右掖門地区出土遺物２・・・・・・・・・・ 36
第 13 図　南側石牆地区調査箇所・・・・・・・・・・ 38
第 14 図　トレンチ 22・23 遺構図・・・・・・・・・ 40
第 15 図　トレンチ 24 石列２検出箇所・・・・・ 42
第 16 図　石列２検出状況・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第 17 図　トレンチ 24 遺構図１・・・・・・・・・・・ 47
第 18 図　トレンチ 24 遺構図２・・・・・・・・・・・ 49
第 19 図　石積み１検出状況・・・・・・・・・・・・・ 51
第 20 図　漆製品検出箇所・・・・・・・・・・・・・・・ 54
第 21 図　漆製品検出状況・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第 22 図　地山確認調査箇所、土層図・・・・・・ 57
第 23 図　南側石牆地区出土遺物１・・・・・・・・ 76
第 24 図　南側石牆地区出土遺物２・・・・・・・・ 78
第 25 図　南側石牆地区出土遺物３・・・・・・・・ 81
第 26 図　南側石牆地区出土遺物４・・・・・・・・ 83
第 27 図　南側石牆地区出土遺物５・・・・・・・・ 85
第 28 図　南側石牆地区出土遺物６・・・・・・・・ 88
第 29 図　南側石牆地区出土遺物７・・・・・・・・ 89
第 30 図　南側石牆地区出土遺物８・・・・・・・・ 91
第 31 図　南側石牆地区出土遺物９・・・・・・・・ 93
第 32 図　南側石牆地区出土遺物 10・・・・・・・ 95
第 33 図　南側石牆地区出土遺物 11・・・・・・・ 97
第 34 図　南側石牆地区出土遺物 12・・・・・・・ 99
第 35 図　中国産青磁・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
第 36 図　中国産白磁・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102
第 37 図　中国産染付・青磁染付・・・・・・・・・ 106
第 38 図　中国産褐釉陶器・無釉陶器・・・・・ 108
第 39 図　その他の中国産陶磁器・・・・・・・・・ 110
第 40 図　本土産磁器・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
第 41 図　本土産陶器・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113
第 42 図　沖縄産施釉陶器１・・・・・・・・・・・・・ 116
第 43 図　沖縄産施釉陶器２・・・・・・・・・・・・・ 117
第 44 図　初期沖縄産無釉陶器・・・・・・・・・・・ 119
第 45 図　沖縄産無釉陶器１・・・・・・・・・・・・・ 121
第 46 図　沖縄産無釉陶器２・・・・・・・・・・・・・ 122
第 47 図　陶質土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
第 48 図　瓦質土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
第 49 図　漆製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
第 50 図　石製品１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 128
第 51 図　石製品２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
第 52 図　玉製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
第 53 図　骨製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
第 54 図　貝製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
第 55 図　円盤状製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
第 56 図　煙管・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
第 57 図　銭貨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133
第 58 図　青銅製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133
第 59 図　鉄製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
第 60 図　瓦１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
第 61 図　瓦２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
第 62 図　瓦３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
第 63 図　瓦４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
第 64 図　塼１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
第 65 図　塼２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
第 66 図　塼３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 148
第 67 図　ガラス製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
第 68 図　漆液の主要な脂質成分・・・・・・・・・ 163
第 69 図　塗膜の熱分解-GC/MS 分析の結果
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164
第 70 図　塗膜１層目の熱分解-GC/MS 分析
の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164
第 71 図　赤色塗膜の元素分析・・・・・・・・・・・ 165
第 72 図　組成図　土器胎土の岩石鉱物組成
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第 73 図　赤色塗膜のクロスセクション・・・ 169
第 74 図　赤色塗膜の元素分析・・・・・・・・・・・ 169
第 75 図　塗膜の熱分解-GC/MS 分析(m/z60)
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170

図版目次

巻頭図版１　航空写真
巻頭図版２　1945 年 4 月 2 日米軍撮影(CV20-103-63)の首里城周辺
巻頭図版３　遺構検出状況　上：右掖門地区　下：南側石牆地区
巻頭図版４　出土遺物　上：南側石牆地区出土
下：(左)漆製品・壺　(中・右)初期沖縄産無釉陶器・香炉、壺

図版 1　右掖門地区遺構検出状況１…… 20
図版 2　右掖門地区遺構検出状況２…… 22
図版 3　右掖門地区遺構検出状況３…… 24
図版 4　右掖門地区遺構検出状況４…… 25
図版 5　右掖門地区出土遺物１…… 35
図版 6　右掖門地区出土遺物２…… 37
図版 7　南側石牆地区遺構検出状況１…… 39
図版 8　南側石牆地区遺構検出状況２…… 41
図版 9　南側石牆地区遺構検出状況３…… 46
図版 10　南側石牆地区遺構検出状況４…… 53
図版 11　漆製品出土状況…… 54
図版 12　南側石牆地区地山確認調査状況…… 56
図版 13　南側石牆地区出土遺物１…… 77
図版 14　南側石牆地区出土遺物２…… 79
図版 15　南側石牆地区出土遺物３…… 80
図版 16　南側石牆地区出土遺物４…… 82
図版 17　南側石牆地区出土遺物５…… 84
図版 18　南側石牆地区出土遺物６…… 86
図版 19　南側石牆地区出土遺物７…… 87
図版 20　南側石牆地区出土遺物８…… 90
図版 21　南側石牆地区出土遺物９…… 92
図版 22　南側石牆地区出土遺物 10…… 94
図版 23　南側石牆地区出土遺物 11…… 96
図版 24　南側石牆地区出土遺物 12…… 98
図版 25　南側石牆地区出土遺物 13…… 99
図版 26　中国産青磁…… 101
図版 27　中国産白磁…… 103
図版 28　中国産染付・青磁染付…… 107
図版 29　中国産褐釉陶器・無釉陶器…… 109
図版 30　その他の中国産陶磁器…… 110
図版 31　本土産磁器…… 112
図版 32　本土産陶器…… 113
図版 33　沖縄産施釉陶器１…… 117
図版 34　沖縄産施釉陶器２…… 118
図版 35　初期沖縄産無釉陶器…… 120
図版 36　沖縄産無釉陶器１…… 123
図版 37　沖縄産無釉陶器２…… 124
図版 38　陶質土器…… 125
図版 39　瓦質土器…… 126
図版 40　漆製品…… 128
図版 41　石製品１…… 128
図版 42　石製品２…… 130
図版 43　玉製品…… 130
図版 44　骨製品…… 131
図版 45　貝製品…… 131
図版 46　円盤状製品…… 132
図版 47　煙管…… 132
図版 48　銭貨…… 133
図版 49　青銅製品…… 134
図版 50　鉄製品…… 135
図版 51　瓦１…… 141
図版 52　瓦２…… 142
図版 53　塼１…… 148
図版 54　塼２…… 149
図版 55　塼３…… 150
図版 56　ガラス製品…… 151
図版 57　貝類遺体…… 154
図版 58　脊椎動物遺体１…… 157
図版 59　脊椎動物遺体２…… 158
図版 60　「赤色の木片」…… 161
図版 61　「軟質の焼物・壺」片…… 161
図版 62　分析土器資料(外面)…… 161
図版 63　分析土器資料(内面)…… 161
図版 64　赤色塗膜のクロスセクション…… 164
図版 65　漆塗膜の状況１…… 165
図版 66　漆塗膜の状況２…… 165
図版 67　漆塗膜の状況３…… 165
図版 68　赤色塗膜のクロスセクション…… 168
図版 69　南側石牆地区…… 173
図版 70　右掖門地区…… 174

表目次

第 1 表　トレンチ名称一覧 ····· 15
第 2 表　遺構一覧 ····· 15
第 3 表　右掖門地区(平成 20 年度)
トレンチ 16 土層一覧 ····· 21
第 4 表　右掖門地区(平成 22 年度)
トレンチ 19 土層一覧 ····· 21
第 5 表　右掖門地区遺物出土状況 ····· 28
第 6 表　右掖門地区遺物観察一覧 ····· 31
第 7 表　南側石牆地区(平成 22 年度)
トレンチ 22・23 土層一覧 ····· 39
第 8 表　南側石牆地区(平成 24 年度)
トレンチ 24 土層一覧 ····· 45
第 9 表　南側石牆地区遺物出土状況 ····· 62
第 10 表　南側石牆地区遺物観察一覧 ····· 67
第 11 表　中国産青磁出土状況 ····· 100
第 12 表　中国産青磁観察一覧 ····· 100
第 13 表　中国産白磁出土状況 ····· 101
第 14 表　中国産白磁観察一覧 ····· 102
第 15 表　中国産染付・青磁染付出土状況
····· 104
第 16 表　中国産染付・青磁染付観察一覧
····· 104
第 17 表　中国産褐釉陶器・無釉陶器出土
状況 ····· 108
第 18 表　中国産褐釉陶器・無釉陶器観察
一覧 ····· 108
第 19 表　その他の中国産陶磁器出土状況
····· 109
第 20 表　その他の中国産陶磁器観察一覧
····· 109
第 21 表　本土産磁器出土状況 ····· 110
第 22 表　本土産磁器観察一覧 ····· 111
第 23 表　本土産陶器出土状況 ····· 112
第 24 表　本土産陶器観察一覧 ····· 112
第 25 表　沖縄産施釉陶器出土状況 ····· 114
第 26 表　沖縄産施釉陶器観察一覧 ····· 114
第 27 表　初期沖縄産無釉陶器出土状況
····· 119
第 28 表　初期沖縄産無釉陶器観察一覧
····· 119
第 29 表　沖縄産無釉陶器出土状況 ····· 120
第 30 表　沖縄産無釉陶器観察一覧 ····· 120
第 31 表　陶質土器観察一覧 ····· 124
第 32 表　陶質土器出土状況 ····· 125
第 33 表　瓦質土器出土状況 ····· 126
第 34 表　貝製品観察一覧 ····· 131
第 35 表　青銅製品観察一覧 ····· 134
第 36 表　鉄製品観察一覧 ····· 134
第 37 表　大和系瓦出土状況 ····· 135
第 38 表　明朝系瓦当出土状況 ····· 135
第 39 表　明朝系丸瓦・平瓦出土状況 ····· 136
第 40 表　瓦観察一覧 ····· 137
第 41 表　塼出土状況 ····· 144
第 42 表　塼観察一覧 ····· 145
第 43 表　ガラス製品出土状況 ····· 151
第 44 表　貝類出土状況 1（巻貝）····· 152
第 45 表　貝類出土状況 2（二枚貝）····· 153
第 46 表　魚類出土一覧 ····· 155
第 47 表　ニワトリ出土一覧 ····· 155
第 48 表　トリ出土一覧 ····· 155
第 49 表　イヌ出土一覧 ····· 156
第 50 表　ブタ出土一覧 ····· 156
第 51 表　ウシ出土一覧 ····· 156
第 52 表　ヤギ出土一覧 ····· 156
第 53 表　種不明出土一覧 ····· 156
第 54 表　遺物出土状況 ····· 159
第 55 表　土器胎土中の岩石鉱物 ····· 166

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

昭和47年（1972）年５月15日に国指定史跡となった円覚寺跡は、1492年から約３年の歳月を経て建造された臨済宗の寺院である。その創建は、尚真王（第二尚氏王統第三代国王：1477～1526年迄即位)が父親である尚円王の御霊を祀るために建立したと伝えられ､第二尚氏の菩提寺でもあった。

境内には数多くの建造物があり、その伽藍配置等をも含めた建物群の学術的な価値等から昭和８（1933）年には国宝（建造物）に指定されていた。しかしながら、先の沖縄戦により境内を囲う石牆の一部を残し、建物等は灰燼に帰し、国宝指定も解除となった。

また、戦後の昭和25（1950）年には首里城内を中心とした一帯に旧琉球大学が設置され、円覚寺跡内には教官宿舎が建設された。その後、教官宿舎が移築されると昭和40（1965）年には境内背後の小高い丘陵を削平し、造成してグラウンドが建設された。

その後、戦災で破壊された文化財の復元整備を、終戦後に発足した琉球政府文化財保護委員会が中心となり、昭和31（1956）年に園比屋武御嶽を嚆矢として開始された。円覚寺跡についても、昭和42（1967）年に放生橋、昭和43（1968）年に総門、放生池、さらには放生橋から三門に上がる石段等が整備された。そして昭和47（1972）年の本土復帰に伴い、国の史跡に指定され、昭和57（1982）年には、琉球大学が首里城及びその周辺から西原町へ移転完了したことに伴い、円覚寺一帯は県営公園に位置付けられ、首里城をはじめ、周辺の文化遺産の整備が進められていく。これらの復元事業に並行して、円覚寺跡についても往時の姿を復元することを目的に、平成９（1997）年～平成13（2001）年までの５か年間、国からの補助を受け、沖縄県教育庁文化課及び沖縄県立埋蔵文化財センターによる遺構確認調査が行われた。その調査成果を基に、翌年の平成14（2002）年度から10か年計画で円覚寺跡保存修理工事が始まり、円覚寺跡の外周を囲う石牆の復元整備を実施している。整備にあたっては、考古学、歴史学、土木、建築など各分野の専門家を構成員とする整備委員会を組織し、当委員会にて整備のあり方について議論を重ね、整備方針を決めている。その方針に沿う形で整備計画が進められている。平成18（2006）年度以降からは、整備対象となっており発掘調査が必要な箇所において、遺構の復元整備に必要な情報を得る目的で発掘調査を行った。遺構確認調査及び復元整備は現在も継続して行われている。

今回報告の対象となる調査は、平成18（2006）年度から平成22（2010）年度及び平成24（2012）年度に沖縄県教育庁文化課指導の下、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した調査成果をまとめたものである。

第２節　調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成18（2006）年度から平成22（2010）年度及び平成24（2012）年度に実施し、調査報告書作成に係る資料整理業務は、平成24（2012）年度から平成25（2013）年度に実施した。その体制は次のとおりである（職名は当時のもの）。

平成18（2006）年度（発掘調査）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会　教育長　仲宗根用英

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化課　課　長　千木良芳範、課長補佐　島袋 洋
記念物係　主幹兼係長　盛本勲、指導主事　金城 透

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　田場清志、副所長兼庶務課長　瑞慶覧康博

庶務課　主任　城間奈津子
調査課　課長　岸本義彦、主任　仲座久宜

発掘調査作業　沖縄県立埋蔵文化財センター　調査課　主任　仲座久宜
発 掘 調 査 作 業 員　大嶺愛子、松門 孝、宮城悦子

平成19（2007）年度（発掘調査）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会　教育長　仲村守和

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化課　課　長　千木良芳範、副参事　比嘉敏子
記念物班　班長　島袋 洋、専門員 新垣 力

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
参事兼所長　名嘉政修、副所長兼庶務課長　瑞慶覧康博
庶務課　主査　山田恵美子
調査課　課長　岸本義彦、主任　仲座久宜

発掘調査作業　沖縄県立埋蔵文化財センター　調査課　主任　仲座久宜
発 掘 調 査 作 業 員　安次富マサ子、石川栄有、浦添美和子、
大嶺愛子、川上益子、比嘉賀商、比嘉洋子、
松門 孝、宮城悦子、與那嶺勢津子

平成20（2008）年度（発掘調査）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会　教育長　仲村守和

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化課　課　長　千木良芳範
記念物班　班長　島袋 洋、指導主事　宮里 潤

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター　参事兼所長　名嘉政修
総務班　班長　嘉手苅勤、主査　山田恵美子
調査班　班長　岸本義彦、主任　仲座久宜

発掘調査作業　沖縄県立埋蔵文化財センター　調査班　主任　仲座久宜
発 掘 調 査 作 業 員　安次富マサ子、大嶺愛子、川上益子、栗山盛義、
樋口光子、比嘉賀商、又吉志麻子、松門 孝、
宮城悦子、安村重保

平成21（2009）年度（発掘調査）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会　教育長　金武正八郎

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化課　課　長　大城 慧
記念物班　班長　島袋 洋、指導主事 宮里 潤

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター　参事兼所長　玉栄 直
総務班　班長 嘉手苅勤、主任　村吉由美子

調査班　班長 金城亀信、主任　山本正昭

発掘調査作業　沖縄県立埋蔵文化財センター　調査班　主任　山本正昭
発 掘 調 査 作 業 員　安里勝則、大嶺愛子、久我谷渓太、呉我フジ子
砂辺里恵、玉城初美、中塚末子、比嘉洋子、
松門 孝、安村重保、吉田 洋、與那嶺勢津子

平成22（2010）年度（発掘調査）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会　教育長　金武正八郎

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化課　課　長　大城 慧
記念物班　班長　島袋 洋、指導主事　宮里 潤

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター　所長　守内泰三
総務班　班長　嘉手苅勤、主査　本永 恵、主査　恩河朝子、
主事（臨任）玉城飛鳥
調査班　班長　金城亀信、主任　新垣 力、専門員　金城貴子

発掘調査作業　沖縄県立埋蔵文化財センター　調査班　主任　新垣 力、専門員　金城貴子
発 掘 調 査 作 業 員　上江洲由昇、浦崎京子、大嶺愛子、比嘉洋子、
樋口光子、安村重保、與儀良太、與那嶺勢津子

平成24（2012）年度（発掘調査及び資料整理）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会　教育長　大城 浩

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化財課　課　長　長堂嘉一郎、副参事　島袋 洋
記念物班　班長 盛本 勲、主任　山本正昭

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター　所長　崎濱文秀
総務班　班長　荻堂治邦、主査　西島康二、主査　恩河朝子
調査班　班長　金城亀信、専門員　金城貴子

発掘調査作業　沖縄県立埋蔵文化財センター　調査班 専門員 金城貴子
文 化 財 調 査 嘱 託 員　伊禮頼子、宮里知恵
発 掘 調 査 作 業 員　上江洲由昇、浦崎京子、大嶺愛子、當真 哲、
比嘉洋子、樋口光子、安村重保、與那嶺勢津子
調 査 協 力 者　沖縄県立埋蔵文化財センター　調査班 専門員（臨任）大城 歩、宮城明恵

資料整理作業　資 料 整 理 嘱 託 員　島袋久美子、宮良佐弥香
整 理 協 力 者　文 化 財 調 査 嘱 託 員　伊禮頼子、井上奈々、比嘉優子、宮里知恵
資 料 整 理 嘱 託 員　新垣裕子、新垣利津代、市川里恵、喜屋武朋子、
平良貴子、玉城実子、譜久村泰子、又吉純子

平成25（2013）年度（資料整理）

事 業 主 体　沖縄県教育委員会　教育長　諸見里明

事 業 所 管　沖縄県教育庁文化課　課　長　新垣悦男
記念物班　班長 盛本 勲、主任専門員 山本正昭

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター 所長　下地英輝、副参事　島袋 洋
総務班　班長 新垣勝弘、主査 西島康二、主任 平良広海
調査班　班長 金城亀信、主任 金城貴子、専門員（臨任）山城 勝

資料整理作業　資 料 整 理 嘱 託 員　伊集夏子、市川里恵、喜屋武朋子、宮城初枝
整 理 協 力 者　副参事　島袋 洋、調査班 班長　金城亀信、主任専門員　仲座久宜、
主任　新垣 力、主任専門員　瀬戸哲也、主任専門員　知念隆博、
主任　大堀皓平
文 化 財 調 査 嘱 託 員　天久瑞香、井上奈々、玉城 綾、宮里知恵
資 料 整 理 嘱 託 員　新垣裕子、新垣利津代、具志みどり、平良貴子、
譜久村泰子、又吉純子、目島直美、山口こずえ、
山城美奈、瑞慶覧尚美

資料整理指導・助言・協力機関
池田榮史（琉球大学）
大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
倉成多郎（那覇市立壺屋焼物博物館）
関 明恵（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター）
関 一之（鹿児島県姶良市教育委員会）
勢理客智也（南城市教育委員会）
勢理客宣子（南城市教育委員会）
當眞嗣一（元沖縄県立博物館館長）
福島駿介（琉球大学名誉教授）
本多貴之（明治大学理工学部）
宮腰哲雄（明治大学理工学部）
宮里正子（浦添市美術館館長）
渡辺芳郎（鹿児島大学）
パリノ・サーヴェイ株式会社
有限会社　ティガネー

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

円覚寺跡は、沖縄本島南部の那覇市首里当蔵２丁目１番地に所在する。那覇市街北東部の琉球石灰岩から形成される首里台地に位置する。首里台地は北方に標高100～200ｍの末吉山から虎頭山、弁ヶ嶽に至る丘陵を頂き、南方に金城川が流れる凹地、さらには識名丘陵、東方は南風原町との境界を流れるナゲーラ川、西方は真嘉比川に囲まれ、他地域とは隔絶されている。このような自然の障壁に囲まれた首里台地の最高部には首里城が築かれ、円覚寺跡はその北側に隣接する谷地に立地している。円覚寺跡は首里にある寺院の中で最も首里城に隣接していることから、首里王府と政治的、儀礼的な関わりが密接にあったことをうかがい知ることができる。

円覚寺跡のかつての様子は「首里古地図（1700年代初）」（第３図）に見て取ることができる。円覚寺の東隣には「円覚寺松尾」と称する琉球松が植栽された小山があり、さらにその東側には「蓮小堀（りんぐむい）」と称する池があった。南側に隣接する首里城との間には首里城歓会門と首里赤田を結ぶ「城の下（ぐすくのしちゃ）」と称される石畳道があり、西側には円鑑池、北西側には国学孔子廟が隣接していた。さらに円覚寺跡の北東一帯には廣徳寺、奥禅寺、天王寺といった寺院が集中して設置されていることから、近世期の円覚寺北東側は寺町的な景観を呈していたと考えられる。近代に入ると、北側に沖縄師範学校、工業学校が設置されていたものの、旧状は比較的良好に保っていたと考えられる。しかし、沖縄戦による破壊と戦後の琉球大学設置、そして周辺地域の都市化によって蓮小堀は埋め立てられ、北東部の寺院は住宅街に変貌した。現在は、円鑑池及び東側の龍潭を除き、旧状はほぼ留めていない。

第２節　歴史的環境

円覚寺が立地する首里城城下の起源は定かではない。しかし首里城の過去における発掘調査から、14世紀には基壇建物が存在し、首里城の東側（現首里杜館）には14世紀後半頃の集落が見られることから（沖縄県教育委員会2000）、14世紀段階には首里城とそれに伴う城下集落が出現していたことが想定される。1429年の尚巴志による三山統一で初めて沖縄本島内に統一政権が樹立され、その中心地を首里とした。しかし政権内部が脆弱であることによってわずか30年弱で金丸（後の尚円：第二尚氏初代王）に政権は奪われてしまう。政権が安定するのは第二尚氏王統第三代尚真王が即位する15世紀後半以降のことであり、国内における内政改革並びに首里・那覇周辺の整備を積極的に行っていくようになるのもこの頃である。

他方で、14世紀後半頃から日本本土の禅宗僧が明や朝鮮との通交を仲介するようになり、15世紀前半から中頃にかけて禅宗寺院の建立が相次いだ。中継貿易が琉球王国にとって大きな王府財源となっていたために、それを円滑に進めていくための禅宗僧の確保、それに伴う寺院建立は必然の成り行きであったといえる。15世紀後半に禅宗僧を外交担当とする対日貿易の体制も整備されていくと、琉球王府による仏教政策も質的充実が図られていった。と共にその禅宗僧の受け皿として天界寺や天王寺のような大規模寺院が造営され、更なる海外交易の拡充が行われていくようになる。このような状況下で円覚寺は1492年に竣工され、約三年という大事業の末に1494年、七堂伽藍が完備した禅宗寺院として完成した。

円覚寺伽藍群は『琉球国由来記』（1703年）によると広範囲に地ならしを行い、瓦を造って堂宇に葺いたとある、建物の下部構造には礎石・基壇を採用するという当時としては画期的な土木技術を採用していた。ちなみに首里城正殿が瓦葺になったのは1670年であり、円覚寺伽藍群は最新の建築技術をもって建造されたことがわかる。また、天界寺僧周雍が1497年に撰文した『円覚禅寺記碑』には課役を命じたわけでもなく貴賤老若が集まって創建作業に従事したという美辞麗句で綴られている。

円覚寺の開山住持は京都五山の別格南禅寺の住持であった茶隠上人として山号を「天徳山」とした。『球陽』には仏殿、荒神堂、寝室、方丈、仏殿、法堂、三門、両廊及び僧坊、厨庫、浴室が創建当初の建物として記載され、沖縄戦に至るまで琉球王国内で最大規模を有する寺院として約450年間続いていくこととなる。創建当年には御照堂が建てられ、それを第二尚氏の宗廟とし、以降歴代王の位牌は円覚寺に祀られるようになる。1496年に鐘楼が、1498年に放生池及び放生橋が築造される。創建当初の様子に関しては『使琉球録』（1534年）に記載されている。そこには①正殿（仏殿）の規模は５間、②正殿内部は仏像が１座安置され、左右には経典が数千巻納められている、③仏殿天井には板が張られそこには五彩の絵が描かれ、床には筵が敷かれている。④仏殿外には小さい池を掘り、怪石を飾っている、とある。それらは「広大にして壮麗であり、王宮に亜ぐ」と明正使陳侃が報告している。この尚真王による円覚寺の整備を称えて1509年建立の「百浦添之欄干之銘文」の第一条には「仏を信じて像を造り、寺を建てて金を布き、仏閣、僧坊、経殿、鐘楼、甍を連ね棟を接し、輪奐美を兼む」と王徳のひとつとして記されている。なお、この円覚寺創建以降も玉陵（1501年）、円鑑池（1502年）、園比屋武御嶽石門（1519年）の造営、真珠道の整備（1522年）、首里城南側外郭拡張（1546年）と首里城周辺の整備が継続的に行われていく。

その後、16世紀になると琉球王国による東アジア交易の衰退と共に国内の寺院が数多く廃されていくが、円覚寺は1571年に御照堂が加建、1588年には方丈、大殿、三門等が、1596年には法堂（仏殿？）が修復されていることから国王の菩提寺として王府の厚い庇護下にあったことがわかる。また、首里における士族子弟の教育施設としても利用されていたことから王府経営の教育施設としても機能していた。

薩摩侵入時には焼失を免れ、近世に入っても王府から60石（1695年には100石に加増）の知行が与えられている。これは琉球王国内にある寺院の中では最も石高が高く、円覚寺創建以来から王府内で最も格式ある寺院として位置付けられている。

このような王府の庇護によって17世紀以降も建物の修復が繰り返される一方で1721年に大殿（戦前まであった龍淵殿に相当）が失火により焼失するという惨事に見舞われる。当時の住持覚翁上人が責を問われて八重山へ流刑という災難に遭うものの同年に大殿（龍淵殿）が再建される。その際、歴代国王の位牌配置を仏式に変更したり、仏像の配置換え等、堂内部の改変を行っている。以降も1728年に獅子窟、御照堂が小堂に改築、1744年には鐘楼、亭寮、照堂寮といった建物の移築、修復が行われていることから、近世を通して、王府の厚い庇護下にあったことがこれらの建物の再建、修復からわかる。

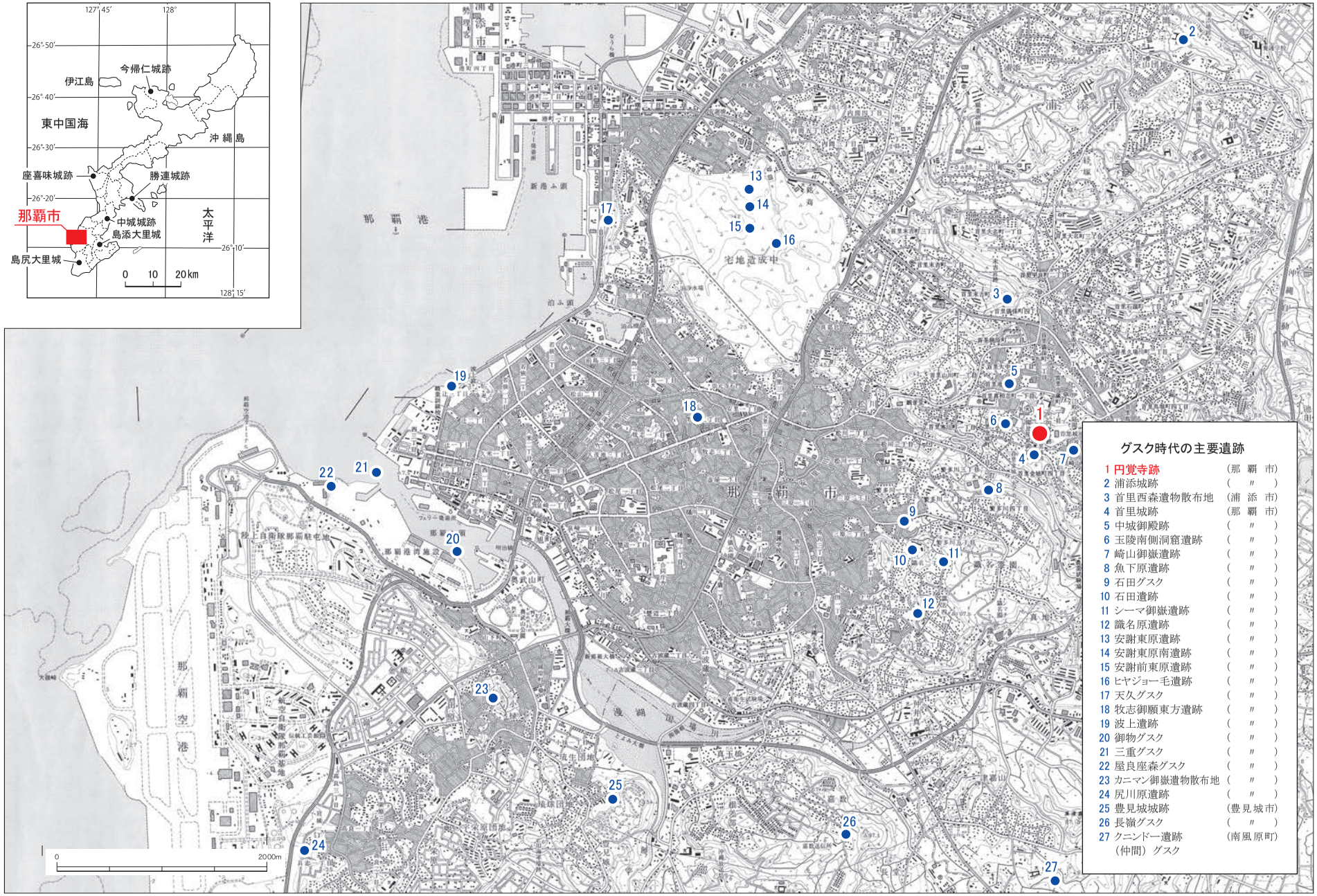
近代に入ると、琉球処分の六年後の明治17（1884）年に王府管轄から尚氏の私寺に移管される。しかし尚氏に関わる王府儀礼そのものは沖縄戦直前まで執り行われていた。昭和8（1933）年には総門、放生池、三門、仏殿、鐘楼、獅子窟、龍淵殿が旧国宝に指定されるが、昭和20（1945）年の沖縄戦によって全ての建物が焼失した。戦後は昭和23（1948）年に開学した琉球大学の教員官舎が建てられ、基壇や石畳といった遺構が破壊もしくは地下に埋蔵された。昭和43（1968）年に旧琉球政府文化財保護委員会によって総門、左掖門の復元、放生池の修復が行われるものの、かつて仏殿、龍淵殿といった伽藍群が建てられていた場所は昭和40（1965）年頃に琉球大学のグランドとして再び造成される。

一方で昭和47（1972）年に放生橋と昭和53（1978）年に前鐘、中鐘、楼鐘が国指定重要文化財となり、木像白象及び趣意書、放生池石橋勾欄、総門が県指定有形文化財となっている。

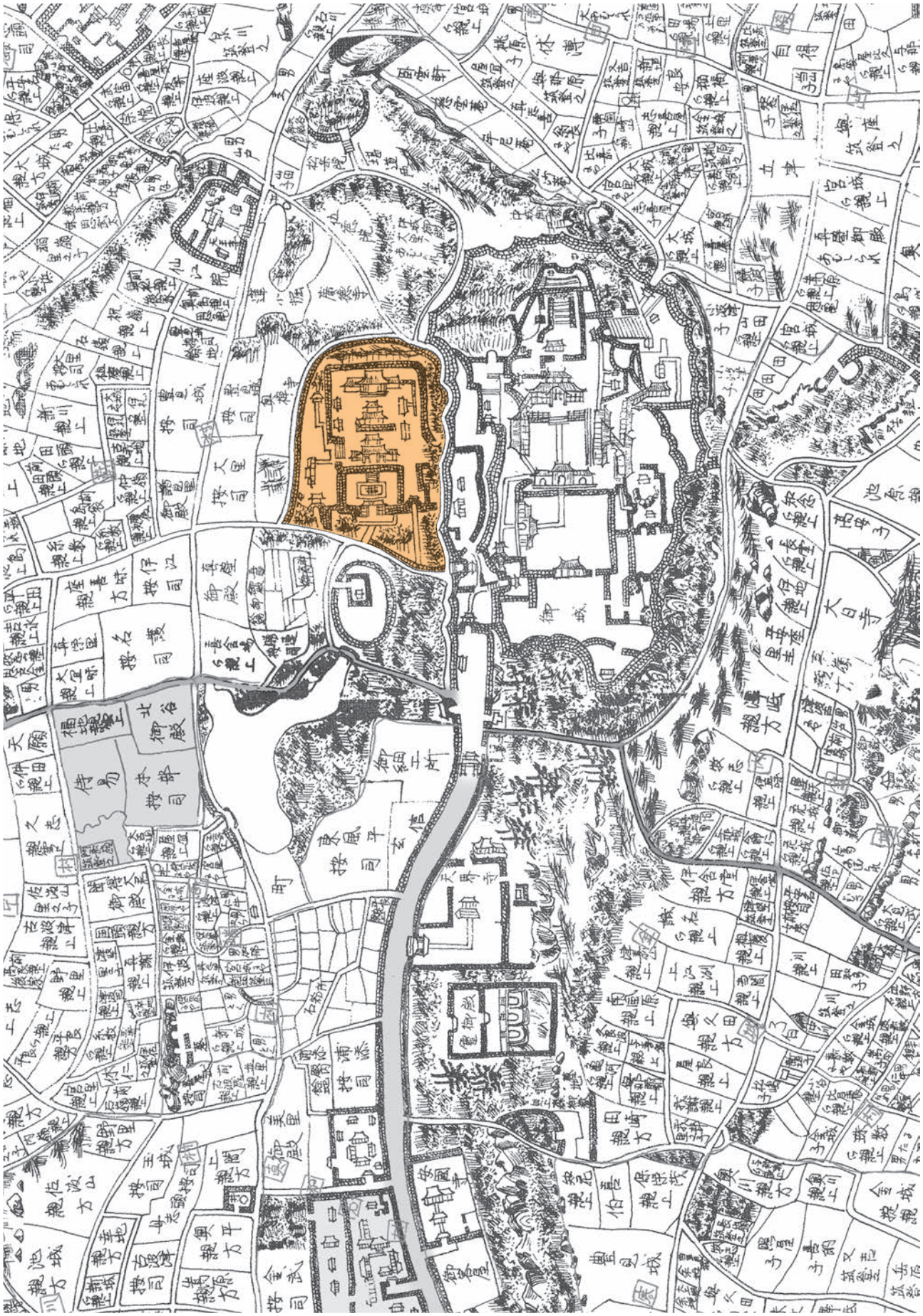
昭和59（1984）年には琉球大学キャンパスが首里城及びその周辺から西原町字千原への移転が完了したのに伴って、円覚寺跡一帯は県営公園に位置付けられ、首里城を軸にした復元整備事業に付随するかたちで整備が本格的に始動している。

120°
130°
140°
40°
30°
20°
10°
モンゴル
MONGOLIA
ロシア連邦
RUSSIAN FEDERATION
ウラジオストク Vladivostok
朝鮮民主主義人民共和国
NORTH KOREA
北京 Beijing
平壤 Pyongyang
ソウル Seoul
大韓民国
SOUTH KOREA
東京 Tokyo
博多 Hakata
中華人民共和国
CHINA
日本
JAPAN
上海 Shang hai
東中国海
EAST CHINA SEA
那覇 Naha
沖縄
OKINAWA
台北 Taipei
太平洋
PACIFIC OCEAN
台湾
TAIWAN
香港 Hong Kong
南中国海
SOUTH CHINA SEA
フィリピン諸島
PHILIPPINES
マニラ Manila
0
500
1000km

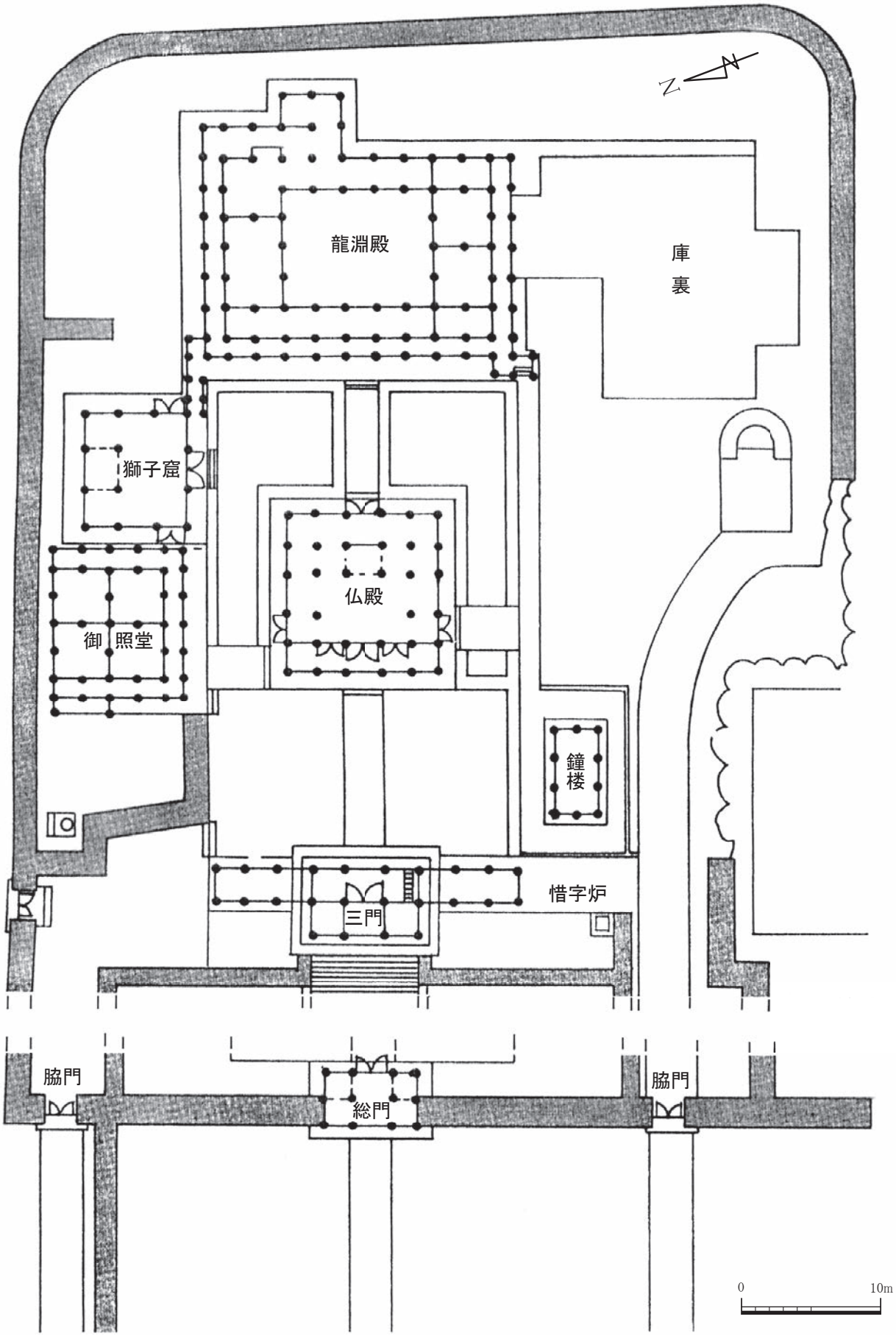
第1図　沖縄本島の位置



第2図　円覚寺跡の位置及び周辺の遺跡



第3図　首里古地図



第4図　円覚寺平面図（田辺泰「琉球建築」1937）

第３章　調査経過

第１節　発掘調査（平成18～22年度、平成24年度）

今回報告を行うのは、平成18年度～22年度及び平成24年度に行われた発掘調査成果についてである。第１章調査に至る経緯でも述べたが、当該史跡では現在まで継続して史跡整備事業を実施しており、その内、整備対象箇所となっていて発掘調査が必要な箇所について、平成18年度から毎年、調査を実施してきた。途中、平成23年度については、発掘調査は一時中断したが、平成24年度からは再び復元整備に伴う発掘調査を実施した。

発掘調査は、沖縄県教育庁文化財課指導の下、沖縄県立埋蔵文化財センターが主体となって調査を実施した。以下に年度別で調査概要を述べていく。

平成18年度

平成18年度の調査は、当該史跡の北側において、前年度に整備した石牆（御照堂地区まで復元）から右掖門へ向かって石牆の根石を確認することを目的として発掘調査を実施した。調査期間は平成18（2006）年８月１日から９月19日の約１か月半で、調査面積は約15㎡である。調査の結果、石牆の根石の一部（約１ｍ）や石敷遺構などが確認された。中でも石牆の根石は、前年度に整備した石牆復元ラインより石一個分、北側へずれることが確認された（図版１）。そのため、調査後の保存修理工事では、石牆の解体と積み直しが行われた。

平成19年度

前年同様、当該史跡の北側において、整備復元した石牆から右掖門方向への石牆の根石確認と、絵図にみえる通用門及び境内の仕切りを成すと考えられる石積みの検出を目的として、右掖門から御照堂地区にかけて調査区を設け、発掘調査を実施した。調査期間は平成19（2007）年６月20日から10月12日の約４か月で、調査面積は約200㎡である。調査の結果、右掖門から前年度の整備箇所に向けて延びている石牆（約19m）と右掖門から境内へ延びる石敷遺構が確認された。これは参道と考えられる。しかし、通用門や境内の仕切りを成す石積みの確認はできなかった。

平成20年度

調査期間は平成20（2008）年７月14日から８月29日の約１か月半で、北側石牆に接し境内の南方向へ延びていたとされる仕切りを成すと考えられる石積みの検出及び、右掖門外における遺構確認を目的として、「三門北地区」及び「右掖門西地区」に調査区を設け、発掘調査を行った。調査面積は約300㎡である。その結果、目的の遺構は沖縄戦や旧琉球大学教員官舎設置に伴う撹乱によって見つからなかったものの、「三門北地区」では、往時の土地造成技術を窺い知ることができる様相を確認することができた。これらは円覚寺の創建に関わる重要なものであるため、次回の報告で「三門地区」として、この成果をしっかりまとめたい。

平成21年度

調査期間は平成21（2009）年７月１日から９月９日までの約２か月間で、「右掖門西地区」、「三門北地区」、「南側石牆地区」の三つの地区にて発掘調査を実施した。調査面積は120㎡である。まず「右掖門西地区」では、地山ラインを確認することを目的として発掘調査を行い、北から南の放生池側へ向かってクチャの地山が傾斜していることを確認した。次に「三門北地区」では、前年度に三門北地区で見つかった土地造成工事に伴う石積み遺構の続きを確認することを目的として発掘調査を行い、多数の遺構を確認した。本地区の成果についても次回にまとめる。そして「南側石牆地区」では、円覚寺の周りを取り囲む石牆の復元整備に向けて、石牆の根石確認を目的として発掘

調査を行った。しかしながら、戦後の造成土が厚く堆積し、根石が想定されるレベルまで掘り下げて確認を行ったが、根石及びその痕跡を確認することができなった。

平成22年度

調査期間は平成22（2010）年７月１日から９月８日の約２か月間で、前年同様、「右掖門地区」、「三門地区」、「南側石牆地区」の三つの地区にて発掘調査を実施した。調査面積は約70㎡である。まず「右掖門地区」では、平成19年度に確認された右掖門から境内に延びる石敷遺構がどのように門と繋がるかを確認することを目的として発掘調査を行った。次に「三門地区」では、往時の階段遺構の確認を目的として２本のトレンチを設け、発掘調査を行った。旧琉球政府によって復元されたと考えられる階段の一部を取り外して掘り下げていくと、土留めと考えられる石積みが見つかったものの、目的としていた明確な階段遺構を見つけることができなかった。そして「南側石牆地区」では、前年に引き続き、石牆の根石を確認することを目的として、２本のトレンチを設け、発掘調査を行った。その結果、復元対象となる石牆を確認することができた。石牆は残りが良かったが、２か月の調査期間内で根石まで確認することができなかった。そのため、根石の確認は次年度に持ち越されることになった。その内、トレンチ22では炭層及び石敷遺構内とその直下で検出された炭化物について年代測定分析を委託した。

平成24年度

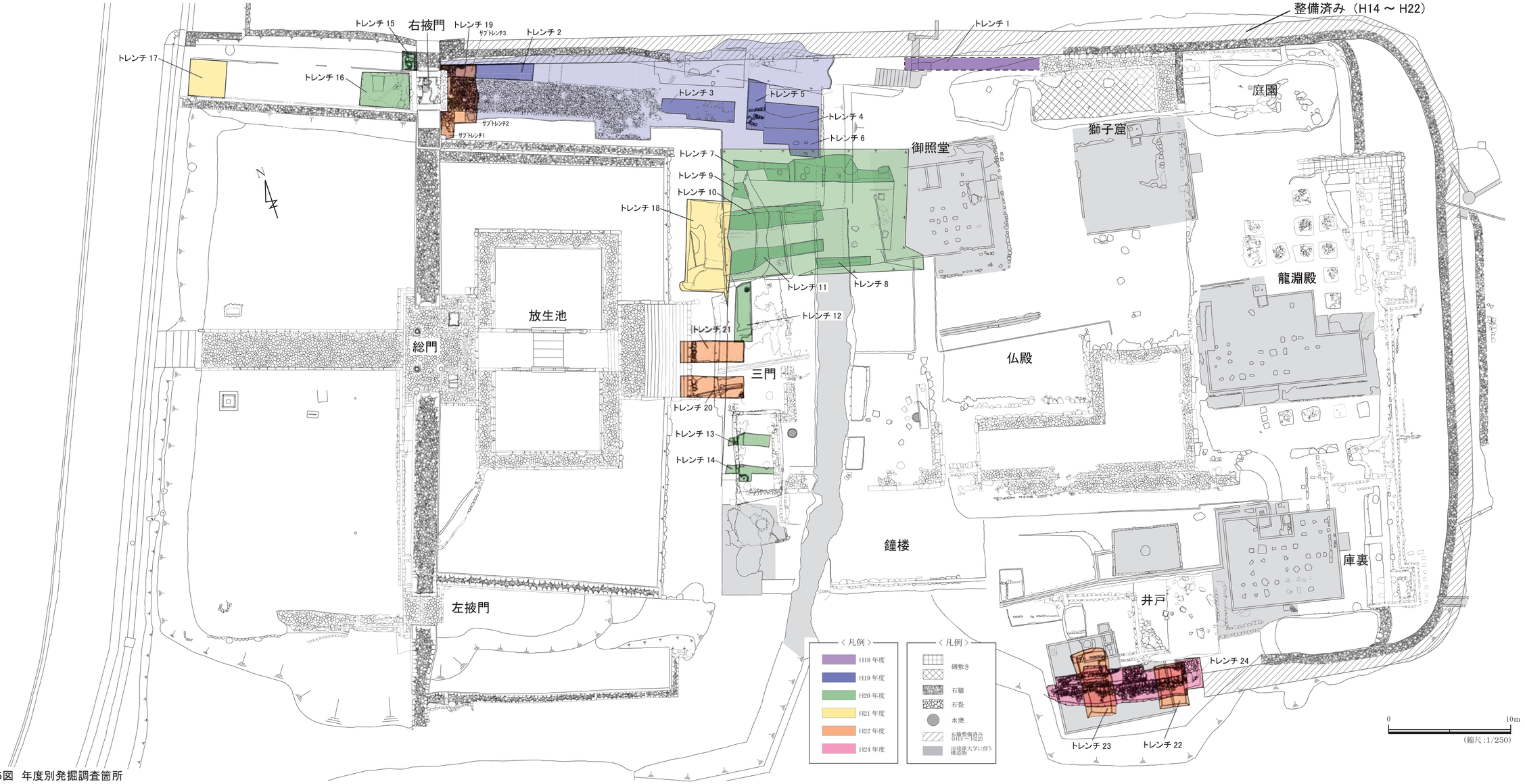
調査期間は平成24（2012）年７月２日から９月28日の約３か月間で、「南側石牆地区」にて、前年度に確認された石牆の根石を確認することを目的として発掘調査を行った。トレンチは前年度に整備された石牆から西側に設定した。調査面積は約50㎡である。その結果、石牆は根石まで残っていた他、調査区全体に渡って良好に残っていることを確認した。その他、石敷遺構、石積み、石列など、様々な遺構が見つかった。さらに、本調査にて見つかった漆製品についてその成分分析等を明治大学に委託した。

また、発掘調査の終了後に開催された円覚寺跡整備委員会にて、南側石牆の整備石牆高を確定させるために、南側石牆背後におけるのり面の整形方法に関する確認調査の必要性が提起された。それを受けて、平成25年２月８日と13日の２日間、トレンチ24で確認された石牆背後における地山確認調査を沖縄県教育庁文化財課が行った。

第２節　資料整理（平成24・25年度）

調査報告書の刊行に向け、平成24（2012）年度～平成25（2013）年度に資料整理作業を実施した。出土遺物の洗浄は現場の雨天時にほぼ終了していたことから、整理作業はまず遺物台帳の作成から始めた。続いて層序や遺構の関係を整理した後、注記作業を行った。注記にあたり、各年度毎で付けられていたトレンチ名を、平成18年の調査箇所をトレンチ１として、年度順に連番を付与した（第１表、第５図）。これは、「北側トレンチ」など、トレンチ名が重複するものがあるため、整理の際に混乱を避けるため、トレンチ名に連番を振った。また、遺構名については、注記は調査時の遺構名で注記し、報告では「石敷１」などと遺構の種類別に連番を振った（第２表）。注記作業の後は、分類、接合、図化対象遺物の抜き出しを行い、実測図の作成、トレース、写真撮影等を行った。出土遺物の内、漆製品及び塗膜片については、成分分析及び産地同定を明治大学理工学部に依頼した。

これらの作業と並行して、遺構図・土層図等のトレース後、発掘現場で撮影した写真と併せてレイアウトを行い、原稿執筆ののち編集後、指名競争入札により落札した印刷業者と契約を行い、本調査報告書を刊行する手順をとった。



第5図　年度別発掘調査箇所

第1表　トレンチ名称一覧

報告書トレンチ名称	調査年度	地区名	調査時トレンチ名称
トレンチ　1	H18	右掖門地区	―
トレンチ　2	H19	右掖門地区	畔西側トレンチ
トレンチ　3	H19	右掖門地区	東西トレンチ西側
トレンチ　4	H19	右掖門地区	東西トレンチ東側
トレンチ　5	H19	右掖門地区	南北トレンチ
トレンチ　6	H19	右掖門地区	東西トレンチ南側拡張部
トレンチ　7	H20	三門北地区	三門北　北側トレンチ
トレンチ　8	H20	三門北地区	三門北　南側トレンチ
トレンチ　9	H20	三門北地区	三門北　トレンチ1
トレンチ　10	H20	三門北地区	三門北　トレンチ2
トレンチ　11	H20	三門北地区	三門北　トレンチ3
トレンチ　12	H20	三門北地区	三門　トレンチ1
トレンチ　13	H20	三門北地区	三門　トレンチ2
トレンチ　14	H20	三門北地区	三門　トレンチ3
トレンチ　15	H20	右掖門地区	右掖門西側地区
トレンチ　16	H21	右掖門地区	右掖門西地区　東側トレンチ
トレンチ　17	H21	右掖門地区	右掖門西地区　西側トレンチ
トレンチ　18	H21	三門北地区	三門北地区
トレンチ　19	H22	右掖門地区	右掖門地区
トレンチ　20	H22	三門地区	南側トレンチ
トレンチ　21	H22	三門地区	北側トレンチ
トレンチ　22	H22	南側石牆地区	東側トレンチ
トレンチ　23	H22	南側石牆地区	西側トレンチ
トレンチ　24	H24	南側石牆地区	南側石牆地区

第2表　遺構一覧

遺構名	地区	調査年度	調査時遺構名
石牆	右掖門	H18	石牆
石敷1	右掖門	H18	石畳
石敷2	右掖門	H18	石敷遺構
石敷3	右掖門	H19・22	石敷遺構
石敷4	右掖門	H22	下部集石遺構
石列1	右掖門	H20	―
溝状遺構1	右掖門	H20	溝状遺構
石列2	南側石牆	H24	旧琉大時代の石列
方形状の遺構	南側石牆	H22・24	方形状の遺構
石積み1	南側石牆	H24	石牆
石敷5	南側石牆	H24	石敷遺構
石積み2	南側石牆	H24	下部石積み
石列3	南側石牆	H24	下部石列
石列4	南側石牆	H24	8層中より検出した石列

第４章　遺構と遺物

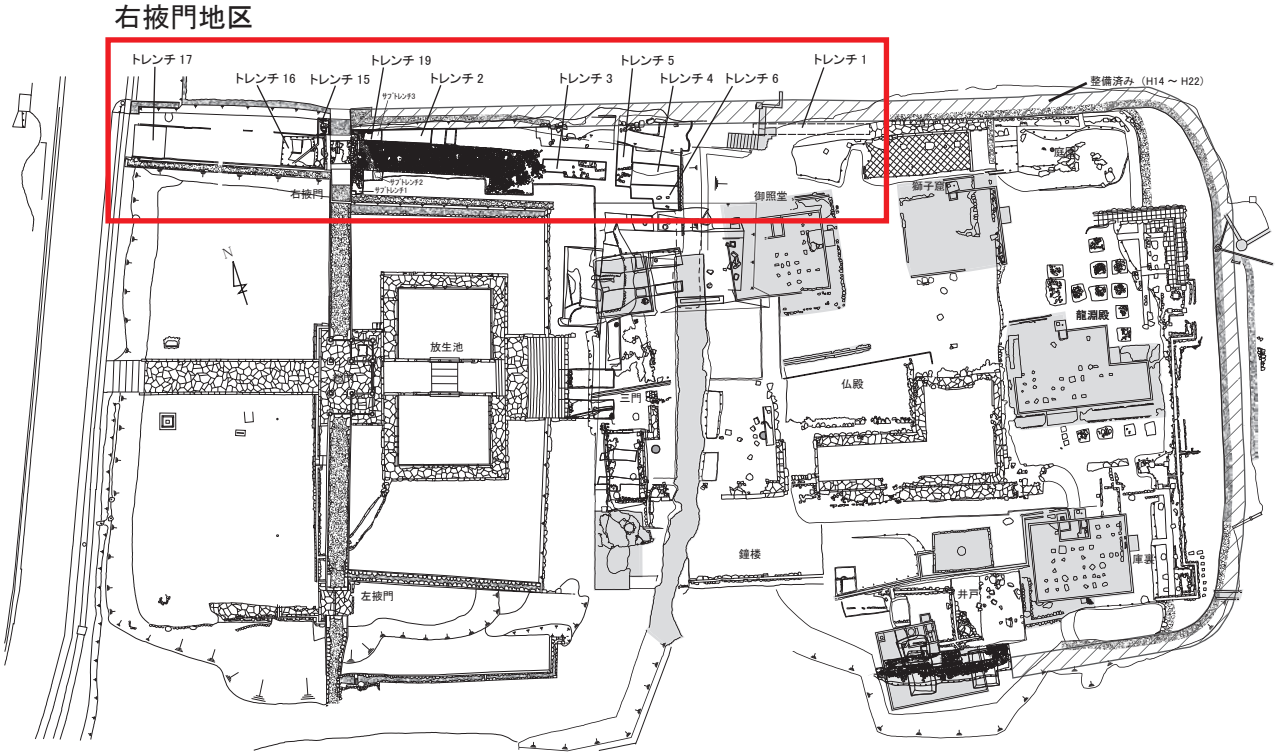
本調査は円覚寺跡の史跡整備に伴う遺構確認調査である。前回の調査により、残っていた遺構のほとんどが1728年の上･下御照堂改修時以降のものであることが明らかになった。その成果を受け、整備目標年代は18世紀前半～沖縄戦で焼失するまでの円覚寺と設定されている。よって、調査はこの年代の遺構確認を基本としている。

発掘調査は、右掖門地区、三門・三門北地区、南側石牆地区の三つの地区にて行ってきた。ここでは、各地区別に成果をまとめた。ただし、三門・三門北地区については、平成25年度にも発掘調査が行われたこともあり、今回の報告では取り上げずに次の機会にまとめて報告することとする。

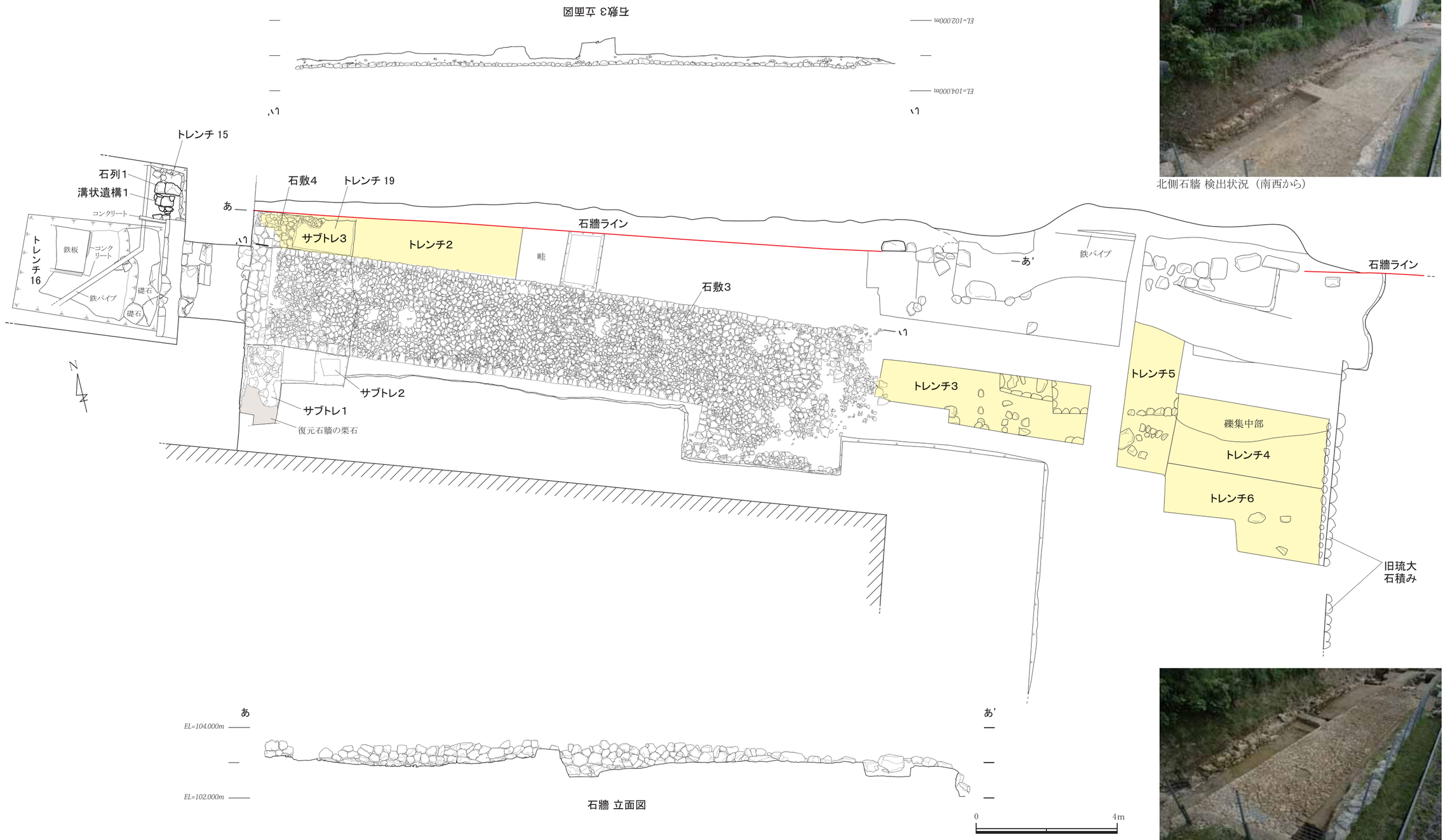
第１節　右掖門地区の遺構と遺物

右掖門とその周辺を右掖門地区と設定した。右掖門は円覚寺の北側に設置されていた門である。創建年代は不明だが、「首里古地図」（1700年初）には描かれている。沖縄戦によって破壊されたが、昭和43（1968）年に旧琉球政府文化財保護委員会によって復元されている。本地区では門から境内内部に至る範囲と、門から境内外にかけての範囲を発掘調査した。調査面積は約250㎡である。

調査の結果、右掖門地区の造成層が確認されたとともに、石牆や石敷遺構など、様々な遺構が見つかった。また、右掖門の復元状況についても確認できた。復元の様相については総括でふれる。



第6図　右掖門地区 調査箇所



北側石墻 検出状況（南西から）

石敷3 検出状況（南西から）

第7図 右掖門地区 遺構図

１　遺構

ａ　門から境内内部の遺構

右掖門地区は平成18・19年度と平成22年度に発掘調査が行われたが、北側の一部で調査範囲が重なっている（トレンチ２とトレンチ19サブトレ３）。平成19年度のトレンチ２の時は、石敷３直下の６層途中で掘削を留めていた。その後、平成22年度にトレンチ19サブトレ３と設定して、６層の続きから掘り下げたことを前置きする。

本地区における造成層の堆積状況はトレンチ19で確認された（第９図）。平成19年度の調査時に埋め戻した土から約20cm下に、石灰岩を細かく砕いて固く敷き詰めた第２層があり、その下から石敷３が現れた。第２層は舗装面と考えられる。本層の上面ではわずかにガラス片がみられたが、層自体が薄いため、第１層からの混入したものの可能性もある。石敷３の造成土の堆積状況を確認するために北側と南側にそれぞれサブトレンチを設定し掘り下げると、北側のサブトレ３ではクチャの地山を検出した。しかし、南側のサブトレ１と２では地山の検出には至らず、造成土の堆積が続いていた。このことから、本地区の旧地形は北側から南側の放生池方向に地形が大きく落ち込んでいたものと考えられ、円覚寺創建前の周辺地形は首里城を擁する丘陵（南側）と、現県立芸大図書館側（北側）にも高まりを持つ尾根状の凹地であったことを裏付けている。

一方、造成土（第６～12層）は北側から南側にかけて投入されている。１～５cm大の小礫が混ざる粘質土や、クチャブロックが主体の土が造成土として使われている。第６層になると水平気味に造成している。これは、土地が平坦になるよう意識したものと想定される。この第６層の上に石敷３がのっている。遺物は第６、８、９層で得られている。第６層は青磁、褐釉陶器、瓦、塼などがみられる。瓦は灰色や褐色系が主体で赤色瓦はわずかである。第９層も同様な遺物がみられるが、赤色瓦はみられない。いずれも近世段階に相当すると考えられる。

石牆

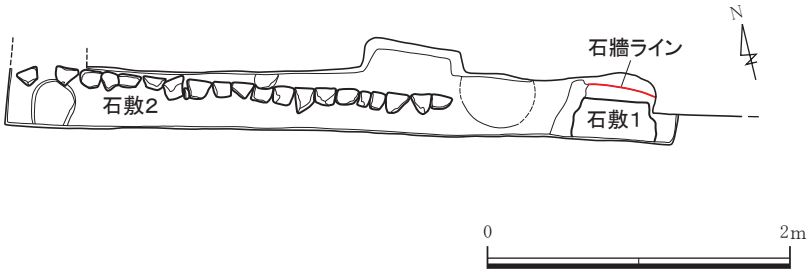
石牆は円覚寺の周囲を取り囲む石積みであり、『首里古地図』（第３図）にも描かれている。円覚寺では、平成14年度より石牆の復元整備を進めており、平成17年度までに御照堂地区付近まで石牆の復元整備が行われてきた。その続きの基礎資料を得るために発掘調査を行った結果、御照堂地区付近から右掖門側へ延びる石牆（約１ｍ残存、図版１）と、右掖門から整備箇所（東側方向）へ向けて延びる石牆（約19ｍ残存）が確認された（第７図）。一部、旧琉球大学に伴う石積みも一緒に検出され、円覚寺石牆の直上に築いていることがわかった（第７図、写真右上）。石牆は石灰岩の切石を用いた相方積みで、約20～40cm大の石が主体である。残存高は約50cm～１ｍである。

石敷１

トレンチの東側にて検出された（第８図、図版１）。北側石牆の前面に広がる。縁石は切石で北側に面を持ち、東西方向に延びる。上面の平坦が意識され、石と石の間の隙間もほとんどなく、丁寧に敷かれている。前回調査にて、獅子窟の基壇北側で検出された石敷に似ていることから、石敷1は建物の基壇の周囲に敷かれていたものの可能性が考えられる。前回調査では、近世段階には獅子窟の周囲には珊瑚石灰岩を砕いた砂利が敷かれ、それ以前は石敷であったことが確認されている。

石敷２

トレンチ１の西側にて検出された（第８図、図版１）石敷１と同様に、縁石は切石で北側に面を持ち、東西方向に延びる。しかし石敷１とは様相が異なり、縁石の南側には野面の石を詰めていることから、石敷２は溝と判断される。



第8図　トレンチ1 平面図

トレンチ1 遺構検出状況（東から）

石牆 検出状況（西から）

石敷1 検出状況（南から）

石敷1 検出状況（西から）

石敷2 検出状況（西から）

図版1　右掖門地区 遺構検出状況1

石敷３

平成19年度と平成22年度の調査によって右掖門から境内内へ延びることが確認された石敷遺構で、参道と考えられる（第７図、図版２）。幅は約2.8ｍで、北側と南側には切石の縁石を配置している。約10～20cm大の石を丁寧に敷き、石の表面は凹凸があまり見られない。石敷３の西端部は門の復元箇所に沿うように欠けている。門の石段の一部を取り外し、石敷３の北壁を確認したところ（第９図）、石敷が欠けているところから新しい時期の掘り込み（第３、４層）が確認された。このことから、石敷きの西端部は復元工事の際に除去されたとみられる。この石敷３がのっている造成土の堆積状況は層序の項目でふれた。出土遺物より、近世段階には構築されていたと考えられる。

石敷４

トレンチ19サブトレ３で確認された石敷遺構である（第９図、図版３）。約５～20cm大の石が敷かれ、中には塼も混じっている。石敷３下の造成土内へもぐり込んでいるが、反対側のサブトレンチ１では見つからなかった。石牆と石敷３の間に敷かれているため、排水を考えたものと考えられるが、サブトレンチ全面に広がらないため、その性格については判然としない。石敷４は第９層にのっていることより、近世段階には構築されていたと考えられる。

第3表　右掖門地区（平成20年度）トレンチ16 土層一覧

層序	色 調	所　見
1-1	―	撹乱層（現代）。
1-2	Hue2.5Y4/6　オリーブ褐色土	大小の石灰岩礫が混じる。粘質微砂層。
2	Hue5Y7/6　黄色土	石灰岩、砂利を多く含む。復元右掖門の造成層。こぶし大の礫が大量に混じる。
3	Hue5Y5/3　灰オリーブ色土	粘質土層。石灰岩粒、赤瓦、木片、ブルーシートの切れ端が混入。
4	―	クチャで地山。

第4表　右掖門地区（平成22年度）トレンチ19 土層一覧

層序	色 調	所　見
1a	Hue2.5Y4/4　オリーブ褐色土	表土。H19年度調査の際の埋戻しの土。ボロボロしている。
1b	―	白砂層。
2	Hue10YR6/6　明黄褐色土	コーラル層。石敷の上に薄く敷いている。
3	Hue2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土	粘質あり、しまりは強い。石段造成土。1cm大の小石を含む。
4	Hue2.5Y5/4　黄褐色土	右掖門と石敷遺構の間の石段の下にみられる。石段を造る際の造成土と考えられる。粘質、しまりともに弱い。3～5cm大の小石を含む。
5	Hue5Y6/2　灰オリーブ色土	クチャブロック（3～5cm大）混じりの層。粘質強く、しまりあり。
6	Hue2.5Y5/3　黄褐色土	1～5cm大の小石混じりの層。石敷遺構の直下で確認できる。粘質、しまりともに強い。石敷遺構の造成土。
7	Hue2.5Y4/3　オリーブ褐色土	5cm大の小石を含む。粘質あり、しまり弱い。
8	Hue2.5Y5/4　黄褐色土	クチャブロック（3～5cm大）混じりの層。1～5cm大の小石も含む。粘質、しまりともに強い。
9	Hue5Y5/3　灰オリーブ色土	瓦、センを多く含む層。細蓮弁文碗や褐釉陶器片を含む。粘質はやや強いが、しまりは弱い。
10	Hue2.5Y4/2　暗灰黄色土	3～5cm大の小石混じりの層。粘質、しまりともに弱い。
11	Hue2.5Y6/2　灰黄色土	クチャブロック（10～15cm大）が主体の層。1～2cm大の小石が少し混じるため、地山ではない。粘質はあるが、しまりは弱い。
12	Hue2.5Y6/4　にぶい黄色土	1～3cm大の小石が混じる粘質の層。粘質、しまりともに強い。

石敷3 検出状況（西から）

石敷3 検出状況（北から）

石敷3 検出状況（北から）

石牆 検出状況（南東から）

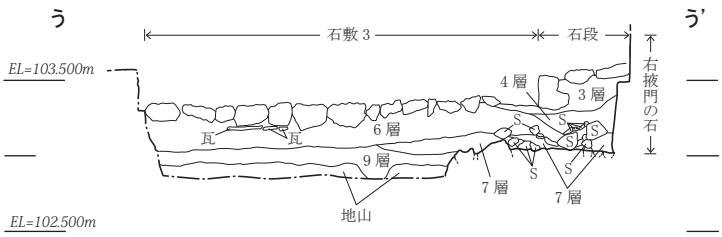
石敷3 検出状況（北から）

右掖門地区東側 遺構検出状況（北から）

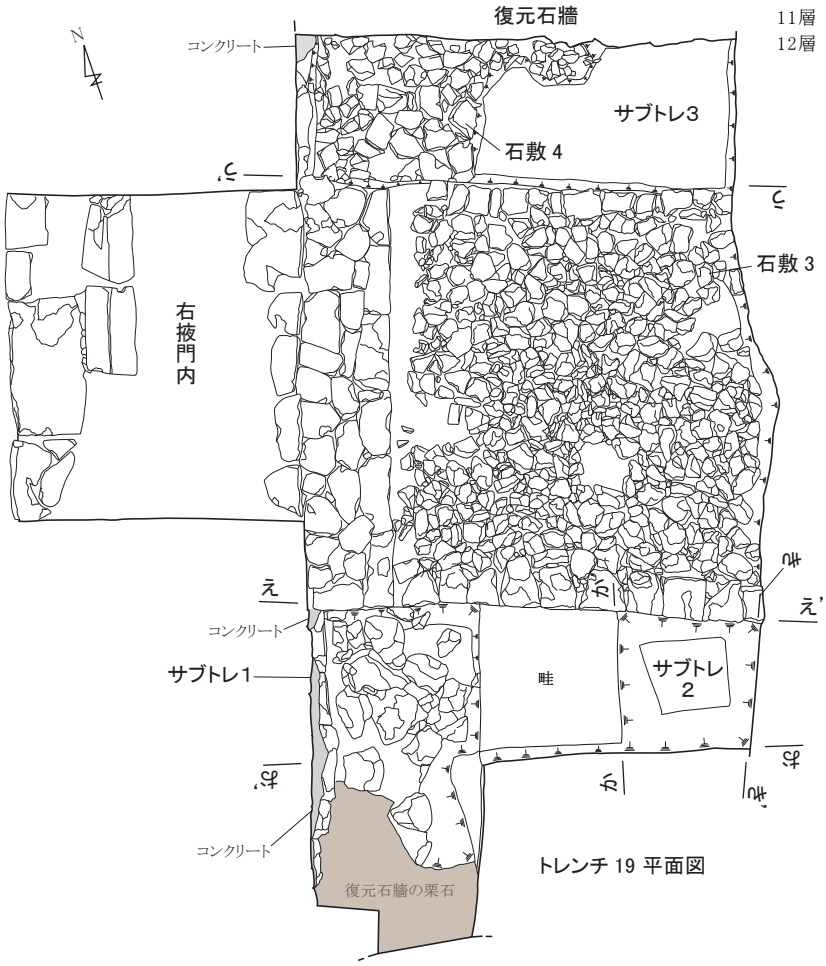
右掖門地区東側 遺構検出状況（東から）

図版2　右掖門地区 遺構検出状況2

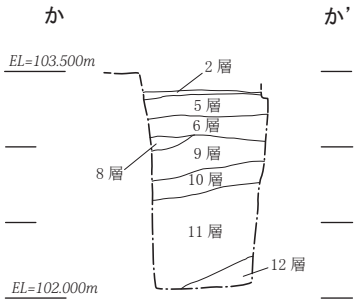
1a層	オリーブ褐色土	撹乱層。
1b層	—	白砂層。
2層	明黄褐色土	コーラル層。
3層	暗オリーブ褐色土	石段の造成土。撹乱層。
4層	黄褐色土	石段の造成土。撹乱層。
5層	灰オリーブ色土	クチャブロック(3～5cm大)混じりの層。
6層	黄褐色土	石敷3の造成土。
7層	オリーブ褐色土	小石を含む。造成土。
8層	黄褐色土	クチャブロック、小石を含む。造成土。
9層	灰オリーブ色土	瓦、センを多く含む層。細蓮弁文碗や褐釉陶器片を含む。造成土。
10層	暗灰黄色土	3～5cm大の小石混じりの層。造成土。
11層	灰黄色土	クチャブロックが主体の層。造成土。
12層	にぶい黄色土	1～3cm大の小石が混じる粘質の層。造成土。



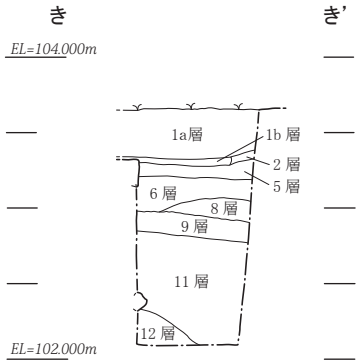
南壁土層図



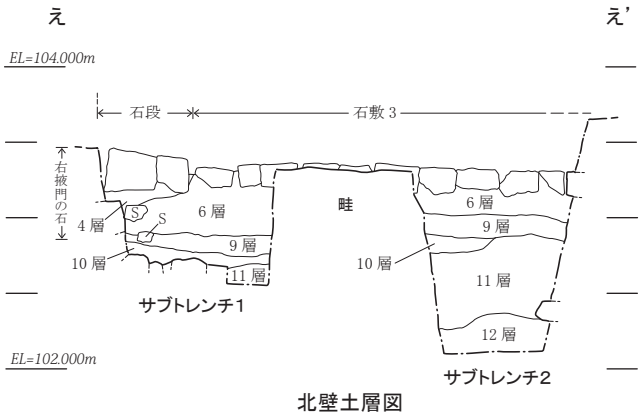
トレンチ 19 平面図



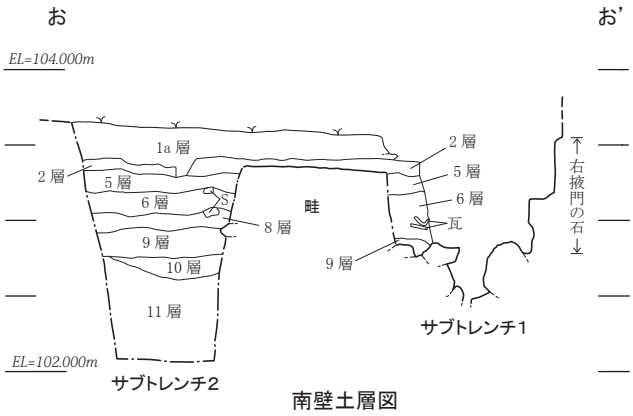
西壁土層図



東壁土層図



北壁土層図



南壁土層図

0　2m

第9図　トレンチ 19 遺構図

トレンチ 19 石敷3 検出状況（北東から）

サブトレ3 石敷4 検出状況（南から）

サブトレ1 北壁

サブトレ3 西壁

サブトレ2 西壁

サブトレ2 北壁

サブトレ3 南壁

サブトレ3 南壁

図版3　右掖門地区 遺構検出状況3

ｂ　門から境内外の遺構

平成20年度にトレンチ15・16、平成21年度にはトレンチ17を設定し、発掘調査を実施した（第６図）。

トレンチ17は３ｍ×３ｍの面積を発掘調査したが、戦前戦後の改変により遺構は見つからなかったため、写真のみでの記録とした（図版４）。

トレンチ16では、右掖門地区で検出した石敷３及び、石牆等に関連する遺構検出を目的に調査を行ったが、ここでも戦前戦後の改変を深く受けており、重機による表土掘削時には戦後の配管が多く検出された。この状況から遺構の残存を期待できなかったが、トレンチ15において、配管と門のわずかな隙間に、石牆の可能性がある石列と、側溝状の石組みが検出されている（図版４）。

石列１

琉球石灰岩の切石で構築され、地山と思われるクチャ上に堆積した粘質土上に置かれている。石列は、門東側で検出した石牆につながるかのように見えるが、南に面して切石２点が列ぶ規模でしかないことから遺構か否か判然としないが、石列として報告する。

溝状遺構１

石列と同様、琉球石灰岩の切石で構築され、地山と思われるクチャ上に堆積した粘質土上に置かれている。側石らしき切石が南北に数点見られるのみで、その間にはやや低目に礫が敷かれている。しかし、この遺構も残存が小規模のため断定が厳しい。周辺の破壊が著しく遺構のつながりが確認できないことも、性格が判然としない要因の一つである。

トレンチ 15 石列1及び溝状遺構1（西から）

トレンチ 16 完掘状況（西から）

トレンチ 16 北壁（南から）

トレンチ 17 完掘状況（西から）

図版４　右掖門地区 遺構検出状況４

1-1層	—	撹乱層。
1-2層	オリーブ褐色土	粘質微砂層。
2層	黄色土	石灰岩、砂利を多く含む。復元右掖門の造成層。撹乱層。
3層	灰オリーブ色土	撹乱層。
4層	—	クチャの地山。

第 10 図 トレンチ 15・16 遺構図

２　遺物

右掖門地区からは総数 305 点の遺物が出土している。内訳をみると、中国・タイ・本土産の陶磁器、沖縄産陶器、土器、石製品、煙管、銭貨、青銅製品、鉄製品、瓦、塼、ガラス製品、石材が出土している。最も多いのは瓦や陶磁器である。陶磁器に関しては、14 世紀後半～近現代までのものがあり、産地別にみると中国産が最も多く、次に沖縄産が多い。

ここでは、51 点について図化し、遺物の種類別に報告することとする。個々の所見は遺物観察表にまとめている。

①中国産青磁（１～７）…16 点中７点を図化した。碗（１～６）、皿（７）があり、いずれも龍泉窯産である。碗は雷文帯碗（１）や蓮弁文（２～４、６）などがある。
②中国産白磁（８～15）…17 点中８点を図化した。碗（８～10）、皿（11～14）、瓶（15）があり、産地は景徳鎮産（８、９）、福建・広東系（10、12、13、15）、福建産（11）、徳化窯（14）がみられる。
③中国産染付（16～25）…38 点中 10 点を図化した。碗（16～22）、皿（23）、小杯（24）、小皿（25）があり、産地は景徳鎮産（16～21、23、24）、漳州窯産（22）、徳化窯（25）がある。
④中国産褐釉陶器（26～30）…29 点中５点を図化した。すべて壺で、明代の製品と考えらえる。
⑤本土産陶器（31～32）…４点中２点を図化した。急須（31）及び器種不明胴部片（32）である。32 は撹乱出土の第 41 図 78 の素地と類似しており、産地は関西系と考えられる。
⑥沖縄産施釉陶器（33～35）…20 点中３点を図化した。小碗（33）、蓋（34）、香炉（35）である。
⑦沖縄産無釉陶器（36～38）…９点中３点を図化した。鉢（36）、壺（37）、土管（38）である。土管は本土産陶器製のものが中城御殿跡で出土している。中城御殿跡出土資料と比べると造りは粗く、小ぶりである。
⑧土器（39）…20 点中１点を図化した。39 は貝殻片や赤色粒が混ざることより、宮古式土器と考えられる。
⑨サンゴ製品（40）…１点のみ出土した。40 は球形状を呈する製品である。表裏面及び側面に複数の擦面の痕跡が確認される。用途は判然としないが、鉄製品などの錆を落とすために使われた資料の可能性が考えられる。
⑩ガラス製品（41）…青緑色のガラス玉が１点のみ得られている。
⑪煙管（42）…柱状形の雁首が１点出土した。陶製で瓦質を呈する。先端が丸みを帯びる円錐形をなす火皿のみの製品である。器壁は 0.2～0.3cm とかなり薄手の造りであることより、粘土の段階から成形されて、焼成された製品の可能性が考えられる。
⑫銭貨（43）…３点中１点を図化した。43 は無文銭である。
⑬青銅製品（44）…３点中１点のみ図化した。44 は円形状を呈し、両目に非常に細かいドット状の文様が確認される。判然としないが、禅宗の袈裟のリングである可能性が考えられる。
⑭鉄製品（45、46）…角釘が２点出土している。どちらも全体的に錆化が著しい。
⑮瓦（47～49）…84 点中３点を図化した。全て明朝系瓦である。灰色系と赤色系（褐色を含む）がみられた。47、48 は灰色系の平瓦、49 は褐色系の平瓦で、いずれも広端部である。
⑯塼（50、51）…18 点中２点を図化した。50 は平面に敷き並べるタイプ、51 は端部噛み合わせタイプの製品である。どちらも褐色系である。

第5表　右掖門地区遺物出土状況a

出土地 ＼ 分類		中国産																									
		青磁						白磁													染付						
		碗			皿	蓋	合計	碗				小碗	皿		盤	小杯	瓶	灯明皿	器種不明	合計	碗		皿		小皿	小杯
		口縁部	胴部	底部	底部			口～底部	口縁部	胴部	底部	胴部	口縁部	底部	胴部	口縁部	底部	口縁部	胴部		口縁部	胴部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部
平成18年度	トレンチ1　石敷1　直上	1	2				3	1	1			1								3	3	3	1	2			
	トレンチ1　石敷2　溝内		1		1		2											1		1	1	2					
平成19年度	トレンチ2　下層　造成土						0							1			1			2					1	1	
	トレンチ2　西端拡張部　炭まじり土		1				1						1							1	1	2					
	トレンチ2　西端拡張部　クチャ混り造成土						0													0							
	西端側拡張部　クチャ混り造成土層						0													0							
	石積み前						0													0							
	石積み前　褐色土						0		1						1					2							
	石積み前　造成土		1			1	2													0		1					
	石積み　裏込め内						0													0							
	石敷						0				1					1				2							3
	石敷　上面	1					1		2				1	1					1	5	3						
	石敷　南溝西端						0			1										1							
	石敷　南溝西端　クチャ混層の下層		1				1													0		1					
	石敷　南溝西端　クチャ混層						0													0							
	石敷　縁石南側下						0													0							
平成22年度	トレンチ19　サブトレ1　6層	1		1			2													0		2					
	トレンチ19　サブトレ1　9層	1		1			2													0							
	トレンチ19　サブトレ2　6層						0													0							
	トレンチ19　サブトレ3　6層	1					1													0							
	トレンチ19　サブトレ3　8層		1				1													0							
	トレンチ19　サブトレ3　9層						0													0							
合計		5	7	2	1	1	16	1	4	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	17	8	11	1	2	1	1	3

出土地 ＼ 分類		中国産											タイ産		薩摩か朝鮮産陶器	本土産						
		染付			褐釉陶器					無釉陶器	色絵	陶器	褐釉陶器	半練土器		染付			近現代磁器		陶器	
		瓶	器種不明	合計	壺			器種不明	合計	器種不明	瓶	器種不明	壺	器種不明	器種不明	碗	鉢	蓋	碗	器種不明	碗	急須
		胴部	胴部		口縁部	胴部	底部	胴部		胴部	口縁部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	口縁部
平成18年度	トレンチ1　石敷1　直上			9	1				1			1				1		1	1			
	トレンチ1　石敷2　溝内	1		4		2			2							1						
平成19年度	トレンチ2　下層　造成土			2		1			1													
	トレンチ2　西端拡張部　炭まじり土			3		1		2	3				1									
	トレンチ2　西端拡張部　クチャ混り造成土		1	1					0													
	西端側拡張部　クチャ混り造成土層			0					0													
	石積み前			0					0													
	石積み前　褐色土			0					0													
	石積み前　造成土	1		2		3	1		4	1			1									
	石積み　裏込め内		1	1					0													1
	石敷		2	5		1			1		1		1		4						1	
	石敷　上面		5	8					0					1	1					1		
	石敷　南溝西端			0		1			1													
	石敷　南溝西端　クチャ混層の下層			1				1	1				1									
	石敷　南溝西端　クチャ混層			0					0													
	石敷　縁石南側下			0					0													
平成22年度	トレンチ19　サブトレ1　6層			2	1	8	1		10													
	トレンチ19　サブトレ1　9層			0					0													
	トレンチ19　サブトレ2　6層			0	1	2			3													
	トレンチ19　サブトレ3　6層			0		1			1													
	トレンチ19　サブトレ3　8層			0					0													
	トレンチ19　サブトレ3　9層			0		1			1								1					
合計		2	9	38	3	21	2	3	29	1	1	1	4	1	5	2	1	1	1	1	1	1

第5表　右掖門地区遺物出土状況 b

出土地＼分類		本土産陶器	沖縄産施釉陶器															初期沖縄産無釉陶器	沖縄産無釉陶器						陶質土器
		器種不明	碗			小碗	皿	瓶	急須		蓋	鍋	壺	香炉	火炉	器種不明	合計	壺	鉢	瓶	壺	土管	器種不明	合計	器種不明
		胴部	口縁部	胴部	底部	底部	口縁部	胴部	胴部	底部	口縁部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	胴部		胴部	底部	底部	胴部	口縁部	胴部		胴部
平成18年度	トレンチ1　石敷1　直上				1		1		1		1	1			1		6	1	1		1	1		3	
	トレンチ1　石敷2　溝内	1				1											1							0	
平成19年度	トレンチ2　下層　造成土							1									1				2			2	
	トレンチ2　西端拡張部　炭まじり土			1													1							0	
	トレンチ2　西端拡張部　クチャ混り造成土															1	1							0	
	西端側拡張部　クチャ混り造成土層																0							0	
	石積み前																0							0	
	石積み前　褐色土																0							0	
	石積み前　造成土																0							0	
	石積み　裏込め内	1															0						1	1	
	石敷													1		5	6							0	
	石敷　上面		1			1				1			1				4				1			1	
	石敷　南溝西端																0							0	
	石敷　南溝西端　クチャ混層の下層																0							0	
	石敷　南溝西端　クチャ混層																0							0	1
	石敷　縁石南側下																0							0	
平成22年度	トレンチ19　サブトレ1　6層																0			1				1	
	トレンチ19　サブトレ1　9層																0							0	
	トレンチ19　サブトレ2　6層																0							0	
	トレンチ19　サブトレ3　6層																0							0	
	トレンチ19　サブトレ3　8層																0							0	
	トレンチ19　サブトレ3　9層																0							0	
合計		2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	20	1	1	1	4	1	1	8	1

出土地＼分類		瓦質土器		土器						産地不明			石製品	煙管	銭貨			青銅製品	鉄製品	明朝系		
		コンロ	器種不明	鉢		鍋	器種不明			碗	瓶	壺		瓦質土器						軒丸瓦		軒平瓦
		部位不明	部位不明	口縁部	胴部	胴部	胴部	底部	合計	底部	胴部	胴部	サンゴ製品	雁首	無文銭	輪銭	銭種不明	飾り金具	角釘	灰色	褐色	褐色
																				瓦当部	瓦当部	瓦当部
平成18年度	トレンチ1　石敷1　直上					2			2									3			3	
	トレンチ1　石敷2　溝内								0	1												
平成19年度	トレンチ2　下層　造成土						2		2													
	トレンチ2　西端拡張部　炭まじり土						1		1				1	1								
	トレンチ2　西端拡張部　クチャ混り造成土								0													
	西端側拡張部　クチャ混り造成土層								0										1			
	石積み前						1		1								1					
	石積み前　褐色土								0													
	石積み前　造成土						1		1												1	
	石積み　裏込め内								0													
	石敷				1		1		2		1											
	石敷　上面								0			1							1	1		
	石敷　南溝西端	1	1	2					2													
	石敷　南溝西端　クチャ混層の下層								0							1						
	石敷　南溝西端　クチャ混層								0													
	石敷　縁石南側下						1		1													
平成22年度	トレンチ19　サブトレ1　6層						3		3						1						1	2
	トレンチ19　サブトレ1　9層							1	1													
	トレンチ19　サブトレ2　6層							1	1													
	トレンチ19　サブトレ3　6層								0													
	トレンチ19　サブトレ3　8層				2				2													
	トレンチ19　サブトレ3　9層						1		1												1	
合計		1	1	2	3	2	11	2	20	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	1	6	2

第5表　右掖門地区遺物出土状況 c

出土地＼分類		明朝系																			塼				
		丸瓦								平瓦															
		灰色			褐色			赤色	合計	灰色(焼き締め)	灰色			褐色(焼き締め)	褐色			赤色		合計	灰色				
		玉縁～筒部	玉縁部	筒部	玉縁部	筒部	端部	玉縁部～端部		筒部	狭端	筒部	広端	筒部	狭端	筒部	広端	狭端	筒部		ⅠA・Ba	ⅠA・Bb	ⅠBb	Ⅲ	分類不明
平成18年度	トレンチ1　石敷1　直上								0											0					
	トレンチ1　石敷2　溝内								0											0					
平成19年度	トレンチ2　下層　造成土								0			1							1	2					
	トレンチ2　西端拡張部　炭まじり土		4		1				5				1		1		1			3					
	トレンチ2　西端拡張部　クチャ混り造成土								0											0					
	西端側拡張部　クチャ混り造成土層								0											0					
	石積み前								0		2		2		1		2			7	2	1			
	石積み前　褐色土								0											0					
	石積み前　造成土								0			2								2					
	石積み　裏込め内								0											0					
	石敷	1				1		1	3					1				1		2			1		
	石敷　上面				1				1	1	1	1	1			2				6				1	
	石敷　南溝西端								0		1	1			1	8				11					
	石敷　南溝西端　クチャ混層の下層								0											0					
	石敷　南溝西端　クチャ混層								0											0					
	石敷　縁石南側下								0											0					
平成22年度	トレンチ19　サブトレ1　6層			1	5	3	1		10		1	1	3				3			8					
	トレンチ19　サブトレ1　9層					1			1						1					1	1	1		1	
	トレンチ19　サブトレ2　6層				1				1											0					
	トレンチ19　サブトレ3　6層						3		3						1	1	2			4					
	トレンチ19　サブトレ3　8層				1				1							2			1	3					
	トレンチ19　サブトレ3　9層				1				1											0					1
合計		1	4	1	10	5	4	1	26	1	5	6	7	1	5	13	8	1	2	49	3	2	1	2	1

出土地＼分類		塼						ガラス製品	石材	合計
		褐色					合計			
		ⅠA・Ba	ⅠA・Bb	Ⅲ	Ⅳ	分類不明				
平成18年度	トレンチ1　石敷1　直上						0			38
	トレンチ1　石敷2　溝内						0			13
平成19年度	トレンチ2　下層　造成土						0			12
	トレンチ2　西端拡張部　炭まじり土						0			21
	トレンチ2　西端拡張部　クチャ混り造成土						0			2
	西端側拡張部　クチャ混り造成土層						0			1
	石積み前						3			12
	石積み前　褐色土						0			2
	石積み前　造成土						0		8	22
	石積み　裏込め内						0	1		5
	石敷				1		2			31
	石敷　上面					1	2			34
	石敷　南溝西端						0			17
	石敷　南溝西端　クチャ混層の下層						0			5
	石敷　南溝西端　クチャ混層						0			1
	石敷　縁石南側下						0			1
平成22年度	トレンチ19　サブトレ1　6層						0		4	44
	トレンチ19　サブトレ1　9層						3		1	9
	トレンチ19　サブトレ2　6層					1	1			6
	トレンチ19　サブトレ3　6層		1				1		1	11
	トレンチ19　サブトレ3　8層				1		1			8
	トレンチ19　サブトレ3　9層	1		1		2	5			10
合計		1	1	1	2	4	18	1	14	305

第6表　右掖門地区出土遺物観察一覧a

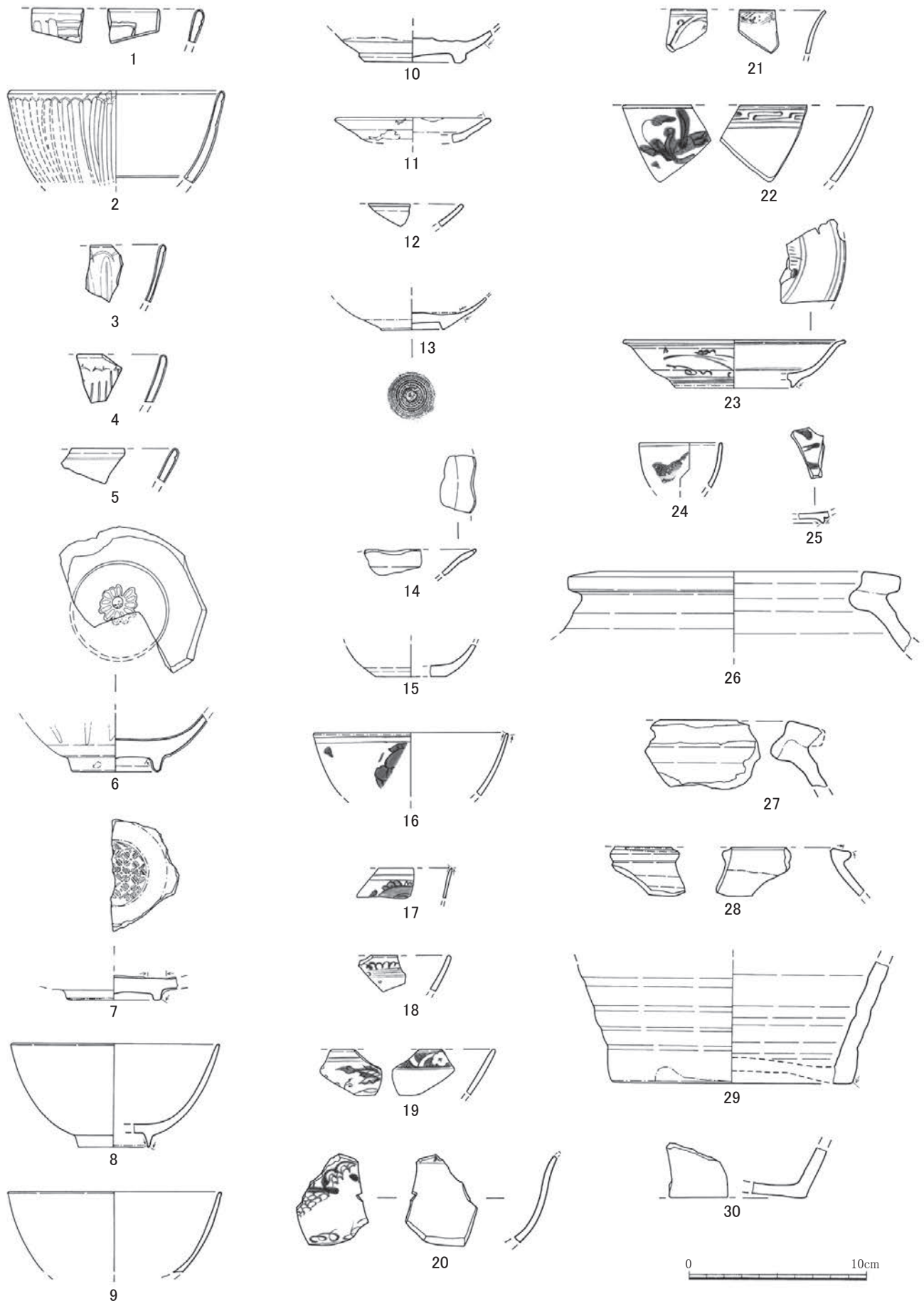
挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項	年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第11図 図版5	1	中国産 青磁	碗	口縁部	－	－	－	釉はオリーブ灰色を呈し、細かな気泡を含む。素地は灰色でやや粗い。黒色粒を僅かに含む。外面口縁部にヘラ描きによる雷文、内面に唐草文。龍泉窯。14c末～15c中葉。	H18	トレンチ1 石敷直上
	2	中国産 青磁	碗	口縁部	12.2	－	－	釉は淡オリーブ灰色を呈し、細かな気泡を多く含む。素地は灰白色で細かい。微細な黒色粒を僅かに含む。外面にヘラ描きによる細蓮弁文。龍泉窯。15c後～16c前。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ1 №2(9層)
	3	中国産 青磁	碗	口縁部	－	－	－	釉はオリーブ灰色を呈し、細かな気泡を多く含む。素地は灰白色でやや粗い。黒色粒を含む。外面にヘラ描きによる蓮弁文。龍泉窯。15c後～16c前。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ3・6層
	4	中国産 青磁	碗	口縁部	－	－	－	釉は灰オリーブ色を呈し、細かな気泡を多く含む。素地は灰白色で緻密。外面にヘラ描きによる細蓮弁文。龍泉窯。15c後～16c前。	H19	石敷上面
	5	中国産 青磁	碗	口縁部	－	－	－	釉はオリーブ灰色を呈し、細かな気泡を多く含む。素地は灰白色でやや粗い。黒色粒を含む。外面口唇下部にヘラ描きによる1条の圏線。龍泉窯。15c後～16c前。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ1・6層
	6	中国産 青磁	碗	底部	－	5.0	－	淡灰オリーブ色の釉を高台内以外に施釉。細かい貫入が多い。素地は灰白色で細かい。外面にヘラ描きによる蓮弁文、見込みに菊花文。龍泉窯。14c末～15c中。	H22	トレンチ19 サブトレ1 №2(9層)
	7	中国産 青磁	皿	底部	－	5.4	－	釉はオリーブ灰色を呈し、高台脇まで施釉。見込みは蛇の目状に釉剥ぎ。細かい貫入あり。素地は黄色味の強い灰白色でやや粗い。黒色粒を多く含む。見込みに陰圏線と七宝繋ぎ文か。龍泉窯。14c後～15c前。	H18	トレンチ1 石敷2 溝内
	8	中国産 白磁	碗	口～ 底部	11.6	4.0	5.8	白色の釉を両面に施釉し、畳付を釉剥ぎする。素地は白色で緻密。全体的に薄手の造り。轆轤成形。景徳鎮窯。16c代。	H18	トレンチ1 石敷1 直上
	9	中国産 白磁	碗	口縁部	12.0	－	－	白色の釉を両面に施釉し、畳付を釉剥ぎする。素地は白色で緻密。全体的に薄手の造り。轆轤成形。景徳鎮窯。16c代。8と同一個体と考えられる。	H18	トレンチ1 石敷1 直上
	10	中国産 白磁	碗	底部	－	6.0	－	灰白色の釉を外面腰部まで施釉。見込みは露胎で、轆轤痕が明瞭。素地は淡黄色で細かい。福建・広東系。14c後～16c代。	H19	石敷
	11	中国産 白磁	皿	口縁部	8.8	－	－	灰色釉を内面にのみ施釉後、口唇部を釉剥ぎ。外面に所々はねた釉薬が残る。微細な貫入あり。素地は灰白色で細かい。黒色粒を含む。外面は轆轤痕が明瞭で煤の付着がみられる。灯明皿。福建産。16c代。	H18	トレンチ1 石敷2 溝内
	12	中国産 白磁	皿	口縁部	－	－	－	灰白色の釉を両面に施釉。素地は灰白色で緻密。轆轤成形。福建・広東系。14c後半～16c代。	H19	トレンチ2 西端拡張部炭混り土
	13	中国産 白磁	皿	底部	－	3.6	－	光沢のある暗灰白色の釉を外面腰部まで施釉。見込みは露胎。素地は灰白色で緻密。碁笥底。轆轤成形。福建・広東系。17c後～18c前。	H19	石敷上面
	14	中国産 白磁	皿	口縁部	－	－	－	白色の釉を両面に施釉。内外面に細かい貫入あり。素地はやや黄色味を帯びた灰白色で細かい。稜花皿。徳化窯。16c後半。	H19	石敷上面
	15	中国産 白磁	瓶	底部	－	4.0	－	透明釉を内面に施釉。外面は露胎。素地は淡黄色で細かい。轆轤成形。福建・広東系。14c後～16c代。	H19	トレンチ2 下層造成土
	16	中国産 染付	碗	口縁部	11.0	－	－	明緑灰色釉を両面に施釉。口唇部を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面口縁部に二重圏線、胴部に宝文？轆轤成形。景徳鎮窯。16c代。	H18	トレンチ1 石敷1 直上

第6表　右掖門地区出土遺物観察一覧b

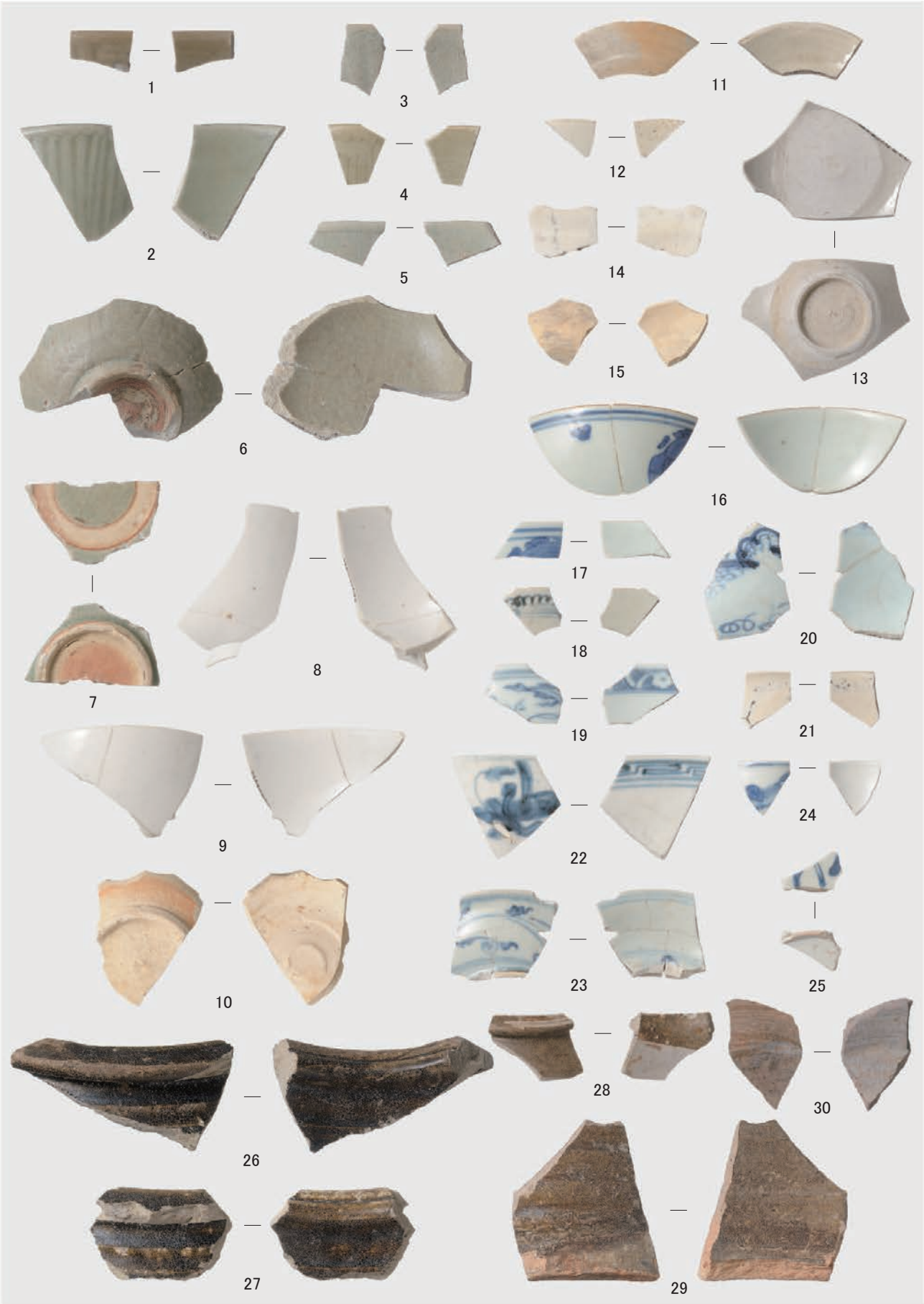
挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項	年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第11図 図版5	17	中国産 染付	碗	口縁部	−	−	−	明緑灰色釉を両面に施釉。口唇部を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面口縁部に二重圏線、胴部に宝文？轆轤成形。景徳鎮窯。16c代。	H18	トレンチ1 石敷1 直上
	18	中国産 染付	碗	口縁部	−	−	−	明オリーブ灰色釉を両面に施釉。素地は灰白色で細かい。外面口縁部に花唐草文。轆轤成形。景徳鎮窯。15c後～16c前。	H19	トレンチ2 西端拡張部炭混り土
	19	中国産 染付	碗	口縁部	−	−	−	明緑灰色釉を両面に施釉。素地は白色で緻密。外面口縁部に二重圏線、胴部に唐草文。内面口縁部に波濤文と花文？轆轤成形。轆轤成形。景徳鎮窯。15c後～16c初。	H19	石敷上面
	20	中国産 染付	碗	胴部	−	−	−	明緑灰色釉を両面に施釉。素地は白色で細かい。外面胴部に唐草文？内面口縁部に僅かに文様が確認される。轆轤成形。轆轤成形。景徳鎮窯。16c代。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ1・6層
	21	中国産 染付	碗	口縁部	−	−	−	被熱の影響か、表面は灰白色を呈し、光沢がない。素地は灰白色で細かい。両面ともに文様が確認されるが、はっきりしない。景徳鎮窯。15c中～16c代。	H18	トレンチ1 石敷2 溝内
	22	中国産 染付	碗	口縁部	−	−	−	淡灰白色釉を両面に施釉。細かい貫入多くみられる。素地は白色で緻密。外面に植物の文様、内面に雷文。漳州窯。16c末～17c前。	H19	石敷上面
	23	中国産 染付	皿	口～ 底部	12.6	6.6	3.7	明緑灰色釉を両面に施釉。素地は白色で緻密。外面に宝相華唐草文、見込みに玉取獅子文か。轆轤成形。景徳鎮窯。15c後～16c前。	H18	トレンチ1 石敷1 直上
	24	中国産 染付	小杯	口縁部	−	−	−	透明釉を両面に施釉。素地は白色で緻密。外面口縁部に圏線、胴部に獅子文。轆轤成形。景徳鎮窯。17c前か。	H19	石敷
	25	中国産 染付	小皿	底部	−	−	−	暗緑灰色釉を両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。見込みに文様あり。徳化窯。清代。	H19	トレンチ2 下層造成土
	26	中国産 褐釉陶器	壺	口縁部	18.7	−	−	黒褐色釉を両面に施釉。素地は灰黄色で細かい。石英や黒色粒を含む。15c～16c。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ2・6層
	27	中国産 褐釉陶器	壺	口縁部	−	−	−	黒褐色釉を両面に施釉。素地は灰黄色で細かい。石英や黒色粒を含む。15c～16c。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ1・6層
	28	中国産 褐釉陶器	壺	口縁部	−	−	−	暗灰黄色釉を両面に施釉。口唇部の一部を釉剥ぎ。内面は口縁部下部から露胎。素地は暗灰白色で細かい。石英や黒色粒を含む。	H18	トレンチ1 石敷直上
	29	中国産 褐釉陶器	壺	底部	−	13.6	−	暗灰黄色釉を両面に施釉。外面下部は釉剥ぎ。素地はにぶい黄橙色で細かい。石英・褐色粒・黒色粒を含む。15c～16c。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ1・6層
	30	中国産 褐釉陶器	壺	底部	−	−	−	暗灰黄色釉を外面に施釉後、釉剥ぎされている。素地は暗褐灰色でやや粗い。石英を多く含む。	H19	石積み前造成土
第12図 図版6	31	本土産 陶器	急須	口縁部	8.2	−	−	無釉。赤褐色を呈し、緻密。微細な白色粒を含む。口唇断面は丸みをおびる三角形を呈する。轆轤成形。造りは丁寧。産地は不明。	H19	石積み裏込め内
	32	本土産 陶器	器種不明	胴部	−	−	−	外面は灰オリーブ色釉、内面は泥釉を施釉。素地は淡黄色を呈し、軟質である。赤色粒を含む。底部の一部は淡橙色を呈する。轆轤成形。関西系。	H18	トレンチ1 石敷2 溝内
	33	沖縄産 施釉陶器	小碗	底部	−	4.0	−	灰釉を両面に施釉。外面胴部下半は露胎。見込みも露胎だが、蛇の目状に白化粧を施す。素地は灰白色で細かい。	H18	トレンチ1 石敷2 溝内
	34	沖縄産 施釉陶器	蓋	−	−	−	−	外面に鉄釉の上から褐釉を施釉。内面は露胎。素地はにぶい黄色を呈し細かい。白砂・黒色粒を含む。外面端部には砂付着。轆轤成形。	H18	トレンチ1 石敷1 直上

第6表　右掖門地区出土遺物観察一覧c

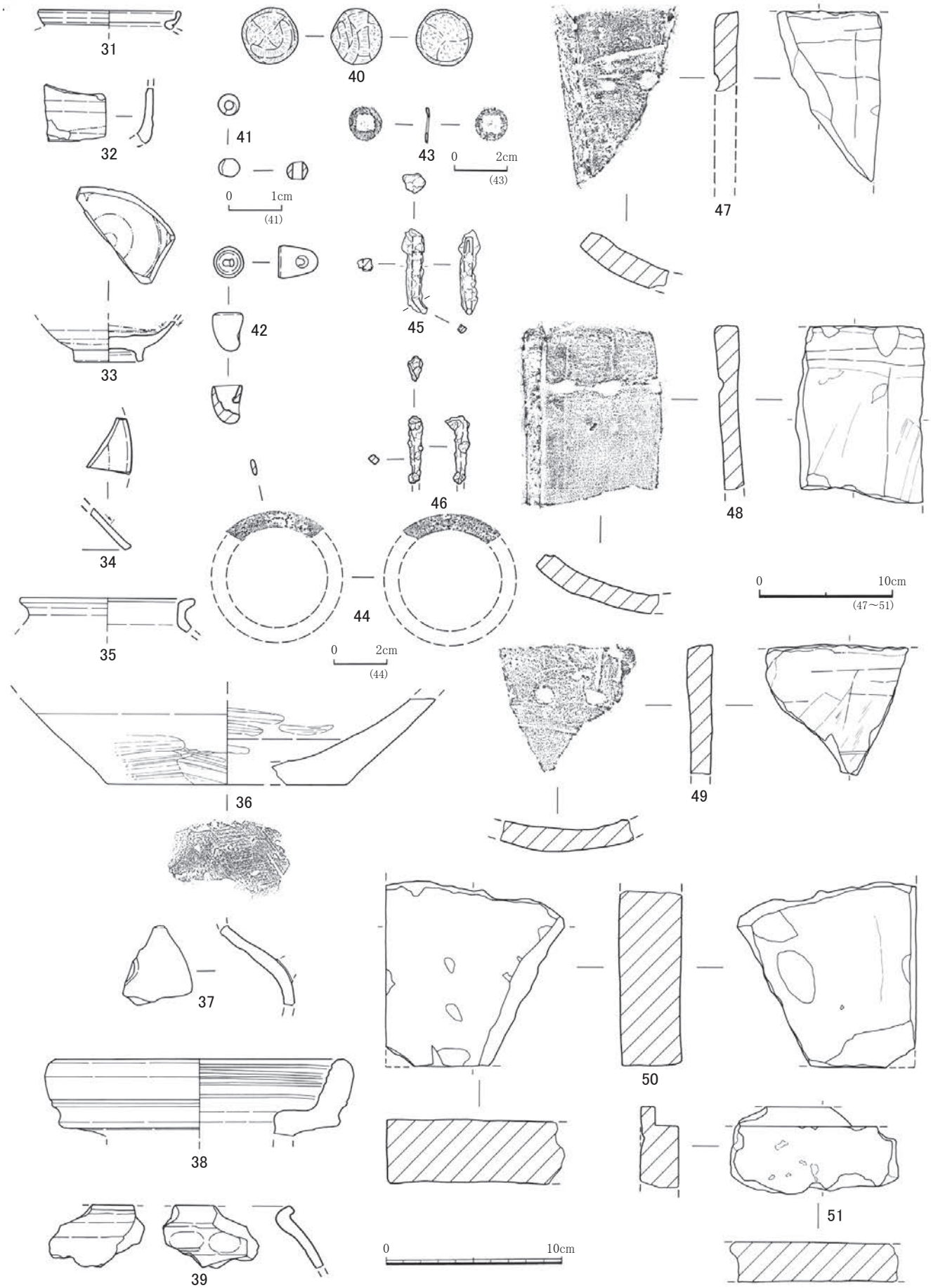
挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項	年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第12図 図版6	35	沖縄産 施釉陶器	香炉	口縁部	10.0	−	−	灰釉を両面に施釉。素地は灰白色で細かい。黒色粒を含む。	H19	石敷
	36	沖縄産 無釉陶器	鉢	底部	−	13.6	−	外面はにぶい黄褐色、内面はにぶい赤褐色、素地は赤灰色を呈する。石灰粒含む。外面底部付近では横方向のナデが明瞭であり、内面のナデ調整が丁寧である。	H18	トレンチ1 石敷1 直上
	37	沖縄産 無釉陶器	壺	胴部	−	−	−	外面に泥釉。素地は赤灰色を呈する。石英を多く含み、砂粒や赤色粒も含む。また、白色土も筋状に多くみられる。轆轤成形。初期のものと考えられる。	H18	トレンチ1 石敷1 直上
	38	沖縄産 無釉陶器	土管	口縁部	17.6	−	−	外面は淡黒褐色の泥釉を施釉、素地は暗赤褐色を呈する。石英・白色・赤色粒・石灰粒を含む。内面口縁部は櫛状の工具で横方向に調整した痕跡が確認される。	H18	トレンチ1 石敷1 直上
	39	土器 (宮古式)	鉢	口縁部	−	−	−	外面:にぶい黄橙色、内面:明赤褐色、断面:灰色。混入物:砂粒(多量)、赤色粒、貝殻片。調整:両面に横方向のナデ、外面はミガキも施される。内面はハケ目が残る。	H19	石敷 南溝西端
	40	サンゴ 製品	−	−	−	−	−	表裏面及び側面に研磨がみられる。表裏面ともに中心部が放射状に高くなっており、複数の面をもつ。鉄製品の錆落としなどの可能性が考えられる。	H19	トレンチ2 西端拡張部炭混り土
	41	ガラス 製品	−	−	0.4	―	0.35	ガラス玉。孔径:0.15cm。青緑色。横位に巻き付け成形時の筋が入る。微細な気泡を含む。	H19	石積み裏込め内
	42	煙管	−	雁首	2.2			陶製で瓦質を呈する。先端が丸みを帯びる円錐形。器壁は0.2〜0.3cmとかなり薄い。調整痕ははっきりしないが、ナデによる調整か。火皿径1.8cm、羅宇接続部径0.6cm。	H19	トレンチ2 西端拡張部炭混り土
	43	銭貨	無文銭	−	1.2	−	(厚さ) 0.1	重量0.4g。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ1・6層
	44	青銅製品	飾り金具	−	5.0	−	0.18	両面に非常に細かいドット状の文様がみられるが、詳細は不明である。禅宗の袈裟のリングか。重量1.9g	H18	トレンチ1 石敷1 直上
	45	鉄製品	角釘	−	−	−	−	全体的に錆化が著しい。先端が一方に折れる。	H19	石敷上面
	46	鉄製品	角釘	−	−	−	−	全体的に錆化が著しい。頭部が一方に折れる。	H19	西端部拡張部 クチャ混り造成土層
	47	瓦	明朝系 平瓦	広端部	−	−	−	灰色。凸面の広端部側には横方向のナデによる凹線がみられ、凹面の広端部側には桶紐綴り圧痕がみられる。角1有り。	H19	石敷上面
	48	瓦	明朝系 平瓦	広端部	−	−	−	灰色。凸面の広端部側には横方向のナデによる凹線がみられ、凹面の広端部側には桶紐綴り圧痕がみられる。角1有り。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ1・6層
	49	瓦	明朝系 平瓦	広端部	−	−	−	褐色。凸面の広端部側には横方向のナデによる凹線がある。糸切痕もみられる。凹面の広端部側には桶紐綴り圧痕がみられる。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ3・6層
	50	塼	ⅠABa式	破片	−	−	−	褐色系。表面は風化の影響か、ざらざら感がある。裏面は粗面。角1有り。	H22	右掖門 トレンチ19 サブトレ3・9層
	51	塼	Ⅲ式	破片	−	−	−	灰色系。両面ともナデが丁寧に施され平坦だが、風化もみられる。側面に段を成形する。	H19	石敷上面



第11図　右掖門地区出土遺物1



図版5　右掖門地区出土遺物1



第12図　右掖門地区出土遺物2

図版6　右掖門地区出土遺物2

第２節　南側石牆地区の遺構と遺物

１　遺構

円覚寺南側を巡る石牆の復元整備にあたり、整備予定範囲における石牆の根石確認を目的とし、すでに整備がなされた箇所から西側へ向けて調査区を設定し、発掘調査を実施した。調査は、平成22年度及び24年度に実施した。調査面積は約50㎡である。

a　平成22年度

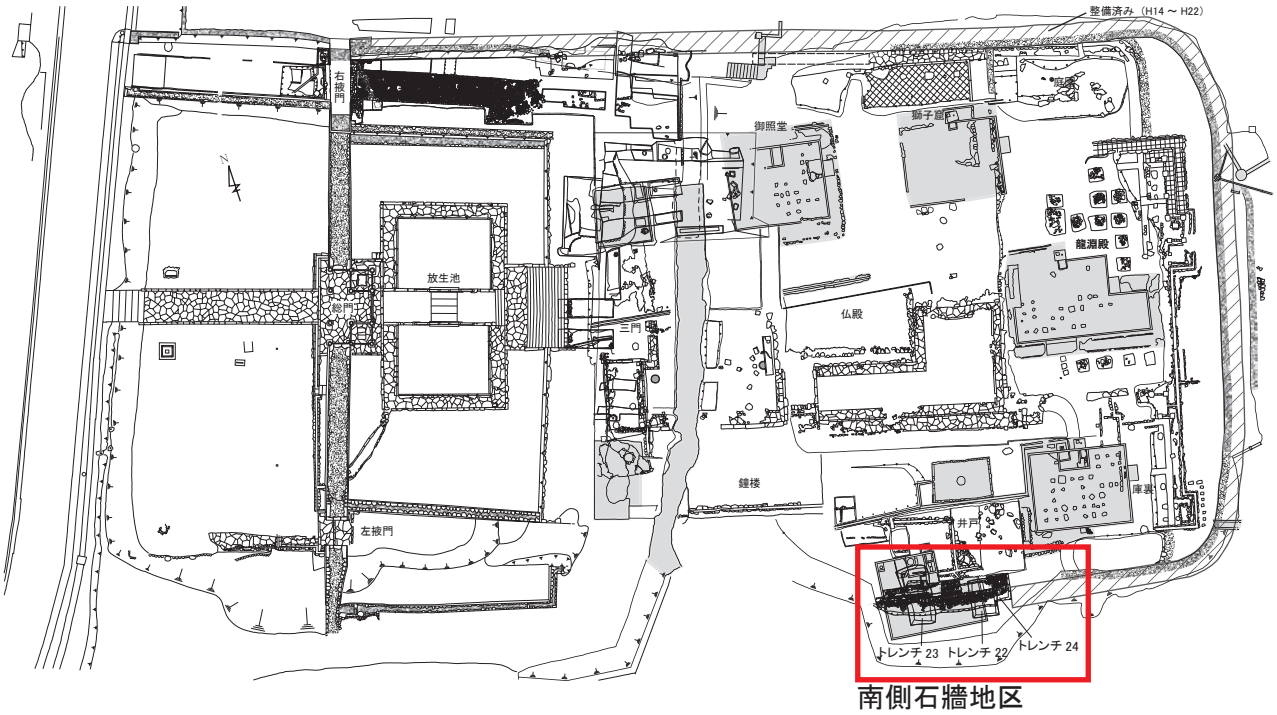
トレンチ22、23を設定して調査を行った結果、石牆（石積み１）が残存していることを確認できた（第14図、図版８）。ただし、調査期間内で根石まで確認することができなかったため、石牆の石が数段積まれている状況を確認していったん掘削作業は留め、根石確認は次回調査に持ち越しとなった。また、石牆以外にも方形状の遺構が見つかった。

層序

トレンチ22・23における堆積をみていく（第７表）。トレ22第１～３層・トレ23第１～５層までは現代遺物が混じる撹乱層で、そこから下位は未撹乱層である。トレ22第４層・トレ23第６層は方形状の遺構の造成土、トレ22・第５層は非常に薄い炭層で、トレンチ23ではみられない。トレ22第６層・トレ23第７層は遺物包含層で、多くの遺物が得られている。17世紀～18世紀代の遺物が主体となっている。

方形状の遺構

調査区西側にて、方形状の遺構を検出した（図版８）。この遺構は、現代遺物の混じらないクチャブロックが主体の造成土（トレ22第４層・トレ23第６層）に築かれていると考えられる。よって、戦前まで残存していた円覚寺の遺構と考えられる。規模は南北方向に1.2m、東西方向に1.7mの方形を呈し、西側では約40cm幅の溝状の遺構に連結する。石は全て内側に面を持つ。溝状の遺構に連結することより、流れてくる水を溜めるための遺構とも考えられる。しかし平成22年度は、石牆の



第 13 図　南側石牆地区 調査箇所

確認が調査目的であったため、この方形状の遺構については石の輪郭を出す程度の掘削に留めた。詳細については今後の調査によりたい。

第7表　南側石牆地区（平成22年度）トレンチ22・23 土層一覧

層序		色 調	所 見
トレンチ22	トレンチ23		
1	1	Hue2.5Y5/2　暗灰黄色土	現代遺物を含む撹乱層。
2	2	Hue2.5Y6/1　黄灰色土	赤瓦やガラス片など現代遺物を多く含む撹乱層。
3	3	Hue2.5Y5/1　黄灰色土	ガラス片など現代遺物を多く含む撹乱層。
－	4	Hue10YR4/1　褐灰色土	ガラス片など現代遺物を多く含む撹乱層。
－	5	Hue5Y4/2　灰オリーブ色土	現代遺物含む撹乱層。
4	6	Hue5Y6/2　灰オリーブ色土	クチャブロック（20～30cm大）が主体の層。粘質強く、しまり強い。現代遺物はみられない。方形状遺構はこの土に築かれていると考えられる。造成土。（トレ24　3層と同層）
5	－	Hue10YR1.7/1　黒色土	炭の層。粘質はややあるが、しまりはやや弱い。非常に薄い。（トレ24　4層と同層）
6	7	Hue5Y5/3　灰オリーブ色土	粘質強いが、しまりはやや弱い。炭粒が多く含まれ、遺物も多い。（トレ24　7・9層と同層）
7	8	Hue7.5Y6/2　灰オリーブ色土	クチャの地山。粘質、しまりともに強い。

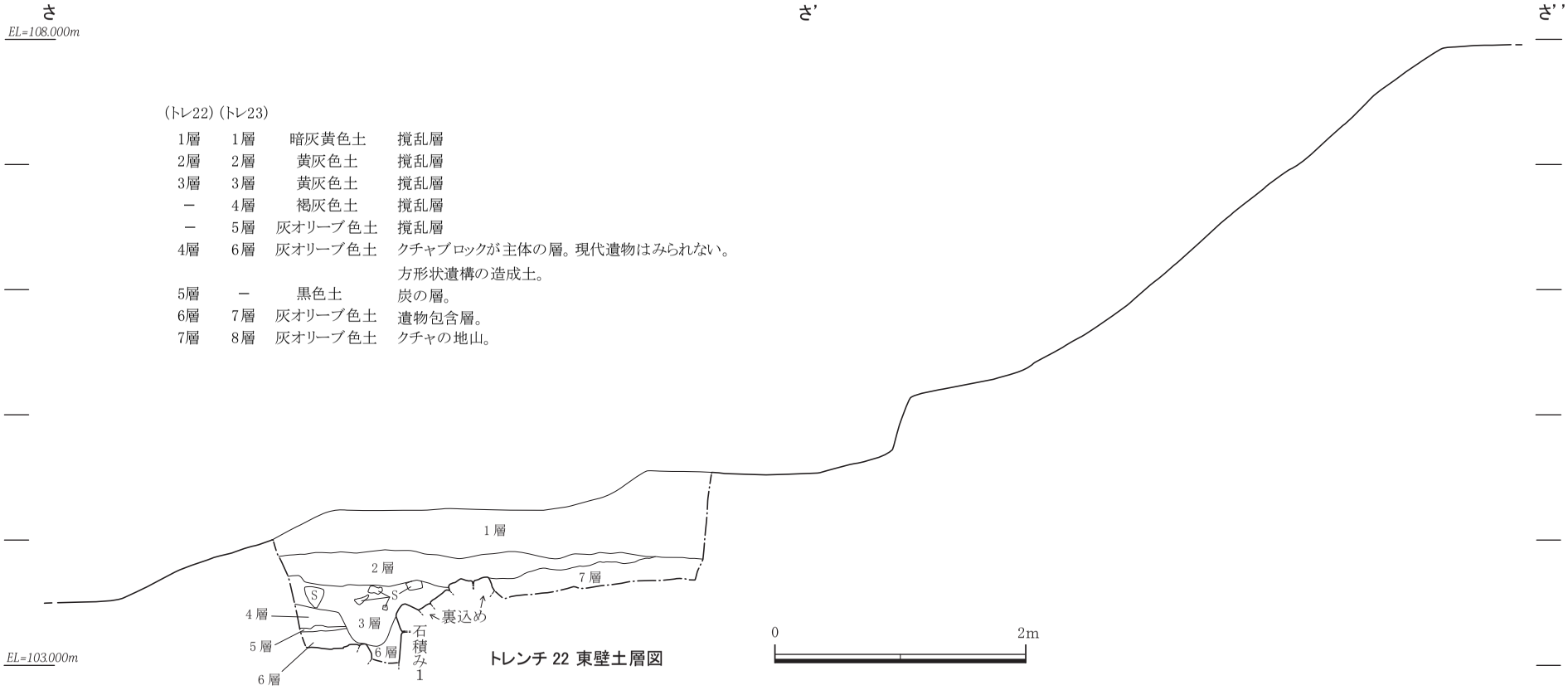
トレンチ 22 東壁（西から）

トレンチ 23 東壁（西から）

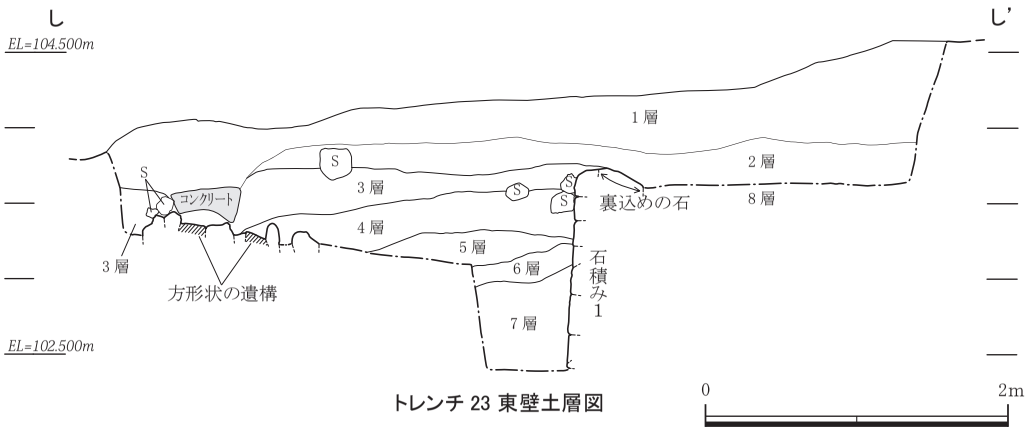
トレンチ 23 東壁（西から）

図版7　南側石牆地区 遺構検出状況1

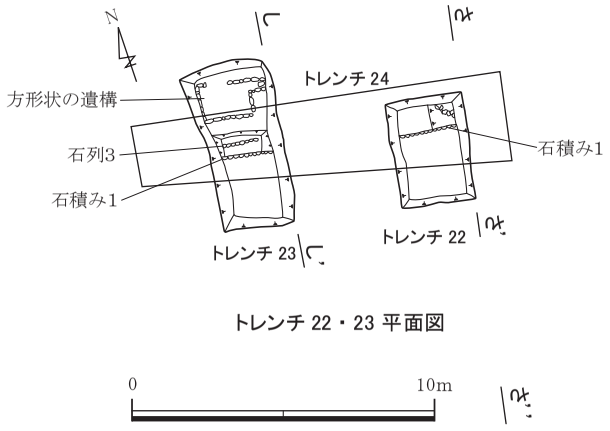
(トレ22)	(トレ23)		
1層	1層	暗灰黄色土	撹乱層
2層	2層	黄灰色土	撹乱層
3層	3層	黄灰色土	撹乱層
－	4層	褐灰色土	撹乱層
－	5層	灰オリーブ色土	撹乱層
4層	6層	灰オリーブ色土	クチャブロックが主体の層。現代遺物はみられない。方形状遺構の造成土。
5層	－	黒色土	炭の層。
6層	7層	灰オリーブ色土	遺物包含層。
7層	8層	灰オリーブ色土	クチャの地山。



トレンチ 22 東壁土層図



トレンチ 23 東壁土層図



トレンチ 22・23 平面図

第 14 図 トレンチ 22・23 遺構図

トレンチ 22 石積み1 検出状況（北から）

トレンチ 22 石積み1 近景（北から）

トレンチ 23 遺構検出状況（北から）

トレンチ 22、23 遠景（西から）

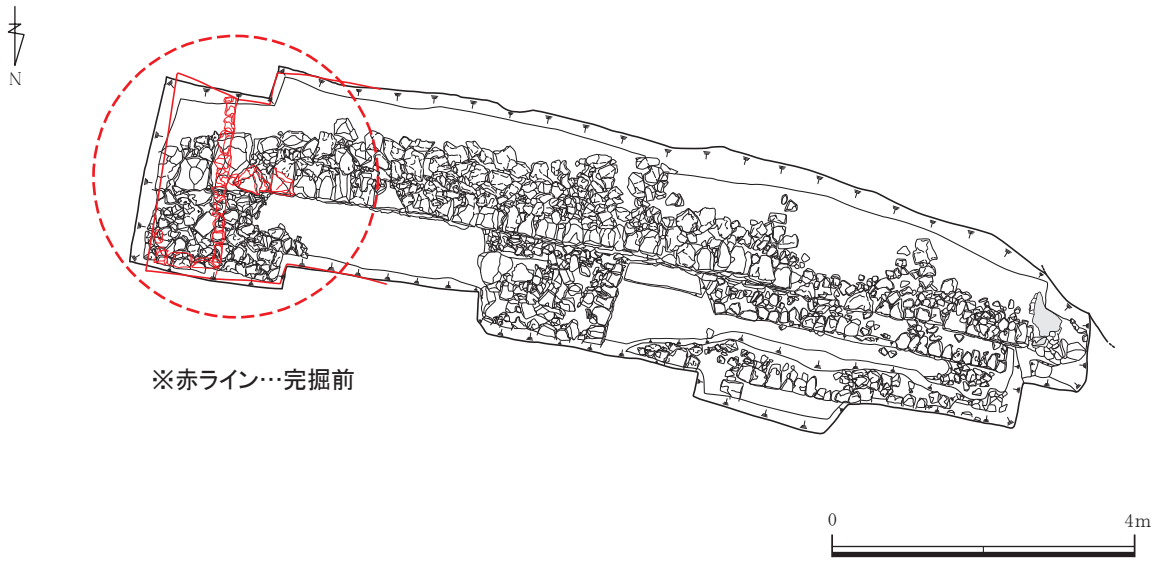
図版8　南側石牆地区 遺構検出状況2

b　平成24年度

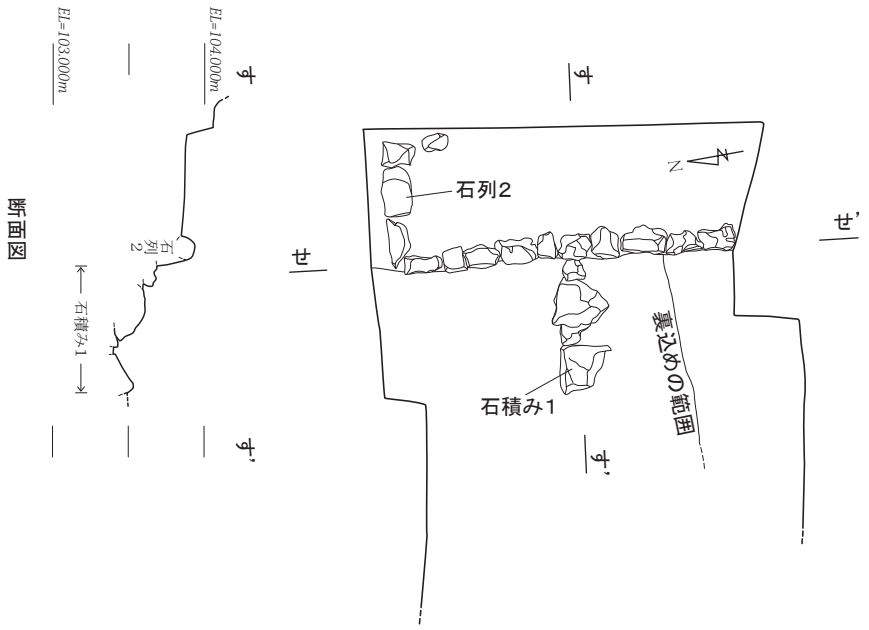
前回調査で石牆ラインを検出したトレンチ22及び23に重なる範囲でトレンチ24を設定した。調査の結果、復元対象である石牆とその根石を確認することができた。石牆は残りが非常に良く、調査区全体に渡って残存していた。また、石敷遺構や石積み、石列などの遺構も見つかった。その他、戦前まであったと考えられる円覚寺跡の遺構や、戦後に構築されたと考えられる石列なども見つかった。

層序

本地区における土の堆積状況を、平成24年度の調査成果を基に述べていく（第８表）。そのほとんどは近世段階に相当する。第３層以下が現代遺物の混ざらない層である。第３層はクチャブロックが主体の層で、方形状の遺構の造成土と考えられる。遺物は17世紀後半～18世紀頃が主体である。第４層は炭層で、調査区の東側で推積しているのが確認された。遺物は17世紀後半～18世紀代が主体である。第５層は調査区の東側にて、石敷５の上に堆積しており、塼や陶磁器片が多く得られた。土中には炭化物が多く混じっていた。石敷５をよく観察すると、表面が赤みを帯びたような様相もみられることから、火災等が起きて一括で廃棄したものと考えられる。遺物は赤瓦が若干混じることより、17世紀後半～18世紀代と考えられる。第６～10c層は遺物包含層で17世紀～18世紀代の遺物が主体である。第８層は調査区西側の北壁で検出された石列４に伴う造成土である。遺物は少ない。第11層は下部で見つかった石敷の造成土、第12、13層は石列３の造成土である。遺物は17世紀代と考えられる。第15層は石敷４の造成土、第14、16、17層は石牆及び石積み１の造成土である。遺物は少なく、褐釉陶器が１点出土している。

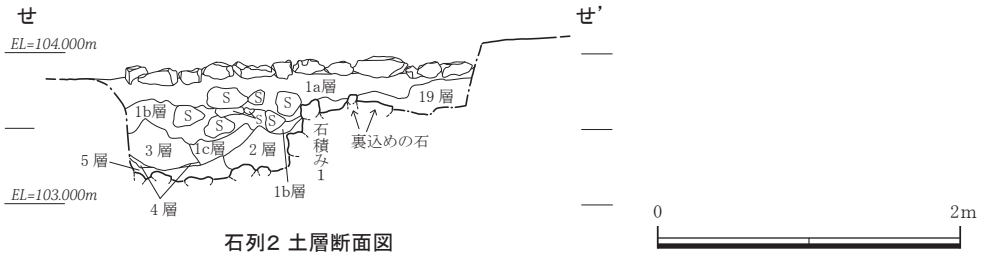


第 15 図　トレンチ 24 石列2 検出箇所



石列2 検出状況

1a層	オリーブ褐色土	撹乱層。
1b層	オリーブ褐色土	撹乱層。
1c層	浅黄色土	撹乱層。
2層	―	注記なし。
3層	灰オリーブ色土	クチャブロックが主体の層。
4層	黒色土	炭層。
5層	暗オリーブ褐色土	礫、炭粒を含む。
19層	灰オリーブ色土	しまり強い。クチャの地山。



石列2 土層断面図

石列2 検出状況（北西から）

石列2 東壁（西から）

第 16 図　石列2 検出状況

石列２

調査区東側にて、表土から約20cm下げると北側及び西側に面を持つ石列を検出した。この石列がのっている土（第１層）にはガラス片や現代の鉄釘などが混じることより、戦後に構築された石列と考えられる。そのため、旧琉球大学に伴う構造物の可能性も考えられる（第16図）。

石積み１

円覚寺の南側を取り囲む石積みであり、『首里古地図』（第３図）にも描かれている。根石まで残存している状況を確認できた。石積みは石灰岩の切石を用いた相方積みで、クチャの地山直上に根石を据えて立ち上げている箇所と、造成土に根石を据えて立ち上げている箇所が確認できた（第19図）。また、石牆を観察すると、大きさや加工を同じように施した石を使用し、石と石が隙間なく積まれている箇所もあれば、大小様々な石を使用し、石と石の隙間が大きい箇所など、石の積み方に違いがみえる箇所が数箇所あった。このことより、何度か積み直し等が行われたことが考えられる（第19図）。しかし、遺物の出土状況より、時期差を見出すことはできなかった。なお石牆の一部にて、排水管と思われる鉄製パイプが石牆から突き出ている所がある（第19図）。この鉄製パイプ周辺については、旧琉球大学に伴う構造物設置の際に積み直されてたものと考えられる。

また、裏込めの石にも注目すると、約10～30cm大の石が密に入り、面石からの裏込め幅が、調査区の東側から西側へかけてだんだん狭くなっている。これは石牆の高さに関係していると考えられ、裏込め石の幅が大きい箇所は石牆の高さも高く積まれ、裏込め石の幅が狭い箇所は石牆の高さは低く積まれていたことが考えられる。そうすると、円覚寺の南側の石牆は西側へ向かってだんだん低くなるように築かれていたことが考えられる。石牆の残存高は最大で164cmである。

石敷５

調査区東側にて石牆の前面に広がる状況を確認できた（図版10）。石敷５は調査区の中央部で見つかった南北方向に延びる石積み２まで続いていたことが想定され、その機能については排水を意識したものではないかと考える。約10～20cmの石灰岩が主体で、中には40cm大の石も使われている。石敷５は、平成22年度にトレンチ22を調査した際、僅かに検出されている。右掖門地区で見つかった石敷４に類似する。

石積み２

石積み１に直交するように確認された（図版10）。20～30cm大の石灰岩を３段積んでいる。南北方向に延び、東側に面をもつ。また、天端も意識して面取りされている。石積みの残存高は36cm。

石列３

調査区西側にて石牆の根石の前面にて確認された（図版10）。東西方向に延び、北側に面をもつ。また、裏込め石も伴っている。機能については、石列を伴う石牆は、しまりの弱い造成土上に根石を据えて立ち上げている状況も踏まえると、石牆を補強するためのものと考えられる。石列の残存高は22cm。

石列４

調査区西側の北壁にて確認された（図版10）。面などは確認できないが、同じような形や大きさをした石が、天端も揃って数個並んでいる状況で確認されたため、石列と判断した。石列３より上層で見つかっているため、石列３よりは新しい。今回は一部分のみ検出しただけで留めたため、詳細については今後の調査によりたい。

遺構の新旧関係を整理すると、石積み１、石積み２、石敷５を築いた後に、石牆を補強する目的で石列３を新たに築いたものと考えらえる。さらに、あまり時間を置かずして、第３層のクチャ主体の土を投入して周辺の土地造成を行い、方形状の遺構のような内部遺構を築いたものと考えられる。年代としては、各遺構の造成土から出土した遺物より、近世段階（17世紀～18世紀代）に築かれたものか、あるいは近世段階にはすでに築かれていたものと考えられる。

第8表　南側石牆地区 （平成24年度）トレンチ24 土層一覧

層序	色 調	所 見
1a	Hue2.5Y4/6 オリーブ褐色土	前回調査時のブルーシートが入っている撹乱層。 石列2の造成土。
1b	Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色土	粘質が強く、しまりも強い。小礫、炭粒を含む。撹乱層。
1c	Hue5Y7/3 浅黄色土	粘質は強く、しまりも強い。クチャブロック（1～30cm大）を多く含む。小礫も少しみられる。撹乱層。
1d	Hue2.5Y5/3 黄褐色土	粘質は強く、しまりも強い。クチャブロック（5～15cm大）を多く含む。撹乱層。
1e	―	撹乱層。
1f	Hue5Y3/2 オリーブ黒色土	粘質はややあるが、しまりはない。埋甕内の埋土。撹乱。
2	―	注記なし。
3	Hue5Y4/2 灰オリーブ色土	粘質がやや強く、しまりはよい。クチャブブロック（5～20cm大）を多く含む。クチャブロックが主体の層。炭粒も僅かにみられる。現代遺物は混じらない。遺物は少ない。（トレ22 4層・トレ23 6層と同層）
4	Hue10YR1.7/1 黒色土	炭層。礫（2～4cm大）がまばらに含まれる。（トレ22 5層と同層）
5	Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土	礫、炭粒を含む。瓦やセン、陶磁器などが多く混じる。石敷遺構5の上に堆積。
6	Hue2.5Y5/4 黄褐色土	粘質、しまりともに強い。7層と類似するが、クチャブロックが混じらないことで分けられる。
7	Hue2.5Y4/2 暗灰黄色土	粘質は強く、しまりはよい。炭粒、焼土粒、小礫を含む。遺物は瓦、塼、陶磁器など多く含む。徳化窯系、沖施などもみられる。（トレ22 6層・トレ23 7層と同層）
8	Hue2.5Y4/2 暗灰黄色土	粘質は強く、しまりもある。炭粒、焼土粒、小礫を含む。10b層より混入物の密度は少ない。石列4が入っている範囲のみに確認される。石列4の造成土と考えられる。
9	Hue2.5Y4/2 暗灰黄色土	粘質は強く、しまりはよい。炭粒、焼土粒、小礫を含む。7層と似ているが、混入物の密度が7層より密である。（トレ22 6層・トレ23 7層と同層）
10a	Hue2.5Y5/3 黄褐色土	粘質は強く、しまりは弱い。炭粒、小礫を含む。（9層より混入物の密度は小さいが大きめの礫が入る）
10b	Hue2.5Y5/2 暗灰黄色土	粘質、しまりともにややある。炭粒、焼土粒、小礫を含む。遺物は10a層より少ない。
10c	Hue2.5Y5/3 黄褐色土	10a層とほぼ似ているが、炭粒の混入が10a層と比べて少ないため分層した。石列3の裏込め内の土。
11	Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色土	粘質は強く、しまりは弱い。小礫、炭粒を含む。西側の下部に確認された石敷の下だけにみられるため、石敷の造成土と考えられる。
12	Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色土	粘質はあるが、しまりは弱い。小礫、炭粒を含む。小礫の密度が高い層。石列3はこの土にのっていることより、石列3の造成土と考えられる。遺物は少ない。
13	Hue2.5Y4/2 暗灰黄色土	粘質はややあるが、しまりは弱い（5層より弱い）。小礫、クチャブロックを含む。石列3の造成土と考えられる。遺物は少ない。
14	Hue2.5Y5/2 暗灰黄色土より暗い	しまりは弱い。炭粒を含む。16層より炭粒の混入が多い。石積み2の造成土。
15	Hue2.5Y4/2 暗灰黄色土	粘質がとても強く、しまりもある。石灰岩（2～7cm大）を多く含む。小礫、炭粒、焼土粒を含む。石敷遺構5の造成土。
16	Hue2.5Y5/2 暗灰黄色土	粘質は強く、しまりは弱い。炭粒を僅かに含む。遺物はほとんど入っていない。石積み1と2の造成土。
17	Hue2.5Y4/2 暗灰黄色土	粘質は強く、しまりは弱い。混入物はない。遺物もない。地山であるクチャブロックの上にたまっている柔らかい土。16層より暗い。
18	Hue5Y5/2 灰オリーブ色土	粘質がとても強く、しまりは弱い。焼土粒を僅かに含む。地山のクチャブロックの間に堆積している土。
19	Hue5Y5/2 灰オリーブ色土	粘質は弱く、しまりは強い。クチャの地山。

トレンチ 24 東壁（つーつ’、ひーひ’）

トレンチ 24 北壁（てーて’）

トレンチ 24 北壁（なーな’）

トレンチ 24 北壁（ぬーぬ’）

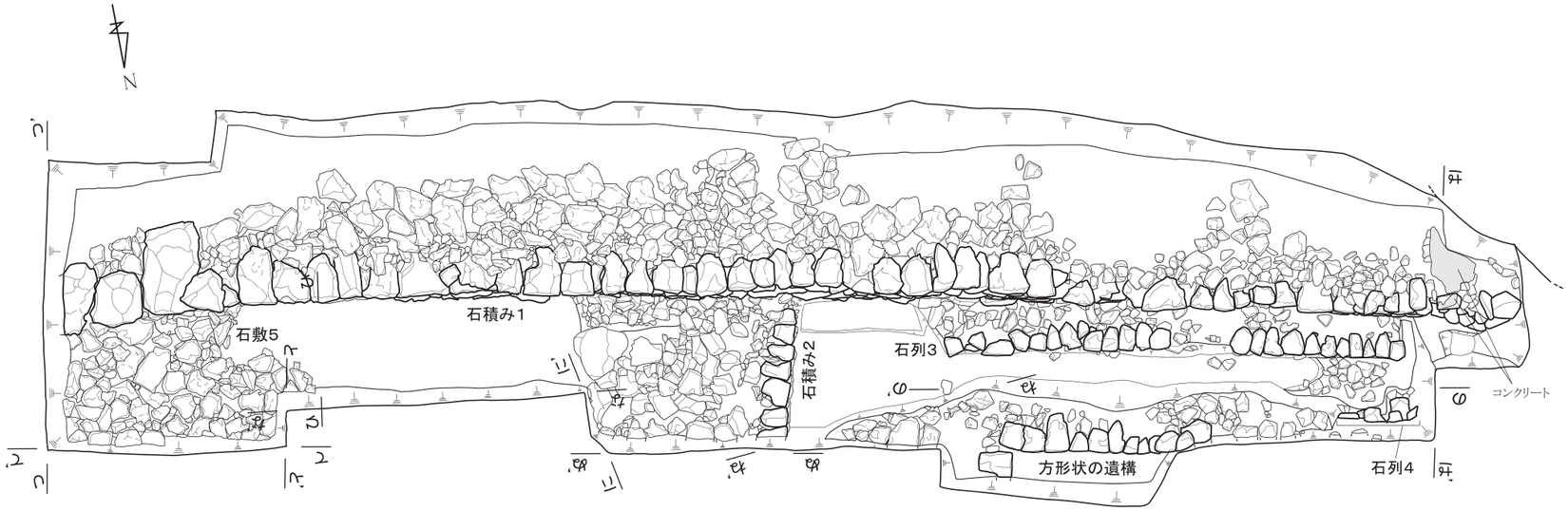
トレンチ 24 北壁（ねーね’）

トレンチ 24 北壁（ねーね’、のーの’）

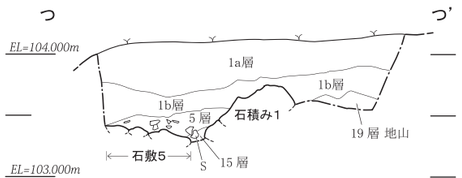
トレンチ 24 北壁（のーの’）

トレンチ 24 西壁（はーは’）

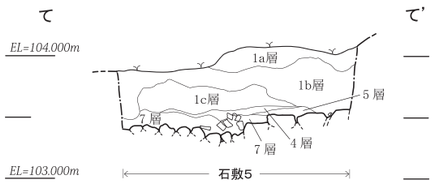
図版9　南側石牆地区 遺構検出状況3



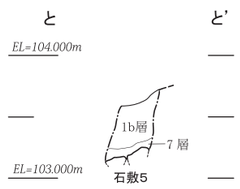
1a層	オリーブ褐色土	撹乱層。
1b層	オリーブ褐色土	撹乱層。
1c層	浅黄色土	撹乱層。
1d層	黄褐色土	撹乱層。
1e層	—	撹乱層。
1f層	オリーブ黒色土	埋甕内の埋土。撹乱。
2層	—	注記なし。
3層	灰オリーブ色土	クチャブロックが主体の層。
4層	黒色土	炭層。
5層	暗オリーブ褐色土	礫、炭粒を含む。
6層	黄褐色土	7層に類似。炭粒、焼土粒、小礫を含む。
7層	暗灰黄色土	粘質強い。炭粒、焼土粒、小礫を含む。
8層	暗灰黄色土	粘質強い。炭粒、焼土粒、小礫を含む。石列4の造成土。
9層	暗灰黄色土	粘質強い。炭粒、焼土粒、小礫を含む。(H22　7層と同層の範疇)
10a層	黄褐色土	粘質強い。炭粒、小礫を含む。遺物は多い。
10b層	暗灰黄色土	10a層より遺物は少ない。
10c層	黄褐色土	石列3の裏込め内の土。
11層	オリーブ褐色土	粘質強い。小礫、炭粒を含む。
12層	オリーブ褐色土	粘質はある。小礫、炭粒を含む。石列3の造成土。遺物は少ない。
13層	暗灰黄色土	粘質はある。小礫、クチャブロックを含む。石列3の造成土。遺物は少ない。
14層	暗灰黄色土より暗い	炭粒を含む。石積み2の造成土。
15層	暗灰黄色土	粘質強い。石灰岩(2～7cm大)を多く 含む。小礫、炭粒、焼土粒を含む。石敷5の造成土。
16層	暗灰黄色土	粘質強い。遺物はほとんどない。石積み2及び石牆の造成土。
17層	暗灰黄色土	粘質強い。混入物も 遺物も ない。地山のクチャの上にたまっている柔らかい土。
18層	灰オリーブ色土	粘質がとても 強い。焼土粒を僅かに含む。地山のクチャの間に堆積している土。
19層	灰オリーブ色土	しまり強い。クチャの地山。



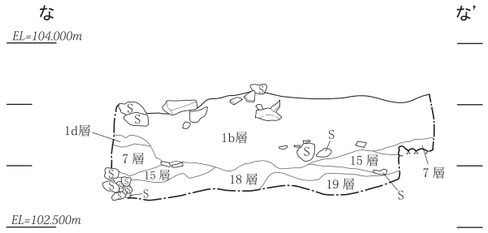
東壁土層図



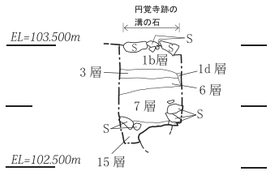
北壁土層図



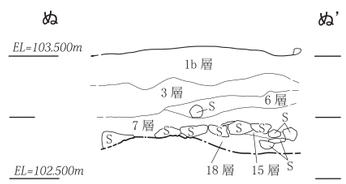
西壁土層図



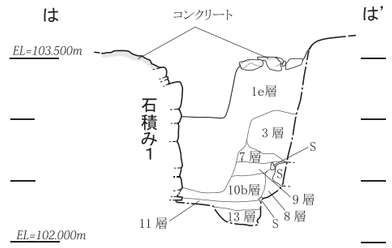
北壁土層図



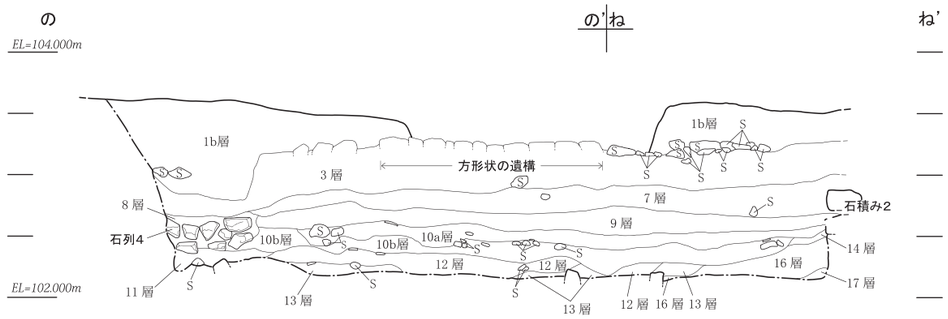
東壁土層図



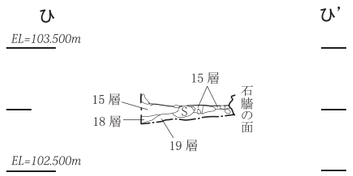
北壁土層図



西壁土層図



北壁土層図（1つに繋げた図）

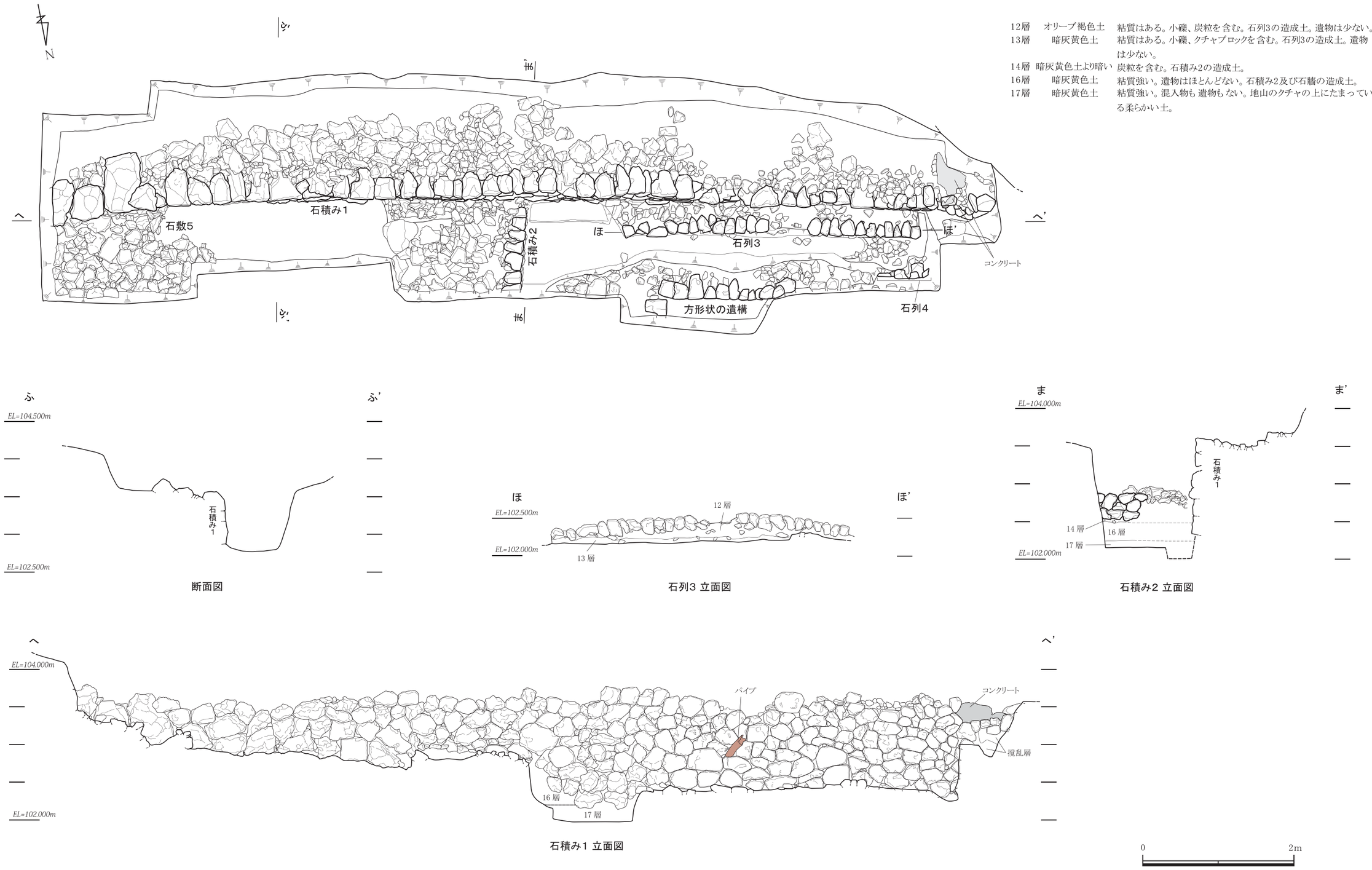


東壁土層図

0　2m

第 17 図 トレンチ 24 遺構図1

12層	オリーブ褐色土	粘質はある。小礫、炭粒を含む。石列3の造成土。遺物は少ない。
13層	暗灰黄色土	粘質はある。小礫、クチャブロックを含む。石列3の造成土。遺物は少ない。
14層	暗灰黄色土より暗い	炭粒を含む。石積み2の造成土。
16層	暗灰黄色土	粘質強い。遺物はほとんどない。石積み2及び石牆の造成土。
17層	暗灰黄色土	粘質強い。混入物も遺物もない。地山のクチャの上にたまっている柔らかい土。



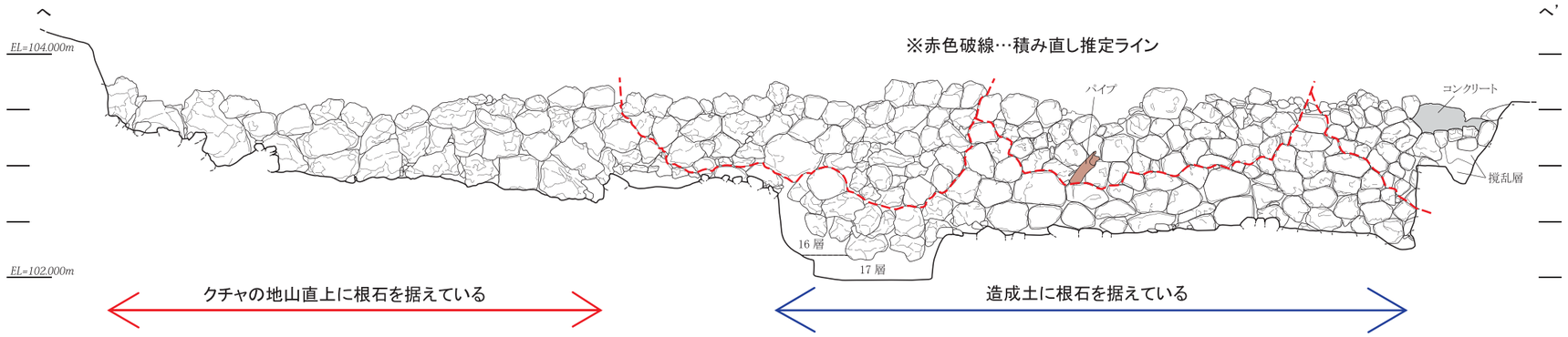
断面図

石列3 立面図

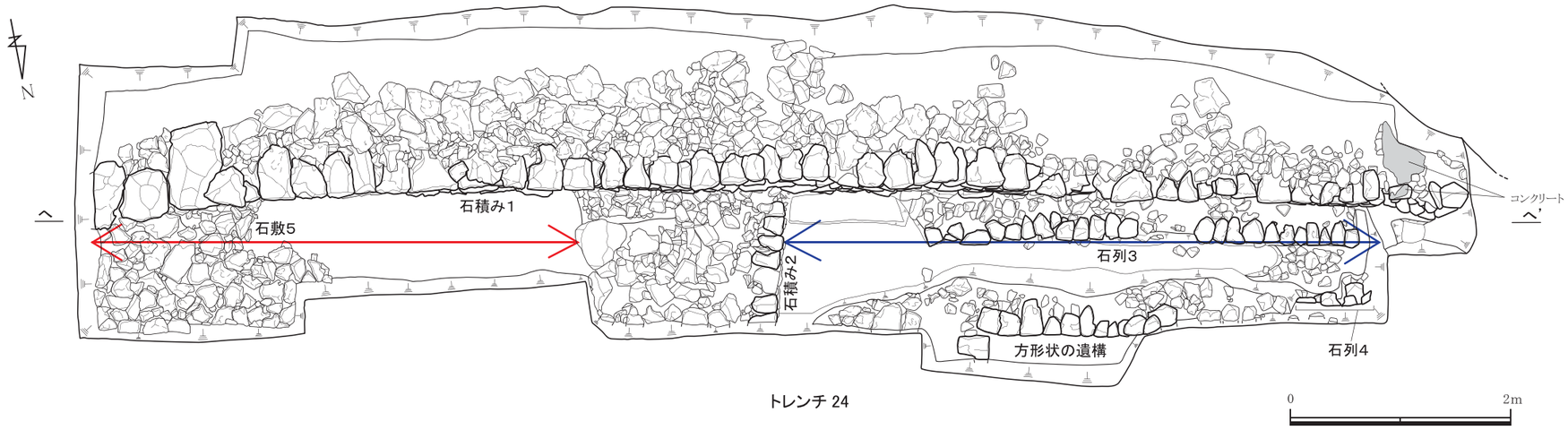
石積み2 立面図

石積み1 立面図

第 18 図 トレンチ 24 遺構図2



石積み1 立面図



トレンチ 24

石積み1(北から④)

石積み1(北から⑤)

石積み1(北から⑥)

石積み1(北から①)

石積み1(北から②)

石積み1(北から③)

第 19 図　石積み1 検出状況

トレンチ 24 全景
（西から）

トレンチ 24 石積み1、 石敷5（北から）

トレンチ 24 石積み1、 石敷5（西から）

トレンチ 24 石積み2（西から）

トレンチ 24 石積み2（北から）

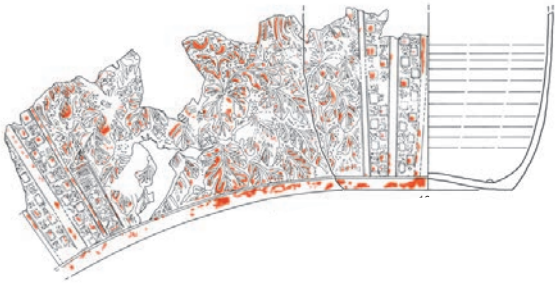
トレンチ 24 石列3（西から）

トレンチ 24 石列4（南から）

図版 10　南側石牆地区 遺構検出状況4

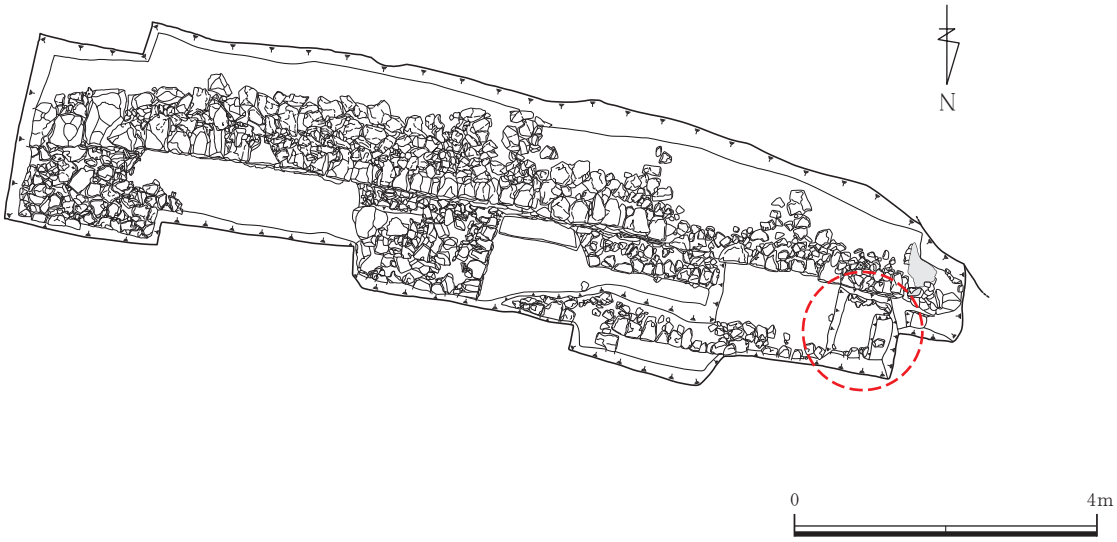
漆製品の出土について

トレンチ24の調査区西側で漆製品が出土した。その状況は、戦後の攪乱層を掘り下げていくと、一部が土坑状に深くなる箇所があった。そこを半截して確認した結果、ガラス瓶や鉄片などが含まれていた。その攪乱部分を掘り下げていくと、約10～20cm大の石灰岩が２個入っており、その下部周辺に漆製品の一部がみられた。そこで、石を取り除いて周りの土を慎重に掘り下げていくと、胴部が二つに割れ、底部が上を向いた状態の漆製品が出土した。漆製品の両端には赤色系塼があり、ヤギの下顎骨も１点みられた。

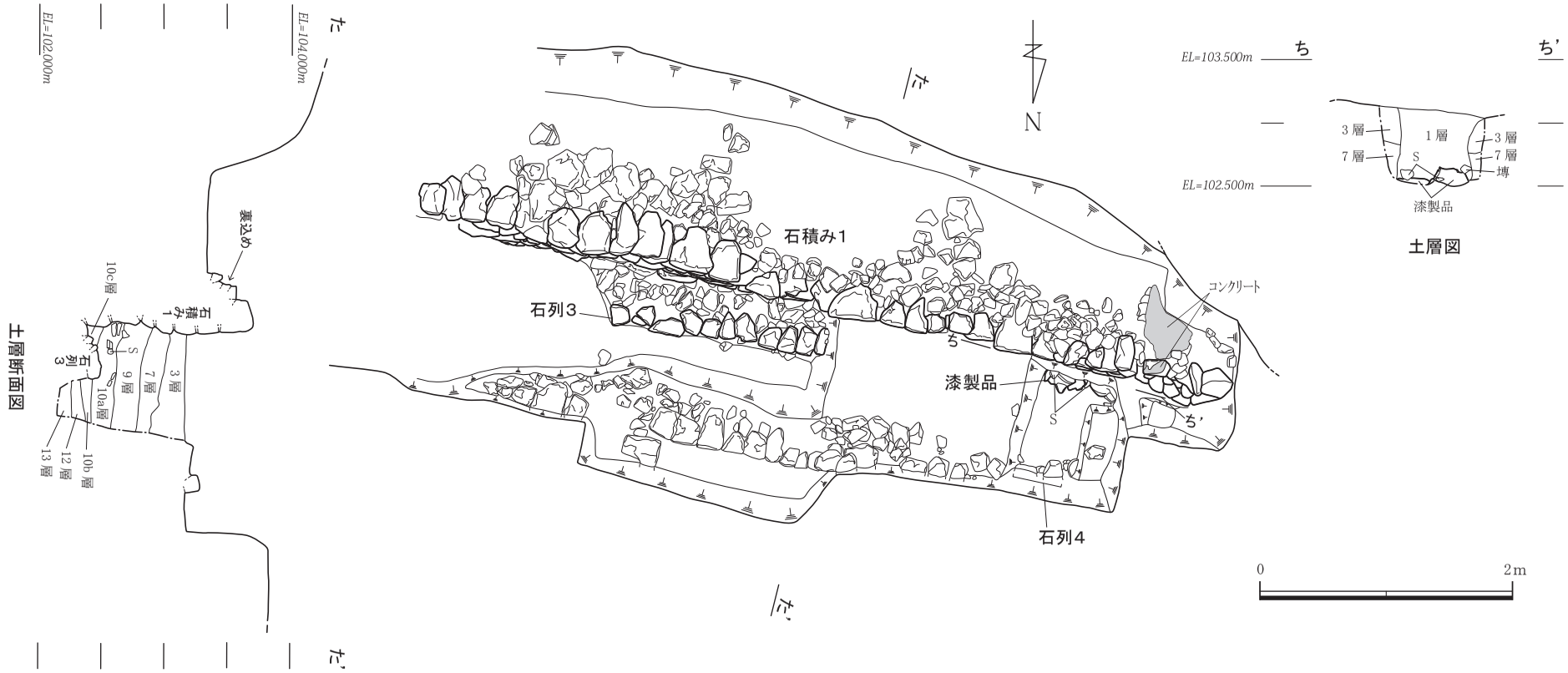


図版 11　漆製品出土状況

この漆製品は焼物の壺で、その表面には牡丹や唐草などの植物や格子状の文様が立体的に浮かび上がるように彫られていた。焼物に漆を塗布した漆製品は非常に珍しいことより、貴重な資料と考え、取り上げの際は慎重を期した。だが、漆製品の胎土は軟質で、表面には細かなひびが多く入っていたため、取り上げは破片のまとまりごとに数回に分けて行った。取り上げ後は洗浄を行い、一部については補強材（土器強化剤バインダーNo. 17）を塗布した後に接合を行った。小破片については補強材を施さず、乾燥しないよう湿らせたスポンジで包みつつ、空気を遮断して保管し、後に漆の成分分析を明治大学大学院理工学研究科に委託した。この詳細については、遺物及び自然化学分析の項で報告する。



第 20 図　漆製品 検出箇所



1層	―	撹乱層。
3層	灰オリーブ色土	クチャブロックが主体の層。
7層	暗灰黄色土	粘質強い。炭粒、焼土粒、小礫を含む。
9層	暗灰黄色土	粘質強い。炭粒、焼土粒、小礫を含む。(H22　7層と同層の範疇)
10a層	黄褐色土	粘質強い。炭粒、小礫を含む。遺物は多い。
10b層	暗灰黄色土	10a層より遺物は少ない。
10c層	黄褐色土	石列3の裏込め内の土。
12層	オリーブ褐色土	粘質はある。小礫、炭粒を含む。石列3の造成土。遺物は少ない。
13層	暗灰黄色土	粘質はある。小礫、クチャブロックを含む。石列3の造成土。遺物は少ない。

漆製品 出土状況（北から）

漆製品出土 南壁土層（北から）

第 21 図　漆製品 検出状況

地山確認調査の概要

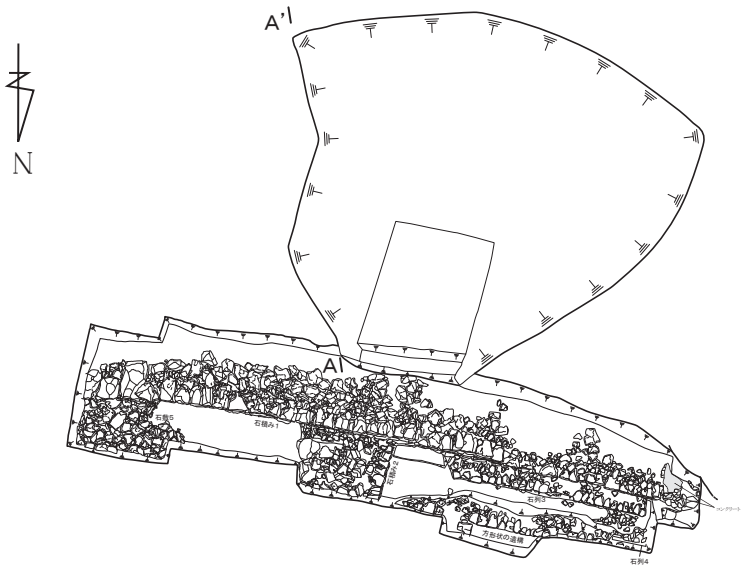
続けて平成24年度は、発掘調査の終了後に開催された円覚寺跡整備委員会で、確認された石牆について、石牆の整備ライン及び整備石牆高について審議がなされた。その中で、整備石牆高を確定させるために、南側石牆背後におけるのり面の整形方法に関する確認調査の必要性が提起された。それを受け、平成25年２月に、トレンチ24で確認された石牆背後における地山確認調査を沖縄県教育庁文化財課が行った（第22図、図版12）。

調査の結果、石牆の造成土を確認することができたが、周辺は戦後の大きな撹乱を受けており、石牆を築いた際の構築方法を確認することはできなかった。また、出土遺物はなく、石牆造成土に関する年代の把握には至らなかった。

東壁（西から①）

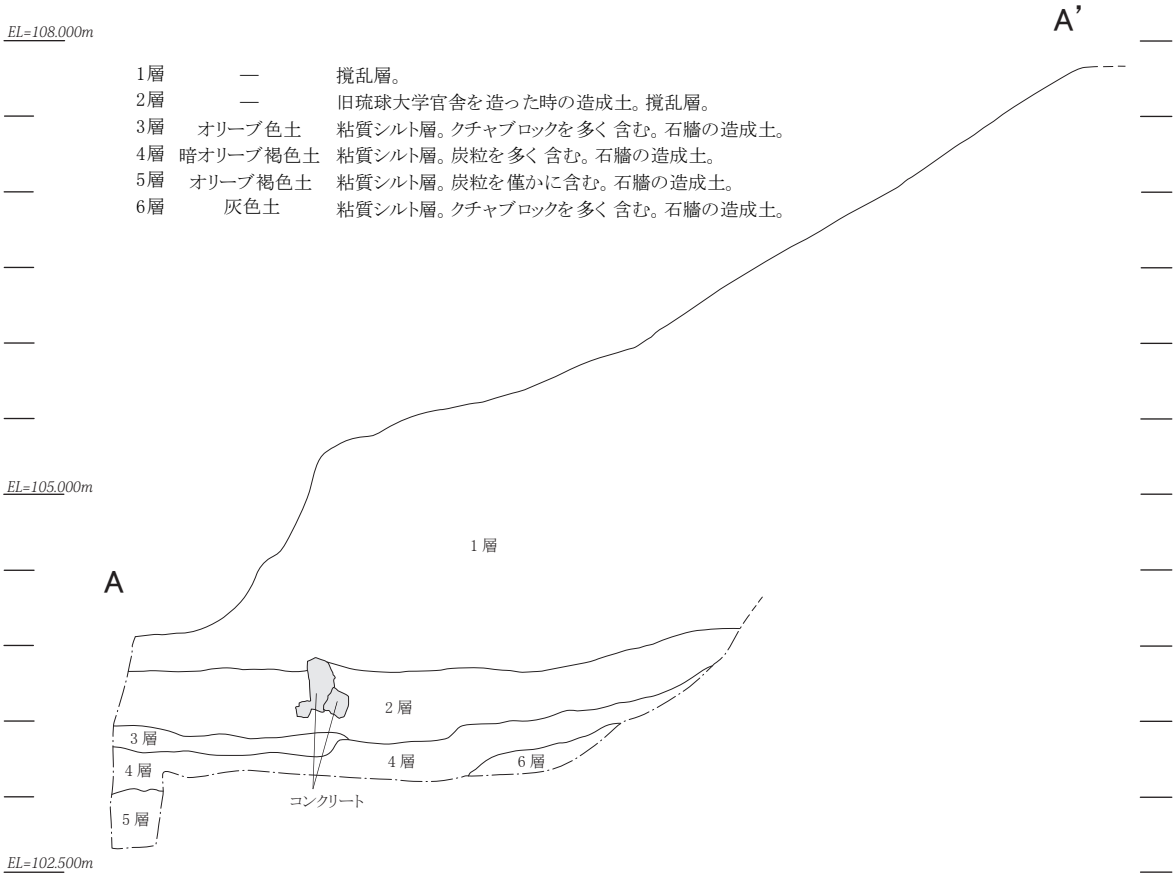
東壁（西から②）

図版 12　南側石牆地区 地山確認調査状況



地山確認調査箇所

0　6m



1層	—	撹乱層。
2層	—	旧琉球大学官舎を造った時の造成土。撹乱層。
3層	オリーブ色土	粘質シルト層。クチャブロックを多く含む。石牆の造成土。
4層	暗オリーブ褐色土	粘質シルト層。炭粒を多く含む。石牆の造成土。
5層	オリーブ褐色土	粘質シルト層。炭粒を僅かに含む。石牆の造成土。
6層	灰色土	粘質シルト層。クチャブロックを多く含む。石牆の造成土。

東壁土層図

0　2m

第 22 図　地山確認調査箇所、土層図

２　遺物

南側石牆地区からは総数 1711 点の遺物が出土している。内訳をみると、中国・タイ・ベトナム・本土産の陶磁器、沖縄産陶器、土器、石製品、円盤状製品、煙管、銭貨、青銅製品、鉄製品、瓦、塼、石材が出土している。最も多いのは瓦や陶磁器である。陶磁器に関しては、14 世紀後半～近現代までのものがあり、17 世紀～18 世紀代のものが主体を占める。産地別にみると沖縄産陶器が最も多く、次に中国産が多い。本地区出土の遺物については、層序ごとの遺物の様相を捉えるために、各層ごとに報告する。ここでは 174 点について図化し、個々の所見は遺物観察表にまとめた。

①トレンチ 22　６層出土遺物（１～10）

トレンチ 23 の７層、トレンチ 24 の７層、９層と同層と考えられる層で、グスク時代～近世相当の遺物が出土している。その内訳は、中国産白磁２点、中国産染付７点、中国産褐釉陶器５点、本土産青磁１点、本土産染付１点、本土産陶器５点、初期沖縄産無釉陶器４点、沖縄産無釉陶器 14 点、硬質土器１点、大和系瓦１点、明朝系瓦 25 点（灰色系と褐色系が主体、赤色系少ない）、塼７点、石材１点の合計 74 点である。主体は 17 世紀後半～18 世紀代と考えられる。

１は中国産褐釉陶器の壺、２は肥前産の青磁の碗、３・４は本土産陶器の碗及び擂鉢で、いずれも肥前産である。５・８は初期沖縄産無釉陶器の擂鉢である。外面または両面に泥釉が施釉され、素地には白色土が筋状に入っているのが特徴である。６・７は沖縄産無釉陶器の碗、９は沖縄産無釉陶器の火炉である。９は外面胴部及び畳付に煤が付着する。10 は硬質土器（本土産焙烙）で、土師質な胎土が特徴である。天界寺跡、首里城跡、中城御殿跡などで出土例がある。

②トレンチ 23　７層出土遺物（11～44）

トレンチ 22 の６層、トレンチ 24 の７層、９層と同層と考えられる層で、グスク時代～近世相当の遺物が主に出土している。その内訳は、中国産青磁２点、中国産白磁４点、中国産染付 46 点、中国産褐釉陶器６点、褐釉磁器１点、本土産染付 10 点、本土産近現代磁器１点、本土産陶器 18 点、沖縄産施釉陶器２点、初期沖縄産無釉陶器 10 点、沖縄産無釉陶器 55 点、陶質土器２点、円盤状製品１点、大和系瓦２点、明朝系瓦 42 点（灰色系、褐色系）、塼８点、石材３点の合計 213 点である。主体は 17 世紀～18 世紀代と考えられる。１点のみ近現代磁器と思われる鉢が出土しているが、調査時の状況は、本層中からは近現代の遺物はほぼみられなかったことより、上層から混入したものと考えたい。

11・12 は中国産青磁の龍泉窯の瓶及び壺、13 は福建・広東系の中国産白磁の碗である。14～20 は中国産染付で、14～18 が福建・広東系の碗、19・20 は景徳鎮窯の小碗である。21 は褐釉磁器の小碗で景徳鎮窯、22 は本土産染付で肥前産の見込荒磯碗である。24 は近現代磁器の鉢である。23・25～28 は本土産陶器で、23 は信楽焼の壺、25・26 は肥前産の碗、27 は備前産の擂鉢、28 は肥前産の擂鉢の底部で、４の口縁部と同じ素地であることより、同資料の底部になるものと考えられる。29～35 は初期沖縄産無釉陶器である。31 は内面口縁部にサンゴ目がある。33・34 は三足の香炉と考えられる。36～43 は沖縄産無釉陶器、44 は陶質土器の皿で、硬質の資料である。

③トレンチ 24　３層（45～49）

方形状の遺構の造成土で、グスク時代～近世相当の遺物が主に出土している。その内訳は、中国産白磁１点、中国産染付 10 点、中国産褐釉陶器２点、瑠璃釉１点、本土産陶器６点、沖縄産施釉陶器４点、初期沖縄産無釉陶器１点、沖縄産無釉陶器 13 点、明朝系瓦８点（灰色系、褐色系）、塼５点、石材１点の合計 52 点である。主体は 17 世紀後半～18 世紀代である。

45 は中国産染付で、福建・広東系の碗である。46 は瑠璃釉の小碗で、景徳鎮窯である。47 は唐津産の鉢、48 は沖縄産無釉陶器の碗、49 は端部噛み合わせタイプの塼である。

④トレンチ 24　４層（50～52）

グスク時代～近世相当の遺物が主に出土している。その内訳は、中国産染付３点、中国産褐釉陶器３点、褐釉磁器１点、タイ産褐釉陶器１点、本土産陶器３点、初期沖縄産無釉陶器１点、沖縄産無釉陶器 13 点、明朝系瓦 16 点（灰色系、褐色系）、塼２点、産地不明製品が５点の合計 48 点である。

50 は褐釉磁器の小碗で、景徳鎮窯、51・52 は沖縄産無釉陶器の碗で、51 は初期の製品である。

⑤トレンチ 24　５層（53～62）

石敷５の上に堆積していた層で、火を受けて廃棄されたと考えられる一括遺物と捉えた。17 世紀後半～18 世紀代の遺物が主体である。その内訳は、中国産白磁１点、中国産染付４点、本土産染付２点、初期沖縄産無釉陶器３点、沖縄産無釉陶器７点、石製品１点、銭貨１点、青銅製品１点、明朝系瓦 16 点（灰色系と褐色系が主体、赤色系少ない）、塼 24 点、石材１点の合計 61 点である。

53 は中国産染付で福建・広東系の碗、54・55 は肥前産の碗で、同一個体と思われる。56・57 は沖縄産無釉陶器の碗、58 は蝋石製の石筆で、円錐形状を呈している一方の端部を筆記具として使用していたことが考えられる。59 は古寛永で、表面に孔がみられるなど、造りが雑である。

⑥トレンチ 24　５・７層（63～70）

５層または７層の遺物を５・７層としてまとめた。グスク時代～近世相当の遺物が出土しており、17 世紀～18 世紀代が主体である。その内訳は、中国産白磁３点、中国産染付１点、中国産褐釉陶器７点、本土産陶器７点、初期沖縄産無釉陶器６点、沖縄産無釉陶器 12 点、土器１点、石製品１点、明朝系瓦 45 点（灰色系と褐色系が主体、赤色系少ない）、塼 12 点、産地不明製品が 11 点の合計 108 点である。

63 は中国産白磁の小杯で徳化窯系、64 は中国産褐釉陶器の壺、65～67 は本土産陶器で、65 は肥前産の擂鉢、66 は壺で、薩摩・苗代川系、67 は小壺で薩摩・堂平窯である。68・69 は初期沖縄産無釉陶器の皿と擂鉢、70 は沖縄産無釉陶器の碗である。外底に線刻がみられる。

⑦トレンチ 24　７層（71～100）

出土遺物の量は多く、グスク時代～近世相当の遺物がみられる。17 世紀～18 世紀代が主体である。その内訳は、中国産青磁６点、中国産白磁 14 点、中国産染付 52 点、中国産褐釉磁器 18 点、中国産無釉陶器１点、瑠璃釉１点、タイ産褐釉陶器１点、ベトナム産白磁１点、薩摩か朝鮮産陶器６点、本土産染付 20 点、本土産磁器２点、近現代磁器２点、本土産陶器 20 点、沖縄産施釉陶器２点、初期沖縄産無釉陶器 24 点、沖縄産無釉陶器 68 点、陶質土器１点、瓦質土器１点、硬質土器１点、石製品２点、青銅製品１点、明朝系瓦 85 点（灰色系と褐色系が主体、赤色系は少ない）、塼 19 点、石材２点の合計 350 点である。

71・72 は中国産白磁で、71 は碗で景徳鎮窯、72 は小碗で徳化窯系、73～77 は中国産染付で、73・74 は福建・広東系の碗、75 は景徳鎮窯の碗、76 は福建産の碗、77 は芙蓉手の皿で景徳鎮窯である。78 は急須の蓋の撮みで、宜興窯製品、79 はベトナム産白磁の碗、80～82 は本土産磁器で、肥前産の碗である。83～86 は本土産陶器で、83 は唐津産の碗、84 は肥前産の京焼風陶器の碗、85 は肥前産の擂鉢、86 は袋物だが、産地は判然としない。87・88 は初期沖縄産無釉陶器の皿と蓋である。89～93 は沖縄産無釉陶器で、89・90 は碗、91 は皿で、90 と 91 の外底には線刻がみられる。92・93 は擂鉢である。94 は硬質土器（本土産焙烙）の口縁部で、外面口縁部には煤が付着する。95 は青銅製品で切羽である。96～100 は明朝系瓦で、96～98 は丸瓦で褐色系、99 は丸瓦で赤色系、100 は平瓦で褐色系である。

⑧トレンチ 24　８層（101）

石列４の造成土である本層からは、明朝系瓦が１点のみ出土した。軒丸瓦で褐色系である。

ⅠB01 式（上原）・内間御殿Ａ（石井）。

⑨トレンチ 24　７・９層（102～107）

７層または９層の遺物を７・９層としてまとめた。グスク時代～近世相当の遺物が出土している。17 世紀～18 世紀代が主体である。その内訳は、中国産青磁４点、中国産白磁５点、中国産染付 17 点、中国産褐釉陶器２点、色絵１点、本土産染付７点、本土産磁器２点、本土産陶器 10 点、沖縄産施釉陶器１点、初期沖縄産無釉陶器１点、沖縄産無釉陶器 21 点、陶質土器１点、土器１点、明朝系瓦 25 点（灰色系と褐色系が主体）、塼２点、漆喰１点、石材３点、産地不明製品１点の合計 105 点である。

102 は中国産染付の碗で、福建・広東系である。103・104 は本土産磁器の小碗と高足杯で、肥前産である。105・106 は本土産陶器で、105 は関西系と考えられる小碗、106 は唐津産の鉢である。107 は沖縄産無釉陶器の碗である。

⑩トレンチ 24　９層（108～112）

グスク時代～近世相当の遺物がみられる。17 世紀～18 世紀代が主体である。その内訳は、中国産青磁１点、中国産白磁１点、中国産染付 12 点、中国産褐釉陶器１点、中国産無釉陶器１点、本土産染付１点、本土産陶器７点、沖縄産無釉陶器８点、明朝系瓦 16 点（灰色系、褐色系）、塼１点、石材１点の合計 50 点である。

108・109 は中国産染付の碗と皿で、108 は福建・広東系、109 は景徳鎮窯である。110 は本土産陶器の碗で、外面に銅緑釉、内面に灰釉を掛け分けした肥前・内野山産である。111・112 は沖縄産無釉陶器の皿である。112 は口唇部に煤が付着していることより、灯明皿と考えられる。

⑪トレンチ 24　10a 層（113～126）

グスク時代～近世相当の遺物が主にみられる。17 世紀～18 世紀代の遺物が主体である。その内訳は、中国産青磁２点、中国産白磁８点、中国産染付 23 点、中国産褐釉陶器７点、タイ産青磁１点、本土産染付６点、本土産陶器５点、初期沖縄産無釉陶器２点、沖縄産無釉陶器 33 点、陶質土器１点、土器１点、石製品２点、円盤状製品１点、鉄製品４点、明朝系瓦 87 点（灰色系と褐色系が主体、赤色系少ない）、塼 11 点、石材４点の合計 198 点である。

113 は中国産白磁の碗で、福建・広東系、114～117 は中国産染付で、114・115 が福建・広東系の碗、116 が徳化窯系の碗、117 が景徳鎮窯の皿である。118～120 が本土産陶器で、118 は肥前・内野山産の碗、119 は唐津産の二彩手の鉢、120 は薩摩産と考えられる蓋である。121 は初期沖縄産無釉陶器の器種不明製品である。内外面ともにナデ調整が施される。特に外面は、縦方向へのナデ調整により面取りされる。内面及び上面は平坦気味に仕上げられている。何らかの脚部になることも考えられるが、判然としない。122 は沖縄産無釉陶器の壺である。123～126 は明朝系瓦である。123・124 は丸瓦で褐色系、125 は平瓦で褐色系、126 は平瓦で赤色系である。

⑫トレンチ 24　10a・10b 層（127～162）

グスク時代～近世相当の遺物が主にみられる。17 世紀～18 世紀代の遺物が主体である。その内訳は、中国産青磁５点、中国産白磁 10 点、中国産染付 35 点、中国産褐釉陶器 15 点、褐釉磁器２点、瑠璃釉１点、三彩２点、翡翠釉１点、天目１点、中国産陶器１点、本土産染付 26 点、本土産陶器 26 点、沖縄産施釉陶器９点、初期沖縄産無釉陶器 22 点、沖縄産無釉陶器 80 点、陶質土器１点、瓦質土器３点、硬質土器１点、土器１点、煙管２点、大和系瓦１点、明朝系瓦 73 点（灰色系と褐色系主体、赤色系少し）、塼 16 点、石材８点、産地不明の製品が１点の合計 343 点である。遺物の内容は 10a 層とほぼ同じである。

127 は中国産白磁の皿で福建・広東系、128～130 は中国産染付の碗で、128 は徳化窯、129 と 130 が福建・広東系である。131 は褐釉磁器の小碗で景徳鎮窯、132 は瑠璃釉の瓶である。133～137 は本土産染付で、133～136 は碗、137 は皿であり、全て肥前産となっている。138～140 は本土産陶器で、138 と 139 は碗と小碗で肥前産、140 は擂鉢で備前産である。141～146、152、154・155 は初期沖縄産無釉陶器である。141 と 142 は擂鉢、143 は火取、144 は大型の香炉である。外面口縁部と口縁部下部に連続した三重弧文を施し、胴部には唐草文をめぐらす。脚部は獅子を象ったものが三足付く。この脚部の類例資料が湧田古窯跡でみられる。145 は火炉、146 は器種不明の製品である。口縁部と思われる資料で、上面は段をもつ。内面は指頭圧痕が明瞭である。外面口縁部の肥厚部は貼り付けて成形している。外面は文様と思われる連続した彫り込みがみられる。素地は初期沖縄産無釉陶器に特徴的な筋状の白色土が非常に多く混じっている。152 は肩部に龍を象った耳が付く壺としたが、17 世紀前半の薩摩産とのご教示も得られており、今後類例資料を調べたい。154 は火炉である。肩部を内側に屈曲させ、口縁部の上面観が三葉形をなす。147～151、153 は沖縄産無釉陶器である。147～150 は碗、151 は擂鉢、153 は急須、156 は陶質土器の火炉、157～159 は瓦質土器である。157 は瓦灯の屋根部分になるものかと考えられる資料である。外面は、非常に平坦に仕上げられ、端部は立ち上がる。反対側の斜めになっている端部についても立ち上がる状況が確認される。双方をつなげると、平面形は三角形状を呈するものと考えらえる。また、中央部分には孔が１つある。孔径は 6.6cm。組み合わせ式の瓦灯の屋根部分と考えられるが、類例に乏しく、詳細については今後の課題である。158 は大型の鉢である。159 は焜炉の目皿と考えられる資料である。外面は非常に平坦で、器表面には３箇所の孔が開けられているのが確認される。孔径は 1.2cm。160 はパナリ焼の香炉と考えられ、口縁断面は方形状を呈する。口唇部及び外面は非常に平坦であることより、型枠成形による製品の可能性がある。161 は沖縄産無釉陶器の煙管で、八角形を呈する。火皿は欠損している。162 は褐色系の明朝系丸瓦で、玉縁中央部にはヘラ印がみられる。

⑬トレンチ 24　10c 層（163～165）

グスク時代～近世相当の遺物がみられる。出土量は少ない。内訳は、中国産白磁３点、中国産染付２点、タイ産褐釉陶器１点、初期沖縄産無釉陶器２点、沖縄産無釉陶器１点、明朝系瓦 19 点（灰色、褐色系）、塼１点、石材１点の合計 30 点である。

163 は中国産染付の蓋で、景徳鎮窯である。164 は沖縄産無釉陶器の火炉、165 は明朝系平瓦で、褐色系である。

⑭トレンチ 24　12 層（166～170）

石列３の造成土で、グスク時代～近世相当の遺物がみられる。その内訳は、中国産青磁３点、中国産白磁２点、中国産染付２点、沖縄産無釉陶器１点、瓦質土器１点、土器２点、明朝系瓦 12 点（灰色系、褐色系）の合計 23 点である。

166 と 167 は中国産青磁で、166 は景徳鎮窯の小碗、167 は龍泉窯の碗である。168・169 は中国産染付の碗である。170 は褐色系の明朝系平瓦である。

⑮トレンチ 24　15 層（171～173）

石敷５の造成土で、グスク時代～近世相当の遺物がみられる。その内訳は、中国産褐釉陶器５点、初期沖縄産無釉陶器２点、沖縄産無釉陶器３点、明朝系瓦 13 点（灰色系と褐色系が主体、赤色系少ない）、塼４点の合計 27 点である。

171 は初期沖縄産無釉陶器の擂鉢、172・173 は沖縄産無釉陶器の擂鉢と碗である。

⑯トレンチ 24　16 層（174）

石積み１及び２の造成土で、中国産褐釉陶器の瓶の口縁部が１点のみ出土している。

第9表　南側石牆地区遺物出土状況 a

出土地＼分類		中国産																													
		青磁										白磁															染付			
		碗			小碗		瓶	壺	酒会壺		器種不明	合計	碗			小碗		皿		小杯			壺	袋物	器種不明			合計	碗			
		口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	胴部	口縁部	胴部	胴部			口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	口縁部	底部	口～底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部		口～底部	口縁部	胴部	底部
平成22年度	トレンチ22 6層											0							1								1		2		2	2	1
	トレンチ22 7層直上											0																	0				
	トレンチ23 7層						1		1			2	2		1												1		4	1	9	11	15
平成24年度	トレンチ24 裏込め内											0																	0		1		
	トレンチ24 3層											0						1											1		1	2	1
	トレンチ24 4層 上面											0																	0			1	
	トレンチ24 4層											0																	0			1	1
	トレンチ24 5層											0															1		1		2	1	
	トレンチ24 6層											0																	0				
	トレンチ24 5･7層											0		1						1		1							3		1		
	トレンチ24 7層		2			2		1	1			6	4	1		1	4	1							1	2			14		14	16	9
	トレンチ24 8層											0																	0				
	トレンチ24 7･9層	2	2									4	1	2							1							1	5		9	3	4
	トレンチ24 9層						1					1												1					1		4	5	1
	トレンチ24 10a層								1			1	1	2									1			3			7	1	5	3	2
	トレンチ24 10a･10b層	2									3	5						1	3						1	5			10		5	9	5
	トレンチ24 漆一括 10a層						1					1	1																1		1	1	1
	トレンチ24 10c層											0	1													2			3				
	トレンチ24 12層			1	1	1						3	1	1															2		1		1
	トレンチ24 13層											0																	0				
	トレンチ24 14層											0																	0				
	トレンチ24 15層											0																	0				
	トレンチ24 16層											0																	0				
合計		4	4	1	1	4	2	2	2	3	23	11	7	1	1	4	3	4	1	1	1	1	1	2	15	1	54	2	55	55	41

出土地＼分類		中国産																														
		染付														褐釉陶器								無釉陶器		褐釉磁器			瑠璃釉		
		小碗		皿			杯	小杯		鉢		瓶	蓋	器種不明	合計	瓶	壺			茶壺	器種不明		合計	急須	蓋	碗	小碗		碗	小碗	瓶
		口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	底部	口縁部	胴部	胴部		胴部		口縁部	口縁部	胴部	底部	底部	口縁部	胴部		胴部		底部	口縁部	底部	口縁部	底部	底部
平成22年度	トレンチ22 6層										1	1			7		1	4					5									
	トレンチ22 7層直上														0								0									
	トレンチ23 7層	2	2			1				1		2		2	46			5				1	6				1					
平成24年度	トレンチ24 裏込め内					1									2			1					1						1			
	トレンチ24 3層	1			3									2	10			1			1		2							1		
	トレンチ24 4層 上面														1			1					1									
	トレンチ24 4層														2			2					2					1				
	トレンチ24 5層				1										4								0									
	トレンチ24 6層													1	1								0									
	トレンチ24 5･7層														1			6	1				7									
	トレンチ24 7層	1	1	1	1	2		1						6	52			11		1		6	18		1							1
	トレンチ24 8層														0								0									
	トレンチ24 7･9層				1										17			2					2									
	トレンチ24 9層			1	1										12			1					1	1								
	トレンチ24 10a層			2	2	1		1					1		18			7					7									
	トレンチ24 10a･10b層			2	1	3	2	2	1			2		3	35			15					15			1		1				1
	トレンチ24 漆一括 10a層													2	5								0									
	トレンチ24 10c層												1	1	2								0									
	トレンチ24 12層														2								0									
	トレンチ24 13層														0							1	1									
	トレンチ24 14層														0								0									
	トレンチ24 15層														0			5					5									
	トレンチ24 16層														0	1							1									
合計		4	3	6	10	8	2	4	1	1	1	5	2	17	217	1	1	61	1	1	1	8	74	1	1	1	1	2	1	1	2

第9表　南側石牆地区遺物出土状況 b

出土地＼分類		中国産						タイ産			ベトナム産	薩摩か朝鮮産陶器	本土産															
		色絵		三彩	翡翠釉	天目	中国産陶器	青磁	褐釉陶器		白磁		青磁	染付														
		碗	器種不明	器種不明	碗	碗	器種不明	器種不明	瓶	壺	碗	器種不明	碗	碗			小碗		皿		高足杯	鉢	瓶		香炉	器種不明		合計
		胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	胴部	底部	胴部	口縁部	口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	口縁部	底部	底部	胴部	胴部	底部	口縁部	口縁部	胴部	
平成22年度	トレンチ22 6層												1									1						1
	トレンチ22 7層直上																											0
	トレンチ23 7層													2	5	3												10
平成24年度	トレンチ24 裏込め内																											0
	トレンチ24 3層																											0
	トレンチ24 4層 上面																											0
	トレンチ24 4層								1																			0
	トレンチ24 5層													1		1												2
	トレンチ24 6層	1																1										1
	トレンチ24 5・7層																											0
	トレンチ24 7層									1	1	6		5	3	2		2					3	1		1	3	20
	トレンチ24 8層																											0
	トレンチ24 7・9層		1											1	1		1	1			1		1	1				7
	トレンチ24 9層													1														1
	トレンチ24 10a層							1						2	2	1				1								6
	トレンチ24 10a・10b層			2	1	1	1							8	5	3	1		1	2		5			1			26
	トレンチ24 漆一括 10a層																											0
	トレンチ24 10c層									1																		0
	トレンチ24 12層																											0
	トレンチ24 13層																											0
	トレンチ24 14層																											0
	トレンチ24 15層																											0
	トレンチ24 16層																											0
合計		1	1	2	1	1	1	1	1	2	1	6	1	20	16	10	2	4	1	3	1	6	4	2	1	1	3	74

出土地＼分類		本土産																														
		磁器			近現代磁器				陶器																							
		蓋	壺	香炉	碗	鉢	瓶	香炉	碗			小碗		皿		鉢		擂り鉢			蓋	壺			小壺	壺・甕	袋物		器種不明		合計
			胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	口縁部	胴部	底部	口～底部	底部	口縁部	胴部	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部		口縁部	胴部	底部	口縁部		胴部	底部	胴部	底部	
平成22年度	トレンチ22 6層								1		1							1											2		5
	トレンチ22 7層直上																														0
	トレンチ23 7層					1			2	4	1			1					1	2			4	2					1		18
平成24年度	トレンチ24 裏込め内																						2								2
	トレンチ24 3層								1										1				2						2		6
	トレンチ24 4層 上面																	1													1
	トレンチ24 4層								1	1																					2
	トレンチ24 5層																														0
	トレンチ24 6層																														0
	トレンチ24 5・7層									1					1			1				1	2		1						7
	トレンチ24 7層	1		1			1	1	2	6	2		1					2			1					2	1	2	1		20
	トレンチ24 8層																														0
	トレンチ24 7・9層		2						2	5			1			1							1								10
	トレンチ24 9層								1	2	2																		1	1	7
	トレンチ24 10a層								2	1							1				1										5
	トレンチ24 10a・10b層								5	6	1	1	1	1						2			4						5		26
	トレンチ24 漆一括 10a層																														0
	トレンチ24 10c層																														0
	トレンチ24 12層																														0
	トレンチ24 13層																														0
	トレンチ24 14層																														0
	トレンチ24 15層																														0
	トレンチ24 16層																														0
合計		1	2	1	0	1	1	1	17	26	7	1	3	2	1	1	1	5	2	4	2	1	15	2	1	2	1	2	12	1	109

第9表　南側石牆地区遺物出土状況 c

出土地＼分類		沖縄産施釉陶器										初期沖縄産無釉陶器																			
		碗		小碗		鉢	瓶	壺	器種不明		合計	碗			皿				鉢	擂鉢			蓋	壺			香炉		火炉		
		口縁部	胴部	口縁部	底部	胴部	胴部	底部	口縁部	胴部		口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	胴部	口縁部	胴部	底部		口～底部	胴部	底部	口～底部	口縁部	口縁部	胴部	底部
平成22年度	トレンチ22 6層										0									1	1	1			1						
	トレンチ22 7層直上										0																				
	トレンチ23 7層		2								2								1				1		7	1					
平成24年度	トレンチ24 裏込め内		1								1																				
	トレンチ24 3層	1			1					2	4																				
	トレンチ24 4層 上面										0																				
	トレンチ24 4層										0			1																	
	トレンチ24 5層										0														3						
	トレンチ24 6層										0																				
	トレンチ24 5･7層										0					2		1		1					1						
	トレンチ24 7層		2								2	1			1					1	2		1		13			1	1		
	トレンチ24 8層										0																				
	トレンチ24 7･9層		1								1															1					
	トレンチ24 9層										0																				
	トレンチ24 10a層										0																				
	トレンチ24 10a･10b層		2	2		2	1	1	1		9		1	2					1	2	6			1			1		2	2	1
	トレンチ24 漆一括 10a層										0														1						
	トレンチ24 10c層										0						1								1						
	トレンチ24 12層										0																				
	トレンチ24 13層										0																				
	トレンチ24 14層										0																				
	トレンチ24 15層										0											1			1						
	トレンチ24 16層										0																				
合 計		1	8	2	1	2	1	1	1	2	19	1	1	3	1	2	1	1	2	5	9	2	2	1	28	2	1	1	3	2	1

出土地＼分類		初期沖縄産無釉陶器			沖縄産無釉陶器																										
		器種不明		合計	碗				皿				鉢			擂鉢			植木鉢	瓶			壺			急須		蓋	甕	火取	香炉
		胴部	底部		口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部		胴部	口縁部	口縁部
平成22年度	トレンチ22 6層			4		2		3					1											2				1			
	トレンチ22 7層直上			0																											
	トレンチ23 7層			10	1		3	1	1	4	1	1		1		3	3			1			1	20	1						
平成24年度	トレンチ24 裏込め内			0																											
	トレンチ24 3層	1		1		1	1				1		2			1	1							4					1		
	トレンチ24 4層 上面			0						2			1											1				1			
	トレンチ24 4層			1		2				1														4					1		
	トレンチ24 5層			3		1		1		1														2							
	トレンチ24 6層			0																											
	トレンチ24 5･7層	1		6		2	3	5			1										1										
	トレンチ24 7層	3		24		7	1	6	3	6	2	3	3			2	5	2		1	3			16	2			3			
	トレンチ24 8層			0																											
	トレンチ24 7･9層			1		3	3	1		2			1			1	3		1					2		1		1			
	トレンチ24 9層			0			1			3	1	1												1							1
	トレンチ24 10a層		1	1			7			2	2	2			1		4	1					2	10					1		
	トレンチ24 10a･10b層	3		22	2	9	3	5	1	3		2				4	2					1		28		1	2			1	
	トレンチ24 漆一括 10a層			1																											
	トレンチ24 10c層			2																											
	トレンチ24 12層			0																											
	トレンチ24 13層			0																											
	トレンチ24 14層			0																											
	トレンチ24 15層			2		1										1															
	トレンチ24 16層			0																											
合 計		8	1	78	3	28	22	22	5	24	8	9	8	1	1	12	18	3	1	2	4	1	3	90	3	2	2	6	3	1	1

第9表　南側石牆地区遺物出土状況 d

出土地＼分類		沖縄産無釉陶器											陶質土器								瓦質土器					硬質土器		土器		産地不明		
		香炉		火炉			器種不明					合計	皿	鉢	瓶	蓋	火炉	器種不明		合計	鉢		目皿	瓦灯か	器種不明	焙烙		香炉	器種不明	急須	壺	器種不明
		胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	耳	胴部	底部	部位不明		口縁部	口縁部	口縁部		底部	胴部	底部		胴部	底部	底部	胴部	口縁部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部	胴部	胴部
平成22年度	トレンチ22 6層					2			3			14								0						1						
	トレンチ22 7層直上											0								0												
	トレンチ23 7層		2	1	2	2	2		1	3		55	1			1				2												
平成24年度	トレンチ24 裏込め内											0						1		1												
	トレンチ24 3層								1			13								0												
	トレンチ24 4層 上面											5								0											2	
	トレンチ24 4層											8								0											3	
	トレンチ24 5層								2			7								0												
	トレンチ24 6層											0								0												
	トレンチ24 5･7層											12								0									1		11	
	トレンチ24 7層		1	1					1			68							1	1					1	1						
	トレンチ24 8層											0								0												
	トレンチ24 7･9層			1					1			21			1					1									1			1
	トレンチ24 9層											8								0												
	トレンチ24 10a層							1				33								0									1			
	トレンチ24 10a･10b層	1	1	2	1				10		1	80					1			1		1	1	1			1	1		1		
	トレンチ24 漆一括 10a層											0		1						1												
	トレンチ24 10c層			1								1								0												
	トレンチ24 12層								1			1								0	1								2			
	トレンチ24 13層											0								0												
	トレンチ24 14層											0								0												
	トレンチ24 15層			1								3								0												
	トレンチ24 16層											0								0												
合計		1	4	7	3	4	2	1	20	3	1	329	1	1	1	1	1	1	1	7	1	1	1	1	1	2	1	1	5	1	16	1

出土地＼分類		石製品			円盤状製品		煙管	銭貨	青銅製品			鉄製品	大和系瓦				明朝系											
													丸瓦	平瓦			役瓦(飾り瓦)	軒丸瓦			軒平瓦		丸瓦					
		砥石	硯	石筆	褐釉	瓦	沖無	寛永通寶	角釘	切羽	器種不明	角釘	褐色	灰色	褐色			灰色	褐色	赤色	褐色	赤色	灰色			褐色		
							雁首						筒部	筒部	広端部	筒部		瓦当部	瓦当部	瓦当部	瓦当部	瓦当部	玉縁部	筒部	端部	玉縁部	筒部	端部
平成22年度	トレンチ22 6層															1				1						7		1
	トレンチ22 7層直上																										2	
	トレンチ23 7層					1							1		1						1					11	1	3
平成24年度	トレンチ24 裏込め内										1																1	
	トレンチ24 3層																		1							1	1	2
	トレンチ24 4層 上面																									1		1
	トレンチ24 4層																								1	3	3	
	トレンチ24 5層			1				1	1																1		1	
	トレンチ24 6層																											
	トレンチ24 5･7層		1																							6	3	
	トレンチ24 7層	1	1							1									1			2	5		1	16	4	2
	トレンチ24 8層																		1									
	トレンチ24 7･9層																				1			1	1	2	4	3
	トレンチ24 9層																		1				1				1	
	トレンチ24 10a層	1	1		1							2					1	1	1				1		2	12	5	5
	トレンチ24 10a･10b層						2							1					1				2	1	6	13	1	4
	トレンチ24 漆一括 10a層											2														1	1	2
	トレンチ24 10c層																						1			4		
	トレンチ24 12層																									3	3	
	トレンチ24 13層																											
	トレンチ24 14層																									1		
	トレンチ24 15層																										2	1
	トレンチ24 16層																											
合計		2	3	1	1	1	2	1	1	1	1	4	1	1	1	1	1	1	6	1	2	2	10	2	12	81	33	24

第9表　南側石牆地区遺物出土状況 e

出土地＼分類		明朝系																		塼										
		丸瓦				平瓦													丸平不明											
		赤色			合計	灰色(焼き締め)			灰色			褐色			赤色			合計	褐色	灰色					褐色				
		玉縁部	筒部	端部		狭端部	筒部	広端部	狭端	筒部	広端	狭端	筒部	広端	狭端	筒部	広端部		筒部	ⅠAa	ⅠAb	ⅠA・Ba	Ⅲ	Ⅳ	分類不明	ⅠAa	ⅠAb	ⅠBb	ⅠA・Ba	ⅠA・Bb
平成22年度	トレンチ22 6層				8				3		1	6		4	1			15	1						1				5	
	トレンチ22 7層直上				2							1						1												1
	トレンチ23 7層				15	1	4		3	1	1	6	4	6				26							3			1		1
平成24年度	トレンチ24 裏込め内				1								2					2												
	トレンチ24 3層				4				1			1	1					3					1				1			
	トレンチ24 4層 上面				2						1		1					2												
	トレンチ24 4層				7		1			2	1	1						5									1			
	トレンチ24 5層		1		3					2	1	3	5	1		1		13		1	1				1	2	4	1		7
	トレンチ24 6層				0													0												
	トレンチ24 5・7層			1	10	1	2		3	5	3	10	7	2	2			35										1		
	トレンチ24 7層	2			30	1		2	9	8	5	12	2	12	1			52							2				3	
	トレンチ24 8層				0													0												
	トレンチ24 7・9層				11				2	1	2	1	4	3				13								1				
	トレンチ24 9層				2				1	3	1	1	5	2				13												
	トレンチ24 10a層		1		26	1			8	3	3	11	10	6		1	1	44	5					1						1
	トレンチ24 10a・10b層	3			30				7		11	7	4	13				42				2			4				2	4
	トレンチ24 漆一括 10a層				4				1					4				5												
	トレンチ24 10c層				5				2	2	1	5	4					14												
	トレンチ24 12層				6				2			1	2	1				6												
	トレンチ24 13層				0		1				1	2						4												
	トレンチ24 14層				1													0												
	トレンチ24 15層				3					2	1	2	2	2	1			10							1					2
	トレンチ24 16層				0													0												
合計		5	2	1	170	4	8	2	42	29	33	70	53	56	5	2	1	305	6	1	1	2	1	1	12	3	6	3	10	16

出土地＼分類		塼									漆喰	石材	合計
		褐色			赤色					合計			
		Ⅲ	Ⅳ	分類不明	ⅠAb	ⅠA・Bb	ⅠBb	Ⅳ	分類不明				
平成22年度	トレンチ22 6層		1							7		1	74
	トレンチ22 7層直上									1			4
	トレンチ23 7層	1		2						8		3	213
平成24年度	トレンチ24 裏込め内									0		1	13
	トレンチ24 3層	1		1				1		5		1	52
	トレンチ24 4層 上面									0			14
	トレンチ24 4層			1						2			34
	トレンチ24 5層			6					1	24		1	61
	トレンチ24 6層									0			3
	トレンチ24 5・7層			10					1	12		2	108
	トレンチ24 7層	2		11		1				19		2	350
	トレンチ24 8層									0			1
	トレンチ24 7・9層			1						2	1	3	105
	トレンチ24 9層			1						1		1	50
	トレンチ24 10a層	1		6						9		3	175
	トレンチ24 10a・10b層		1	3						16		8	343
	トレンチ24 漆一括 10a層				1		1			2		1	23
	トレンチ24 10c層			1						1		1	30
	トレンチ24 12層									0			23
	トレンチ24 13層									0			5
	トレンチ24 14層			1						1			2
	トレンチ24 15層			1						4			27
	トレンチ24 16層									0			1
合計		5	2	45	1	1	1	1	2	114	1	28	1711

第10表　南側石牆地区遺物観察一覧a

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項	年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第23図 図版13	1	中国産 褐釉陶器	壺	口縁部	－	－	－	両面に黒褐色釉を施釉。素地は灰黄色で細かい。石英や黒色粒を含む。15c～16c。	H22	トレンチ22 6層
	2	本土産青磁	碗	口縁部	－	－	－	明オリーブ灰色釉を両面に施釉。素地は灰白色で細かい。外面胴部下半にはヘラなどによる縞状の削りがみられる肥前。17c前か。	H22	トレンチ22 6層
	3	本土産陶器	碗	底部	－	4.2	－	灰オリーブ色釉を両面に施釉。外面は高台脇まで施釉し、内底は蛇の目釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。微細な貫入あり。外底の削りがやや粗雑。内底に目跡あり。轆轤成形。肥前。	H22	トレンチ22 6層
	4	本土産陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	暗褐色釉を両面の口縁部に施釉。素地は灰色を呈し、細かい。白色粒、黒色粒を僅かに含む。内面口縁部下部に段をもつ。櫛目は明瞭。肥前。17c前。	H22	トレンチ22 6層
	5	初期 沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	外面は泥釉が施され、素地は暗赤褐色を呈する。石英や赤色粒を含む。白色土が筋状にみられる。外面口縁部下部に泥釉の溜まりがみられる。轆轤成形。	H22	トレンチ22 6層
	6	沖縄産 無釉陶器	碗	口縁部	－	－	－	両面、断面ともに灰褐色を呈する。石英・砂粒・赤色粒を含む。口唇部はやや尖る。轆轤成形。	H22	トレンチ22 6層
	7	沖縄産 無釉陶器	碗	底部	－	6.4	－	明赤褐色を呈する。砂粒を含み、赤色土がブロック状に混じる。高台低い。外底にヘラ描きあり。轆轤成形。	H22	トレンチ22 6層
	8	初期 沖縄産 無釉陶器	擂鉢	底部	－	－	－	両面に泥釉を施釉。断面はにぶい赤褐色を呈する。赤色土や白色土が筋状に多く混じる。泥釉が掛かっているため、内面の櫛目はかなり浅い。轆轤成形。	H22	トレンチ22 6層
	9	沖縄産 無釉陶器	火炉	底部	－	8.6	－	両面及び断面は赤褐色を呈する。微細な白色粒を含む。赤色土がブロック状に混じる。外面胴部及び畳付に煤付着。轆轤成形。	H22	トレンチ22 6層
	10	硬質土器	焙烙	口縁部	－	－	－	内外面:淡灰白色、断面:灰白色、胎土:土師質、混入物:赤色粒、白色粒。口唇部は平坦に仕上げ。	H22	トレンチ22 6層
	11	中国産青磁	瓶	胴部	－	－	－	淡オリーブ灰色を呈し、細かな気泡を含む。素地は灰白色で、緻密。胴つぎがみられる。龍泉窯。	H22	トレンチ23 7層
	12	中国産青磁	酒会壺	口縁部	－	－	－	光沢のあるオリーブ灰色の釉を両面に施釉。口縁部は釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。外面に蓮弁文と思われる文様あり。龍泉窯。	H22	トレンチ23 7層
	13	中国産白磁	碗	底部	－	7.6	－	灰白色の釉を両面に施釉。外面は畳付脇まで施釉。内底は蛇の目釉剥ぎ。素地は淡橙色で粗い。黒色粒を含む。福建・広東系。16c後～17c前。	H22	トレンチ23 7層
	14	中国産染付	碗	口縁部	11.2	－	－	灰白色釉を両面に施釉。素地は灰白色で緻密。外面胴部に草花文。景徳鎮窯。	H22	トレンチ23 7層
	15	中国産染付	碗	口～ 底部	12.9	7.2	5.5	灰白色釉を両面に施釉。外面は高台途中まで及び外底に施釉。内面は内底を蛇の目釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。外面胴部にスタンプの鳳凰文か。福建・広東系。17c後半～18c前。	H22	トレンチ23 7層
	16	中国産染付	碗	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。素地は灰白色で細かい。外面胴部にスタンプの鳳凰文か。福建・広東系。17c後半～18c前。	H22	トレンチ23 7層
	17	中国産染付	碗	口縁部	－	－	－	明オリーブ灰色釉を両面に施釉。素地は灰白色で緻密。外面胴部にスタンプの菊花文を押し、唐草を絵付け。外面口唇部下を削り、玉縁状を呈する。福建・広東系。17c後～18c前。	H22	トレンチ23 7層
	18	中国産染付	碗	底部	－	7.2	－	明緑灰色釉を両面に施釉。外面は畳付のみ露胎。内底は蛇の目釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。福建・広東系。17c後～18c代。	H22	トレンチ23 7層
	19	中国産染付	小碗	口縁部	7.8	－	－	明緑灰色釉を両面に施釉。素地は白色で緻密。外面口縁部に二重圏線、胴部に植物の文様か。景徳鎮窯。	H22	トレンチ23 7層
	20	中国産染付	小碗	底部	－	4.0	－	灰白色釉を両面に施釉。畳付は露胎。素地は灰白色で緻密。外面腰部から高台に複数の圏線。内底は圏線内に文様あり。景徳鎮窯。	H22	トレンチ23 7層
第23図 図版14	21	中国産 褐釉磁器	小碗	口縁部	7.6	－	－	外面に褐釉、内面に透明釉の掛け分け。素地は白色で緻密。内底に山水文か。外反口縁。景徳鎮窯。17c後。	H22	トレンチ23 7層

第10表　南側石牆地区遺物観察一覧b

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項	年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第23図 図版14	22	本土産染付	碗	底部	－	6.0	－	両面に灰白色の釉を施釉。畳付は露胎。素地は暗灰白色で緻密。黒色粒を含む。外面高台に二重圏線、内底の文様は荒磯文と考えられる。肥前。17c後。	H22	トレンチ23 7層
	23	本土産陶器	壺	底部	－	9.6	－	外面に光沢のあるオリーブ黄色釉を施釉。素地は灰白色で細かい。石英や黒色粒を含む。外底には溶着痕あり。内底に小さな粘土の塊がくっついており、釉がドット状に散らばっている。轆轤成形。信楽焼。	H22	トレンチ23 7層
	24	本土産 近現代磁器	鉢	口縁部	20.6	－	－	外面及び内面口縁部下部までガラス質の褐釉を施釉。素地は白色で緻密。	H22	トレンチ23 7層
第24図 図版14	25	本土産陶器	碗	口縁部	－	－	－	外面に銅緑釉、内面に灰釉の掛け分け。素地は灰白色で細かい。黒色粒を含む。肥前・内野山産。17c後～18c前。	H22	トレンチ23 7層
	26	本土産陶器	碗	底部	－	4.2	－	灰オリーブ色釉を両面に施釉。外面は高台脇まで施釉し、内底は蛇の目釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。微細な貫入あり。外底の削りがやや粗雑。内底に目跡あり。轆轤成形。肥前。	H22	トレンチ23 7層
	27	本土産陶器	擂鉢	底部	－	12.6	－	内面に灰褐色釉を施釉。外面は露胎。素地は暗灰白色で細かい。黒色粒、白色粒、石英、赤色粒を多く含む。櫛目は深くはっきりしている。外底に砂目の跡あり。備前。16c。	H22	トレンチ23 7層
	28	本土産陶器	擂鉢	底部	－	7.8	－	両面はにぶい褐色、断面は褐灰色を呈する。質は細かい。白色粒、黒色粒を僅かに含む。櫛目は深く、はっきりしている。底部と胴部の境は稜をもつ。第23図4と同資料と思われる。肥前。17c前。	H22	トレンチ23 7層
	29	初期 沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	両面に泥釉を施釉か。素地は暗褐色を呈する。石英を含み、白色土が筋状にみられる。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	30	初期 沖縄産 無釉陶器	蓋	－	11.2	－	－	外面は暗赤褐色、内面は赤褐色で、断面は褐灰色を呈する。石英を含む。両面の縁付近には煤が付着。被熱の影響か、内面はアバタ状を呈する。撮みの部分から破損している。	H22	トレンチ23 7層
	31	初期 沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	19.2	－	－	外面に暗褐色の泥釉を施釉。内面及び断面はにぶい赤褐色を呈する。石英を多く含み、白色土が筋状にみられる。内面口縁部にサンゴ目あり。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	32	初期 沖縄産 無釉陶器	壺	底部	8.8	－	－	両面に泥釉を施釉。外底は露胎。外面はにぶい黄橙色、内面は灰色を呈する。断面は灰褐色で、石英粒を多く含む。赤色土がブロック状に混じり、白色土が筋状にみられる。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	33	初期 沖縄産 無釉陶器	香炉	底部	－	16.4	－	外面に暗赤褐色の泥釉を施釉。内面は露胎。断面はにぶい赤褐色を呈する。石英を多く含む。赤色土及び白色土が筋状に多くみられる。足は逆S字状を呈する、轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	34	初期 沖縄産 無釉陶器	香炉	底部	－	12.0	－	両面に黒褐色の泥釉を施釉。断面はにぶい赤褐色を呈する。石英を多く含む。赤色土及び白色土が筋状に多くみられる。底部の一部の粘土を上方に折り曲げて足を造り出している。	H22	トレンチ23 7層
第24図 図版15	35	初期 沖縄産 無釉陶器	火炉	胴部	－	－	－	両面に灰赤色の泥釉を施釉。断面はにぶい赤褐色を呈する。石英を多く含む。赤色土及び白色土が筋状に多くみられる。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	36	沖縄産 無釉陶器	碗	口～ 底部	13.8	6.2	6.3	外面胴部上半部は橙～灰褐色の泥釉、腰部から外底は露胎で赤褐色。内面は褐灰色の泥釉を施釉。ブロック状の赤色土、石英、砂粒を含む。高台の造りは粗く、かなり低い。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	37	沖縄産 無釉陶器	碗	口縁部	13.8	－	－	両面ともに橙～灰褐色を呈する。ブロック状の赤色土、石英、砂粒を含む。口縁部に煤が付着。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	38	沖縄産 無釉陶器	碗	底部	－	5.8	－	外面は橙色、内面はにぶい橙色。断面は灰色と明赤褐色がサンドイッチ状を呈する。ブロック状の赤色土、石英、砂粒を含む。内底の一部に泥釉がかかる。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	39	沖縄産 無釉陶器	皿	口～ 底部	12.2	6.2	3.2	外面は暗赤褐色～赤褐色で、内面は極暗赤褐色の泥釉を施釉。ブロック状の赤色土、石英を含む。底部はベタ底。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層

第10表　南側石牆地区遺物観察一覧c

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項	年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第24図 図版15	40	沖縄産 無釉陶器	皿	口縁部	10.4	－	－	外面はにぶい赤褐色、内面は暗赤褐色を呈する。口唇部は泥釉がかかり、内面は自然釉がドット状に散らばっている。ブロック状の赤色粒、石英を多く含む。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	41	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	外面はにぶい赤褐色の泥釉を施釉し、内面は赤褐色を呈する。白色粒や黒色粒を僅かに含む。口縁部は逆「L」字状。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	42	沖縄産 無釉陶器	火炉	底部	－	12.6	－	両面ともに明赤褐色を呈する。ブロック状の赤色土、石英、白色粒、黒色粒を含む。円錐状の脚が3点つくものと考えられる。轆轤成形。	H22	トレンチ23 7層
	43	沖縄産 無釉陶器	器種 不明	底部	－	7.0	－	浅黄色の自然釉が外面胴部から外底にかけて施釉される。内面は灰オリーブ色で露胎。浅黄色土がマーブル状に混じる。底部はベタ底。	H22	トレンチ23 7層
	44	陶質土器	皿	口縁部	－	－	－	両面とも明赤褐色を呈する。白色粒、黒色粒、雲母を含む。硬質で焼成良好。	H22	トレンチ23 7層
第25図 図版15	45	中国産染付	碗	口縁部	－	－	－	灰白色釉を両面に施釉。素地は灰白色で細かい。外面胴部にスタンプの菊花文か。福建・広東系。17c後半～18c代。	H24	トレンチ24 3層
	46	中国産 瑠璃釉	小碗	底部	－	4.6	－	外面に瑠璃釉、内面に透明釉を掛け分け。素地は白色で緻密。腰部はやや丸みをおび、高台は断面三角形状を呈する。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 3層
	47	本土産陶器	鉢	口縁部	－	－	－	灰白色釉を両面に施釉し、内面は胴部途中まで施釉。素地はにぶい赤褐色で細かい。白色粒を含む。口唇部は断面三角形状を呈する。被熱を受けている。唐津。17c代。	H24	トレンチ24 3層
	48	沖縄産 無釉陶器	碗	口縁部	11.6	－	－	外面胴部上半部は灰褐色の泥釉が掛かり、胴部下半からは露胎で赤褐色。内面はにぶい褐色の泥釉。石英、砂粒を含む。僅かにブロック状の赤色土が混じる。口唇部は舌状を呈する。轆轤成形。	H24	トレンチ24 3層
	49	塼	Ⅲ式	－	－	－	－	灰色系。表面はナデがやや良好。裏面は粗面。端部に段を成形する。裏面に「へ」の字状の箆印あり。	H24	トレンチ24 3層
第25図 図版16	50	中国産 褐釉磁器	小碗	底部	－	3.8	－	外面に褐釉、内面に透明釉を掛け分け。素地は白色で緻密。外底に二重圏線、内底に二重圏線と山水文。景徳鎮窯。17c後。	H24	トレンチ24 4層
	51	初期 沖縄産 無釉陶器	碗	底部	－	6.8	－	両面とも灰色を呈し、露胎。白色粒を含む。白色土が筋状にみられる。造りは非常に粗い。外底に糸切痕と思われる細かい筋と、ヘラ印あり。轆轤成形。	H24	トレンチ24 4層
	52	沖縄産 無釉陶器	碗	口縁部	14.0	－	－	外面は明赤褐色、内面は明赤褐色～灰赤色を呈する。断面は灰色と赤色がサンドイッチ状をなす。口唇部は舌状を呈する。器壁は厚い。轆轤成形。	H24	トレンチ24 4層
	53	中国産染付	碗	口縁部	－	－	－	明緑灰色釉を両面に施釉。素地は白色で細かい。外面胴部にスタンプの丸文か。口縁部はやや外反する。福建・広東系。17c後半～18c代。	H24	トレンチ24 5層
	54	本土産染付	碗	口縁部	－	－	－	内外面に灰白色の釉を施釉。素地は暗灰白色で緻密。黒色粒を僅かに含む。外面胴部に草花文か。被熱を受けている。第25図55と同一個体と思われる。肥前。17c後半～。	H24	トレンチ24 5層
	55	本土産染付	碗	底部	－	5.7	－	内外面に灰白色の釉を施釉。素地は暗灰白色で緻密。黒色粒を僅かに含む。外面胴部に草花文か。内底は荒磯文か。被熱を受けている。第25図54と同一個体と思われる。肥前。17c後半～。	H24	トレンチ24 5層
	56	沖縄産 無釉陶器	碗	口縁部	11.3	－	－	外面は黒褐色の泥釉で、内面は灰褐色～赤褐色を呈する。ブロック状の赤色土、石英を含む。口唇部は舌状を呈し、外面口縁部下に段をもつ。轆轤成形。	H24	トレンチ24 5層
	57	沖縄産 無釉陶器	碗	底部	－	6.5	－	明赤褐色を呈する。白色粒、黒色粒、石英を含む。高台は造りが粗く、非常に低い。轆轤成形。	H24	トレンチ24 5層
	58	石製品	石筆	－	3.8	0.6	0.5	断面は楕円形。端は円錐状を呈する。蝋石製。	H24	トレンチ24 5層
	59	銭貨	寛永 通宝	－	－	－	0.1	古寛永と考えられる。初鋳年代は1636年。江戸時代。造りは雑で、青銅が均一に流し込まれていないことによる孔が確認される。	H24	トレンチ24 5層

第10表　南側石牆地区遺物観察一覧d

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項	年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第25図 図版16	60	青銅製品	角釘	－	3.7	－	－	頭部が一方に折れる。緑錆付着。	H24	トレンチ24 5層
	61	塼	ⅠAa式	－	－	－	－	灰色系。表面は風化によりアバタ状を呈する。裏面も粗面。側面に刻線がみられる。角1有り。	H24	トレンチ24 5層
	62	塼	ⅠAb式	－	－	－	－	褐色系。表面は風化によりアバタ状を呈する。裏面も粗面。角1有り。	H24	トレンチ24 5層
第25図 図版17	63	中国産白磁	小杯	口～ 底部	－	－	－	灰白色の釉を両面に施釉。外面は畳付が露胎。内底に目跡あり。素地は白色で緻密。高台形状は花文を呈する。型成形か。徳化窯。	H24	トレンチ24 5・7層
	64	中国産 褐釉陶器	壺	底部	－	9.0	－	両面に暗赤褐色釉を施釉するが、外面胴部下半は露胎。素地は灰褐色で細かい。石英を多く含む他、赤色粒や黒色粒を僅かに含む。轆轤成形。	H24	トレンチ24 5・7層
	65	本土産陶器	擂鉢	口縁部	32.4	－	－	暗褐色釉を両面の口縁部に施釉。外面は釉垂れがみられる。素地は灰色を呈し、細かい。白色粒、黒粒色を僅かに含む。内面口縁部下部に段をもつ。櫛目が明瞭。肥前。17c前。	H24	トレンチ24 5・7層
第26図 図版17	66	本土産陶器	壺	口縁部	16.6	－	－	黒褐色釉を両面に施釉。素地は赤色を呈する。石英、黒色粒、白色粒を多く含む。口唇部に貝目が確認される。薩摩。苗代川窯系。18c。	H24	トレンチ24 5・7層
	67	本土産陶器	小壺	口縁部	13.2	－	－	灰白色釉を両面に施釉。素地は黄褐色で細かい。石英、赤色粒、白色粒を含む。口縁部は「く」の字状を呈する。口唇部の一部は釉剥ぎされる。薩摩。堂平窯。	H24	トレンチ24 5・7層
	68	初期 沖縄産 無釉陶器	皿	底部	－	3.8	－	両面ともに橙色を呈する。断面は褐灰色を呈する。石英を多く含む。外面胴部下半は削りの痕跡が明瞭で、外底は糸切痕が明瞭。底部はベタ底。轆轤成形。	H24	トレンチ24 5・7層
	69	初期 沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	外面に褐色の泥釉を施し、口唇部途中まで施釉する。内面は明赤褐色で露胎。断面はにぶい赤褐色を呈する。石英を多く含み、その他にもブロック状の赤色土、白色粒を含む。轆轤成形。	H24	トレンチ24 5・7層
	70	沖縄産 無釉陶器	碗	底部	－	5.9	－	両面ともに橙色を呈する。石英、白色粒、黒色粒を含む。外底に「十二」状の印が刻まれる。轆轤成形。	H24	トレンチ24 5・7層
	71	中国産白磁	碗	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。内面には細かい貫入がみられる。白色で緻密、黒色粒を僅かに含む。口唇部がやや尖る外反。景徳鎮窯か。	H24	トレンチ24 7層
	72	中国産白磁	小碗	口～ 底部	6.8	3.0	4.1	灰白色の釉を両面に施釉。外面は畳付は露胎で、砂が付着する。素地は白色で細かい。器壁は薄く、口縁部は外反する。被熱を受けている。徳化窯。18c後～19c前。	H24	トレンチ24 7層
	73	中国産染付	碗	口縁部	－	－	－	灰白色釉を両面に施釉。素地は灰白色で細かい。外面胴部にスタンプの鳳凰文か。福建・広東系。17c後半～18c代。	H24	トレンチ24 7層
	74	中国産染付	碗	底部	－	7.6	－	灰白色の釉を両面に施釉。外面は高台脇まで施釉。内底は蛇の目釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。黒色粒を含む。内底に一本の圏線と文様が確認されるが不明瞭。福建・広東系。17c後～18c代。	H24	トレンチ24 7層
	75	中国産染付	碗	底部	－	7.4	－	明緑灰色釉を両面に施釉。畳付は露胎。素地は白色で緻密。腰部は外に開きながら丸みをもつ。高台は高く、畳付に砂が付着する。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 7層
	76	中国産染付	碗	底部	－	5.1	－	透明釉を両面に施釉。畳付は露胎。素地は白色で緻密。腰部は丸みをおび、高台は高い。内底に草花文か。外底には「岐」と思われる銘あり。轆轤成形。福建産。	H24	トレンチ24 7層
	77	中国産染付	皿	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。素地は白色で緻密。口縁部は輪花状を呈する。芙蓉手。景徳鎮窯 。17c代。	H24	トレンチ24 7層
	78	中国産 無釉陶器	蓋	－	－	－	－	にぶい赤褐色で細かい。硬質である。表面は滑らか。宜興窯。清代。	H24	トレンチ24 7層
	79	ベトナム産 白磁	碗	底部	－	6.8	－	透明釉を両面に施釉。畳付から外底は露胎。外底中央付近に鉄釉を施す。素地は灰白色で細かい。内底には目跡が1箇所みられる。高台は低く、外底の削りはあまりされない。	H24	トレンチ24 7層

第10表　南側石牆地区遺物観察一覧e

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項	年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第26図 図版18	80	本土産染付	碗	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。素地は白色で緻密。口縁部はやや内湾する。外面胴部に折枝梅文か。肥前。	H24	トレンチ24 7層
	81	本土産染付	碗	口縁部	－	－	－	灰白色釉を両面に施釉。素地は暗灰白色で緻密。黒色粒を含む。外面口縁部に圏線、胴部に雲竜文か。内面口縁部に圏線。直口口縁。肥前。	H24	トレンチ24 7層
	82	本土産染付	碗	底部	－	5.7	－	灰白色釉を両面に施釉。高台途中から外底にかけては露胎。素地は灰白色で細かい。外面腰部に唐草文。内底に荒磯文か。腰部は稜をもつ。肥前。	H24	トレンチ24 7層
	83	本土産陶器	碗	口縁部	－	－	－	両面に暗オリーブ灰色を施釉。素地はにぶい橙色で細かい。黒色粒、砂粒を含む。外面に鉄絵による文様あり。口縁部はやや外反する。轆轤成形。唐津。	H24	トレンチ24 7層
	84	本土産陶器	碗	底部	－	5.1	－	両面に透明釉を施釉。高台脇から外底にかけては露胎。細かい貫入あり。素地は灰白色で細かい。赤色粒、黒色粒を含む。内底に山水文。外底に銘あり。底部の成形が丁寧。京焼風陶器。1650年～1690年代か。肥前。	H24	トレンチ24 7層
	85	本土産陶器	擂鉢	口縁部	32.4	－	－	暗褐色釉を両面の口縁部に施釉。素地は灰色を呈し、細かい。白色粒、黒色粒を僅かに含む。内面口縁部下部に段をもつ。櫛目9本一組。肥前。17c前。	H24	トレンチ24 7層
第27図 図版18	86	本土産陶器	袋物	底部	－	4.6	－	暗赤褐色釉を外面に施釉。内底に釉垂れあり。素地はにぶい黄橙色と灰色がサンドイッチ状を呈し、細かい。黒色粒、白色粒を含む。内底は轆轤痕が明瞭。	H24	トレンチ24 7層
	87	初期 沖縄産 無釉陶器	皿	口～ 底部	10.4	6.8	2.6	にぶい褐色の泥釉が両面に施され、内底と外底は露胎。素地は橙色を呈する。石英を含む。白色土が筋状にみられる。ベタ底。轆轤成形。	H24	トレンチ24 7層
	88	初期 沖縄産 無釉陶器	蓋	－	－	－	－	外面に黒褐色の泥釉を施釉。内面は露胎。素地は暗赤褐色を呈する。石英を含む。白色土が筋状にみられる。轆轤成形。	H24	トレンチ24 7層
	89	沖縄産 無釉陶器	碗	口縁部	13.6	－	－	両面及び断面は橙色を呈する。石英、赤色土が混じる。轆轤成形。	H24	トレンチ24 7層
	90	沖縄産 無釉陶器	碗	底部	－	4.7	－	両面は明橙色を呈し、断面は灰色。白色粒を僅かに含む。高台は低く、造りは粗い。外底に線刻あり。	H24	トレンチ24 7層
	91	沖縄産 無釉陶器	皿	底部	－	3.2	－	両面は黄灰色の泥釉を施釉し、断面は暗赤褐色を呈する。石英を含む。外底に線刻あり。ベタ底。轆轤成形。	H24	トレンチ24 7層
	92	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	外面に灰褐色の泥釉を施釉。内面は露胎。断面はにぶい赤褐色を呈する。石英、赤色土が混じる。櫛目9本一組。轆轤成形。	H24	トレンチ24 7層
	93	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	底部	－	8.6	－	外面はにぶい赤褐色～明赤褐色、内面及び断面は明赤褐色を呈する。石英、白色粒、赤色土、石灰岩粒が混じる。轆轤成形。	H24	トレンチ24 7層
第27図 図版19	94	硬質土器	焙烙	口縁部	－	－	－	内外面:淡灰白色、断面:灰白色、胎土:土師質、混入物:赤色粒、白色粒。口縁部内面は断面三角形状を呈する。外面口縁部は煤が付着する。	H24	トレンチ24 7層
	95	青銅製品	切羽	－	－	－	－	緑錆が全面的に付着。	H24	トレンチ24 7層
	96	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	－	－	－	褐色。玉縁裏は1回の面取り。凹面には布糸綴り痕が1条確認できる。玉縁中央部には十字状のヘラ印あり。角1有り。	H24	トレンチ24 7層
	97	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	－	－	－	褐色。玉縁裏は1回の面取り。凹面には布糸綴り痕が2条確認できる。玉縁端部から中央部にかけて垂直方向の平行する4本線のヘラ印あり。	H24	トレンチ24 7層
第28図 図版19	98	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	－	－	－	褐色。玉縁裏は1回の面取り。凹面には布糸綴り痕が1条確認される。玉縁中央部にはやや垂直方向の二本線に斜位の一本線と水平方向の一本線が交差したヘラ印あり。	H24	トレンチ24 7層
	99	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	－	－	－	赤色。玉縁裏は1回の面取り。凹面には布糸綴り痕が1条確認できる。玉縁段部に斜位の一本線のヘラ印あり。	H24	トレンチ24 7層
	100	瓦	明朝系 平瓦	狭端部	－	－	－	褐色。凸面の狭端側にナデによる凹線がみられる。凹面には1条の糸綴り圧痕が確認される。角1有り。	H24	トレンチ24 7層

第10表　南側石牆地区遺物観察一覧f

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm) 口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	年度	出土地
第28図 図版19	101	瓦	明朝系軒丸瓦	－	－	－	－	褐色。瓦当部。器面は風化がみられ、外周には粘土バリが残る。瓦当裏は縦方向の指ナデ痕が残り、凹凸面となっている。	H24	トレンチ24 8層
第28図 図版20	102	中国産染付	碗	口縁部	14.4	－	－	明オリーブ灰色釉を両面に施釉。素地は灰白色で細かい。外面胴部にスタンプの鳳凰文と絵付けの唐草文か。福建・広東系。17c後半～18c代。	H24	トレンチ24 7・9層
	103	本土産染付	小碗	底部	－	4.0	－	外面に明緑灰色釉、内面に透明釉を掛け分け。畳付は露胎。内底に明緑灰色釉の釉垂れがみられる。素地は白色で細かい。内底に花文か。畳付に砂付着。肥前。	H24	トレンチ24 7・9層
	104	本土産染付	高足杯	底部	－	4.0	－	外面に灰白色釉を施釉。外面胴部下半から外底にかけて露胎。素地は灰白色で細かい。黒色粒を含む。外底中央部は凹む。轆轤成形。肥前。	H24	トレンチ24 7・9層
	105	本土産陶器	小碗	底部	－	4.6	－	にぶい黄色釉を両面に施釉し、外面腰部から外底にかけては灰褐色釉を施釉。畳付を釉剥ぎ。灰白色で細かい。腰部に稜をもつ。関西系。	H24	トレンチ24 7・9層
第29図 図版20	106	本土産陶器	鉢	口縁部	－	－	－	両面に灰黄褐色釉を施釉。素地はにぶい赤褐色で細かい。石英、砂粒を含む。内面は白土で刷毛目の文様及び象嵌による菊花文と波状文。鍔縁口縁。唐津。	H24	トレンチ24 7・9層
	107	沖縄産無釉陶器	碗	口縁部	15.0	－	－	外面は橙色～明赤褐色を呈し、内面は灰褐色～橙色を呈する。断面は橙色。石英、白色、黒色粒を含む。直口口縁。轆轤成形。	H24	トレンチ24 7・9層
	108	中国産染付	碗	口縁部	12.2	－	－	明オリーブ灰色釉を両面に施釉。素地は白色で細かい。外面胴部に唐草文。内面口縁部及び内底に1本の圏線。福建・広東系。17c後半～18c代。	H24	トレンチ24 9層
	109	中国産染付	皿	口縁部	－	－	－	明緑灰色釉を両面に施釉。素地は白色で緻密。内面口縁部に菱文、内底に2本の圏線。外反口縁。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 9層
	110	本土産陶器	碗	口縁部	－	－	－	外面に銅緑釉、内面に灰釉を施釉。素地は灰白色で細かい。口縁部はやや外反する。轆轤成形。肥前・内野山産。17c後～18c前。	H24	トレンチ24 9層
	111	沖縄産無釉陶器	皿	口～底部	13.9	6.0	2.5	外面は暗褐色、内面は暗褐色～明赤褐色を呈する。断面は明赤褐色で砂粒を含む。外面口縁部に1本の沈線。口唇部は尖り気味。ベタ底。轆轤成形。	H24	トレンチ24 9層
	112	沖縄産無釉陶器	皿	口縁部	－	－	－	両面及び断面は明赤褐色を呈する。砂粒を含む。口唇部に煤が付着する。灯明皿。轆轤成形。	H24	トレンチ24 9層
	113	中国産白磁	碗	口縁部	14.8	－	－	灰白色釉を両面に施釉し口唇を釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。直口口縁。轆轤成形。福建・広東系。16c～17cか。	H24	トレンチ24 漆と一括 10a層
	114	中国産染付	碗	口～底部	12.2	6.6	5.0	灰白色釉を両面に施釉し、外面高台途中から畳付にかけて釉剥ぎ。また内底を蛇の目状に釉剥ぎする。素地は灰白色で緻密。外面胴部にスタンプの菊花文を押し、唐草を絵付け。外反口縁。福建・広東系。17c後～18c前。	H24	トレンチ24 漆と一括 10a層
	115	中国産染付	碗	口縁部	12.1	－	－	灰白色釉を両面に施釉。素地は灰白色で緻密。外面胴部にスタンプの菊花文を押し、唐草を絵付け。直口口縁。福建・広東系。17c後～18c前。	H24	トレンチ24 10a層
	116	中国産染付	碗	底部	－	7.0	－	明緑灰色釉を両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面胴部に玉取獅子文、外底に二重圏線と銘款。内底に玉取獅子文。畳付に砂が付着する。徳化窯系。18c。	H24	トレンチ24 漆と一括 10a層
	117	中国産染付	皿	口縁部	－	－	－	両面に透明釉を施釉。素地は白色で緻密。外面に花唐草文か。内面に果実文様、内底にも文様あり。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 10a層
	118	本土産陶器	碗	口縁部	－	－	－	外面に銅緑釉、内面に灰釉の掛け分け。素地は灰白色で細かい。肥前・内野山産。17c後～18c前。	H24	トレンチ24 10a層
	119	本土産陶器	鉢	底部	－	－	－	内面に灰白色釉を施釉。素地は灰褐色で細かい。砂粒を含む。内面は白土で刷毛目文様。内底に砂目あり。唐津の二彩手。	H24	トレンチ24 10a層
	120	本土産陶器	蓋	－	－	－	－	外面に灰白色釉を施釉。素地は赤褐色で細かい。石英、赤色粒を含む。轆轤成形。薩摩。	H24	トレンチ24 10a層

第10表　南側石牆地区遺物観察一覧g

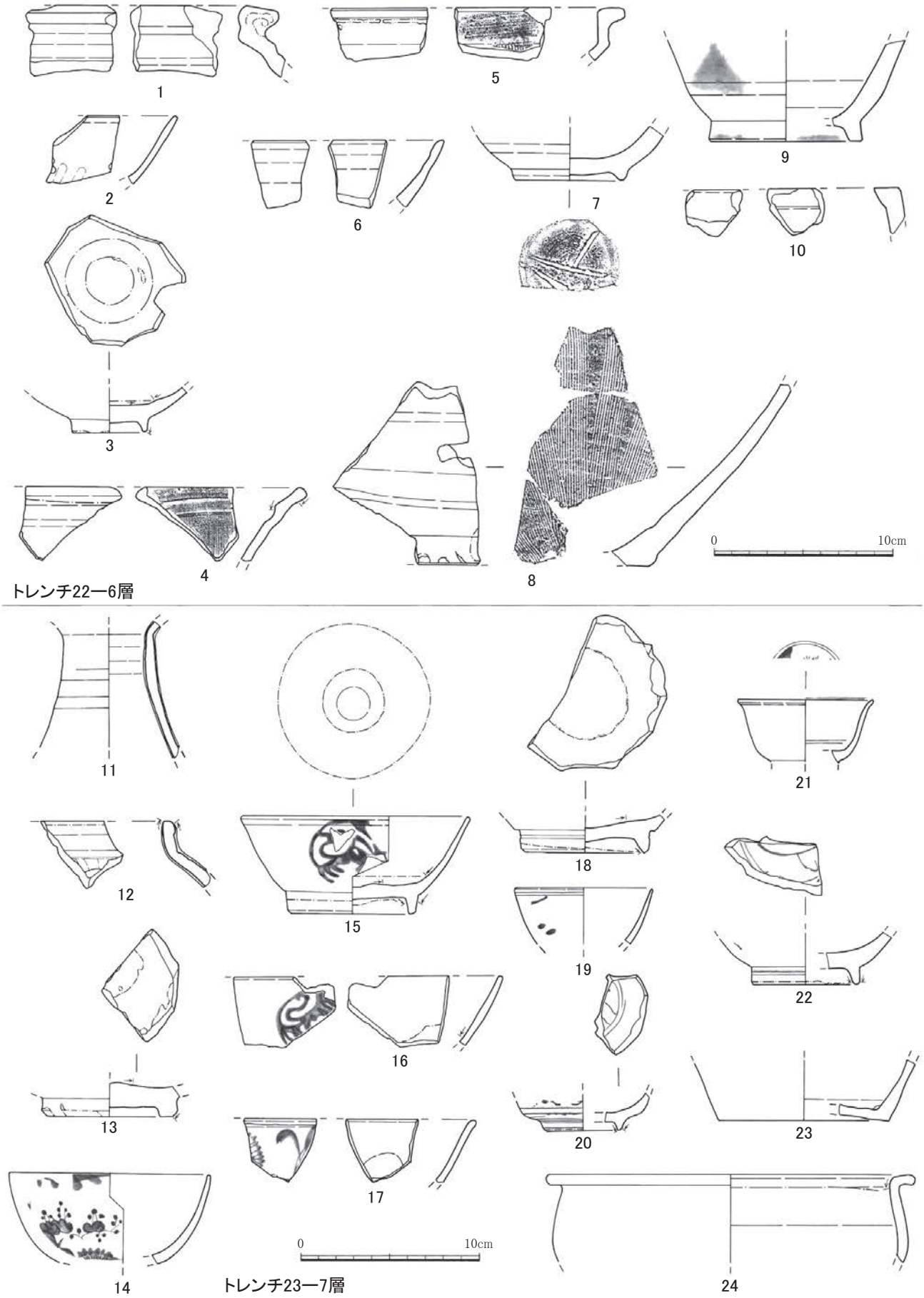
挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm) 口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	年度	出土地
第29図 図版21	121	初期 沖縄産 無釉陶器	器種 不明	底部	－	－	－	器表面は灰褐色、断面は橙色を呈する。石英、赤色粒を含む。白色土が筋状に多くみられる。内外面ともにナデ調整が施される。特に外面は縦方向へのナデ調整が明瞭で、稜をもつ。内面及び上面は平坦気味に仕上げられている。	H24	トレンチ24 10a層
	122	沖縄産 無釉陶器	壺	口縁部	18.8	－	－	外面に灰黄褐色の泥釉を施釉。内面は灰褐色、断面はにぶい赤褐色を呈する。石英を含み、筋状の白色土もわずかにみられる。口縁部は内側へ折り返し成形。内面口縁部下部に1本の沈線あり。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a層
	123	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	－	－	－	褐色。玉縁裏は1回の面取り。凹面には布糸綴り痕が1条確認できる。玉縁中央部にやや垂直方向の平行する3本線のヘラ印あり。	H24	トレンチ24 10a層
第30図 図版21	124	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	－	－	－	褐色。玉縁裏は1回の面取り。凹面には布糸綴り痕が1条確認できる。玉縁中央部に左下から右上方向への斜め線の2本線のヘラ印あり。	H24	トレンチ24 10a層
	125	瓦	明朝系 平瓦	広端部	－	－	－	褐色。凹面の広端側に桶板紐綴り圧痕が4個確認される。凸面には波状の線描きがみられる。角1有り。	H24	トレンチ24 10a層
	126	瓦	明朝系 平瓦	広端部	－	－	－	赤色。凹面の広端側に桶板紐綴り圧痕が3個確認される。凸面には横方向の1本の線描きがみられる。角1有り。	H24	トレンチ24 10a層
	127	中国産白磁	皿	底部	－	10.5	－	灰オリーブ色の釉を両面に施釉。外面高台脇から外底まで露胎。内底は蛇の目釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。黒色粒を含む。高台は低く、畳付幅は広い。内底に胎土目あり。轆轤成形。福建・広東系。16c後～17c前。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	128	中国産染付	碗	口縁部	－	－	－	淡灰白色の釉を両面に施釉。内面は胴部下半を露胎。素地は白色で細かい。外面胴部に花文か。外反口縁。徳化窯。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	129	中国産染付	碗	口縁部	－	－	－	明緑灰色の釉を両面に施釉。口唇部を釉剥ぎ。素地は白色で細かい。外面胴部に唐草文、内面口縁部と胴部下半に1本の圏線。口唇断面は方形状を呈する。福建・広東系。17c後～18c前。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	130	中国産染付	碗	底部	－	7.4	－	明緑灰色釉を両面に施釉。外面は高台のみ露胎。内底は蛇の目釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。外面胴部に文様あるが不明瞭。内定に1本の圏線あり。福建・広東系。17c後～18c前。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	131	中国産 褐釉磁器	碗	底部	－	4.6	－	外面に褐釉、内面に透明釉を掛け分け。素地は白色で緻密。外底に銘あり。内底に二重圏線と山水文。景徳鎮窯。17c後。	H24	トレンチ24 10a・10b層
第31図 図版22	132	中国産 瑠璃釉	瓶	底部	－	6.2	－	外面に瑠璃釉、内面に透明釉を掛け分け。外底は露胎だが、釉垂れがみられる。素地は灰白色で緻密。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	133	本土産染付	碗	口縁部	13.6	－	－	灰白色釉を両面に施釉。素地は暗灰白色で緻密。黒色粒を含む。外面及び内面口縁部に1本の圏線。内面口縁部に圏線。直口口縁。肥前。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	134	本土産染付	碗	口縁部	12.4	－	－	透明釉を両面に施釉。口唇部は釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面胴部に草花文。直口口縁。肥前。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	135	本土産染付	小碗	口縁部	8.5	－	－	透明釉を両面に施釉。素地は白色で緻密。外面胴部に文様あり。直口口縁。肥前。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	136	本土産染付	碗	底部	－	5.0	－	両面に灰白色の釉を施釉。畳付は露胎。素地は暗灰白色で緻密。黒色粒を含む。外面高台に二重圏線、内底に荒磯文。被熱の影響がみられる。肥前。17c後。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	137	本土産染付	皿	底部	－	12.0	－	両面に灰白色の釉を施釉。畳付は露胎。素地は暗灰白色で緻密。外面胴部及び内面に文様あり。肥前。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	138	本土産陶器	碗	口縁部	11.0	－	－	外面に銅緑釉、内面に灰釉の掛け分け。素地は灰白色で細かい。黒色粒を含む。肥前・内野山産。17c後～18c前。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	139	本土産陶器	小碗	口～底部	7.9	4.2	5.5	にぶい黄色釉を両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。素地は灰白色で細かい。黒色粒を含む。腰部に稜をもつ。直口口縁。肥前。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	140	本土産陶器	擂鉢	底部	－	13.0	－	内面は灰褐色釉(泥釉？)を施釉。素地は黄灰色で細かい。黒色、白色、透明粒を多く含む。内底は櫛目が垂直方向に交差する。底部から胴部にかけては粘土バリが明瞭に残っているなど、造りは粗い。備前。16c。	H24	トレンチ24 10a・10b層

第10表　南側石牆地区遺物観察一覧h

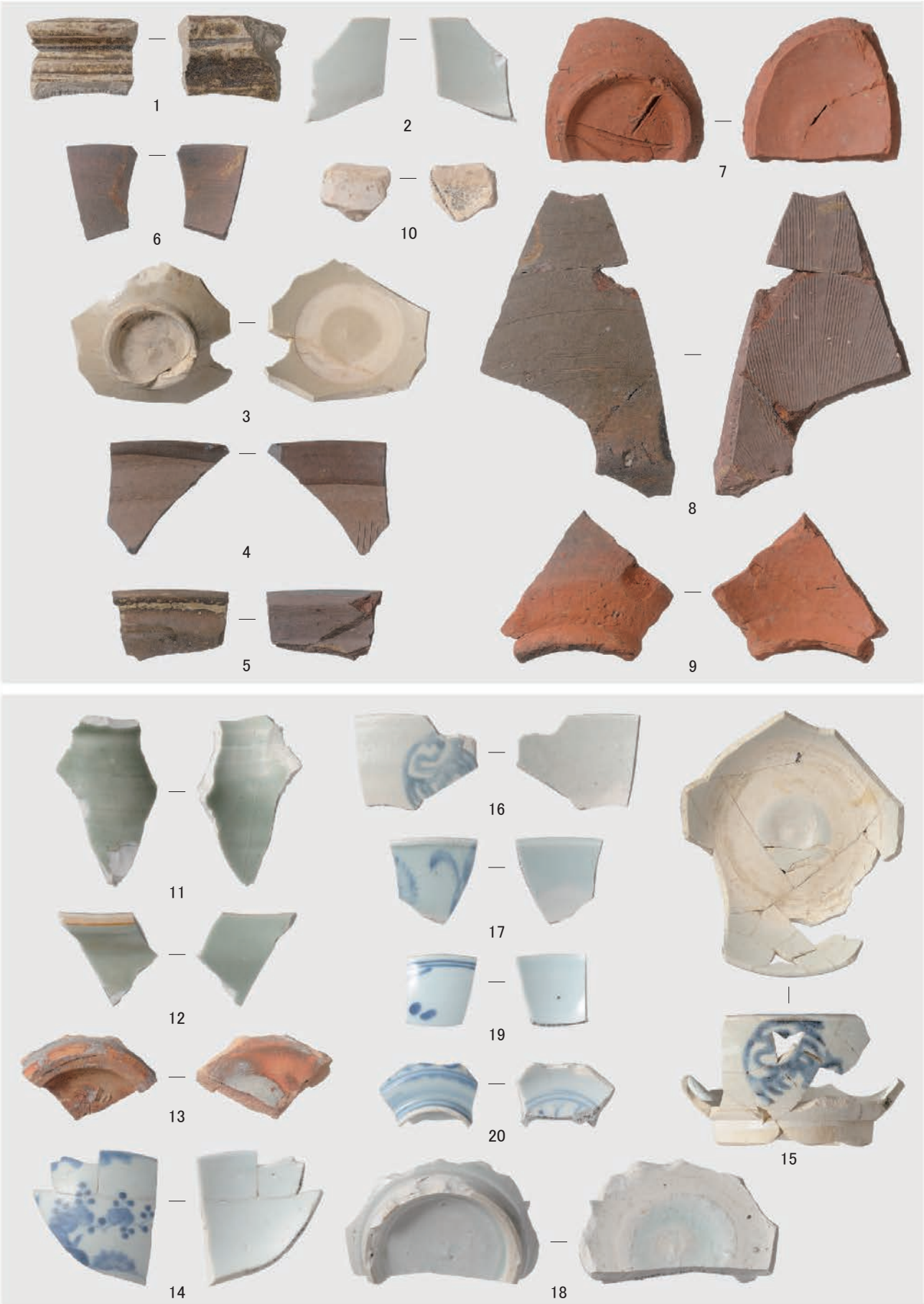
挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm) 口径 (長軸)	法量(cm) 底径 (短軸)	法量(cm) 器高 (厚さ)	観察事項	年度	出土地
第31図 図版22	141	初期 沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	外面には褐色の泥釉を施釉。内面及び断面は灰褐色を呈する。石英、ブロック状の赤土を含む。白色土が筋状にみられる。口縁部を外側に広げ、口唇部は平坦。櫛目8本一組。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	142	初期 沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	褐色の泥釉を両面に施釉。断面は暗褐灰色を呈する。石英を多く含む。白色土が筋状に多くみられる。口縁部を外側に広げ、口唇部は平坦。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	143	初期 沖縄産 無釉陶器	火取	口縁部	12.2	－	－	外面は褐色、内面は青灰色、断面はにぶい赤褐色を呈する。石英を含む。白色土が筋状にみられる。口唇上面はやや丸く、口縁端部は内側へ張り出す。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	144	初期 沖縄産 無釉陶器	香炉	口～ 底部	25.0	18.4	23.3	外面は褐色、内面は暗褐色の泥釉を施釉。断面は赤褐色を呈する。石英を多く含む。白色土が筋状にみられる。外面口縁部及び口縁部下部に連続した三重弧文。胴部に唐草文、脚部は獣面(獅子)を象る。	H24	トレンチ24 10a・10b層
第32図 図版23	145	初期 沖縄産 無釉陶器	火炉	底部	－	14.8	－	外面及び断面は赤褐色、内面は明赤褐色を呈する。ブロック状の赤色土、石英を含む。白色土及び赤色土が筋状にみられる。円錐状の脚が3点つくものと考えられる。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	146	初期 沖縄産 無釉陶器	器種 不明	口縁部	－	－	－	器表面は灰色、断面はにぶい褐色を呈する。石英、赤色粒を含む。筋状の白色土が非常に多くみられる。内面は指頭圧痕が明瞭。外面は文様と思われる連続した彫り込みがある。口縁部上面は段をもち、外面口縁部の肥厚部は貼り付けて成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	147	沖縄産 無釉陶器	碗	口～ 底部	15.8	6.4	7.0	両面ともに暗赤褐色～赤褐色を呈する。断面は暗赤褐色で石英を含む。直口口縁。高台低い。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	148	沖縄産 無釉陶器	碗	口縁部	14.0	－	－	器表面はにぶい赤褐色、断面は暗赤褐色を呈する。外反口縁で、薄手の造りである。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	149	沖縄産 無釉陶器	碗	底部	－	5.9	－	器表面は明赤褐色、断面は黒褐色を呈する。石英を含む。腰部はやや丸みをおび、高台は低い。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	150	沖縄産 無釉陶器	碗	底部	－	6.6	－	器表面及び断面ともに橙色を呈する。石英を多く含む。高台は低く、造りは粗い。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	151	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	器表面には灰赤色の泥釉を施釉。断面は暗赤褐色を呈する。石英、ブロック状の赤色土を含む。櫛目8本一組。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	152	初期 沖縄産 無釉陶器	壺	口～ 底部	13.6	16.4	19.1	褐灰色の泥釉を両面に施釉。外底の一部は釉剥ぎ。素地は灰黄褐色で、石英をかなり多く含む。白色土が筋状にみられる。外面胴部に数本の沈線を施す。口縁部は玉縁状。高台の造りは雑。獣面(龍か)を象った耳が付く。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	153	沖縄産 無釉陶器	急須	口縁部	10.2	－	－	外面及び内面口縁部下部まで暗赤褐色の泥釉を施釉。断面も暗赤褐色を呈し、石英やブロック状の赤色土を含む。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
第32図 図版24	154	初期 沖縄産 無釉陶器	火炉	口縁部	(20.5)	－	－	外面はにぶい赤褐色の泥釉を施釉し、内面及び断面は暗赤褐色を呈する。石英、ブロック状の赤色土を含む。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	155	初期 沖縄産 無釉陶器	火炉	口縁部	－	－	－	外面は暗赤褐色の泥釉を施釉し、内面及び断面はにぶい赤褐色を呈する。石英、ブロック状の赤色土を含む。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	156	陶質土器	火炉	底部	－	15.0	－	器表面及び断面は浅黄橙色、外底は赤褐色を呈する。石英、黒色、赤色粒、ガラス質粒子含む。白色土が筋状にみられる。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
第33図 図版24	157	瓦質土器	瓦灯か	胴部	－	－	－	外面は橙色、内面及び断面は浅黄橙色を呈する。黒色、赤色粒、ガラス質粒子含む。白色土が筋状にみられる。外面は平坦に仕上げ。円形の窓が確認される。組み合わせ式の瓦灯の屋根部分か。孔径:6.6cm。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	158	瓦質土器	鉢	底部	－	19.0	－	外面は橙色、内面は明褐色、断面は明褐色と灰色がサンドイッチ状を呈する。石英、赤色粒を含む。白色土が筋状にみられる。大型の製品。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	159	瓦質土器	焜炉の 目皿	底部	－	－	－	器表面及び断面は橙色を呈する。石英、赤色粒を含む。白色土が筋状にみられる。外面は平坦に仕上げ。孔が3箇所ある。焜炉の目皿か。孔径:1.2cm。	H24	トレンチ24 10a・10b層

第10表　南側石牆地区遺物観察一覧i

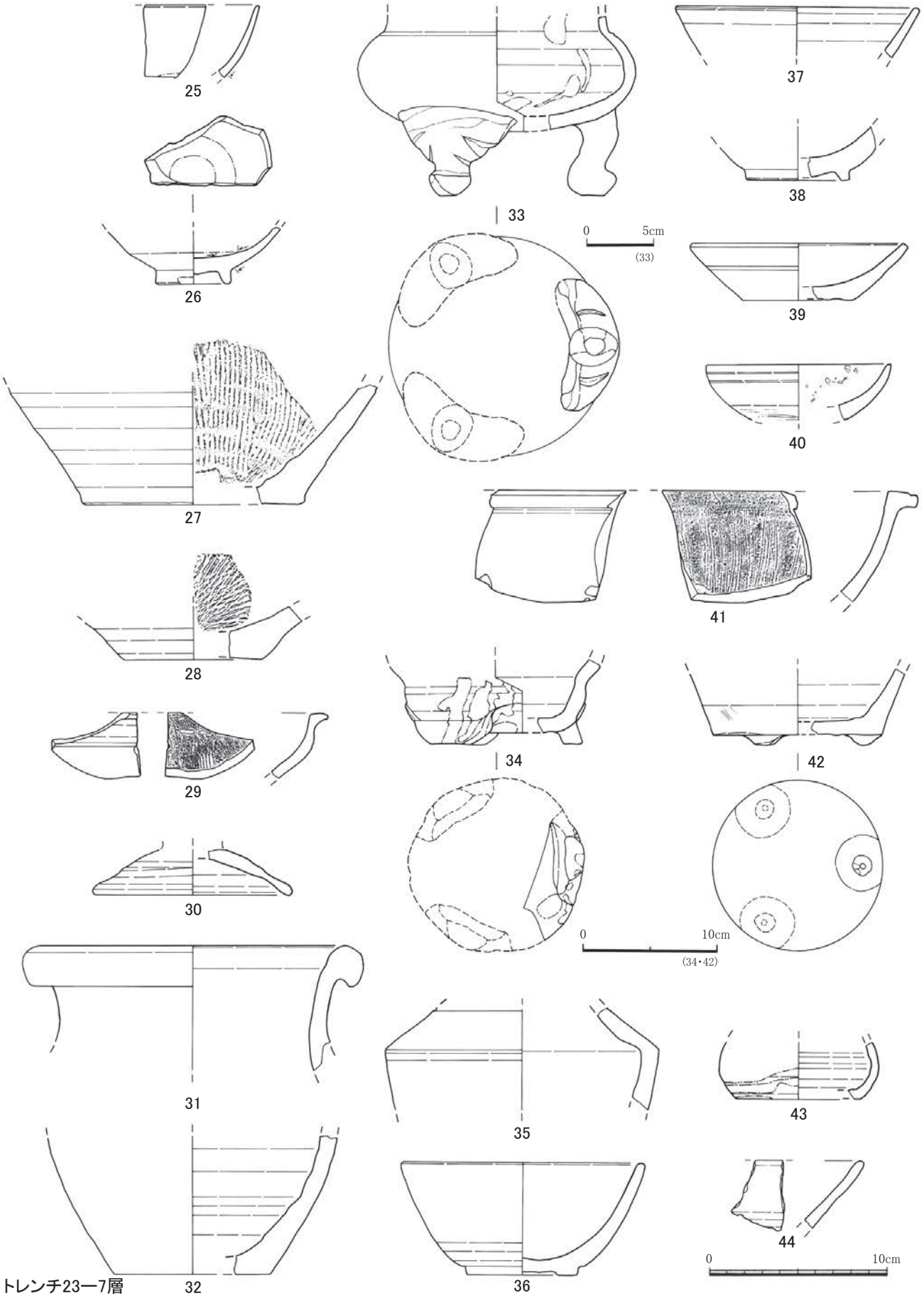
挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項	年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第33図 図版24	160	土器 (パナリ焼)	香炉	口縁部	－	－	－	器表面:明褐色、断面:灰褐色。混入物:貝殻片、千枚岩？、石灰質砂粒。口唇部及び外面は平坦で方形状を呈する。型枠成形によるものと思われる。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	161	煙管	－	雁首	－	－	－	八角形の煙管。黒褐色の泥釉を施釉。素地は暗褐色で、赤色粒、砂粒を含む。火皿は欠損。小口:(外径)1.45cm、(内径)0.9cm。	H24	トレンチ24 10a・10b層
	162	瓦	明朝系 丸瓦	玉縁部	－	－	－	褐色。玉縁裏は2回の面取り。凹面には布糸綴り痕が1条確認できる。玉縁中央部に左上から右下方向への斜め線の3本線のヘラ印あり。角1有り。	H24	トレンチ24 10a・10b層
第33図 図版25	163	中国産染付	蓋	－	9.4	8.2	－	両面に灰白色釉を施釉。上面端部から畳付にかけて露胎。素地は白色で緻密。外面に亀甲繋ぎ文と二重圏線。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 10c層
	164	沖縄産 無釉陶器	火炉	口縁部	－	－	－	器表面は暗褐色の泥釉を施釉。断面は暗赤褐色を呈し、石英、黒色粒、砂粒、ブロック状の赤色土を含む。方形状の横耳が付く。轆轤成形。	H24	トレンチ24 10c層
	165	瓦	明朝系 平瓦	広端部	－	－	－	褐色。凹面の広端側に桶板紐綴り圧痕が1個確認される。角1有り。	H24	トレンチ24 10c層
	166	中国産青磁	小碗	口縁部	8.2	－	－	外面に明オリーブ灰色釉、内面に透明釉を掛け分け。素地は白色で緻密。直口口縁。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 12層
	167	中国産青磁	碗	底部	－	4.8	－	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。外底を蛇の目状に釉剥ぎする。貫入あり。素地は灰白色で細かい。黒色粒を含む。内底に文様あり。龍泉窯。	H24	トレンチ24 12層
	168	中国産染付	碗	口縁部	－	－	－	灰白色釉を両面に施釉。素地は白色で緻密。外面に二重圏線と文様あり。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 12層
	169	中国産染付	碗	底部	－	4.8	－	明緑灰色釉を両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面胴部に文様あり。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 12層
	170	瓦	明朝系 平瓦	広端部	－	－	－	褐色。凹面の広端側に桶板紐綴り圧痕が3個確認される。風化が著しい。	H24	トレンチ24 12層
第34図 図版25	171	初期 沖縄産 無釉陶器	擂鉢	底部	－	11.0	－	褐色の泥釉を両面に施釉。断面は暗褐灰色を呈する。石英を多く含む。白色土が筋状にかなり多くみられる。櫛目8本一組と思われる。轆轤成形。	H24	トレンチ24 15層
	172	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	口縁部	－	－	－	外面はにぶい赤褐色～橙色、内面及び断面は橙色を呈する。石英、赤色粒、砂粒を含む。口縁部下部を肥厚させる。轆轤成形。	H24	トレンチ24 15層
	173	沖縄産 無釉陶器	碗	口縁部	－	－	－	外面及び内面の一部に灰黄褐色の泥釉を施釉か。断面は暗赤褐色を呈する。石英粒を含む。口唇部は尖り気味。轆轤成形。	H24	トレンチ24 15層
第34図	174	中国産 褐釉陶器	瓶	口縁部	5.0	－	－	両面に暗オリーブ色釉を施釉。素地は灰白色で細かい。石英、黒色、白色粒を含む。口縁部は玉縁状を呈する。轆轤成形。	H24	トレンチ24 16層



第23図　南側石牆地区出土遺物1



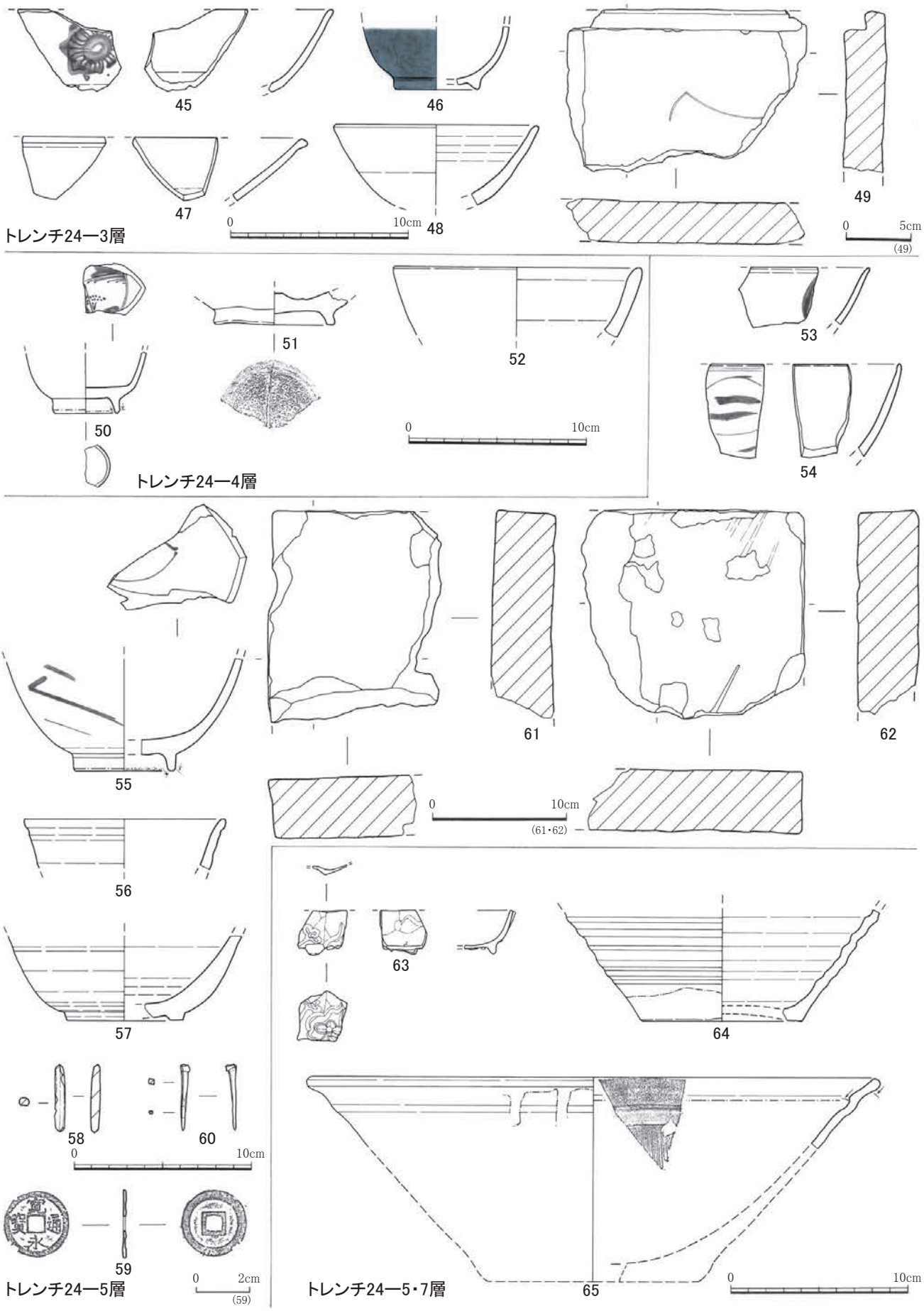
図版 13　南側石牆地区出土遺物1



第24図　南側石牆地区出土遺物2

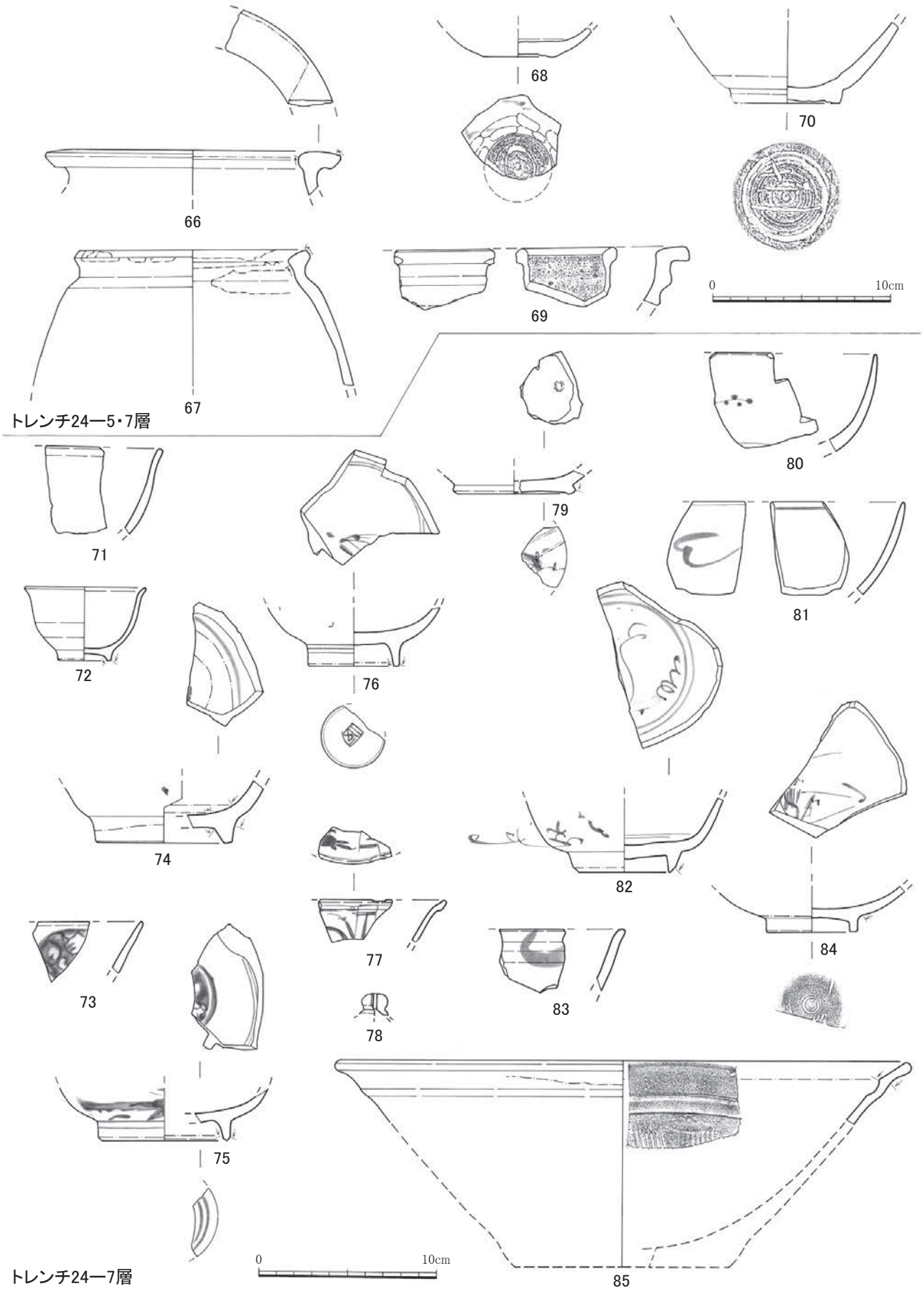
図版 14　南側石牆地区出土遺物2

図版 15　南側石牆地区出土遺物3

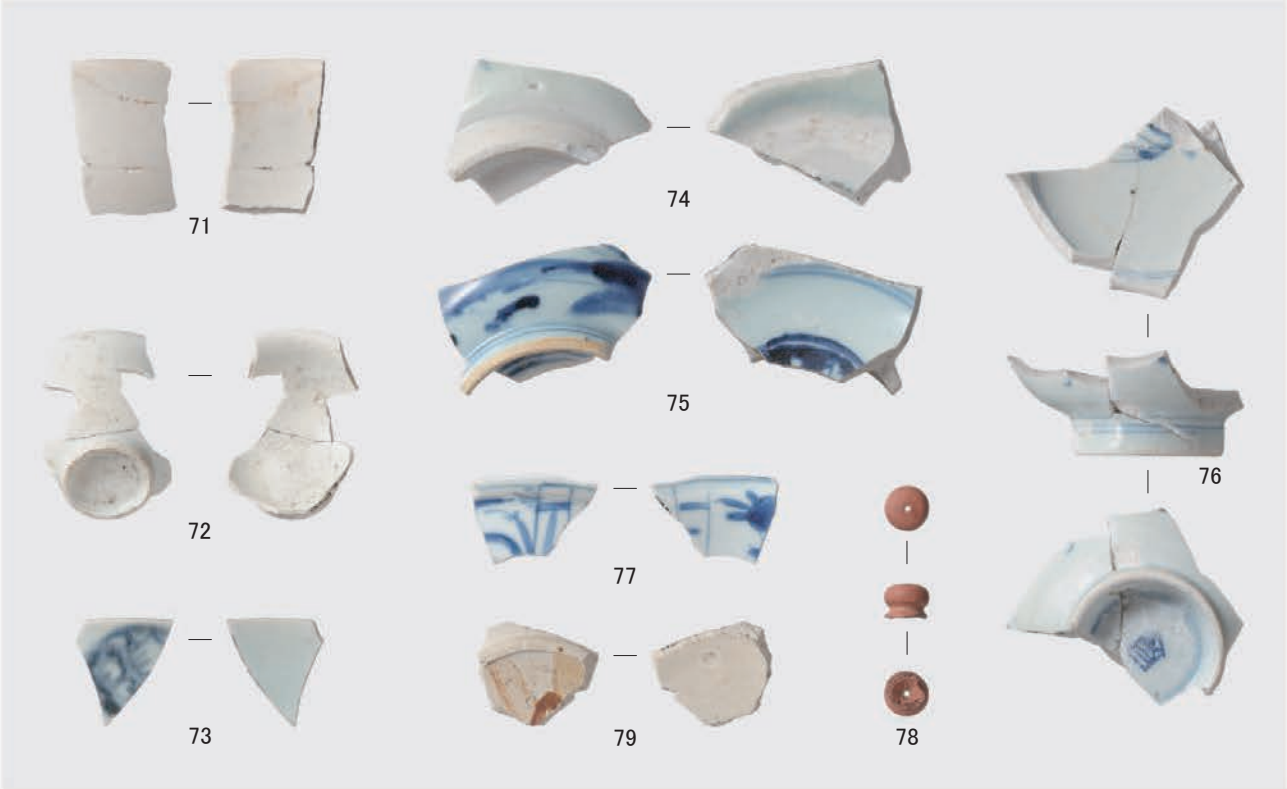


第25図　南側石牆地区出土遺物3

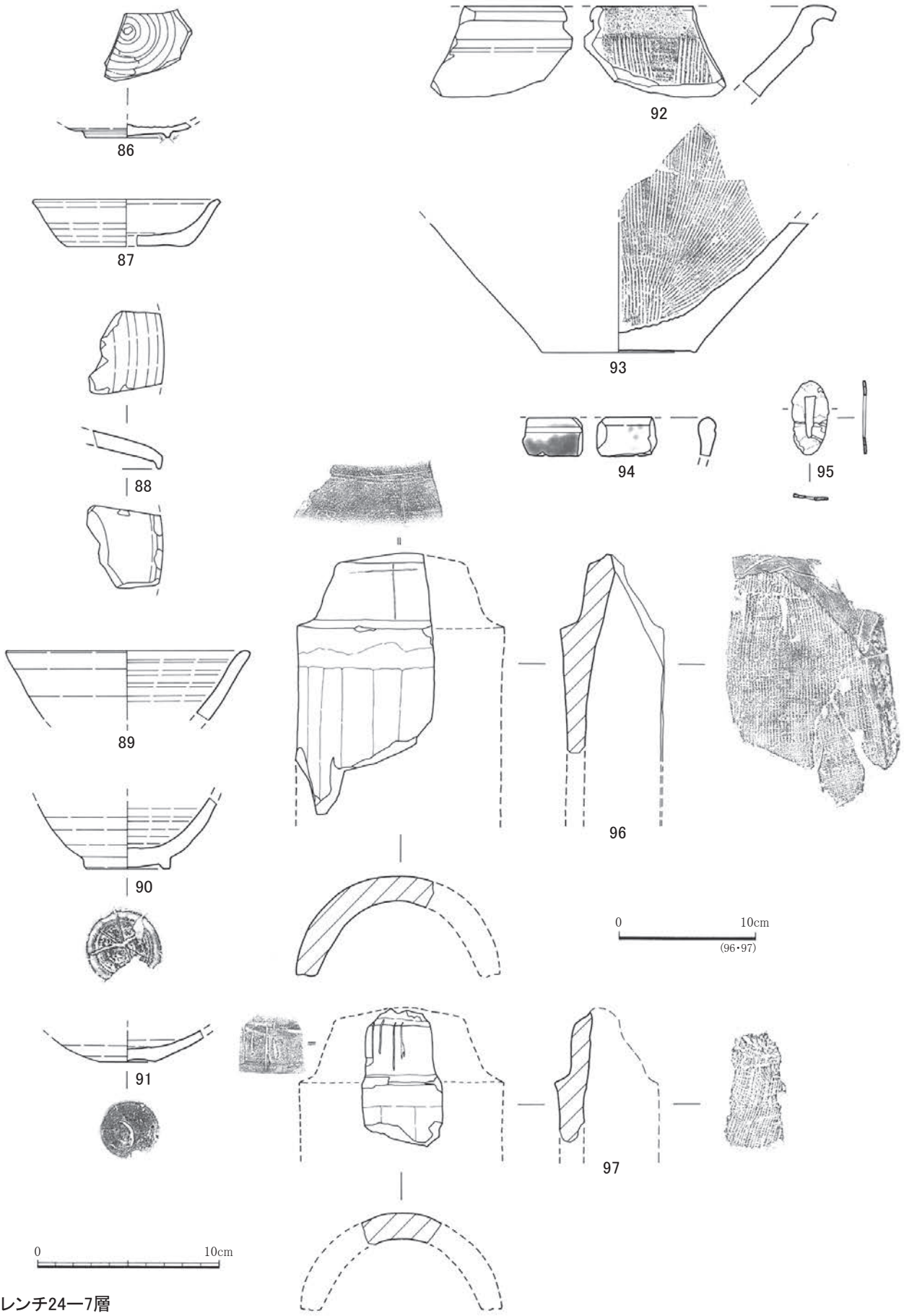
図版 16　南側石牆地区出土遺物4



第26図　南側石牆地区出土遺物4



図版 17　南側石牆地区出土遺物5

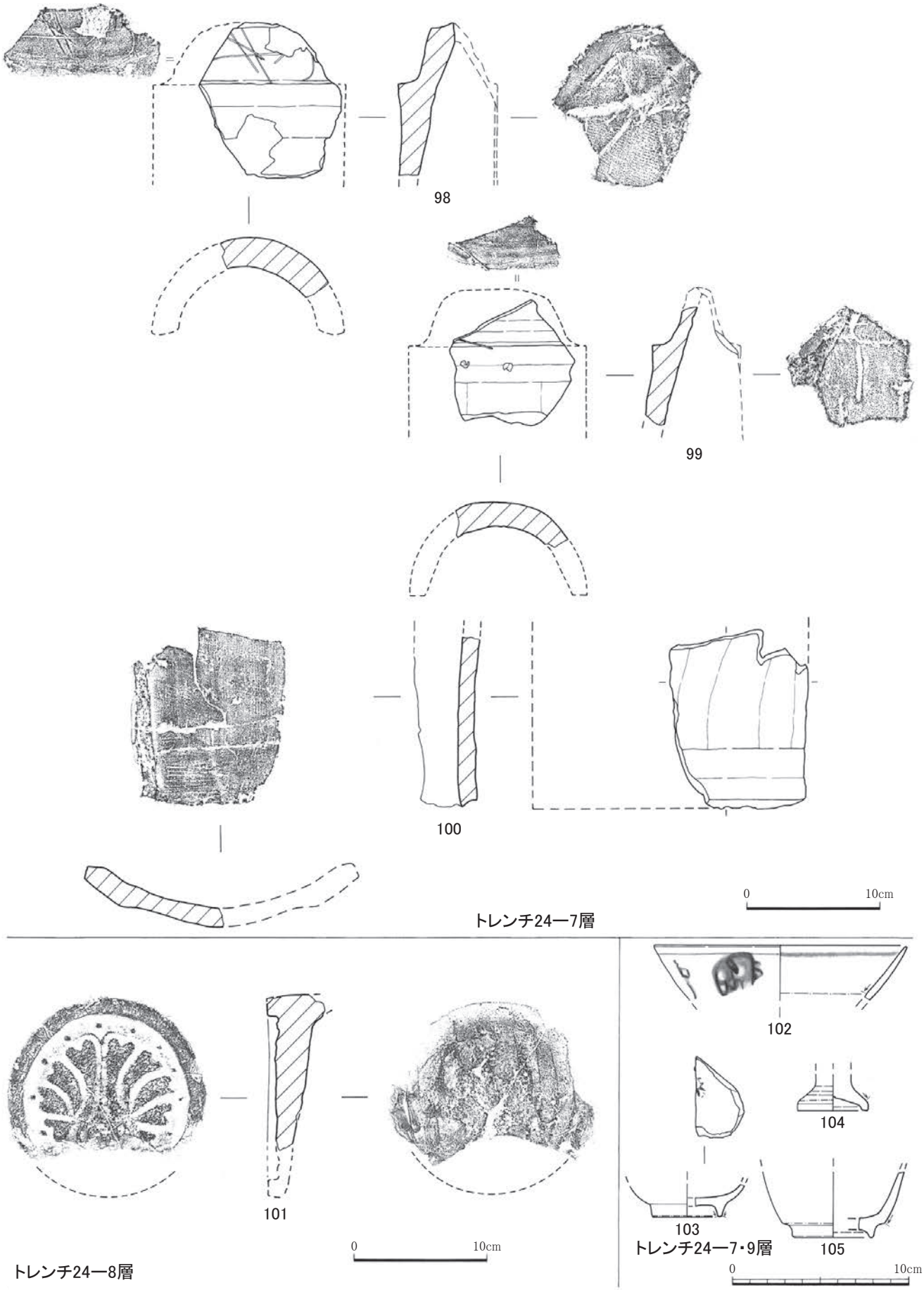


トレンチ24―7層

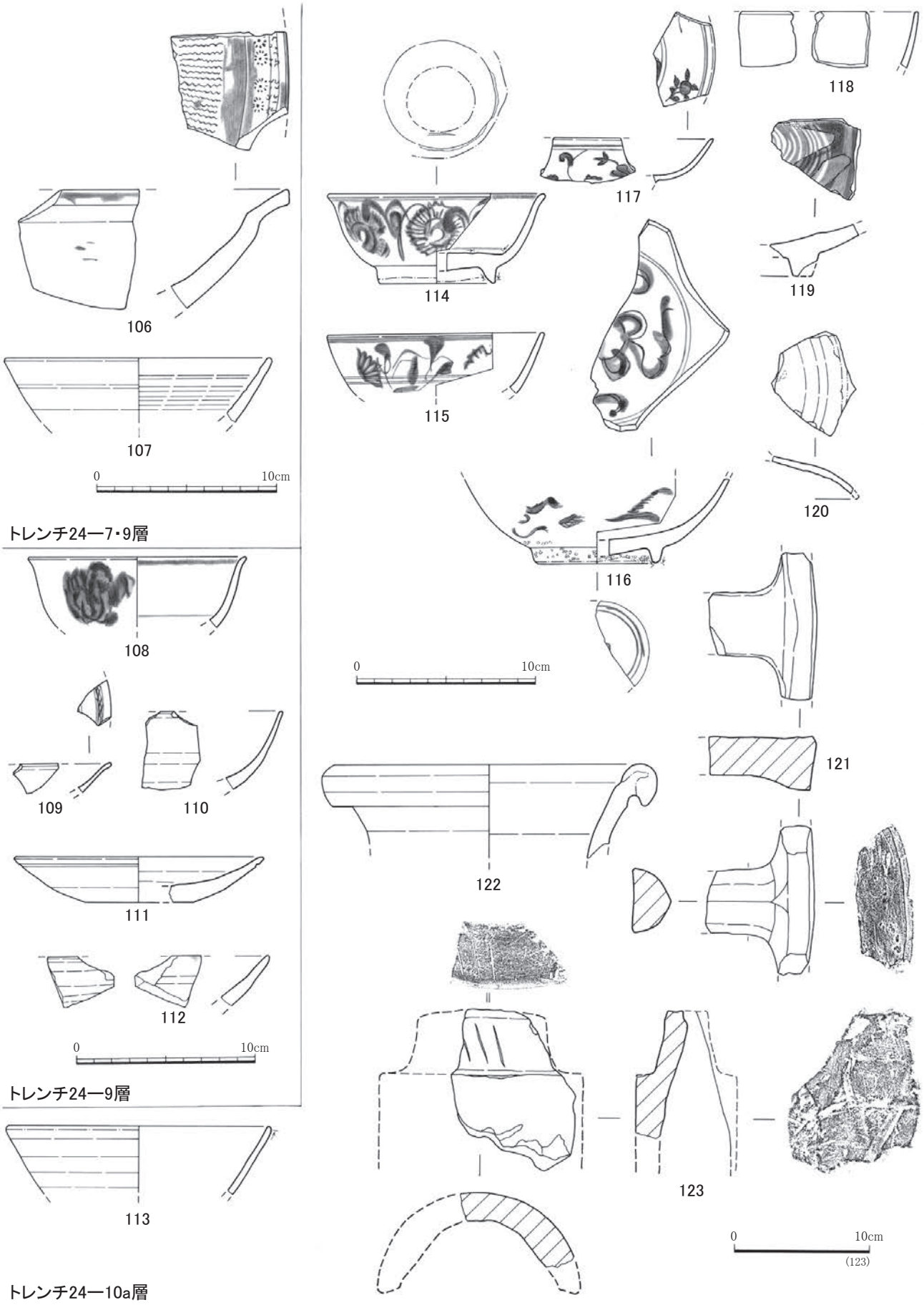
第27図　南側石牆地区出土遺物5

図版 18　南側石牆地区出土遺物6

図版 19　南側石牆地区出土遺物7

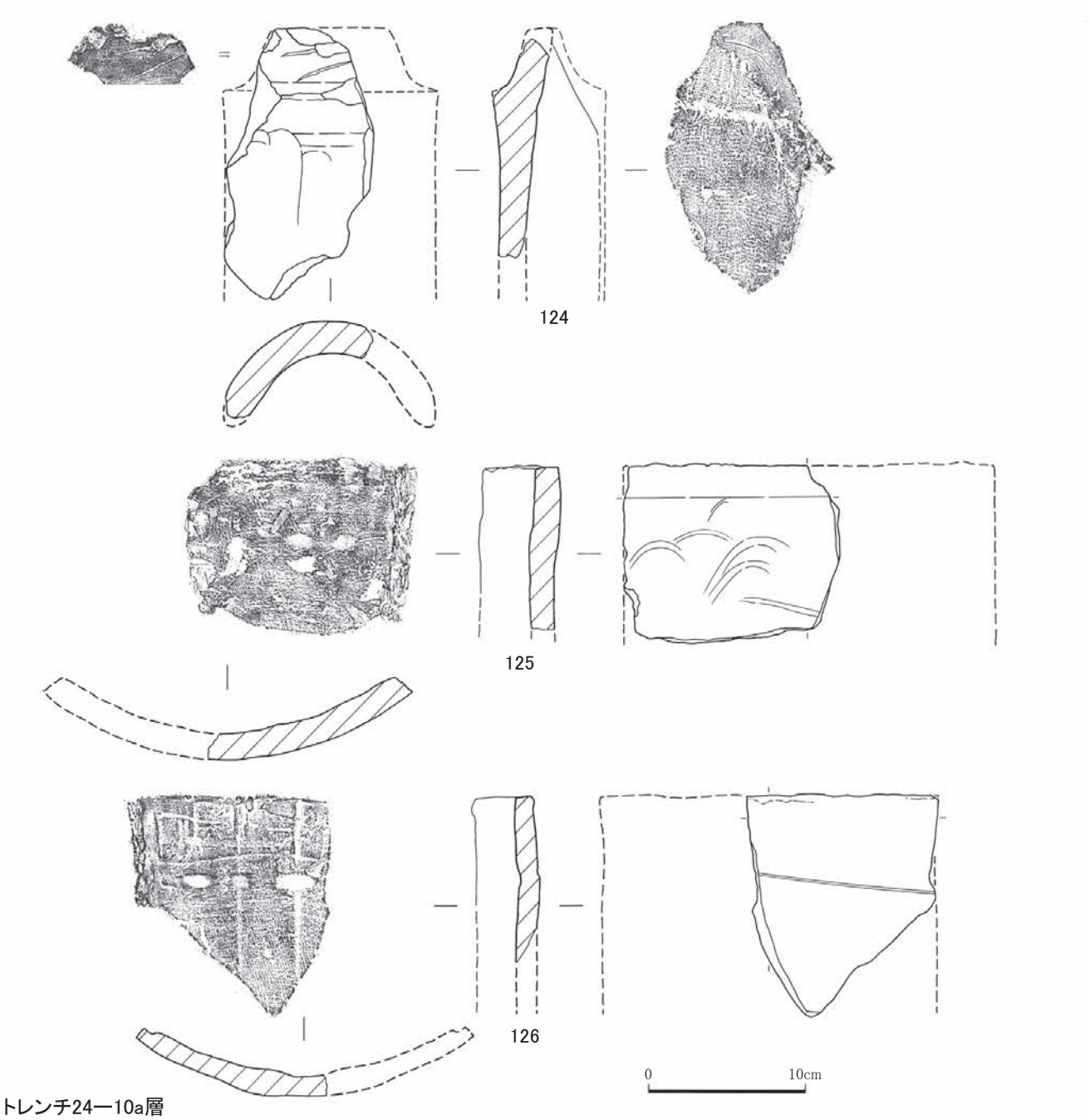


第28図　南側石牆地区出土遺物6

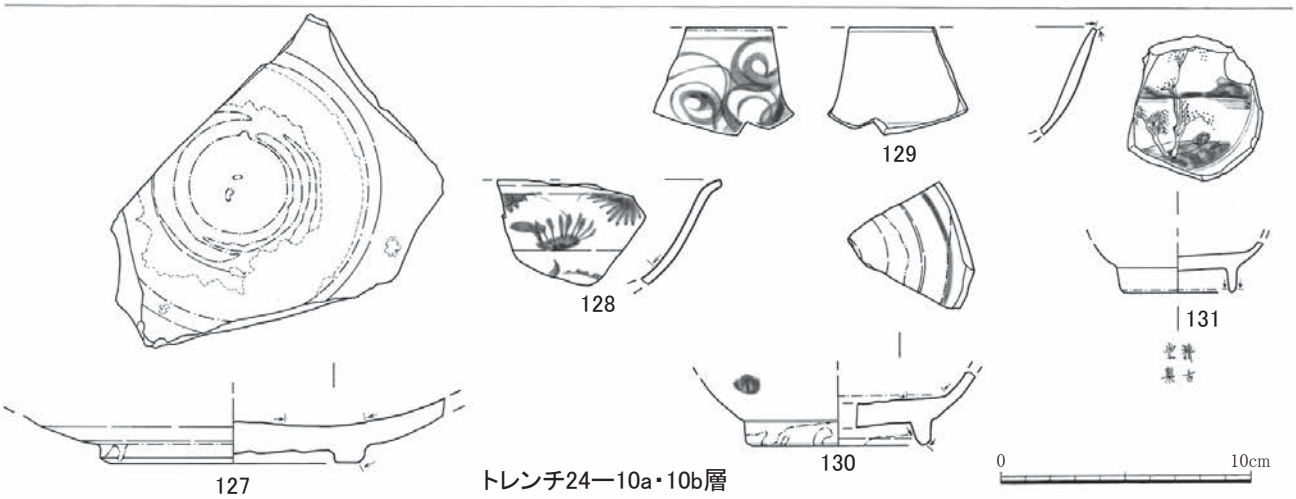


第29図　南側石牆地区出土遺物7

図版 20　南側石牆地区出土遺物8



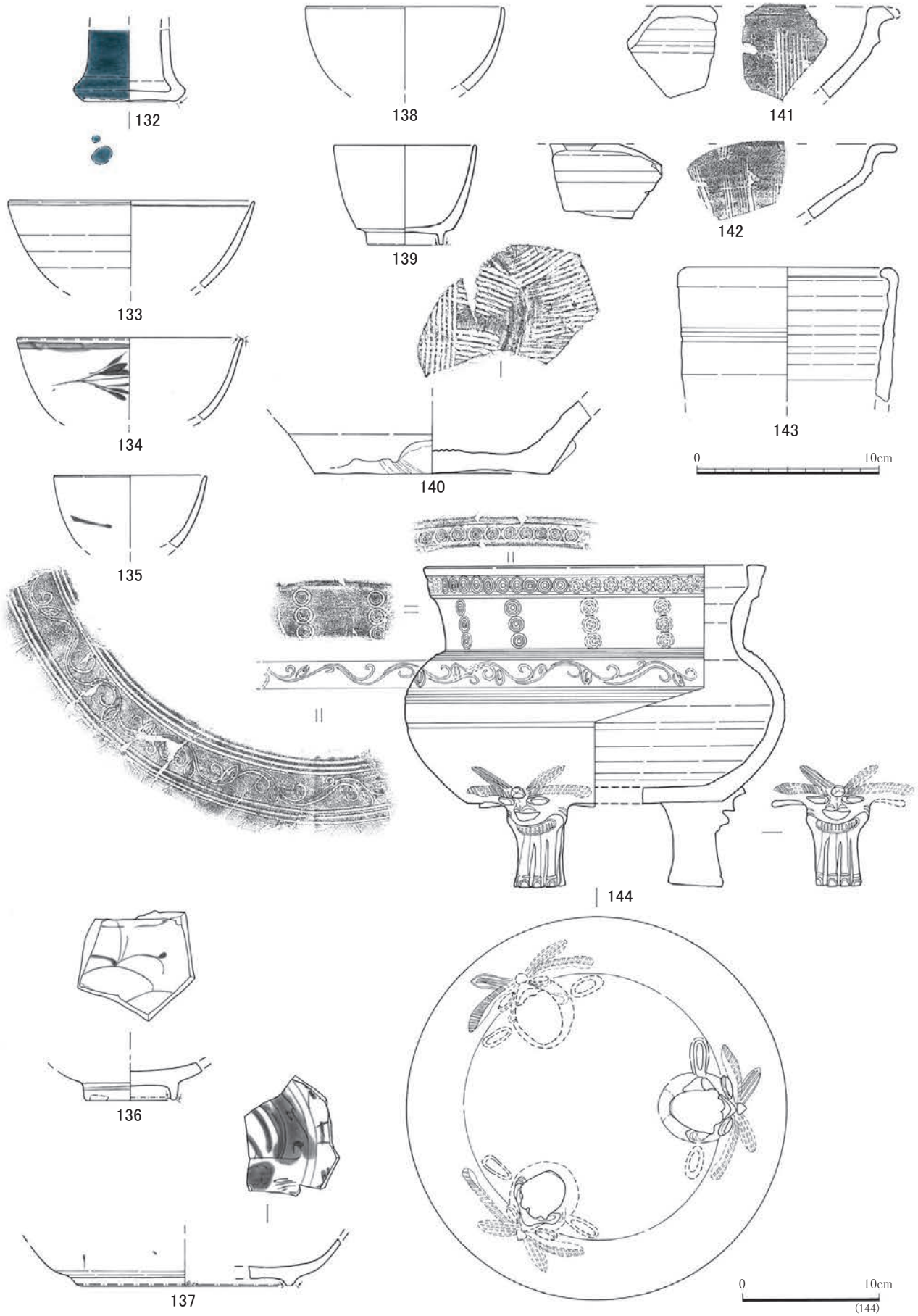
トレンチ24ー10a層



トレンチ24ー10a・10b層

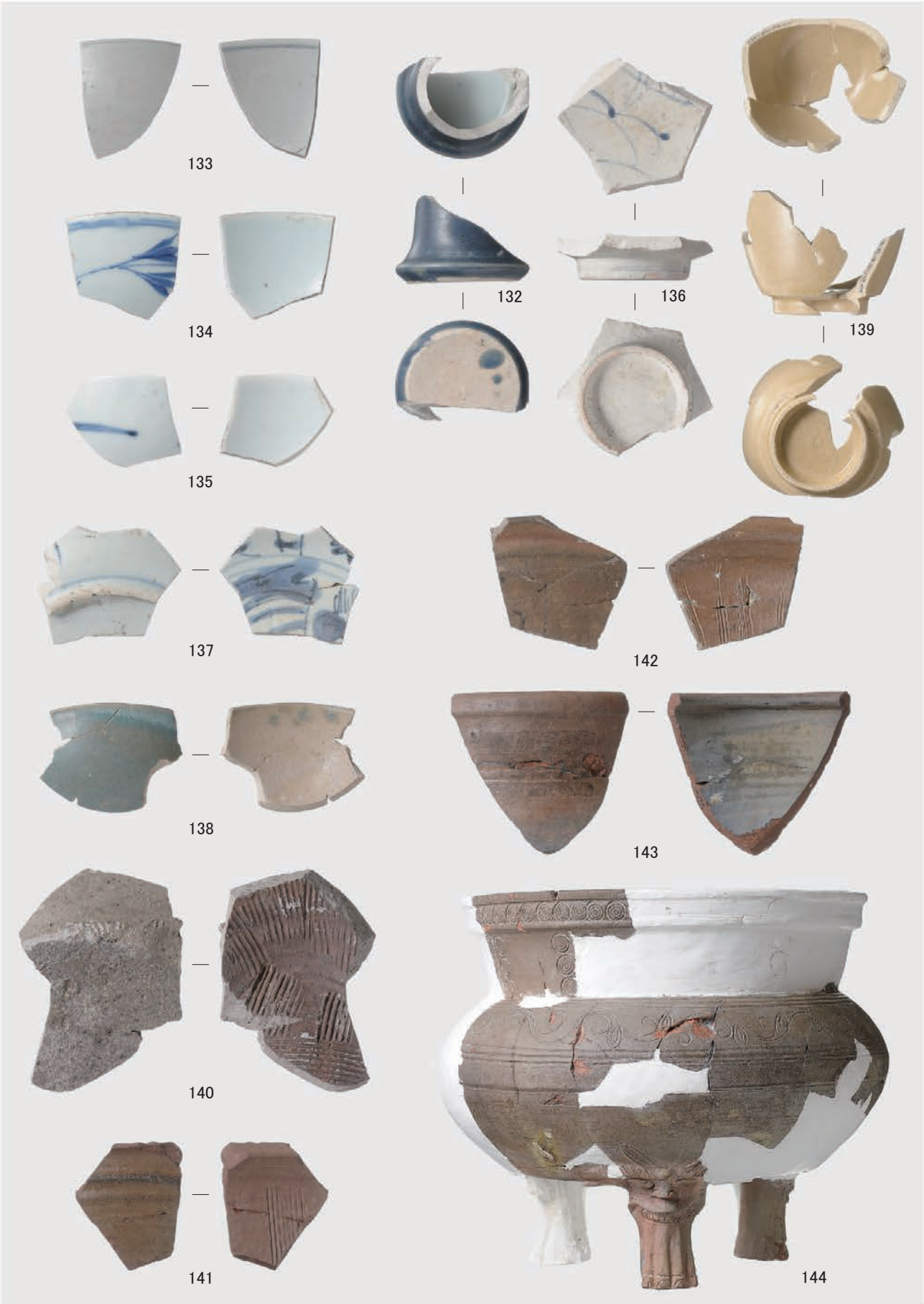
第30図　南側石牆地区出土遺物8

図版 21　南側石牆地区出土遺物9

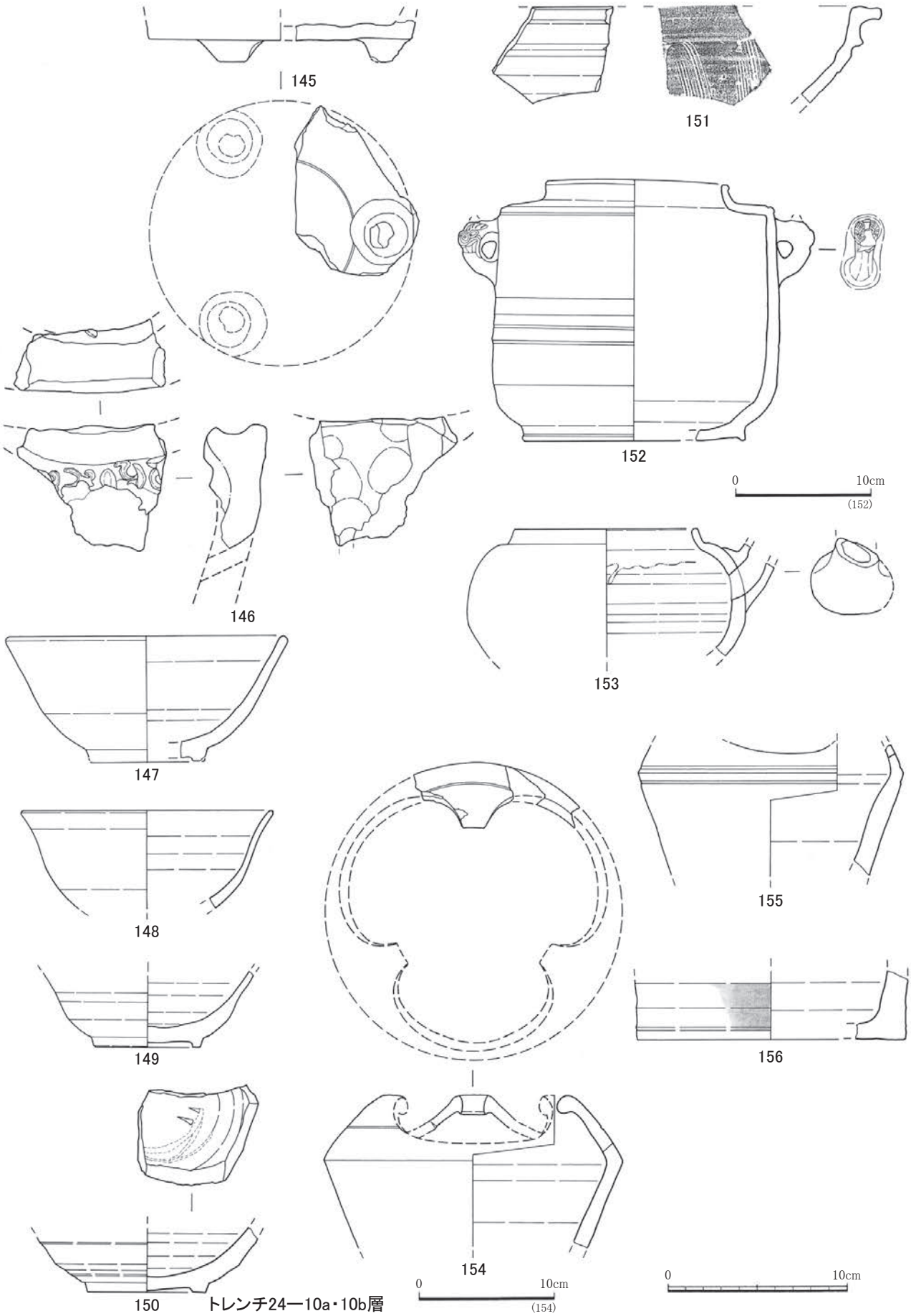


トレンチ24―10a・10b層

第31図　南側石牆地区出土遺物9

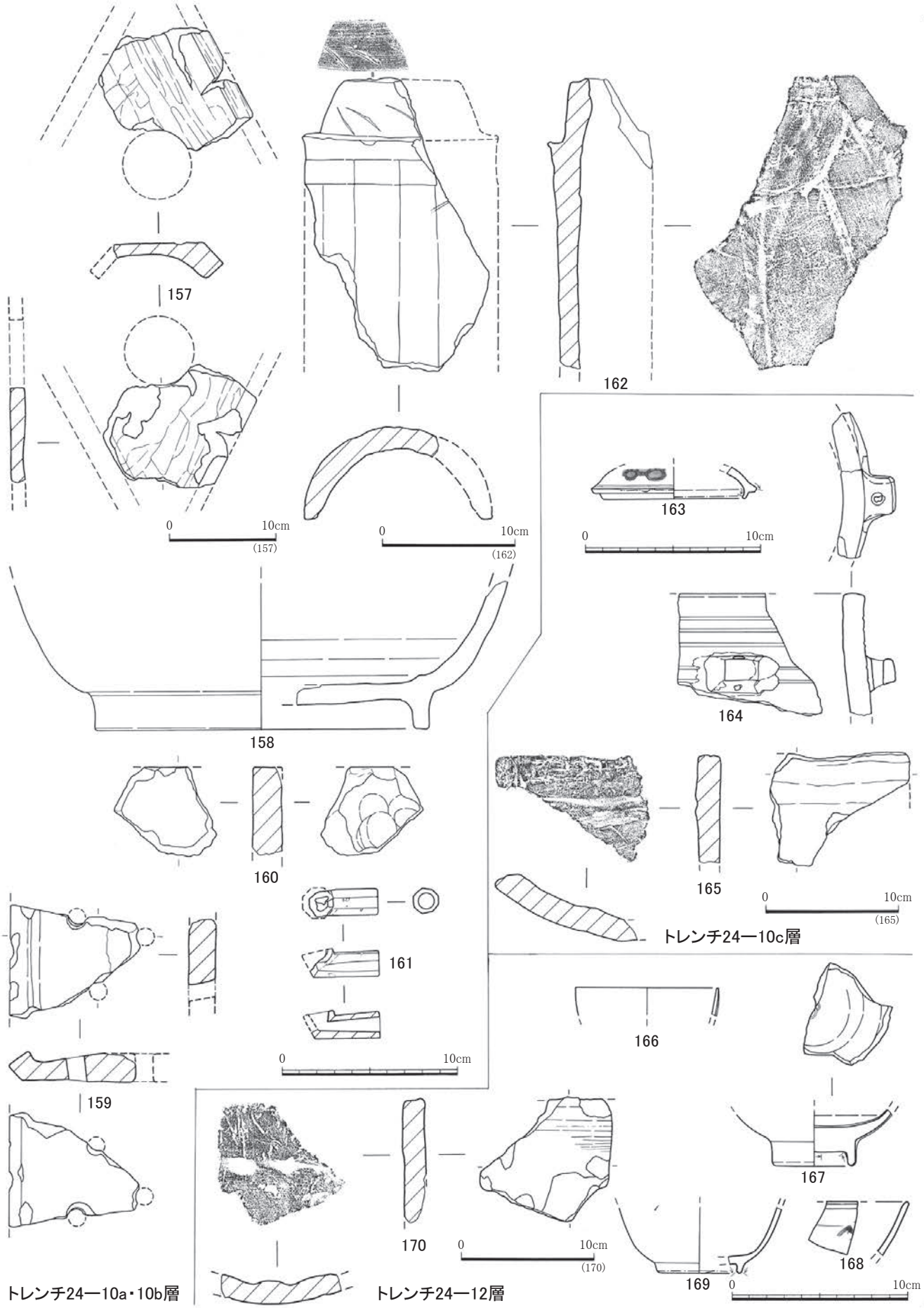


図版 22　南側石牆地区出土遺物 10



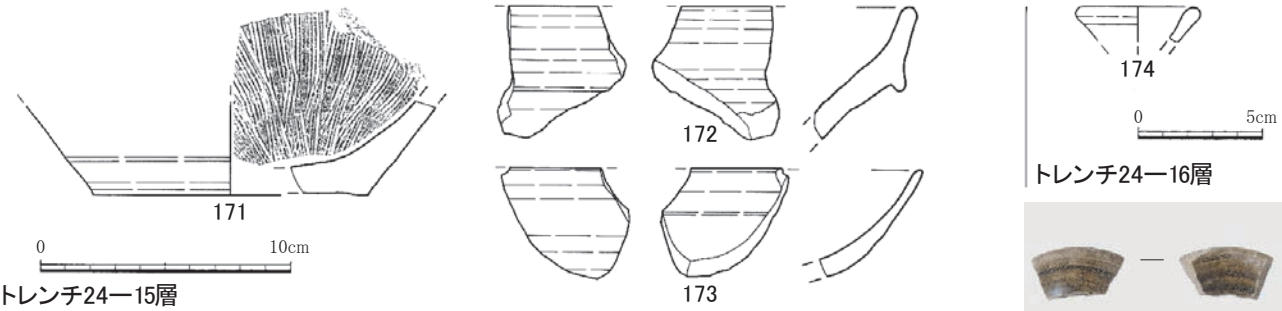
第32図　南側石牆地区出土遺物10

図版 23　南側石牆地区出土遺物 11

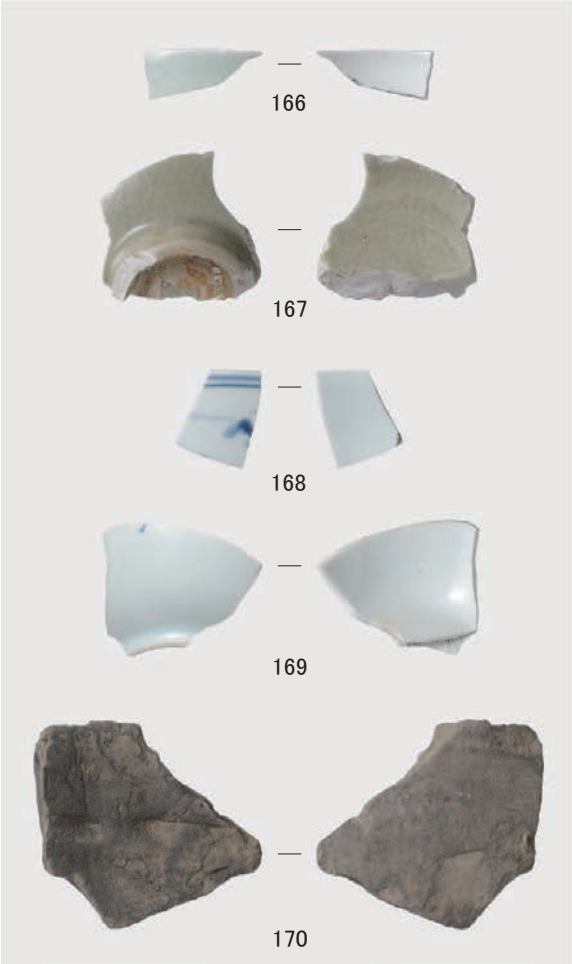


第33図　南側石牆地区出土遺物11

図版 24　南側石牆地区出土遺物 12



第34図　南側石牆地区出土遺物12



図版 25　南側石牆地区出土遺物 13

第３節　表土・撹乱層の遺物

右掖門地区及び南側石牆地区の表土・撹乱層から出土した遺物と共に、三門地区の表土・撹乱層から出土した遺物についてもまとめて報告する。三門地区に関しては、今回の報告の対象ではないが、表土・撹乱層出土遺物に関しては、三地区分をまとめて報告することとした。

本層からは総数 3802 点が出土している。その内訳をみると、瓦、塼、陶磁器類を中心に多種多様な遺物がみられる。ここでは遺物の種類別に報告する。

１. 中国産青磁（１～８）

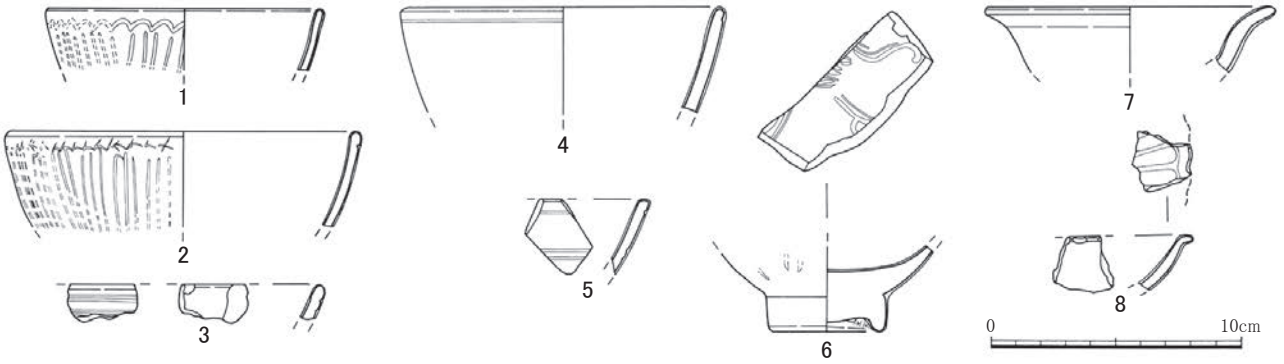
中国産青磁は 84 点が得られている。器種は碗、小碗、皿、盤、壺、瓶、香炉、袋物が確認され、碗や皿が多い。龍泉窯製品が最も多く、その他に景徳鎮窯製品が僅かに見られる。個別の遺物についての詳細は、観察表に記載する。

第11表　中国産青磁出土状況

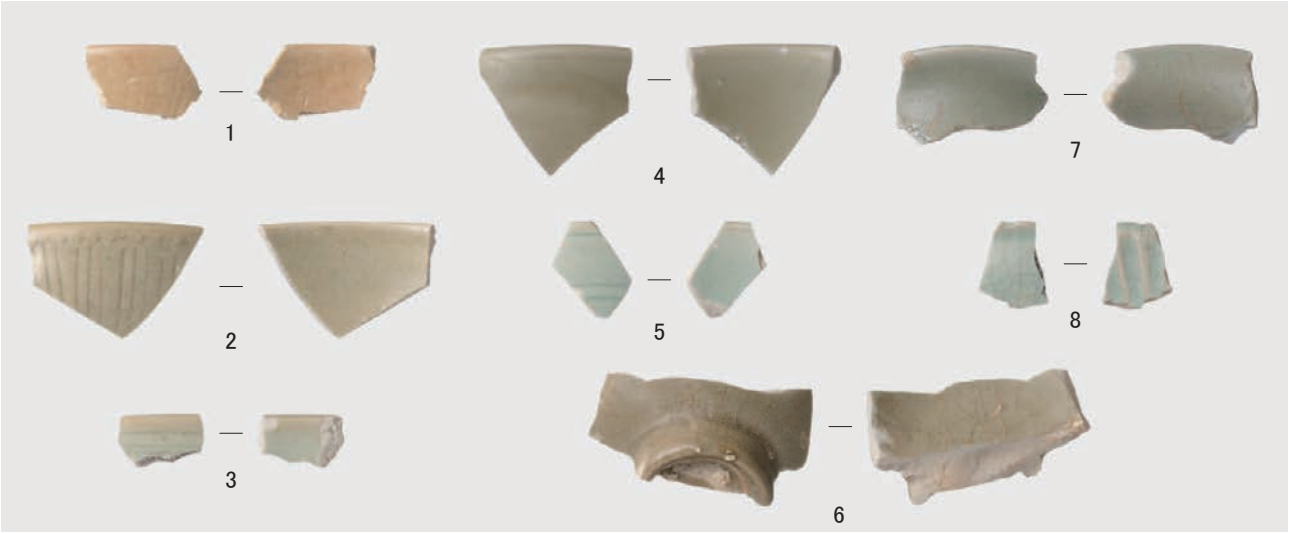
碗			小碗	皿			盤	瓶		壺		酒会壺	袋物	香炉	器種不明	合計
口縁部	胴部	底部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	口縁部	胴部	胴部	底部	胴部	胴部	胴部	胴部	
22	33	3	1	3	1	2	2	1	2	3	2	1	3	1	4	84

第12表　中国産青磁観察一覧

挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第35図 図版26	1	碗	口縁部	11.1	－	－	にぶい黄色味を帯びた釉を両面に施釉。両面に細かい貫入。	白色で粗い。微細な黒色粒を少量含む。	外面に細蓮弁文。轆轤成形。龍泉窯産で15c後半～16c前半。	H19	トレンチ4 撹乱
	2	碗	口縁部	14.2	－	－	灰オリーブ色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。	外面に細蓮弁文。轆轤成形。龍泉窯産で15c後半～16c前半。	H19	撹乱
	3	碗	口縁部	－	－	－	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。両面に粗い貫入。	灰白色でやや細かい。	外面に陰圏線、内面に気泡が見られる。龍泉窯産で15c後半～16c前半？。	H19	トレンチ2 撹乱
	4	碗	口縁部	13.0	－	－	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。黒色粒、白色粒を含む。	無文。轆轤成形。龍泉窯産で15c後半～16c前半。	H19	東西トレンチ 撹乱
	5	碗	口縁部	－	－	－	明オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。黒色粒、白色粒を含む。	口縁部上部に一条、胴部に二条の沈線。轆轤成形。龍泉窯産。	H19	トレンチ4 撹乱
	6	碗	底部	－	4.6	－	灰オリーブ色の釉を両面に施釉。前面に荒い貫入。	灰白色で粗い。白色粒を少量、黒色粒をやや含む。	外面に細蓮弁文。内面に牡丹唐草文。龍泉窯産。	H19	撹乱
	7	皿	口縁部	11.6	－	－	オリーブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。白色粒と黒色粒をやや含む。	無文。轆轤成形。龍泉窯産で14c中～後半。	H19	三門 トレンチ21 撹乱
	8	皿	口縁部	－	－	－	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。両面に粗い貫入。	灰白色で細かい。白色粒を極少量、黒色粒を少量含む。	外面は無文、内面にヘラ彫りで蓮弁文。轆轤成形。龍泉窯産。	H19	石敷 南側拡張部 撹乱



第35図　中国産青磁



図版 26　中国産青磁

２.中国産白磁（9～21）

表土・撹乱層出土の中国産白磁の総数は 78 点出土しており、碗、小碗、皿、杯、小杯、瓶、蓋、蓮華が確認されている。年代は 16 世紀～19 世紀で、16 世紀～17 世紀の資料が多い。以下、個々の所見は遺物観察表でまとめる。

①碗（9～13）

図化したものは全て口縁部のみで外反と直口に大別できる。景徳鎮窯と福建・広東系があり、16 世紀である。景徳鎮窯産（9・10・12・13）は成形が丁寧であるが、福建・広東系（11）は粗製の碗である。

②小碗（19）

清代の徳化窯産であり、薄手で型成形である。

③皿（14～18）

景徳鎮窯産（14）は 16 世紀の端反口縁皿である。福建・広東系は粗製の皿で、16・17 は灯明皿、15・18 は抉り高台である。

④小杯（20・21）

景徳鎮窯産で近世の資料である。20 は薄手で、21 は比較的厚手である。

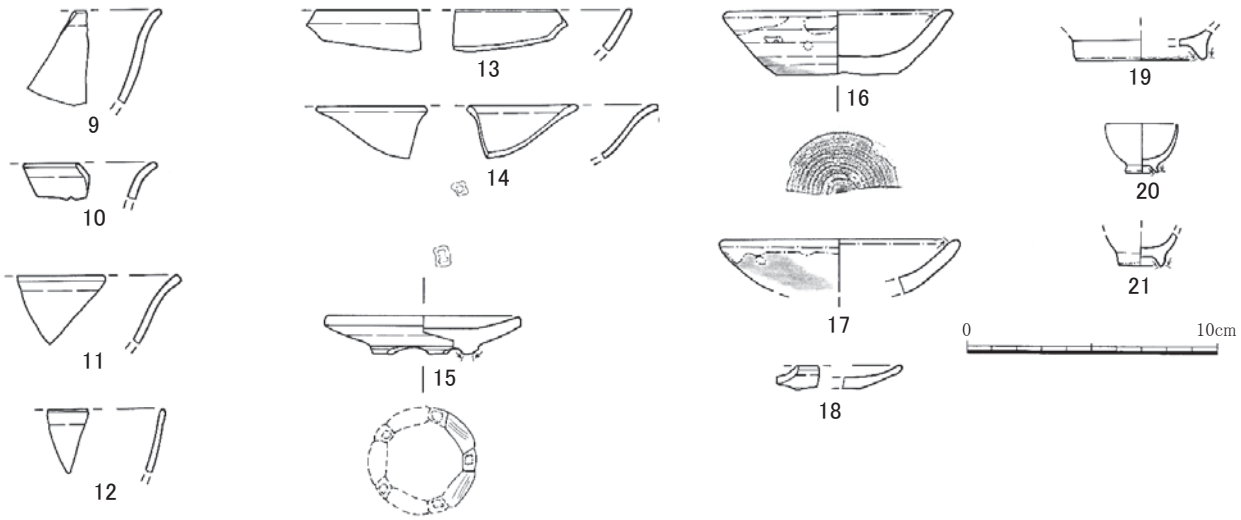
第13表　中国産白磁出土状況

碗			小碗		皿				杯	小杯			瓶	蓋	蓮華	灯明皿	
口～底部	口縁部	胴部	口縁部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口～底部	口縁部	底部	胴部			口～底部	口縁部
1	18	16	1	1	2	7	1	6	4	1	4	1	1	1	1	3	1

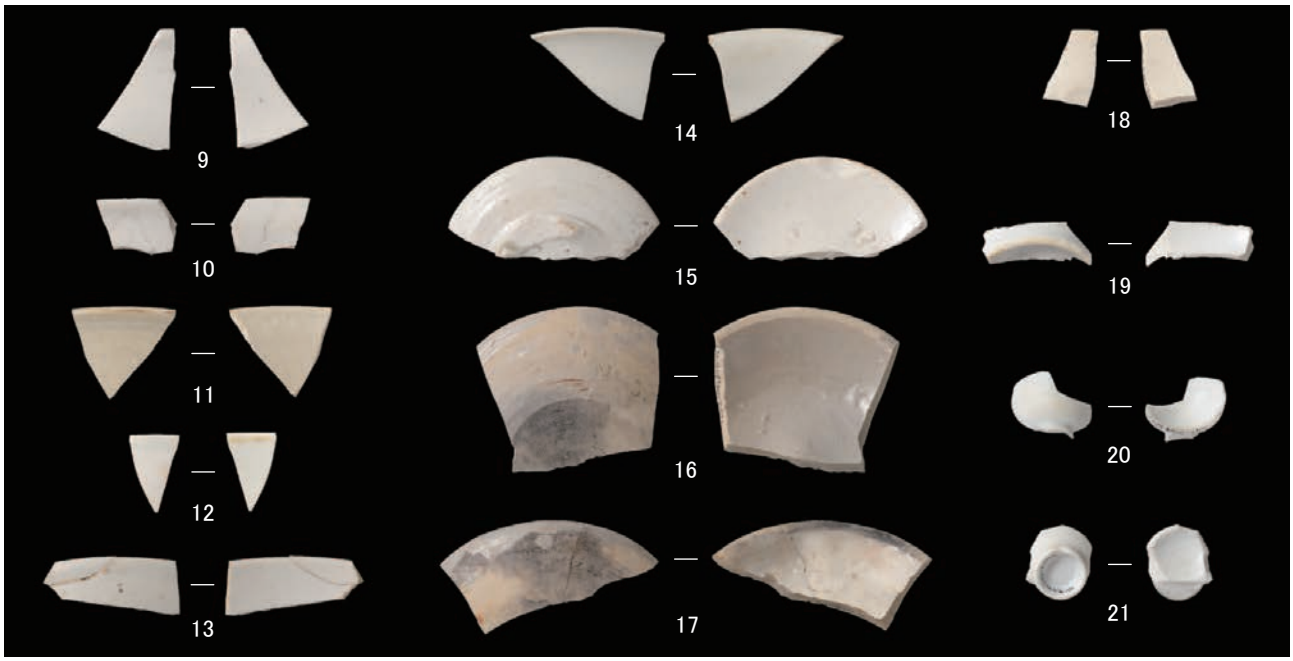
器種不明			合計
口縁部	胴部	底部	
1	6	1	78

第14表　中国産白磁観察一覧

挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第36図 図版27	9	碗	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密、黒色粒を含む。	無文で轆轤成形。口唇がやや尖る外反。景徳鎮窯で16c。	H19	トレンチ4 撹乱
	10	碗	口縁部	－	－	－	口唇断面が丸い外反。灰白色釉を両面に施釉。粗い貫入あり。	灰白色で緻密。	無文で轆轤成形。口唇断面が丸い外反。景徳鎮窯で16c。	H19	東西トレンチ 撹乱
	11	碗	口縁部	－	－	－	灰白色釉を両面に施釉し口唇の外面を釉剥ぎ。両面に細かい貫入あり。	灰白色で細かい。	轆轤成形で口縁に細い隆起線を一条廻らす。口唇がやや厚く外反。福建・広東系で16c。	H19	トレンチ4 撹乱
	12	碗	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密、黒色粒を含む。	無文で轆轤成形。直口の碗で口縁下部を浅くくぼませる。景徳鎮窯で16c。	H19	トレンチ2 撹乱
	13	碗	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色でガラス質で緻密。	無文で轆轤成形。直口の碗で口縁下部を浅くくぼませる。景徳鎮窯で16c。	H21	三門北 撹乱
	14	皿	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密、黒色粒を含む。	無文で轆轤成形。端反口縁皿。景徳鎮窯で16c。	H21	南側石牆 トレンチ1 撹乱
	15	皿	口～ 底部	7.8	4.0	1.5	光沢のある透明釉を内面から畳付まで施釉。貫入なし。	灰白色で細かい。黒色粒を含む。	無文で轆轤成形。直口。抉り高台で目跡が2箇所残る。内底にも目跡の溶着跡あり。福建産で16c。	H19	トレンチ9 撹乱
	16	皿	口～ 底部	9.2	4.8	2.5	灰色釉を内面にのみ施釉後、口唇部を釉剥ぎ。外面に所々はねた釉薬が残る。全体に細かい貫入あり。	灰色で緻密。黒色粒を含む。	無文で轆轤成形。直口で粗製の皿。外底に煤付着。灯明皿。福建産で16c後。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱
	17	皿	口縁部	9.6	－	－	灰色釉を内面にのみ施釉後、口唇部を釉剥ぎ。外面に所々はねた釉薬が残る。微細な貫入あり。	灰色で緻密。	無文で轆轤成形。直口の粗製の皿。外面に煤付着。灯明皿。福建産で16c後。	H19	東西トレンチ 撹乱
	18	皿	口～ 底部	－	－	－	光沢のある透明釉を両面に施釉。貫入なし。	灰白色で細かい。	無文で轆轤成形。直口。抉り高台か。福建産で16c。	H19	トレンチ5 撹乱
	19	小碗	底部	－	5.2	－	光沢のある透明釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。貫入なし。	白色で緻密。	型成形。畳付に砂付着。徳化窯で18～19c前。	H19	トレンチ4 撹乱
	20	小杯	口～ 底部	2.85	1.3	1.95	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密。	無文で型成形か。景徳鎮窯で近世。	H22	南側石牆 トレンチ22 撹乱
	21	小杯	底部	－	1.8	－	透明釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。粗い貫入あり。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景徳鎮窯で近世。	H22	南側石牆 トレンチ23 撹乱



第36図　中国産白磁



図版 27　中国産白磁

３.中国産染付・青磁染付（22～48）

表土・撹乱層出土の中国産染付の総数は 264 点、青磁染付は２点出土しており、碗、小碗、皿、小皿、杯、小杯、瓶、壺、鉢、香炉がある。年代は 16 世紀～19 世紀で、17 世紀後半～18 世紀前半のものが多い。以下、個々の所見は遺物観察表でまとめる。

①碗（22～32）

景徳鎮窯、福建・広東系、徳化窯がある。景徳鎮窯産で 28 は口縁が直口するタイプ、30 は外反するタイプと思われる。福建・広東系の 23・24 はコンニャク印判で施文したものである。

②小碗（37～40、47・48）

景徳鎮窯、徳化窯があり景徳鎮窯産の 47・48 は外面に青磁釉が施釉されている。景徳鎮窯産で外反するもの（37・39）は薄手で外反の角度がきつめである。

③皿（33～36）

景徳鎮窯、徳化窯、漳州窯、福建産がある。漳州窯産は白化粧が比較的厚い。

④小杯（41～43）

景徳鎮窯で 42 は碁笥底になる可能性がある。

⑤盤（44）

内底に草花文が描かれており、元代の末から明代初頭にかけての資料と思われる。

⑥瓶（45）

景徳鎮窯で底部近くの外面に渦文を施文する。中城御殿跡に出土例がある。

⑦香炉（46）

景徳鎮窯で内面に煤が残る。

第15表　中国産染付・青磁染付出土状況

染付																			
碗			小碗			皿				小皿	盤		杯	小杯		鉢	瓶		壺
口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	胴部	胴部	底部	口縁部	口縁部	底部	胴部	胴部	底部	底部
46	57	29	15	5	6	1	8	13	11	1	1	1	2	7	2	1	7	1	1

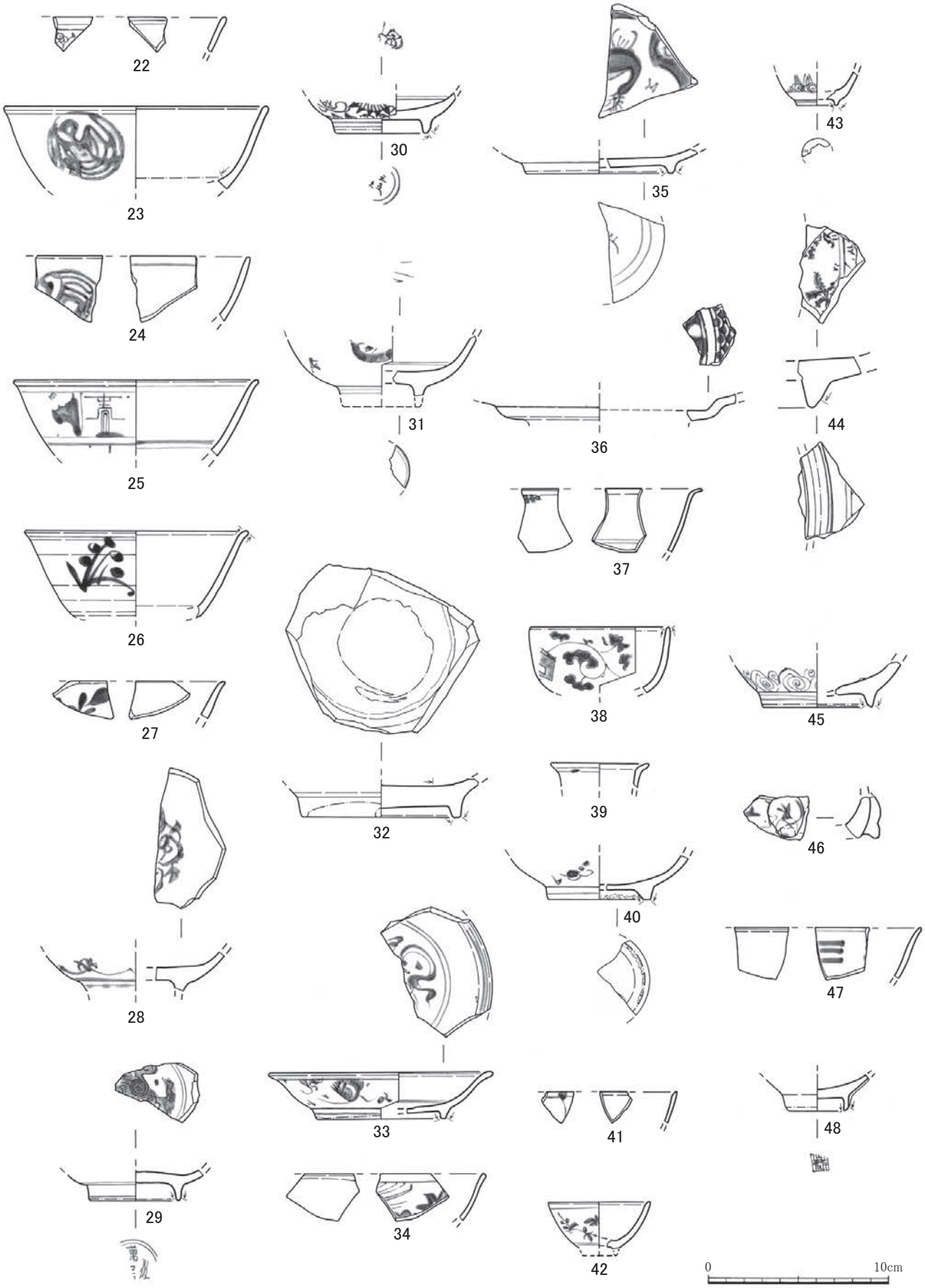
染付				青磁染付		合計
袋物	香炉	器種不明		小碗		
胴部	底部	口縁部	胴部	口縁部	底部	
1	1	5	42	1	1	266

第16表　中国産染付・青磁染付観察一覧a

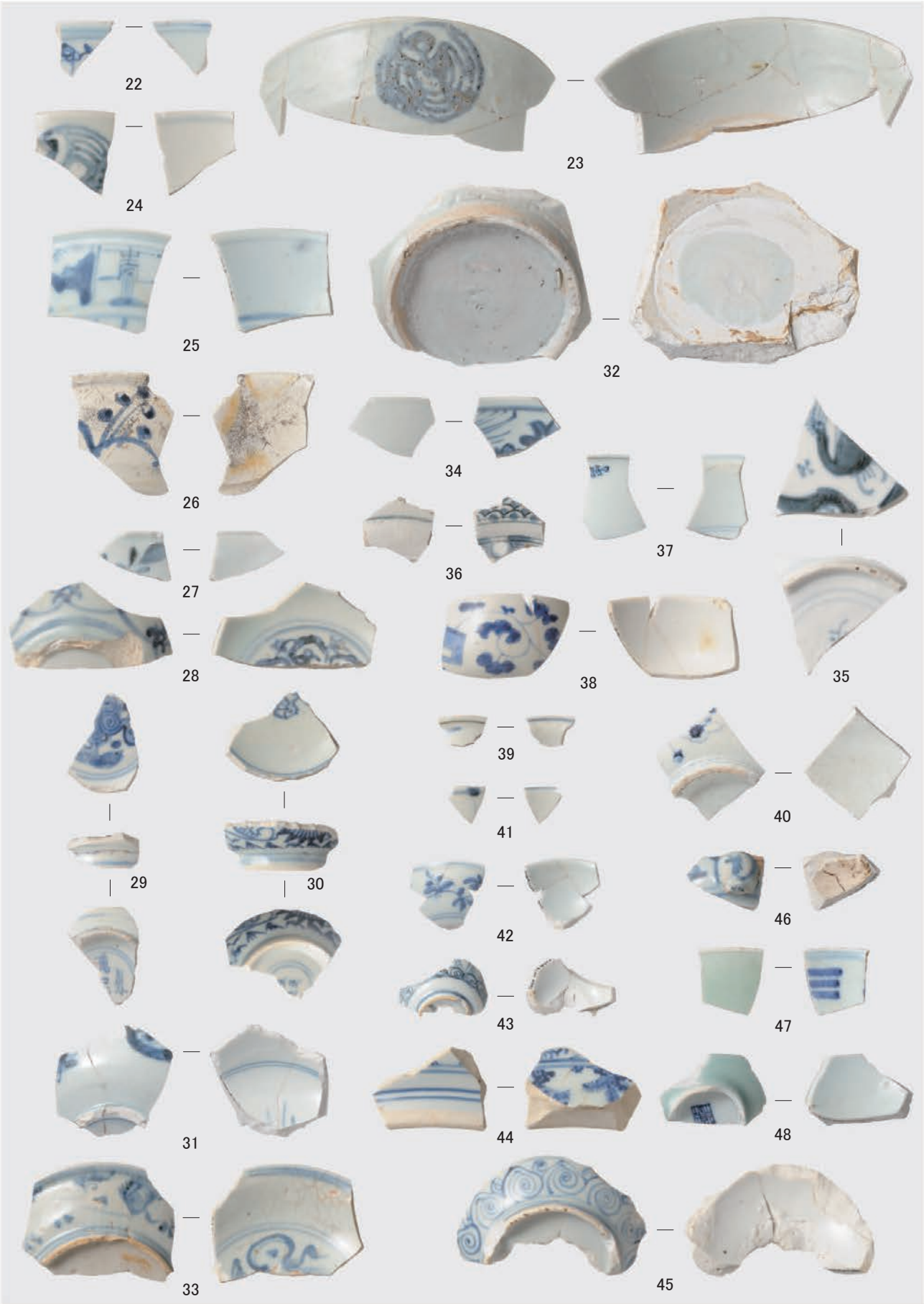
挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第37図 図版28	22	染付	碗	口縁部	－	－	－	両面に透明釉を施釉。貫入なし。	白色で緻密。	外面に花唐草文か。轆轤成形。口縁外面の釉が厚い。景徳鎮窯。	H19	東西トレンチ 撹乱
	23	染付	碗	口縁部	14.6	－	－	明緑灰色釉を両面に施釉。釉垂れ顕著。貫入なし。	灰白色で細かい。	外面にスタンプによる鳳凰文か。轆轤成形。福建・広東系で17c後～18c前。	H22	トレンチ24 撹乱
	24	染付	碗	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	灰白色で細かい。	外面にスタンプによる鳳凰文か。轆轤成形。福建・広東系で17c後～18c前。	H19	石敷 南側拡張部 撹乱
	25	染付	碗	口縁部	13.6	－	－	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密。	外面に梅花文に寿字文。型成形。徳化窯で18c。	H24	トレンチ24 表採
	26	染付	碗	口縁部	12.4	－	－	両面に透明釉を施釉。細かい貫入が部分的にある。	淡黄白色で粗い。黒色粒を含む。	外面に草花文。轆轤成形。福建・広東系で17c後～18c前。	H24	トレンチ24 撹乱
	27	染付	碗	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	灰白色で細かい。	外面に草花文。外反の口唇は尖る。轆轤成形。徳化窯で18c。	H24	トレンチ24 撹乱
	28	染付	碗	底部	－	－	－	明緑灰色釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密。	外面にアラベスク文、内底に渦花文。轆轤成形。景徳鎮窯で15c末～16c中葉。	H21	三門北 表採
	29	染付	碗	底部	－	5.0	－	透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。貫入なし。	白色で緻密。	外底に「萬○」の銘あり。内底に玉取獅子文。轆轤成形。景徳鎮窯。	H20	三門 トレンチ8 撹乱
	30	染付	碗	底部	－	5.3	－	透明釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。貫入なし。	白色で緻密。	外面に花唐草文、内底に草花文、外底に銘あり。轆轤成形。景徳鎮窯で17c前半。	H20	三門北 撹乱
	31	染付	碗	底部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密。	外面に丸文、内底に草花文か。轆轤成形。福建産。	H24	トレンチ24 撹乱
	32	染付	碗	底部	－	8.8	－	明緑灰色釉を両面に施釉後、内底を蛇の目釉剥ぎ。貫入なし。	灰白色で細かい。	轆轤成形。福建・広東系で17c後～18c前。	H24	トレンチ24 撹乱
	33	染付	皿	口～ 底部	12.4	7.1	2.55	明緑灰色釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。全体に粗い貫入あり。	白色で緻密。	外面に宝相華唐草文、内底に玉取獅子文。轆轤成形。景徳鎮窯で16c前～中葉。	H19	トレンチ4 撹乱
	34	染付	皿	口縁部	－	－	－	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	灰白色で細かい。	内面に草花文。轆轤成形。福建産。	H24	トレンチ24 撹乱
	35	染付	皿	底部	－	8.4	－	透明釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。貫入なし。	白色で緻密。	内底に不明文様、植物か、外底に不明の銘。型成形。徳化窯で18c。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱

第16表　中国産染付・青磁染付観察一覧b

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第37図 図版28	36	染付	皿	胴部	−	−	−	両面を白化粧後に呉須で絵付けその上から透明釉を施釉。白化粧は厚め。粗い貫入あり。	淡黄白色で粗い。黒色粒を含む。	内面口縁部の圏線区画内に鱗文、内底には魚文か。轆轤成形。漳州窯で16c末〜17c。	H24	トレンチ24 撹乱
	37	染付	小碗	口縁部	−	−	−	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密。	外面に草文、内面腰部に2本の圏線。口縁が大きく外反する。轆轤成形。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 撹乱
	38	染付	小碗	口縁部	7.8	−	−	透明釉を両面に施釉後、口唇内面を釉剥ぎ。貫入なし。	白色で緻密。	外面に唐草文。口禿碗。型成形。徳化窯。	H21	南側石牆 トレンチ1 撹乱
	39	染付	小碗	口縁部	5.4	−	−	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密。	外面に文様あり。轆轤成形。景徳鎮窯。	H19	トレンチ4 撹乱
	40	染付	小碗	底部	−	5.6	−	透明釉を両面に施釉後、畳付釉剥ぎ。焼成が悪い。貫入なし。	白色で細かい。	外面に草花文。畳付に砂付着。型成形。徳化窯で18c。	H24	トレンチ24 撹乱
	41	染付	小杯	口縁部	−	−	−	透明釉を両面に施釉。貫入なし。	白色で緻密。	外面に草花文か。轆轤成形。景徳鎮窯で17c後〜18c前。	H19	トレンチ5 撹乱
	42	染付	小杯	口縁部	5.6	−	−	両面に透明釉を施釉。貫入なし。	白色で緻密。	外面に草花文。轆轤成形。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 撹乱
	43	染付	小杯	底部	−	2.4	−	透明釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。貫入なし。	白色で緻密。	外面に渦文と鋸歯文、外底に銘あり。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 撹乱
	44	染付	盤	底部	−	−	−	内外面に明緑灰色釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。微細な気泡あり。貫入なし。	灰白色で細かい。	外面に蓮弁文か、内底に草花文。轆轤成形。元末明代。	H20	三門北 撹乱
	45	染付	瓶	底部	−	6.0	−	外面に明緑灰色釉、内面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。貫入なし。	白色で細かい。小さな空洞あり。	外面に渦文。轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	H19	トレンチ2 撹乱
	46	染付	香炉	底部	−	−	−	外面に明緑灰色釉を施釉。貫入なし。	白色で緻密。黒色粒を含む。	外面に蓮弁文。轆轤成形。景徳鎮窯で16c。	H22	南側石牆 トレンチ23 撹乱
	47	青磁 染付	小碗	口縁部	−	−	−	外面には青磁釉、内面には透明釉を施釉。細かい気泡あり。貫入なし。	白色で緻密。	内面胴部に八卦文。轆轤成形。景徳鎮窯。	H24	トレンチ24 撹乱
	48	青磁 染付	小碗	底部	−	3.5	−	外面に青磁釉、内面に明緑灰色釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。外面に微細な気泡あり。貫入なし。	白色で緻密。黒色粒を含む。	外底に銘款。轆轤成形。景徳鎮窯。	H22	南側石牆 トレンチ22 撹乱



第37図　中国産染付・青磁染付



図版 28　中国産染付・青磁染付

４. 中国産褐釉陶器・無釉陶器（49～54）

中国産褐釉陶器は、89 点が得られている。器種は壺と瓶が確認され、壺は 87 点、瓶は２点で壺が圧倒的に多い。代表的な４点を図化した。個別の遺物についての詳細は、観察表に記載する。

中国産無釉陶器は、11 点が得られている。器種は壺、急須、茶器、蓋、鉢が確認されている。壺が最も多い。代表的な２点を図化した。

鉢（53）は素地に石英を多く含むため、比較的新しい製品と考えられる。

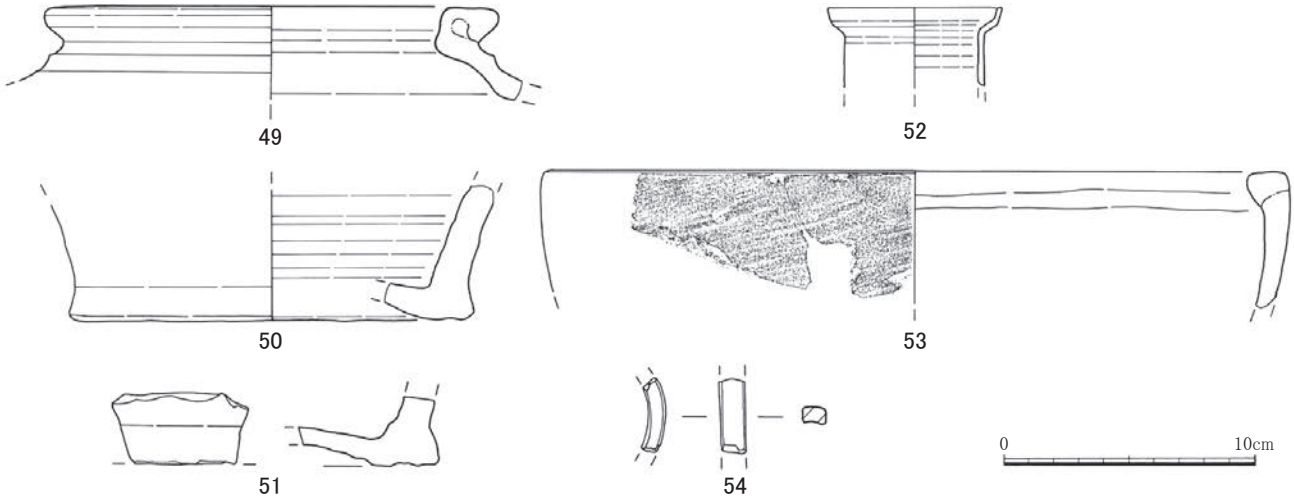
茶器（54）は紫泥茶器の取っ手である。宜興窯産で清代の製品と考えられる。

第17表　中国産褐釉陶器・無釉陶器出土状況

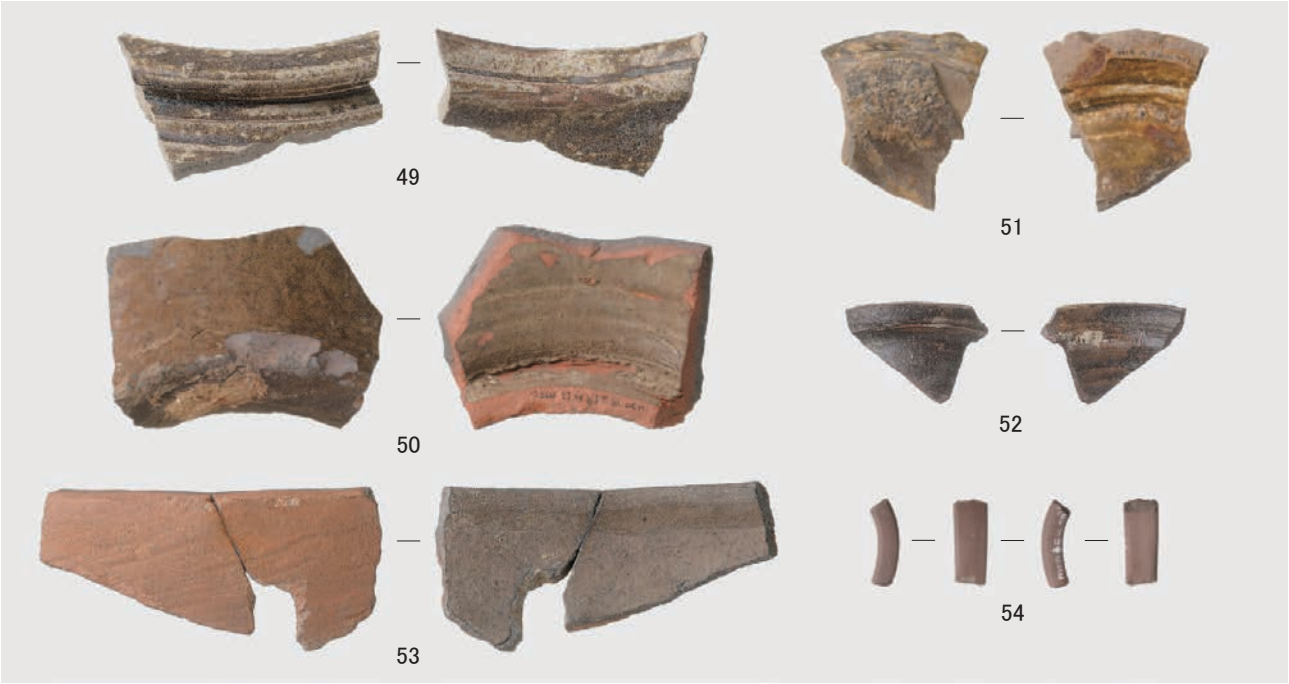
褐釉陶器					無釉陶器						合計
瓶		壺			鉢		壺	急須	茶器	蓋	
口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	胴部	胴部	取手		
1	1	3	77	7	1	3	3	2	1	1	100

第18表　中国産褐釉陶器・無釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
					口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第38図 図版29	49	褐釉陶器	壺	口縁部	18.2	－	－	オリーブ褐色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かく、白色鉱物や赤褐色鉱物を含む。	無文。中国産。	H24	トレンチ24 撹乱
	50	褐釉陶器	壺	底部	－	16.2	－	外面暗褐色、内面灰黄褐色釉施釉。	鈍橙色でやや細かく、白色鉱物や黒色鉱物を含む。	無文。轆轤成形。中国産。	H24	三門 トレンチ13 撹乱
	51	褐釉陶器	壺	底部	－	－	－	オリーブ褐色の釉を両面に施釉後、外面を釉剥ぎ。	灰黄褐色でやや細かい。白色鉱物を含む。	無文。底部内面に鉄が酸化したような跡があり。轆轤成形。中国産。	H19	東西トレンチ 撹乱
	52	褐釉陶器	瓶	口縁部	7.0	－	－	黒褐色の釉を両面に施釉。	赤褐色でやや細かく、白色鉱物と石英を含む。	漏斗状口縁の瓶。内面口縁部～胴部にかけて縦半分が露胎。	H24	トレンチ24 撹乱
	53	無釉陶器	鉢	口縁部	30.0	－	－	無釉。	外側が橙色、内側が灰色で両側とも緻密。白色鉱物を含む。石英を含む。	口唇部が平坦。口縁部が逆L字を呈している。中国南部産か？	H20	三門 撹乱
	54	無釉陶器	茶器	取手	－	－	－	無釉。	赤灰色。	紫泥茶器の取っ手。（宜興窯清代か？）	H19	東西トレンチ 撹乱



第38図　中国産褐釉陶器・無釉陶器



図版 29　中国産褐釉陶器・無釉陶器

5.その他の中国産陶磁器（55～60）

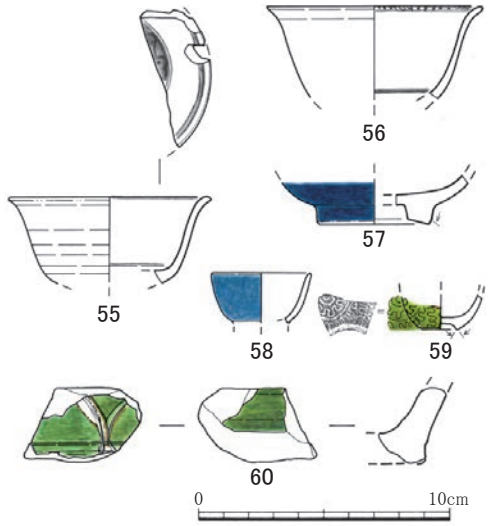
その他の中国産陶磁器は、褐釉磁器５点、瑠璃釉８点、色絵 14 点、三彩２点、翡翠釉１点、天目１点が得られている。個別の遺物についての詳細は、観察表に記載する。

第19表　その他中国産陶磁器出土状況

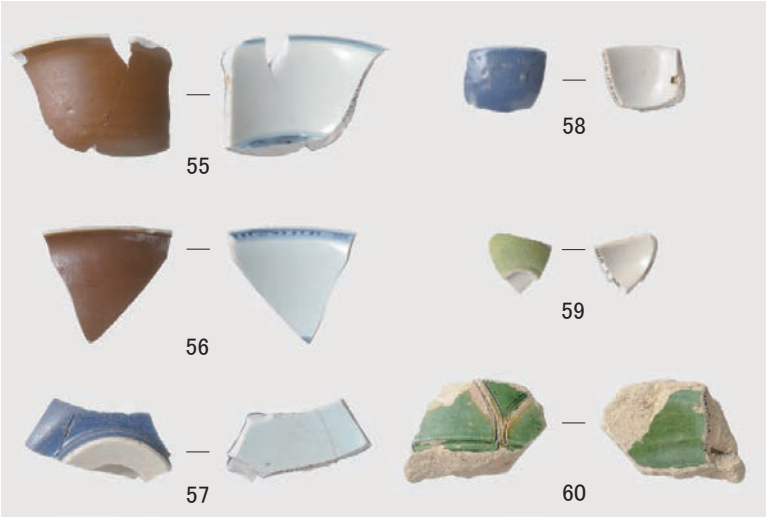
褐釉磁器		瑠璃釉					色絵								三彩		翡翠釉	天目	合計
小碗		碗	小碗	小杯	瓶	器種不明	碗		小碗	皿	盤	小杯	袋物	器種不明	壺	器種不明	器種不明	碗	
口縁部	底部	底部	口縁部	口縁部	胴部	胴部	口縁部	胴部	底部	底部	底部	底部	胴部	胴部	底部	胴部	胴部	胴部	
4	1	2	1	2	1	2	2	3	1	1	1	2	2	2	1	1	1	1	31

第20表　その他の中国産陶磁器観察一覧

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第39図 図版30	55	褐釉 磁器	小碗	口縁部	8.1	－	－	外面褐柚、内面透明釉を施釉。	白色で細かい。黒色粒子をやや含む。	口縁が外反し、口縁内面・内面端部に圏線。中国景徳鎮窯産。17c後。	H24	トレンチ24 撹乱
	56	褐柚 磁器	小碗	口縁部	8.6	－	－	外面褐柚、内面透明釉を施釉。	白色で細かい。黒褐色粒子を含む。	口縁が外反。景徳鎮窯産。17c後。	H22	三門 トレンチ21 7層
	57	瑠璃釉	碗	底部	－	4.6	－	外面瑠璃色釉、内面青灰色釉施釉。	白色で緻密。	型押し成形。無文。畳付は露胎。景徳鎮窯産。	H24	トレンチ24 撹乱
	58	瑠璃釉	小杯	口縁部	4.0	－	－	外面瑠璃色釉、内面透明釉施釉。	白色で緻密。	型押し成形。無文。口縁部は直口。景徳鎮窯産。	H20	三門北 撹乱
	59	色絵 (粉彩)	小杯	底部	－	1.4	－	外面黄緑色の釉、内面透明釉。	灰白色で緻密。	畳付が釉剥ぎされている。高台が碁笥底ぎみ。文様は唐草文。18～19c。	H20	三門北 撹乱
	60	三彩	壺	底部	－	－	－	緑色釉と黄釉を外面施釉。緑色釉を内面に施釉。	淡黄色でやや細かい。	轆轤成形。細かい貫入が見られる。外面に2本単位の陰刻線で弧状に描き、それを繋ぎ合わせる文様が見られる。	H24	トレンチ24 撹乱



第39図　その他の中国産陶磁器



図版 30　その他の中国産陶磁器

６.東南アジア産陶磁器

東南アジア産陶磁器は、タイ産褐釉陶器が３点、半練土器が１点得られている。いずれも壺の胴部小破片のため、今回は図化せず、集計のみ行った。

７.本土産磁器（61～69）

表土・撹乱層出土の本土産磁器の総数は 398 点出土しており、碗、皿、壺、杯、瓶、香炉、鉢、擂鉢、急須、蓋など多くの種類が確認されている。以下、個々の所見は遺物観察表にまとめる。

①染付（61～64）

図化したものは全て肥前産である。1650～1670 年代のもの（61）や轆轤成形後に型打ち成形のもの（63）などがある。

②近現代（65～69）

図化したものは全て瀬戸・美濃産である。碗、急須、仏具の瓶（69）など様々な器種の資料が出土している。

第21表　本土産磁器出土状況

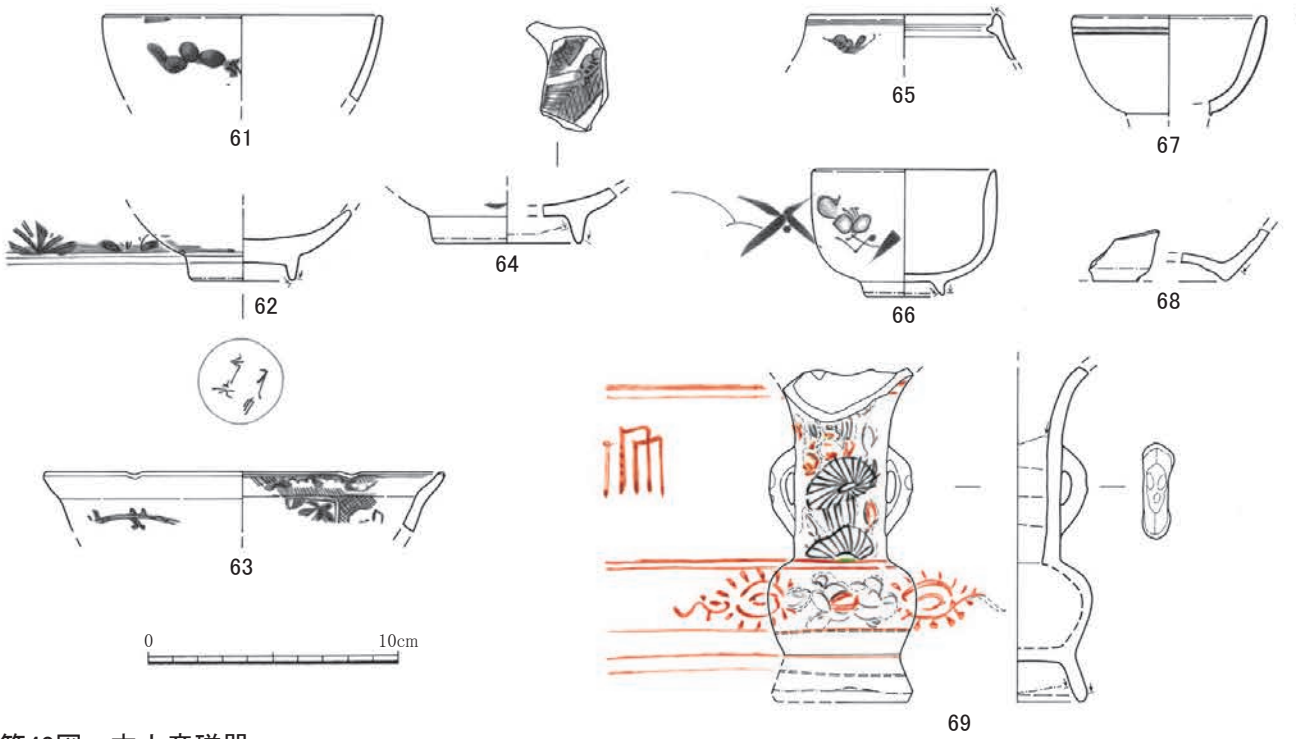
青磁	白磁			染付											色絵	磁器	
碗	碗	小碗	皿	碗			小碗			皿		鉢	瓶	器種不明	小碗	小碗	皿
口縁部	胴部	胴部	胴部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	胴部	底部	口縁部	口～底部
1	1	1	1	10	4	2	1	2	2	3	6	1	2	5	1	2	1

近現代磁器																		
碗				小碗				皿				小皿	杯			小杯		
口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	底部
5	36	35	11	5	36	9	21	4	14	12	14	1	2	1	1	3	10	7

近現代磁器																			合計
鉢	瓶		急須			蓋	小壺	袋物	水滴	香炉	火炉	衛生陶器	碍子	器種不明					
口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部		口縁部	底部	胴部	口縁部	胴部	部位不明		口縁部	胴部	底部	耳	部位不明	
1	1	2	7	6	5	13	1	2	1	3	1	1	9	12	54	4	1	1	398

第22表　本土産磁器観察一覧

挿図番号 図版番号		種類	器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第40図 図版31	61	染付	碗	口縁部	11.2	－	－	両面に透明釉を施釉。貫入なし。	白色で細かい。	外面に松文。轆轤成形。肥前で1650～1670年代。	H24	トレンチ24 撹乱
	62	染付	碗	底部	－	4.2	－	両面に透明釉を施釉。貫入なし。	白色で細かい。	外面に草花文、内底に銘あり。畳付に砂付着。轆轤成形。肥前で17cか。	H24	トレンチ24 撹乱
	63	染付	皿	口縁部	16.0	－	－	両面に透明釉を施釉。貫入なし。	白色で細かい。	外面に唐草文、内面は区画内に草花文。轆轤成形後、型打ち成形。肥前で18c後。	H19	トレンチ6 撹乱
	64	染付	鉢	底部	－	6.0	－	両面に青灰白色釉を施釉後、畳付釉剥ぎ。貫入なし。	灰白色で細かい。	内底に魚文、外面にも文様あり。轆轤成形。肥前で19c。	H21	三門北 表土
	65	近現代	急須	口縁部	7.6	－	－	外面は透明釉を施釉、内面は無釉。貫入なし。	白色で緻密。	外面に梅花文。轆轤成形。瀬戸・美濃で近現代。	H19	トレンチ4 撹乱
	66	近現代	小碗	口～底	7.4	3.2	5.1	両面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色でガラス質で緻密。	外面に松竹梅文。瀬戸・美濃で近現代。	H19	東西トレンチ 撹乱
	67	近現代	小碗	口縁部	7.8	－	－	両面に透明釉を施釉。貫入なし。	白色でガラス質で緻密。	口縁外面にクロム釉で2本の圏線。瀬戸・美濃で近現代。	H19	トレンチ4 撹乱
	68	近現代	急須	底部	－	－	－	外面にクロム青磁釉、内面に透明釉を施釉後、底部を釉剥ぎ。貫入なし。	白色で緻密。	内面の轆轤目が目立つ。轆轤成形。瀬戸・美濃で近現代。	H18	トレンチ1 撹乱
	69	近現代	瓶	底部	－	5.6	－	外面に透明釉を施釉後畳付を釉剥ぎ。内面は頸部下まで施釉。粗い貫入あり。	灰白色で細かい。	外面に草花文。耳には刻み目が入る。仏具。瀬戸・美濃で近現代。	H18	トレンチ1 撹乱



第40図　本土産磁器

図版 31　本土産磁器

8．本土産陶器（70～78）

表土・撹乱層出土の本土産陶器の総数は 97 点である。産地別にみると、肥前（肥前系含む）、関西系、薩摩などがある。肥前では京焼風肥前（71）や唐津焼（70・74）、薩摩産では堂平窯の蓋（77）がある。

第23表　本土産陶器出土状況

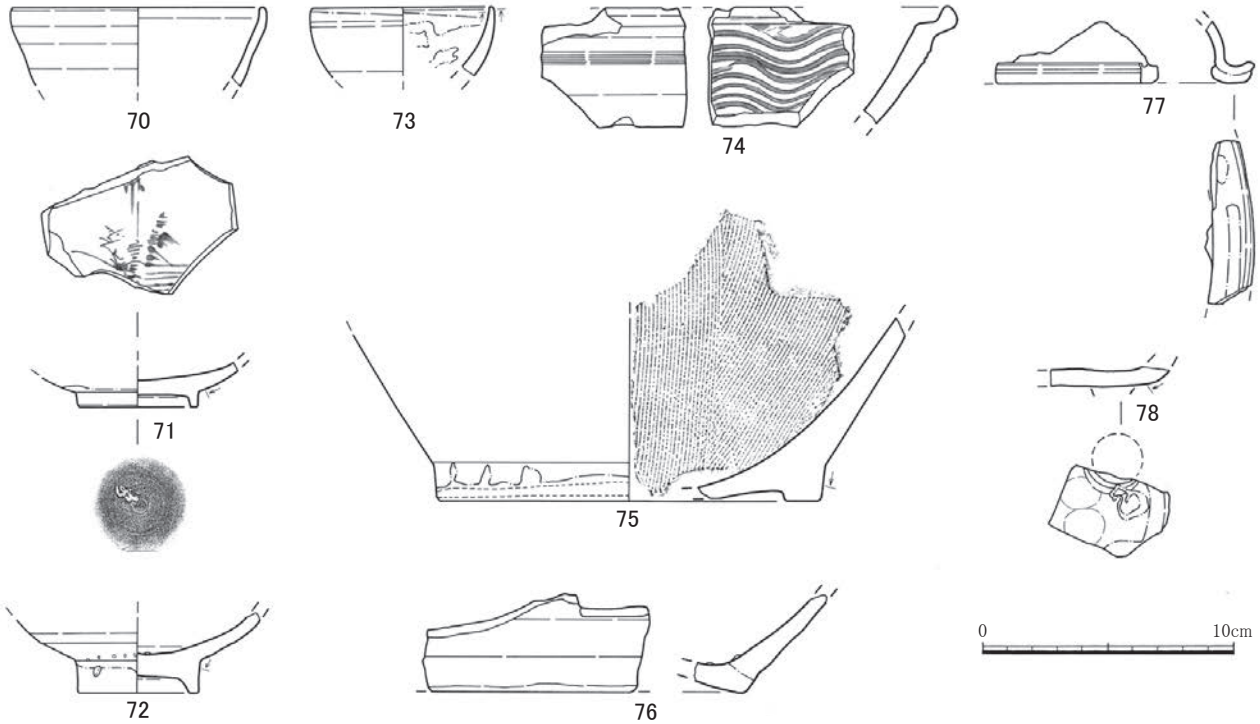
碗			小碗		皿	鉢	擂鉢			植木鉢	急須		蓋	壺		袋物		器種不明		合計
口縁部	胴部	底部	口縁部	底部	底部	口縁部	口縁部	胴部	底部	底部	胴部	底部		胴部	底部	胴部	底部	口縁部	胴部	
8	13	1	2	1	1	2	2	1	3	1	1	2	5	23	1	3	1	3	23	97

第24表　本土産陶器観察一覧a

挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第41図 図版32	70	碗	口縁部	10.2	－	－	両面に浅黄色～褐色釉を施釉。細かい貫入あり。	鈍黄橙色で細かい。砂粒を含む。	口縁下部を少し厚くし口唇は内湾。無文。轆轤成形。唐津。	H24	トレンチ24 撹乱
	71	皿	底部	－	4.8	－	両面に透明釉を施釉、底部は露胎。細かい貫入あり。	淡橙色で細かい。黒色粒を含む。	内底に山水文。底部の成形が丁寧。轆轤成形。京焼風肥前で17c。	H24	トレンチ24 撹乱
	72	碗	底部	－	4.8	－	両面に褐釉を施釉。底部は無釉。粗い貫入あり。	灰白色で細かい。	内底やや尖る。肥前で17c末～18c前。	H24	トレンチ24 撹乱
	73	小碗	口縁部	7.3	－	－	両面に自然釉を施釉、外面は光沢なし。貫入なし。	灰白色で細かい。	直口。無文。轆轤痕あり。肥前。	H24	トレンチ24 撹乱
	74	鉢	口縁部	－	－	－	両面に灰白色釉を施釉。貫入なし。	橙色で細かい。砂粒を含む。	平口縁で内湾。唐津の二彩手、櫛刷毛目鉢で17c前。	H22	南側石牆 トレンチ23 撹乱
	75	擂鉢	底部	－	15.4	－	両面に自然釉を施釉し外面のみ褐釉を施釉。底部は無釉。貫入なし。	灰褐色で細かい。砂粒を含む。	丹波の擂鉢。近世。	H19	石敷 南側拡張部 撹乱
	76	壺	底部	－	－	－	内面にのみ泥釉を施釉。	灰色で細かい。砂粒を含む。	底部は撫で調整なし。内面に被熱か。薩摩。	H24	トレンチ24 撹乱

第24表　本土産陶器観察一覧b

挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第41図 図版32	77	蓋	庇	－	－	－	両面に泥釉を施釉。	赤灰色で細かい。砂粒を含む。	平口縁で内湾。口唇に貝の目跡あり。無文。轆轤成形。薩摩で17c前。	H21	三門北 撹乱
	78	急須	底部	－	－	－	両面に泥釉を施釉。底部は無文。	底部は淡橙色、胴部は淡黄色で細かい。淡橙色は赤色粒を含む。	脚痕あり。轆轤成形。関西系。	H18	トレンチ1 撹乱



第41図　本土産陶器

図版 32　本土産陶器

９. 沖縄産施釉陶器（79～104）

表土・撹乱層から出土した沖縄産施釉陶器の総数は 551 点である。種類別にみると、碗、小碗、皿、小皿、小杯、瓶、瓶子、壺、鉢、鍋、香炉、火炉、火取、蓋、急須、酒器、袋物、灯明具、水滴などである。そのうち、26 点を図示した。個々の遺物の詳細は観察表に記す。

第25表　沖縄産施釉陶器出土状況

碗				小碗				皿	小皿	小杯	鉢			瓶		瓶子	
口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	底部	胴部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	胴部	底部
1	50	80	18	4	29	20	33	2	1	1	14	14	6	2	9	1	1

急須						蓋	鍋			壺			酒器		袋物			水滴		
口縁部	胴部	底部	注口	把手	耳		口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部
5	21	15	1	2	5	17	4	20	3	1	7	2	2	2	1	40	1	1	1	1

火取		香炉		火炉			灯明皿	灯明具	器種不明			合計
口縁部	胴部	底部	耳	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	口縁部	胴部	底部	
6	4	1	1	7	3	1	1	2	7	77	3	551

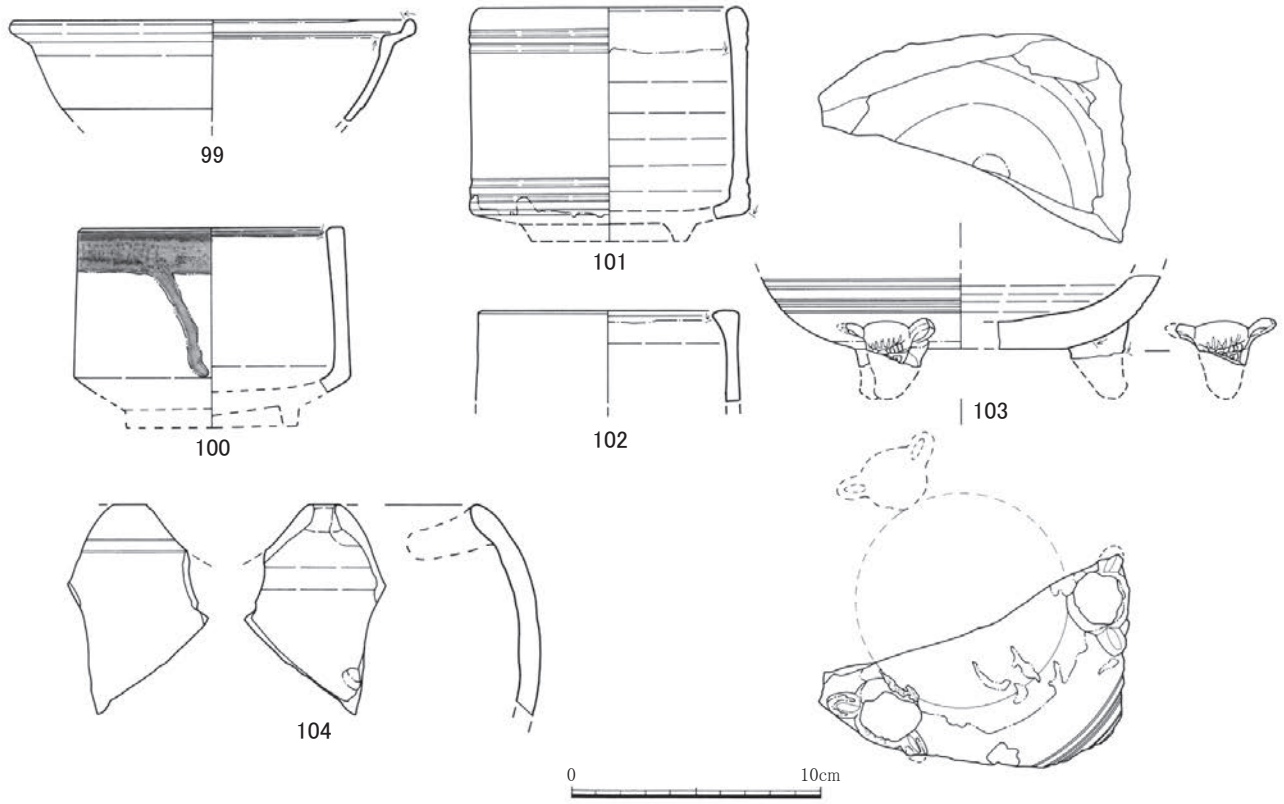
第26表　沖縄産施釉陶器観察一覧a

挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第42図 図版33	79	碗	底部	－	6.6	－	両面ともに灰釉を施釉。外面は高台脇、内面は胴部下部まで施釉。	内側灰色、外側浅黄橙色で細かい。	高台断面三角形。	H24	トレンチ24 撹乱
	80	碗	口～ 底部	13.6	6.1	6.9	両面に白釉を施釉。畳付釉剥ぎ。内底は蛇の目釉剥ぎ。	灰色で細かい。細かい白色粒をやや含む。	口縁は外反。外面に呉須と褐釉で花文を描く。	H19	撹乱
	81	皿	底部	－	4.0	－	外面残存部は無釉、内面は灰釉を施釉。内底蛇の目釉剥ぎ。	灰色で細かい。	高台断面三角形。内底目跡あり。胴部下半及び高台内に煤付着。高台から高台内部まで白土付着。	H18	トレンチ1 撹乱
	82	小碗	口～ 底部	9.8	4.5	4.6	外面胴部下半から口縁内面縁は褐釉、内面は透明釉を二度掛け。内底蛇の目釉剥ぎ。	淡黄色で細かい。	口縁は外反。	H22	南側石牆 トレンチ23 撹乱
	83	小碗	口～ 底部	8.2	3.4	4.3	両面に褐釉を施釉、畳付釉剥ぎ。	淡黄色でやや粗い。	口縁は内湾。高台断面三角形。全体的に造りが粗く、高台は内削りが浅く低い。内底及び外底に焼成時の傷あり。	H18	トレンチ1 撹乱
	84	小碗	口～ 底部	9.1	3.7	4.75	外面から口縁部内面縁は褐釉、内面は灰釉を二度掛け。内底蛇の目釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	口縁は外反。内底に白土付着。	H24	トレンチ24 撹乱
	85	小碗	底部	－	3.7	－	外面は褐釉、内面は灰釉を掛け分け。内底蛇の目釉剥ぎ。	にぶい橙色で細かい。	高台断面三角形。	H18	トレンチ1 撹乱
	86	小碗	底部	－	4.2	－	外面及び外底は黒釉、内面は白釉を掛け分け。内底蛇の目釉剥ぎ。畳付釉剥ぎ。	灰黄色でやや粗い。	内底目跡あり。	H19	東西トレンチ 撹乱
	87	小碗	底部	－	3.7	－	両面に灰釉を施釉。内底蛇の目釉剥ぎ。	灰色でやや粗い。	内底目跡あり。畳付に白土付着。	H19	東西トレンチ 撹乱

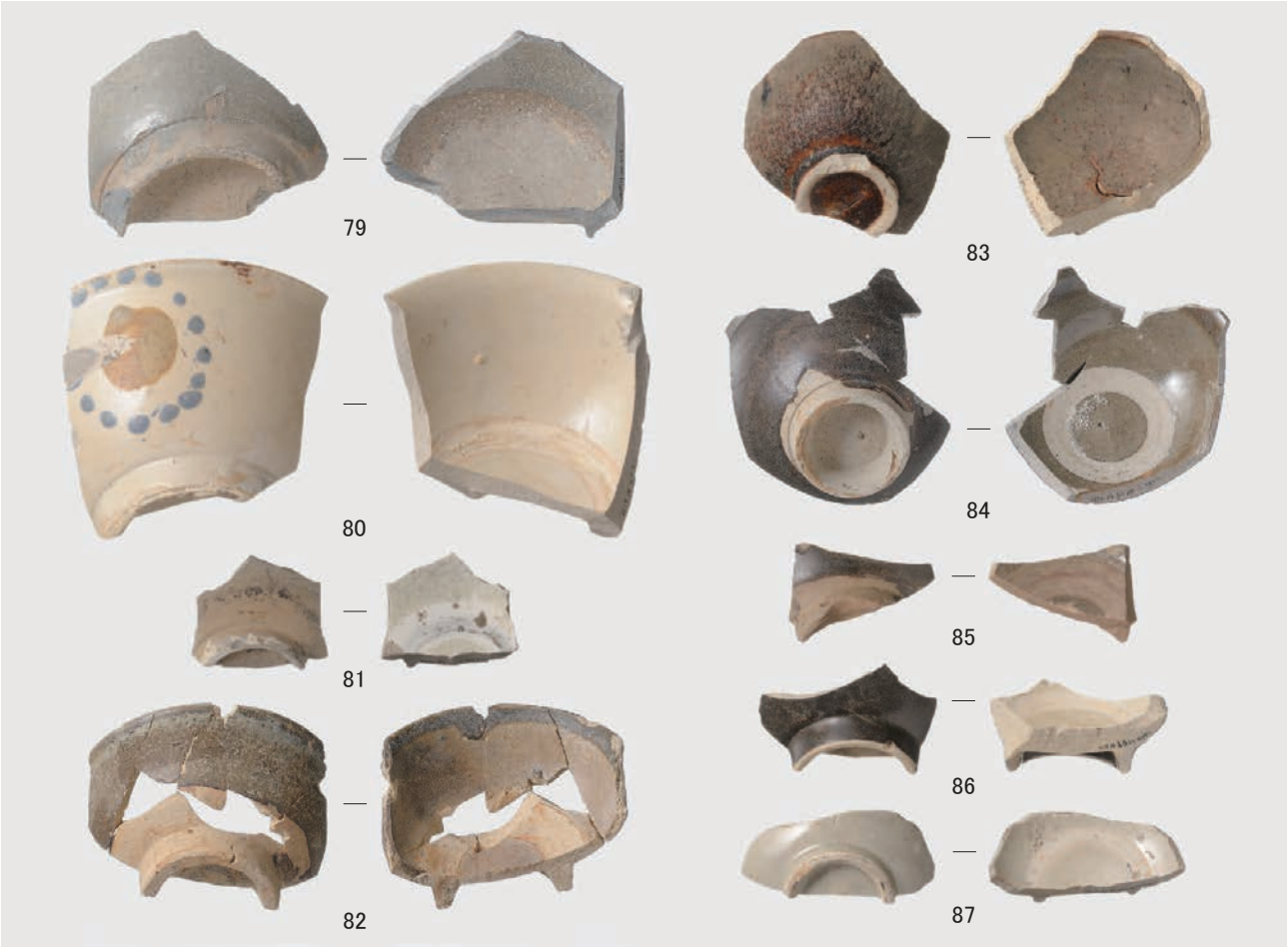
第26表　沖縄産施釉陶器観察一覧b

挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第42図 図版34	88	小碗	底部	－	4.1	－	表面に白化粧を施し、上に灰釉を施釉。畳付釉剥ぎ。	灰色で粗い。白色粒、黒色粒をやや含む。	内底目跡あり。全体的に造りが粗い。外面面取り。	H19	撹乱
	89	小杯	口～底部	4.6	2.2	2.5	両面に白釉を施釉。外面は高台脇まで施釉。	灰白色でやや粗い。	口縁は外反。内底目跡あり。	H19	撹乱
	90	鉢	口縁部	21.5	－	－	両面に褐釉を施釉。	淡黄色でやや粗い。	口縁逆「L」字状の鉢。	H24	トレンチ24 撹乱
	91	鉢	口縁部	－	－	－	両面に灰釉を施釉。	灰色でやや粗い。	口縁が肥厚。轆轤痕が明瞭。	H22	トレンチ23 撹乱
	92	瓶子	脚部	－	7.6	－	外面は灰釉と暗茶褐色の釉を施釉。内面は無釉。	灰白色で細かい。黒色粒および白色粒を僅かに含む。	高台が袴状に広がる瓶子の脚部。轆轤痕が明瞭。端部が玉縁状を呈する。	H22	南側石牆 トレンチ23 撹乱
	93	酒器	底部	－	7.0	－	外面は白化粧を施し呉須と緑釉を流しかけ、上から透明釉を施釉。内面は無釉。畳付釉剥ぎ。	にぶい黄橙色でやや粗い。細かい黒色粒を含む。	胴部に二本の圏線を巡らせる。注ぎ口は後から貼り付けて形成したか。内面轆轤痕が明瞭。底部の削りは丁寧で内側に向けてやや高めに削られており外側部分のみ着く。	H19	東西トレンチ 撹乱
	94	急須	口縁部	6.4	－	－	外面は灰釉、内面は白釉を施釉。	灰白色で細かい。雲母及び暗赤褐色粒を僅かに含む。	胴部に白粘土で形成された厚みのある亀を貼り付ける。湧田Ⅳに類例あり。	H22	南側石牆 トレンチ23 撹乱
	95	急須	底部	－	4.8	－	外面は胴部下半まで灰釉を施釉。内面は無釉。	灰褐色で細かい。細かい白色粒を含む。	内底中央部に膨らみをもち、底部はやや上げ底ぎみ。	H22	南側石牆 トレンチ23 撹乱
	96	蓋	撮み	撮み径 5.8	－	－	外面は褐釉を施釉。内面は無釉。	黄灰色でやや粗い。やや粗めの白色粒を含む。	撮み高台状の蓋。撮み部分を内側に削るように形成。	H24	トレンチ24 撹乱
	97	蓋	袴～庇	13.0	11.2	－	外面は庇部分まで黒釉を施釉。袴部分及び内面は無釉。袴端部にやや黒釉が付着する。	灰白色で緻密。細かい白色粒及び黒色粒を含む。	無文、轆轤成形。	H24	トレンチ24 埋ガメ内 撹乱
	98	蓋	袴～庇	6.5	5.0	－	外面は庇部分まで褐釉を施釉。袴部分及び内面は無釉。	灰黄色で緻密。細かい白色粒を含む。	袴部分は薄く形成。造りは丁寧。急須の蓋か。	H19	撹乱
	99	鍋	口縁部	16.2	－	－	両面ともに黒釉を施釉。口縁部の蓋受けは無釉。	淡黄色でやや細かい。細かい黒色粒を含む。一部、褐色粒が僅かにみられる。	蓋受けに白土が付着。	H22	南側石牆 トレンチ23 撹乱
	100	火取	口縁部	10.6	－	－	外面は白釉、内面は無釉。口縁部に呉須を施す。	灰黄色でやや粗い。	轆轤成形。成形後のナデが丁寧。	H24	トレンチ24 撹乱
	101	火取	口縁部	10.4	－	－	口縁部内面縁から外面底部まで褐釉を施釉。内面は無釉。	にぶい橙色で粗い。やや粗い白色粒及び細かい黒色粒を僅かに含む。	口縁部下に二条、底部直上に二条圏線を引く。轆轤痕が明瞭。残存部からベタ底と考えられる。	H19	撹乱
	102	火取	口縁部	10.4	－	－	口縁部内面縁から外面に灰釉、内面に薄い鉄釉を施釉。	灰白色で細かい。黒色粒及び僅かに細かい白色粒を含む。	口縁部逆「L」字状を呈する。轆轤痕明瞭。	H24	トレンチ24 撹乱
	103	香炉	底部	－	8.4	－	外面は灰釉を施釉。内面は無釉。	浅黄橙色でやや粗い。白色粒及び僅かに黒色粒を含む。	外面に白土による象嵌の圏線が5条確認できる。内底には円状に白土が塗られる。足は獣面を呈する(獅子か)。	H19	トレンチ3 撹乱
	104	香炉	口縁部	－	－	－	両面ともに褐釉を施釉。	白灰色でやや粗い。細かい黒色粒及び僅かに白色粒を含む。	口縁は肥厚し内湾する。轆轤痕が確認できる。	H24	トレンチ24 撹乱

第42図　沖縄産施釉陶器1



第43図　沖縄産施釉陶器2



図版 33　沖縄産施釉陶器1

図版 34　沖縄産施釉陶器2

10. 初期沖縄産無釉陶器（105～110）

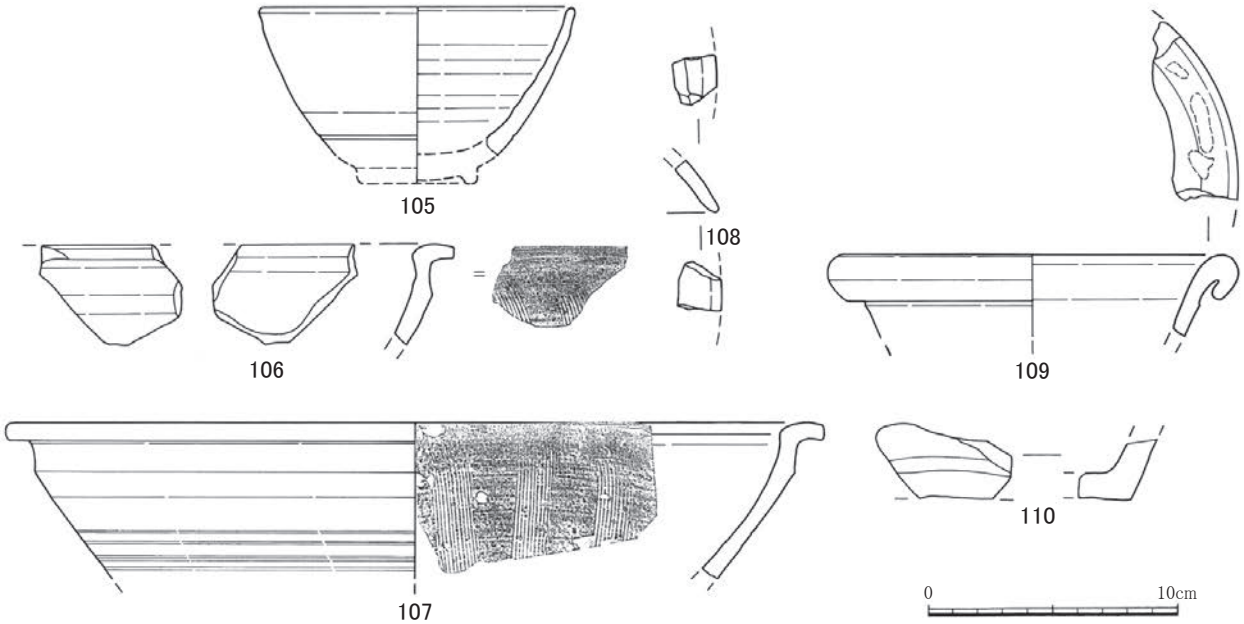
表土・撹乱層から出土した初期沖縄産無釉陶器の総数 39 点である。種類別にみると、碗、皿、壺、火炉、擂鉢などがある。そのうち、６点を図示した。個々の資料の詳細は観察表に記す。

第27表　初期沖縄産無釉陶器出土状況

碗		皿	鉢		擂鉢		壺		火炉	器種不明	合計
口縁部	底部	底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	胴部	胴部	
4	1	1	1	1	5	5	1	14	1	5	39

第28表　初期沖縄産無釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第44図 図版35	105	碗	口縁部	12.6	－	－	両面ともに橙色。灰または炭などの影響か黒ずみ混じる。	にぶい赤褐色、灰色で粗い。白色粒を含む。白色の筋がマーブル状にやや混じる。	口唇断面丸く、轆轤痕明瞭。	H24	トレンチ24 撹乱
	106	擂鉢	口縁部	－	－	－	外面は褐灰色、内面は灰赤色。	にぶい褐色でやや細かい。白色粒を含む。白色の筋がマーブル状に混じる。	口縁部外面下をくぼませ稜を形成。口縁部内面下に間隔をあけ櫛目を施文。	H24	トレンチ24 撹乱
	107	擂鉢	口縁部	32.8	－	－	両面ともに暗赤褐色。	暗赤褐色でやや細かい。粗い白色粒を含む。白色の筋がマーブル状にやや混じる。	口縁外面下をくぼませ稜を形成。口縁内面下に間隔をあけ櫛目10～11本を施文。	H24	トレンチ24 撹乱
	108	蓋	庇	－	－	－	両面ともに灰色。	にぶい褐色で細かい。白色粒を含む。白色の筋がマーブル状に混じる。	ナデが丁寧。	H19	東西トレンチ 撹乱
	109	壺	口縁部	16.4	－	－	外面オリーブ黒色、内面黒褐色。口唇部から口縁部内面まで黒褐色の泥釉を施釉。	暗赤褐色で細かい。細かい白色粒を含む。白色の筋がマーブル状にやや混じる。	口縁部は外側折り返し成形。口縁部内面にサンゴ目あり。	H18	トレンチ1 撹乱
	110	壺	底部	－	－	－	外面は黒褐色の泥釉を全面に施釉。内面は灰色～暗灰色。	暗赤褐色で粗い。粗い白色粒が多く含まれる。白色の筋がマーブル状に多く混じる。	両面ともに轆轤痕が明瞭。底部の形成が丁寧で、稜がはっきりしている。	H18	トレンチ1 撹乱



第44図　初期沖縄産施釉陶器

図版 35　初期沖縄産無釉陶器

11. 沖縄産無釉陶器（111～123）

表土・撹乱層から出土した沖縄産無釉陶器の総数は 359 点である。種類別にみると、碗、皿、灯明皿、瓶、壺、小壺、鉢、擂鉢、甕、香炉、火炉、蓋、急須、茶器、植木鉢などである。そのうち、13 点を図示した。個々の遺物の詳細は観察表に記す。

第29表　沖縄産無釉陶器出土状況

碗				皿				鉢				擂鉢			植木鉢	瓶	急須		
口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口～底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	底部	胴部	口縁部	胴部	把手
1	12	14	8	2	10	2	3	1	14	9	1	15	25	2	1	1	3	2	1

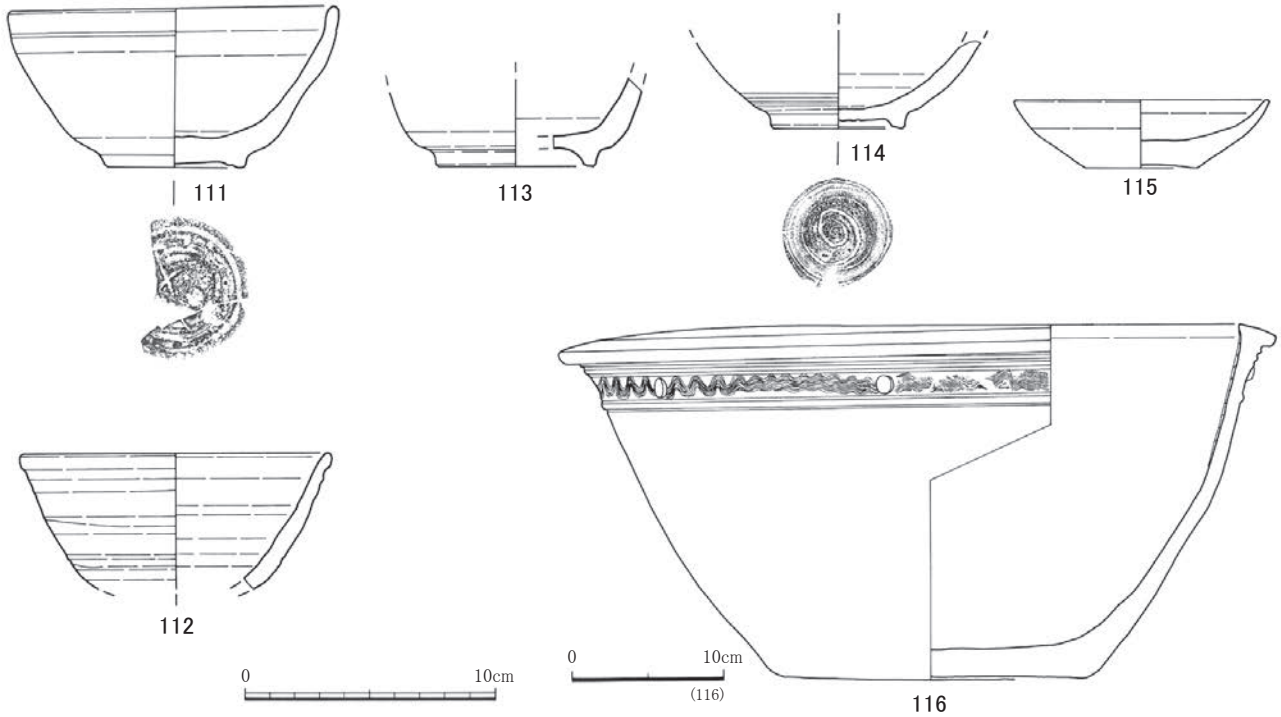
蓋	壺			小壺	壺・甕		甕		茶器	茶器か	灯明皿		香炉	火炉			器種不明		合計
	口縁部	胴部	底部	底部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	胴部	口～底部	口縁部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	
11	8	105	12	1	13	1	7	20	1	1	1	2	1	5	2	1	1	39	359

第30表　沖縄産無釉陶器観察一覧a

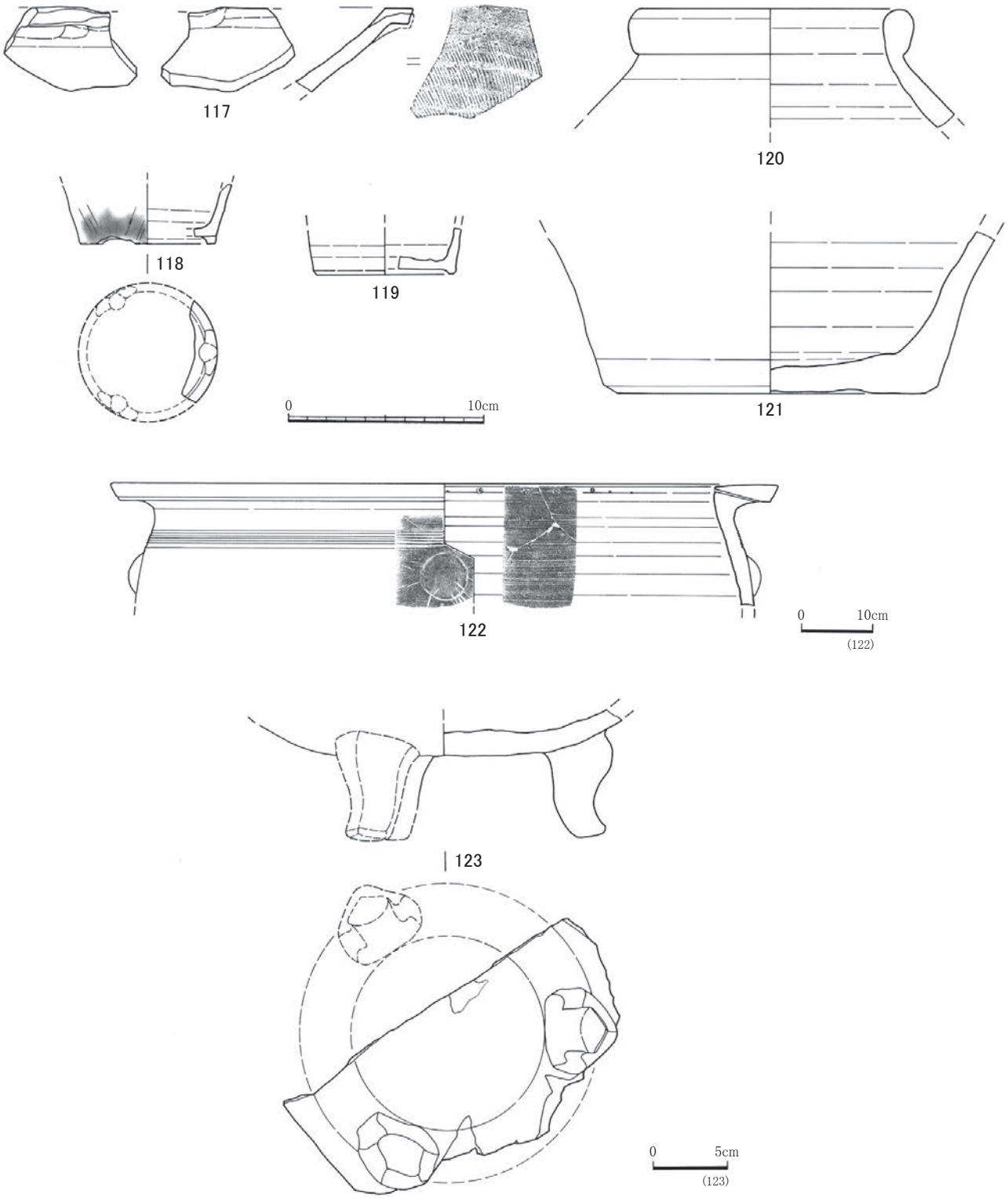
挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第45図 図版36	111	碗	口～ 底部	13.2	5.5	6.5	口縁部内面縁から外面畳付裏まで暗赤灰色の泥釉を施釉。	内側にぶい赤褐色、外側褐灰色で粗い。にぶい褐色部分に粗い橙色粒を及び白色粒、褐灰色部分に細かい白色粒を含む。	口縁部内湾。轆轤痕が明瞭。畳付部分の削りが粗い。	H24	トレンチ24 撹乱
	112	碗	口縁部	12.5	－	－	外面は口縁部内面縁から胴部下半まで黒褐色、胴部下は明赤褐色、内面は赤褐色を呈する。	にぶい赤褐色で細かい。僅かに白色粒を含む。	口縁部外反。轆轤痕が明瞭。	H24	トレンチ24 撹乱
	113	碗	底部	－	6.4	－	両面ともに青灰色を呈する。	内側灰褐色、外面灰色でやや粗い。白色粒を含む。	内面ナデが丁寧。	H19	石積み前 撹乱
	114	碗	底部	－	5.4	－	外面は赤褐色、内面はに灰赤色。	にぶい褐色で細かい。橙色粒を含む。	内面のナデが丁寧。胴部外面の轆轤痕が明瞭。外底にヘラ描きあり。	H24	トレンチ24 撹乱

第30表　沖縄産無釉陶器観察一覧b

挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等		
第45図 図版36	115	皿	口～ 底部	10.2	4.4	2.75	外面は明赤褐色～黒色、内面は明赤褐色～褐灰色。	にぶい褐色でやや粗い。白色粒、透明粒僅かに含む。	全体的に粗く、底部の造りが雑。	H24	トレンチ24 撹乱
	116	鉢	口～ 底部	47.4	23.3	20.0	外面は灰褐色～赤褐色、内面は灰黄褐色～灰褐色。	にぶい赤褐色で細かい。細かい白色粒を含む。	口縁部が逆「L」字状の鉢。外面に凸文2条、その間に波状文をめぐらせ、上から丸文を貼り付ける。内面石灰分多く付着する。	H22	南側石牆 トレンチ22 撹乱
第46図 図版36	117	擂鉢	口縁部	－	－	－	外面灰褐色、内面橙色。	橙色、灰赤色で細かい。細かい白色粒を含む。	内面口縁部下から櫛目を密に造る。口縁部に注ぎ口と思われる凹みあり。	H18	トレンチ1 撹乱
	118	植木鉢	底部	－	7.1	－	両面ともに、にぶい赤褐色。底部の一部が黒ずむ。	明赤褐色でやや粗い。	胴部のナデ調整は丁寧。高台は間隔をあけ抉りを入れる。	H19	トレンチ5 撹乱
	119	茶器	底部	－	7.3	－	両面ともに鈍い赤褐色、外底明赤褐色。	橙色でやや粗い。白色粒及び雲母を僅かに含む。	内面の轆轤痕は明瞭。外面はナデが丁寧。高台低く造る。	H19	東西トレンチ 撹乱
第46図 図版37	120	壺	口縁部	14.6	－	－	両面ともに赤褐色。	にぶい赤褐色でやや粗い。白色粒を含む。	口縁玉縁状。横方向及び縦方向のナデ調整あり。	H18	トレンチ1 撹乱
	121	壺	底部	－	17.0	－	外面はにぶい橙色、内面は明赤褐色。	内側明赤褐色、外側灰色で粗い。白色粒及び黒色粒を含む。僅かに橙色粒が見られる。	内面の轆轤痕が明瞭。底部を削り稜を造る。	H19	東西トレンチ 撹乱
	122	甕	口縁部	90.0	－	－	外面明赤褐色、内面黄灰色～灰褐色	明赤褐色でやや粗い。白色粒及び黒色粒を含む。	口縁部が逆「L」字状を呈する。口唇部に沈線一条施す。口縁部下に沈線を数条巡らせ、その下に丸文貼り付ける。内面から焼成時につけられたと思われる空気穴が7か所確認できる。内面轆轤痕明瞭。	H20	三門北 撹乱
	123	香炉	底部	－	13.0	－	両面ともに灰褐色	灰褐色で細かい。細かい白色粒及びやや粗めの橙粒を含む。橙粒は所々筋になるところもある。	三つの足をもつ香炉だと考えられる。足はS字状を呈す。しっかり面取りされており、稜がはっきりしている。造りは丁寧。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱



第45図　沖縄産無釉陶器1



第46図　沖縄産施釉陶器2

図版 36　沖縄産無釉陶器1

図版 37　沖縄産無釉陶器2

12. 陶質土器（124～129）

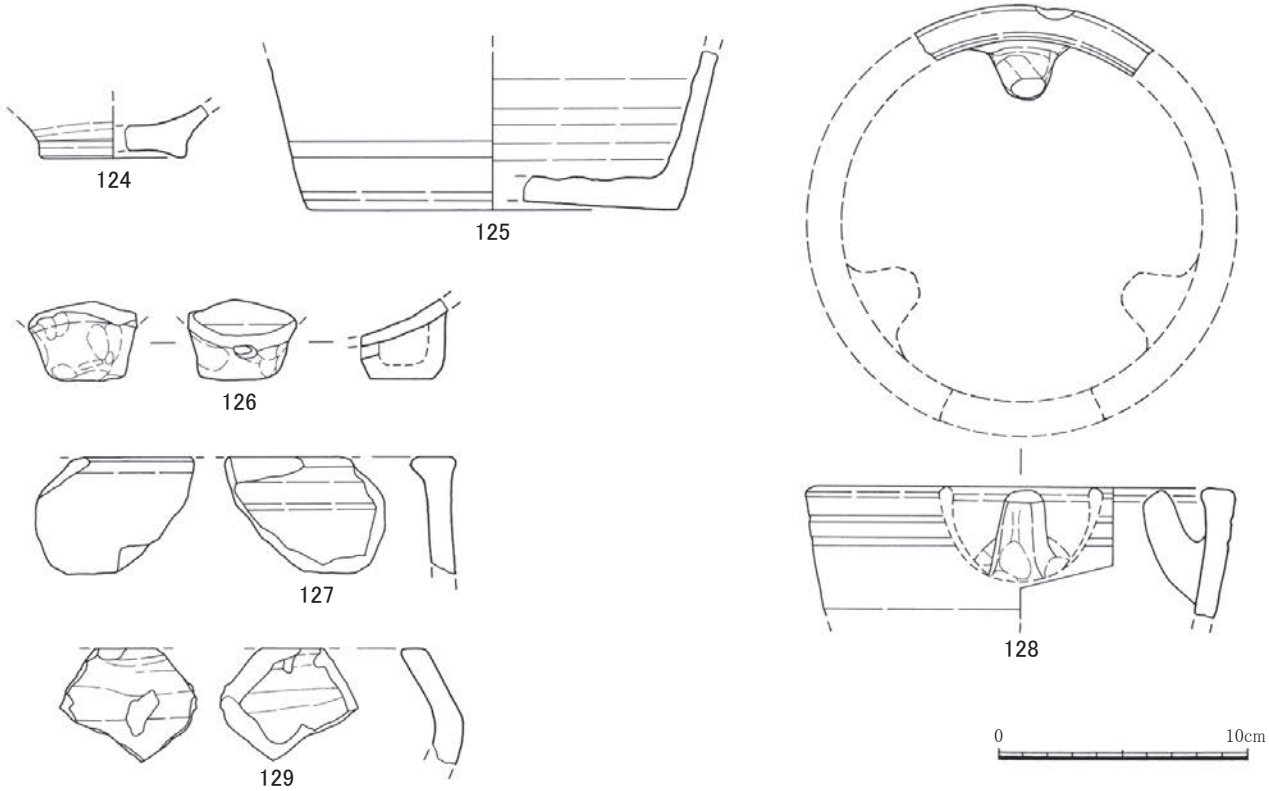
表土・撹乱層で出土した陶質土器の総数は 67 点である。器種別にみると碗、皿、灯明皿、壺、鉢、鍋、香炉、火炉、蓋、急須、土瓶などである。そのうち、６点を図示した。個々の資料の詳細は観察表に記す。

第31表　陶質土器観察一覧

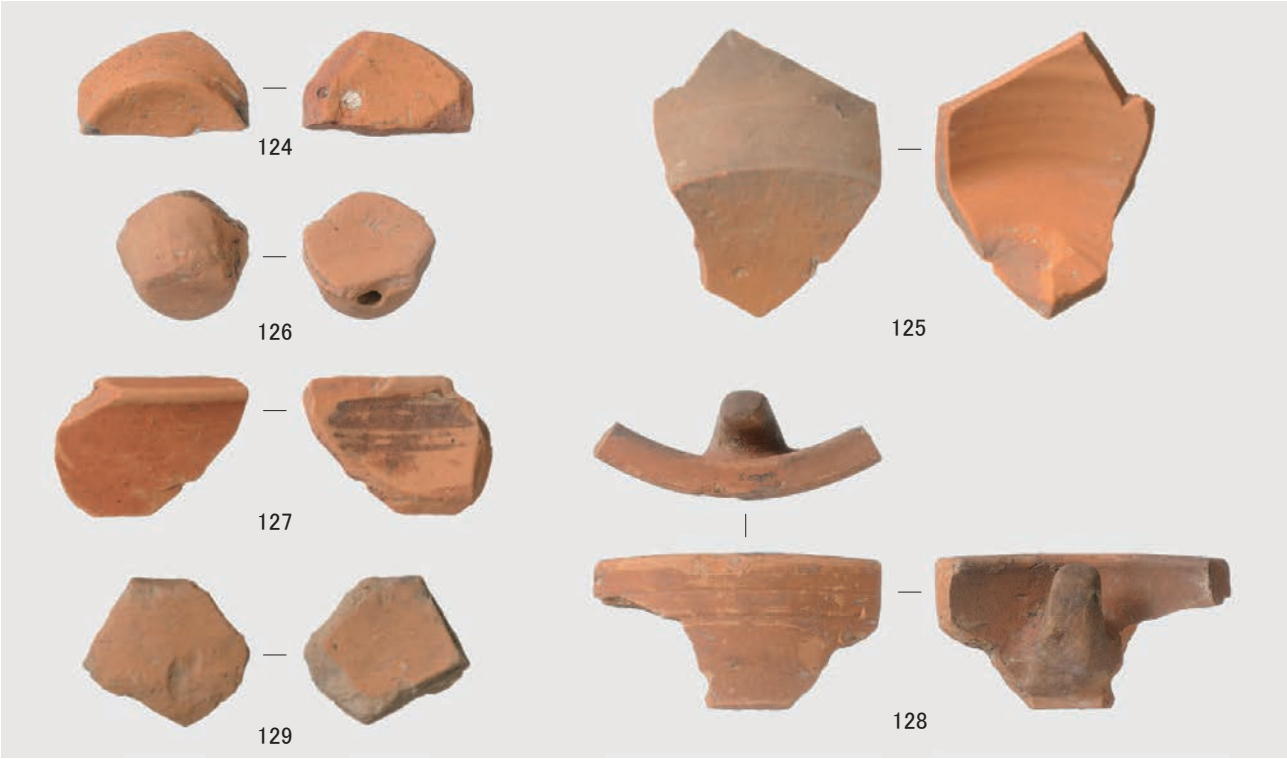
挿図番号 図版番号		器種	部位	法量(cm)			観察事項			年度	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	器色	素地(色・質・混和材)	文様等		
第47図 図版38	124	碗	底部	－	5.8	－	両面ともに橙色。	橙色、にぶい赤褐色で軟質。粗い赤褐色粒及び白色粒、細かい黒色粒及びガラス質粒子を含む。	内面ナデ丁寧。高台削りが浅く低い。	H24	トレンチ24 撹乱
	125	鉢	底部	－	14.8	－	外面はにぶい黄褐色、内面橙色。	橙色、灰色で軟質。やや粗めの赤色粒及び、細かい白色粒、黒色粒、ガラス質粒子を含む。	ベタ底の鉢。内面轆轤痕が明瞭。	H19	撹乱
	126	香炉	底部	－	－	－	両面ともに橙色。	橙色で硬質。粗いにぶい赤褐色粒、細かい白色粒、ガラス質粒子、黒色粒を含む。	香炉の足の部分と考えられる。内側に孔を穿つ。	H24	トレンチ24 撹乱
	127	火炉	口縁部	－	－	－	外面は明赤褐色、内面は暗赤褐色。	橙色、にぶい橙色で硬質。粗いにぶい赤褐色粒及び黒色粒、細かいガラス質粒子及び白色粒を含む。	口縁断面「T」字状の火炉。	H21	南側石牆 トレンチ1 撹乱
	128	火炉	口縁部	17.2	－	－	外面は灰褐色、内面はにぶい赤褐色。	橙色で硬質。細かいにぶい赤褐色粒及び白色粒、黒色粒、ガラス質粒子を含む。	口縁内側に突起を貼り付ける。突起及び内面は煤付着。口縁外面下に二条の沈線を巡らせる。	H24	トレンチ24 撹乱
	129	火炉	口縁部	－	－	－	両面ともに橙色。	褐灰色で硬質。白色粒及び細かい赤褐色粒、ガラス質粒子を含む。	口縁部をくの字に湾曲させる火炉。口唇に煤が付着。	H19	トレンチ2 撹乱

第32表　陶質土器出土状況

碗	皿		鉢			土瓶	急須		蓋	鍋		壺	香炉	火炉			灯明皿	器種不明		合計
底部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部	口縁部	口縁部	胴部		口縁部	耳	底部	底部	口縁部	底部	耳	胴部	口縁部	胴部	
2	1	2	8	1	2	1	1	4	5	1	1	1	1	3	2	2	1	2	26	67



第47図　陶質土器



図版 38　陶質土器

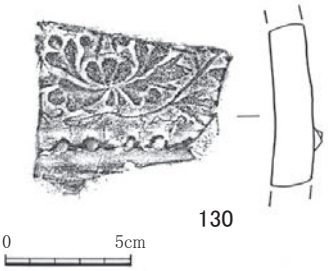
13. 瓦質土器（130）

表土・撹乱層から出土している総数は 10 点である。器種別にみると、コンロ、鉢、植木鉢、袋物などが出土している。中には、表面が加工され欄干の破片の可能性が考えられる資料も見られたが、小破片で天地不明のため、図示していない。今回は植木鉢を 1 点のみ図示した。

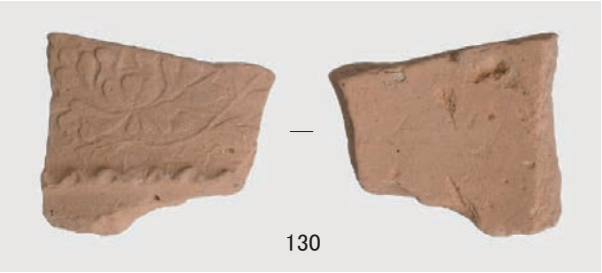
130 は、外面はにぶい褐色、内面はにぶい橙色を呈する植木鉢の胴部である。断面はにぶい橙色～灰褐色を呈し軟質である。赤褐色の粒及び細かい白色粒、ガラス質粒子を含む。表面には菊草文を施し、その下に波状の凸帯をつける。

第33表　瓦質土器出土状況

鉢		植木鉢	袋物	コンロ	器種不明	合計
口縁部	胴部	胴部	底部	胴部	胴部	
1	1	1	1	1	5	10



第48図　瓦質土器



図版 39　瓦質土器

14. 土器・硬質土器

土器は宮古式土器、パナリ焼、硬質土器（本土産焙烙）などが出土している。総数は 29 点で、その内訳をみると、宮古式土器が 9 点、パナリ焼が 6 点、硬質土器が 1 点、土器片が 13 点となっている。宮古式土器は多量の砂粒や赤色土粒が混入し、パナリ焼は多量の貝殻片が混入する。硬質土器は土師質な胎土を呈しており、中城御殿跡で出土例がみられる。いずれも小破片のため今回は集計のみ行い、図化はしていない。

15. 漆製品（131）

漆製品は壺が 1 点出土し、その他漆が塗られた木材片が数点、漆の塗膜片が若干出土した。そのうち、壺については図化を行い、壺と木材片の一部については成分分析を明治大学大学院理工学研究科に委託した。この分析の詳細については、第 4 章自然科学分析の項で述べる。ここでは漆が塗られた壺について詳細を述べることとする。

今回見つかった漆塗りの壺は、底径：17.8cm、残存高：17cm で、底部についてはほぼ完全に残っていたが、口縁部から胴部上半部は欠損していた。素地は土であり、にぶい橙色を呈する軟質の土器である。混入物は微細な白色粒がみられる。

器形は縦長の形になるとみられ、胴部は丸みをもち、底部は上げ底状を呈する。内底には 1 条の突帯の一部が残っており、本来は円形状または半円状に巡らされていたものと考えられる。また、胴部や内底には轆轤痕が確認される。

外面は、牡丹と考えられる植物や唐草とともに格子状の文様が陽刻で表現され、文様と文様の間の隙間にも細かいドット状の彫り文様で埋めているなど、非常に緻密である。この文様の盛り上がった部分には赤色の漆がよく残っており、陽刻された文様だけでも華やかだが、漆の塗布によってさらに華やかさが増している。

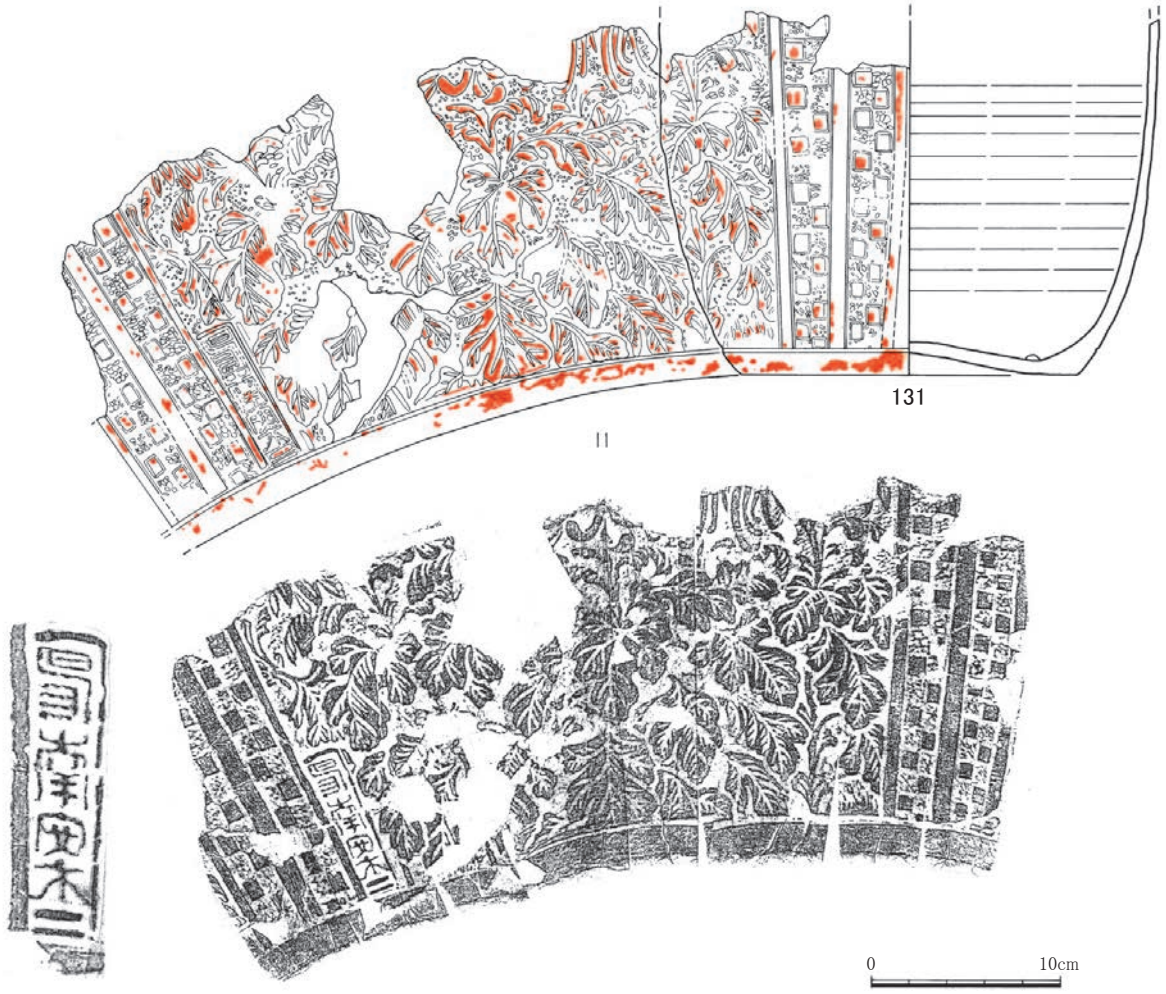
漆は、赤色と黒色の二種類が塗布されているものと思われる。内底や外底面にまで黒色の漆がみられることより、両面に黒漆を塗布し、さらにその上から赤漆を外面底部まで塗布したものとみられる。内面には赤色は確認されない。

また、興味深いこととして、外面底部の一部分に文字が彫り込まれていることがわかった（図版

40)。遺物の取り上げ時には気付かなかったが、後に整理の段階で破片の接合作業をした時に確認できた。文字は枠の中に彫られており、上から順に「易」？、「南」、「安」もしくは「案」？という文字が考えられるが、その意味は判然としない。だが、後の項で出てくる漆の成分分析の結果をみると、ベトナム産の漆の成分が検出されていることから、ベトナムの「安南」と何らかの可能性があるとも考えられる。その場合、ベトナム産の製品という可能性も考えられよう。しかし、本資料の胎土は沖縄産という見方もあれば、沖縄産ではないという見方もあり、現時点ではどちらとも言い難い。

この漆製品は、撹乱の土から見つかっており、年代等についても詳細は不明である。しかし外面に彫り込まれた文様の雰囲気は、1920 年代に製作されていたとされる琉球古典焼と似たような感を受ける。

これまでに見つかっている漆製品については、その多くは木製で、素材が焼物である漆製品の出土事例はほとんどない。また、記録や伝世品にもみられないことから、この壺が円覚寺にとってどのような意味のある壺なのか、詳細については今後の課題としたい。



第49図　漆製品

図版 40　漆製品

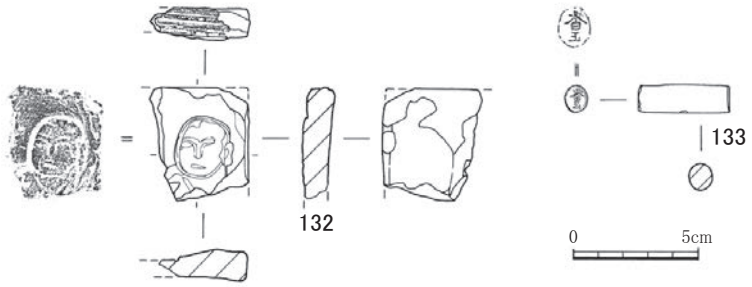
16. 石製品（132～135）

表土･撹乱層から出土している石製品の総数は 14 点である。種類別にみると砥石 1 点、礎盤 7 点、印鑑 1 点あり、その他器種不明の資料もみられる。また、石材もみられたが今回は数量化していない。以下、4 点の資料について詳細を記す。

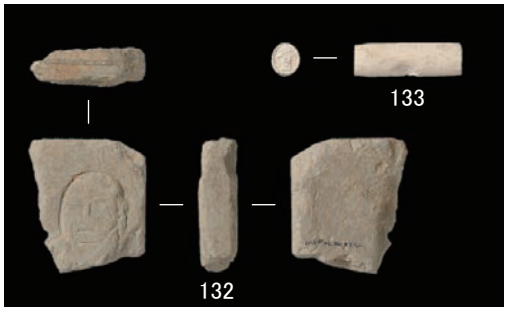
132 は表面に僧侶の顔を彫る石製品である。残存長軸：4.5 cm、残存短軸：3.7 cm、残存厚さ：1.2 cm、材質は千枚岩と思われる。僧侶の顔は作りが粗い。裏面は剥離もみられるが、その後研磨された跡が見受けられる。側面には研磨痕が残り、上面には凸状に段が形成される。具体的な用途は不明。H24 トレンチ 24 撹乱。

133 は「香正」と彫られている印鑑である。残存長軸：1.1 cm、残存短軸：0.9 cm、残存厚さ：3.6 cm、白色を呈し、材質は被熱のためか変質しているため、不明である。石材の産地に関しては、沖縄では採取されないものの可能性が高い。H19 東西トレンチ撹乱。

134・135 はいずれも輝緑岩製の礎盤である。上面観が真円形で縁に丸状の抉りを巡らせる。



第50図　石製品1

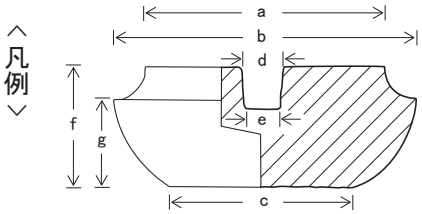


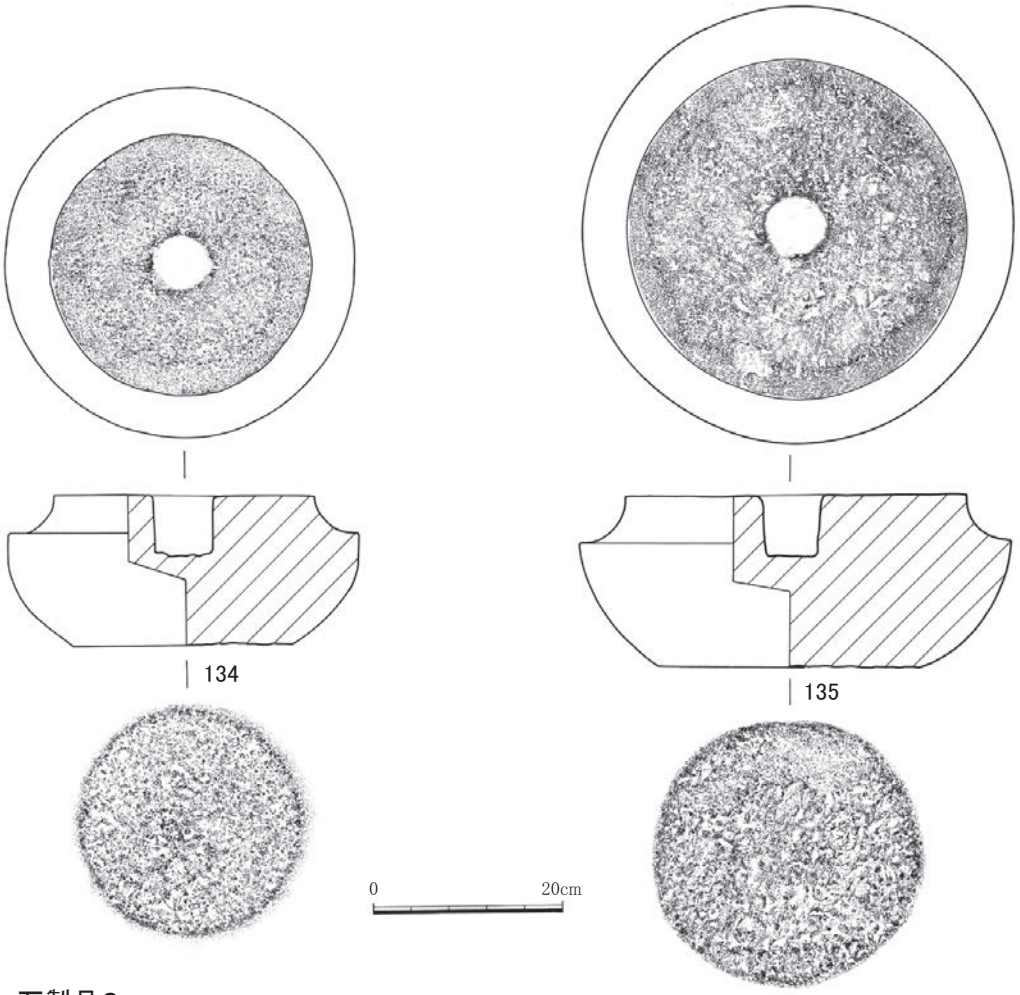
図版 41　石製品1

上面に柱の跡及び円形の臍穴が認められる。また、上面部分は研磨が粗く、やや凹凸を呈す。抉り以下の部位は研磨が丁寧にされる。

（134）
a：36.8 cm、b：27.5 cm、
c：23.1 cm、d：6.6 cm、
e：6.0 cm、 f：20.0 cm、
g：17.1 cm

（135）
a：45.6 cm、b：36.1 cm、
c：28.0 cm、d：6.7 cm、
e：5.1 cm、 f：18.2 cm、
g：13.5 cm





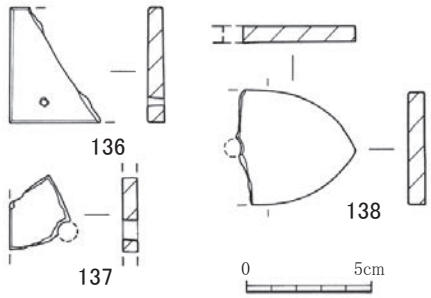
第51図　石製品2

17. 玉製品（136～138）

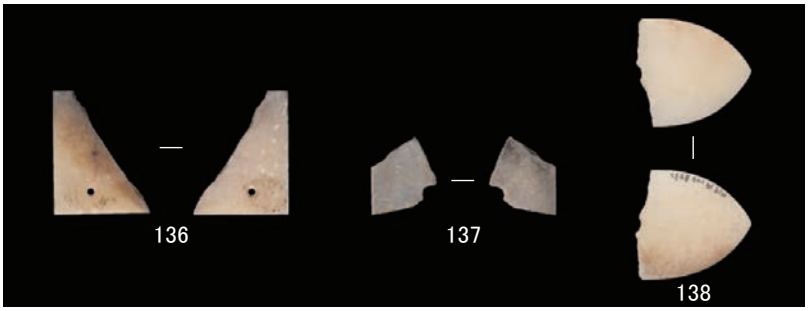
表土・撹乱層から出土している玉製品の総数は３点である。以下、資料について詳細を記す。

136～138 は穿孔のみられる玉製品で表面及び側面は丁寧に研磨が行われている。裏面は表面に比べると仕上げが荒いままであることから、何かにはめ込んで使用したものかと考えらえる。136 は透明感のある白色を呈する資料である。被熱のためか一部、茶褐色に変色する。本資料の表面穿孔部分の周囲に円状に残る跡が確認され、留めていた金具の跡ではないかと考えられる。残存長軸：4.6 cm、残存短軸：3.6 cm、厚さ：1.5 cm、孔経：0.35 cm、H19 トレンチ６撹乱からの出土。137 は透明感の無い灰色を呈する資料である。残存長軸：2.6 cm、残存短軸：2.4 cm、厚さ：0.6 cm、孔経：0.8 cm、H19 トレンチ６撹乱からの出土。138 はやや透明感のある白色を呈し、リーフ状の形をなす資料と思われる。資料中央に穿孔がされている。残存長軸：4.5 cm、残存短軸：4.5 cm、厚さ：0.65 cm、孔経：0.7 cm、H19 トレンチ６撹乱からの出土。

図版 42　石製品2



第52図　玉製品



図版 43　玉製品

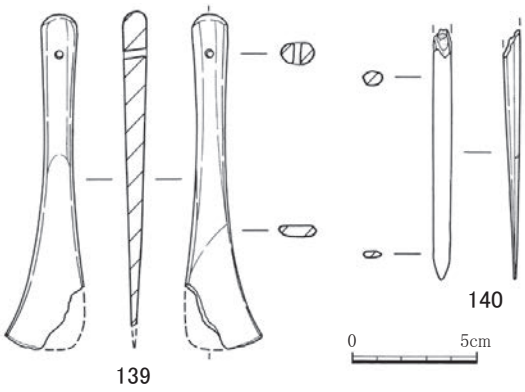
18. 骨製品（139・140）

骨製品はヘラが２点出土した。いずれも哺乳類骨を加工したものと考えられ、全体的に丁寧に磨かれている。139 は裁縫用と思われるもので柄部には径２㎜の孔がある。断面は柄部で楕円形を呈し、刃部では薄く平たくなる。また刃部は両面に磨きがみられるが、表面に比べ裏面では磨かれる範囲が狭い。長軸 13.20cm、短軸 2.19cm、厚さ 0.93cm、重量 16.41g。H19 トレンチ３撹乱。140 は破損のため頭部の形状は不明だが、残存部は棒状で断面は円形を呈し、端部では薄く剣先状に細くなる。長軸 9.86cm、短軸 0.76cm、厚さ 0.7cm、重量 3.26g。H19 東西トレンチ撹乱。

19. 貝製品（141～145）

貝製品は貝製ボタン５点、貝ボタンの原料（チョウセンサザエ）９点、加工痕のある貝（ヌノメガイ）１点が出土した。141～145 には貝製ボタン４点、貝ボタンの原料１点を図示し、個々の特徴は観察表に記した。

貝製ボタンは４点とも形状が異なるが、全体的に丁寧に磨かれている。なかには孔の間の厚みを薄くするような削りがあるものや、裏面の段に糸を通す孔があり機械製と考えられるものがある。145 の貝ボタンの原料と考えられるものは、孔径のわかるもののなかに 141 の貝製ボタンの大きさと同等のものがあり、出土地も同じため原料と製品の関係である可能性が考えられる。

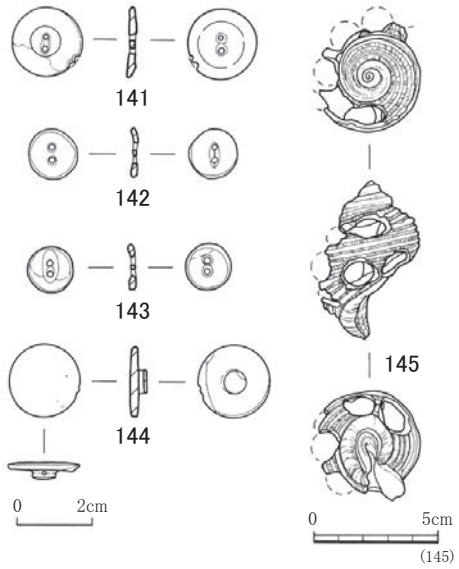


第53図　骨製品

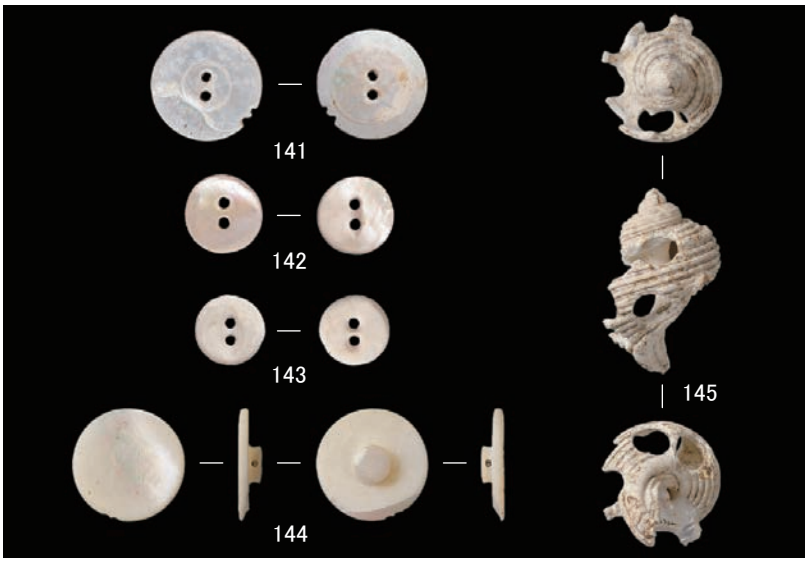
図版 44　骨製品

第34表　貝製品観察一覧

挿図番号 図版番号		種類	口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	年度	出土地
第54図 図版45	141	貝ボタン	1.86	1.85	0.21	中心に段をつくるように縁部が削られる。表面には孔の間の厚みを薄くするように削った痕がある。重量0.45g。	H19	東西トレンチ 撹乱
	142	貝ボタン	1.31	1.27	0.18	断面は皿状に湾曲し、表面には孔の間の厚みを薄くするように削った痕がある。また糸を通したような痕もみられる。重量1.12g。	H19	トレンチ3 撹乱
	143	貝ボタン	1.17	1.14	0.24	やや小さいが厚みがあり、断面がレンズ状を呈するように縁部が削られる。孔の間隔はやや狭い。裏面には孔の間の厚みを薄くするような削りがあり、同様のものよりやや大きく削られる。また、糸を通したような痕もみられる。重量1.56g。	H19	トレンチ3 撹乱
	144	貝ボタン	1.89	1.87	0.2	両面ともに丁寧に磨かれており、裏面には段をつくる。糸を通す孔は裏面の段を貫通するようにあいている。段部の厚さ0.42cm、重量1.56g。	H22	撹乱
	145	貝ボタンの原料	6.37	3.78	4.13	体層に円形を呈する穿孔の痕が10孔あり、うち2孔には破損がない。重量34.15g。	H19	トレンチ3 撹乱



第54図　貝製品

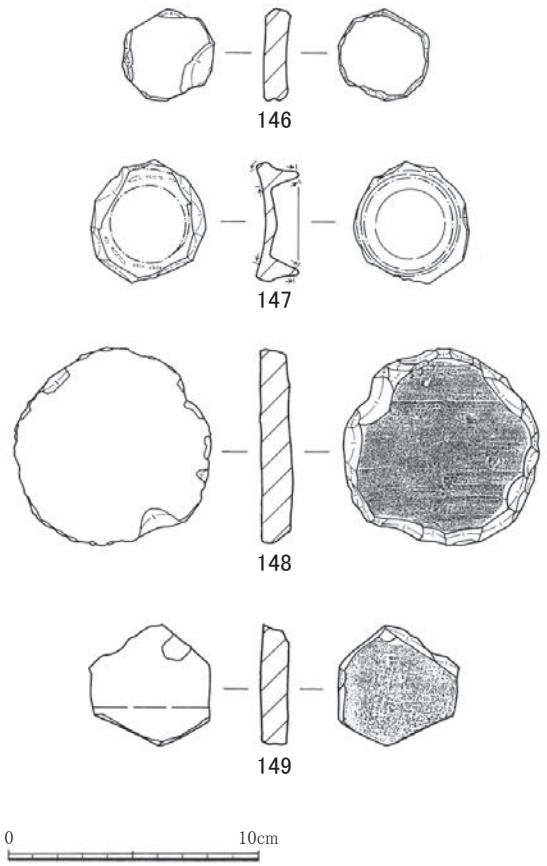


図版 45　貝製品

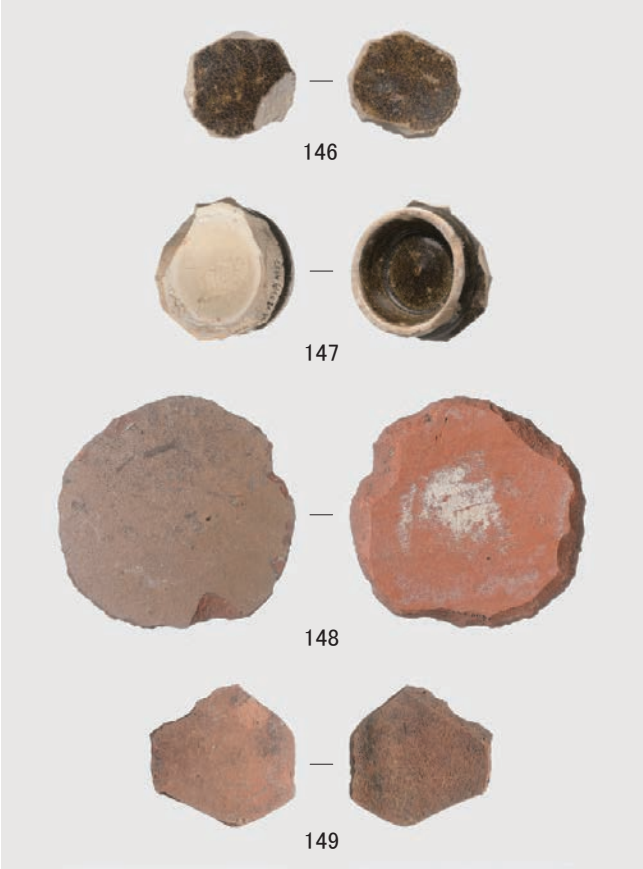
20. 円盤状製品（146～149）

円盤状製品は未製品を含め、中国産磁器２点、中国産陶器２点、沖縄産施釉陶器３点、沖縄産無釉陶器３点、瓦４点の計 14 点が出土した。全体的な特徴として剥離調整はあまり丁寧ではなく、両面から行われているが外面からのものが多い。146 は中国産褐釉陶器の胴部片で、調整はあまり丁

寧ではなく楕円形を呈する。長軸 3.8cm、短軸 3.2cm、厚さ 0.9cm、重量 19.23g。H19 トレンチ５撹乱。147 は沖縄産施釉陶器の底部片で、調整はあまり丁寧ではなく楕円形を呈する。長軸 4.83cm、短軸 4.53cm、厚さ 0.5cm、重量 26.65g。H20 三門北埋ガメ内撹乱。148 は沖縄産無釉陶器の胴部片で、比較的大型で調整も丁寧で円形を呈する。長軸 8.03cm、短軸 7.41cm、厚さ 1.4cm、重量 113.33g。H24 トレンチ 24 撹乱。149 は瓦の筒部で、調整は雑で不定形を呈する。長軸 5.2cm、短軸 4.1cm、厚さ 1.1cm、重量 30.14g。H22 三門トレンチ 21 第８層。



第55図　円盤状製品

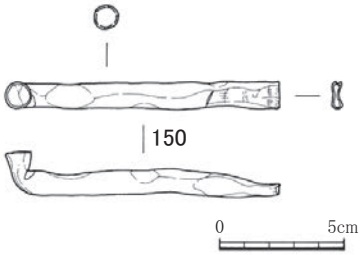


図版 46　円盤状製品

21. 煙管（150）

煙管は火皿から口付までが一体となった青銅製の延べ煙管１点が出土した。

火皿の手前にキズとへこみがみられ、火種を落とした際の痕と考えられる。吸口では両側面と表面、裏面を押しつぶし口付を整形したと思われるへこみなどみられ、口付は「8」の字状を呈する。また吸口の表面と裏面に櫛状のキズがみられる。長軸 10.98cm、短軸１cm、厚さ 0.9cm、重量 22.90g。H19 撹乱。

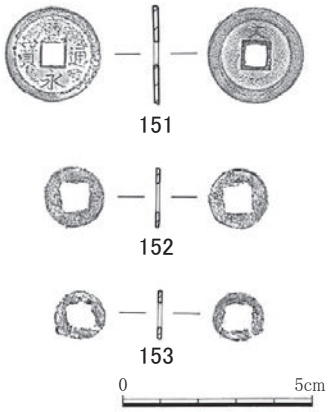


第56図　煙管

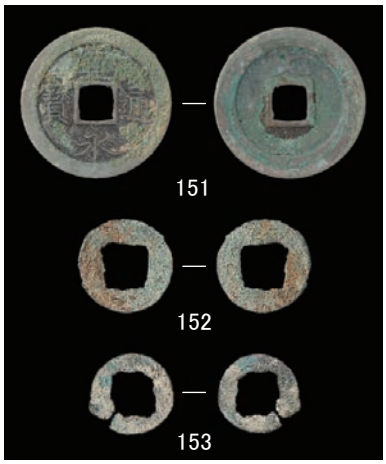
図版 47　煙管

22. 銭貨（151～153）

銭貨は近世以前の有文銭５点、無文銭９点、近・現代のものが 11 点、アメリカ製のものが２点、銭種不明６点の計 33 点が出土した。151～153 には寛永通宝１点、無文銭２点を図示した。151 は寛永通宝で、錆により「寛」の文字が不明瞭である。背には「文」の文字がみられる。直径 2.52cm、孔径 0.56cm、厚さ 0.15cm、重量 3.3g。H21 南側石牆トレンチ１南側拡張部撹乱。152 は無文銭で、孔はやや歪である。直径 15.7cm、孔径 7.2cm、厚さ 0.06cm、重量 0.5g。H22 表採。153 は無文銭で 152 より若干小さく、一部にひび割れがみられる。直径 13.1cm、孔径 6.5cm、厚さ 0.08cm、重量 0.36g。H19 トレンチ西端拡張部撹乱。



第57図　銭貨

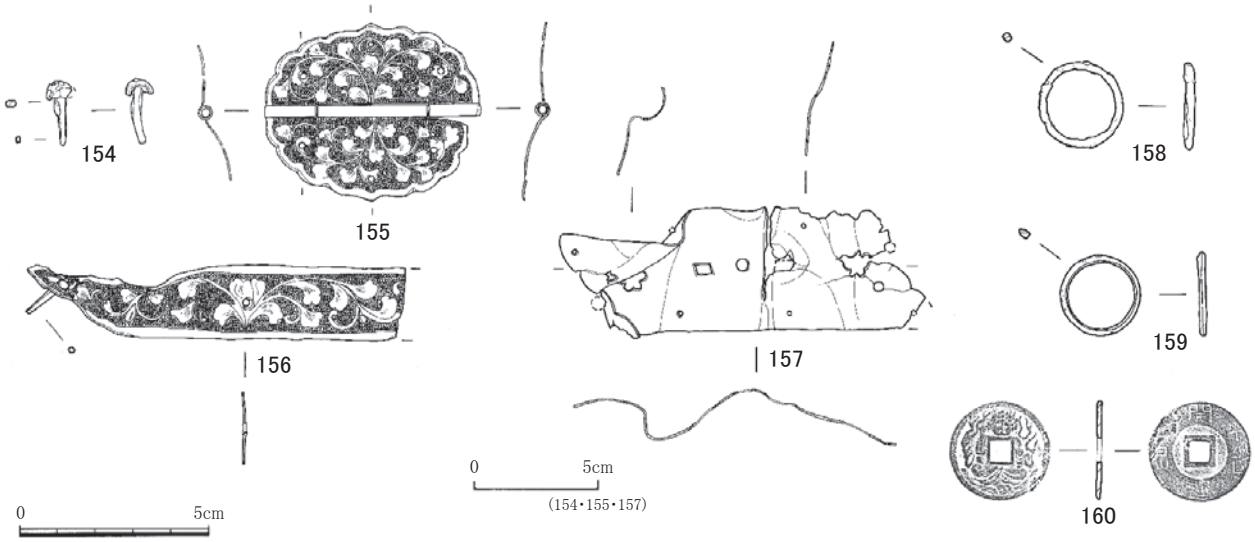


図版 48　銭貨

23. 青銅製品（154～160）

青銅製品は鍵の金具１点、飾り金具（鍵、座金具含む）10 点、飾り金具と思われるもの１点、鋲１点、蝶番１点、鐘３点、ボタン(米軍製含む) ４点、バックル２点、鐶２点、タバコ入れ１点、薬莢１点、お守り１点、器種不明８点の計 37 点が出土した。154～159 には鋲１点、蝶番１点、飾り金具２点、鐶２点、お守り１点を図示し、個々の遺物の特徴は観察表に記した。

155 は唐草の葉の数がやや異なるが、156 とともに円覚寺跡に類例がみられる。また魚々子が密に施されていることから日本製と考えられる。160 は福寶とよばれるお守りと考えられるもので、県内での類例がなく詳細は不明である。



第58図　青銅製品

第35表　青銅製品観察一覧

挿図番号 図版番号		種類	口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	年度	出土地
第58図 図版49	154	鋲	2.59	0.41	0.31	頭部は半球状で、鍍金は残っているが破損により文様などはみられない 。軸断面は方形で、先端がくさび状に尖る。頭部の厚さ1.08cm重量2.07g。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱
	155	蝶番	8.3	6.39	0.1	一部歪んでいるが完形の蝶番で、全体的に鍍金も残り文様も確認できる。形状は木瓜状に近く、一部を筒状に折り曲げ軸受けをつくり、中には軸が残る。文様は枠線の内に魚々子が隙間なく列をなして打たれ、それを切るように唐草が彫られている。軸受け部の厚さ0.52cm重量45.69g。	H20	三門北 撹乱
	156	飾り 金具	10.14	1.91	0.08	一方の端部を欠損するが、全体的に鍍金も残り文様も確認できる。形状は両端が如意頭文を象るものとおもわれ、金具を留めるための鋲孔が3孔あり、うち1つには長軸1.33cm、短軸0.2cm厚さ0.22cm、頭部径0.37cmの鋲が1本付いている。文様は枠線の内に魚々子が隙間なく列をなして打たれ、それを切るように唐草が彫られる。重量9.84g。	H19	東西トレンチ 撹乱
	157	飾り 金具	13.05	4.9	0.9	破損や湾曲がみられ、鍍金や文様は確認できない。両端は魚尾状になると考えられ、金具を留めるための鋲孔が6孔、6～8mm孔が5孔、やや形の崩れた長方形状の孔が2孔、菊花状の孔が2孔確認できる。重量23.70g。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱
	158	鐶	2.29	2.25	0.24	文様等はみられず、接合の痕が確認できる。孔径1.8cm、重量1.46g。	H19	東西トレンチ 撹乱
	159	鐶	22	21.5	2.1	文様等はみられず、接合の痕が確認できる。孔径1.76cm重量1.09g。	H19	東西トレンチ 撹乱
	160	お守り	2.7	2.61	1.5	表面には開運下總國成田山の文字が彫られ、裏面には不動明王が描かれている。重量5.16g。	H22	表採

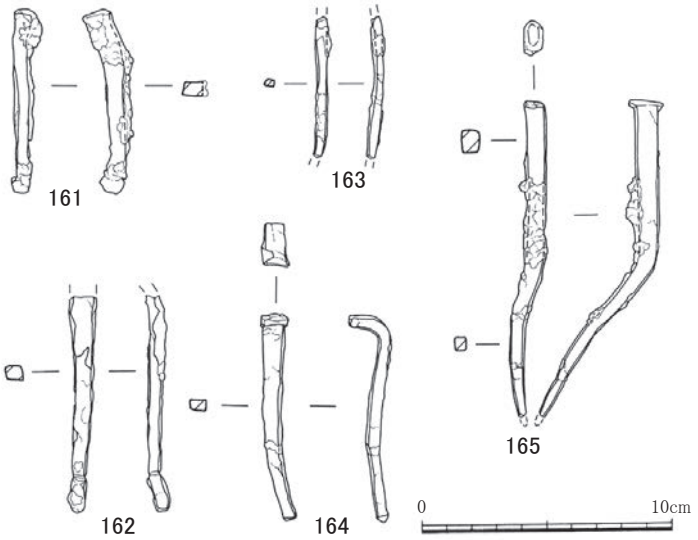
図版 49　青銅製品

24. 鉄製品（161～165）

鉄製品は角釘 68 点、丸釘 25 点、金具 1 点、金具と思われるもの 1 点、釣針 1 点、器種不明 1 点の計 97 点が出土した。161～165 に角釘 5 点を図示し、個々の遺物特徴は観察表に記した。161 は頭部が扁平で、165 は頭部が「T」字状を呈するため巻頭釘と考えられる。

第36表　鉄製品観察一覧

挿図番号 図版番号		種類	口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	年度	出土地
第59図 図版50	161	角釘	7.34	0.8	1.2	全体的に錆膨れが酷く、軸部では錆割れを起こしている。横断面は長方形を呈する。重量16.98g。	H19	東西トレンチ 撹乱
	162	角釘	8.52	1.07	6.8	頭部は欠損しており、端部の形状は錆膨れで判然としない。横断面は長方形を呈する。重量15.25g。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱
	163	角釘	5.63	0.48	0.47	頭部・端部が欠損しており、横断面は正方形を呈する。重量17.04g。	H22	三門 トレンチ20 撹乱
	164	角釘	8.15	1.05	0.58	頭部が逆L字状に折れる形状をしており、横断面は長方形を呈する。重量4.54g。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱
	165	角釘	13.13	0.75	0.87	端部をやや欠損した大型の釘で、横断面は長方形を呈する。重量36.09g。	H20	三門北 撹乱



第59図　鉄製品

図版 50　鉄製品

25. 瓦（166～181）

瓦は撹乱層から明朝系瓦と大和系瓦が総数 881 点出土した。明朝系瓦においては、軒丸瓦 35 点、軒平瓦 16 点、丸瓦 268 点、平瓦 540 点、大和系瓦においては、丸瓦２点、平瓦６点が得られた。それぞれ灰色系と赤色系（褐色を含む）がある。大和系瓦は小破片のため、図化していない。以下、明朝系瓦を種類別に記述する。なお、本報告書では上原静氏の分類（上原 2013）を参考にした。個々の特徴については観察表に記載する。

（1）軒丸瓦：軒丸瓦は 35 点得られた。瓦当文様は、葉や茎が簡略化され花部のみを大きく描く側視２型が得られた。今回は側視１型及び正視型は出土していない。色調別には褐色と赤色が出土した。

（2）軒平瓦：軒平瓦は 16 点得られた。瓦当文様は、花を横から見た文様構図の草花文の側視１型が得られた。色調別には灰色、褐色、赤色が出土した。

（3）丸瓦：丸瓦は 268 点得られた。
ヘラ描き印については、171 において玉縁部頂部に左上から右下方向への斜め１本線のヘラ描きが確認できた。釉については、177 において玉縁部にマンガン釉が施釉されているのが確認できた。漆喰については筒部凸面と側面側に付着するものが最も多い。

（4）平瓦：平瓦は 540 点得られた。
ヘラ描き印については、180 において凸面筒部に垂直方向の１本線のヘラ描きが確認できた。また、広端部においては桶紐綴り圧痕が４～６つ程が確認できた。

第37表　大和系瓦出土状況

丸瓦		平瓦			合計
褐色		褐色			
端部	筒部	狭端部	筒部	広端部	
1	1	2	2	2	8

第38表　明朝系瓦当出土状況

軒丸瓦				軒平瓦				合計
灰色	褐色		赤色	灰色	褐色		赤	
瓦当部	瓦当部	筒部	瓦当部	瓦当部	瓦当部	瓦当部（小型瓦当）	瓦当部	
3	24	2	6	2	6	1	7	51

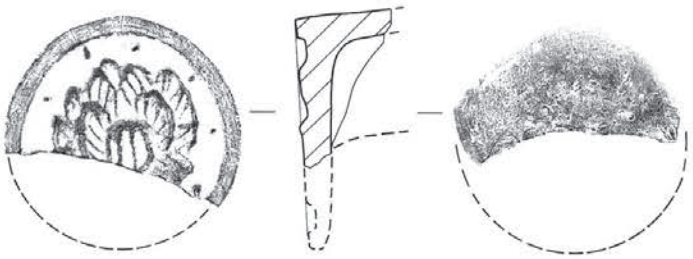
第39表　明朝系丸瓦・平瓦出土状況

丸瓦															
灰色				褐色					赤色					丸瓦合計
玉縁～筒部	玉縁部	筒部	端部	玉縁～端部	玉縁～筒部	玉縁部	筒部	端部	玉縁～端部	玉縁～筒部	玉縁部	筒部	端部	
5	10	5	6	1	13	70	31	30	7	2	46	26	16	268

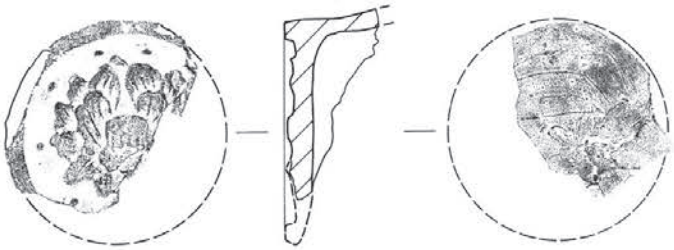
平瓦																	丸平不明			合計
灰色（焼き締め）			灰色			褐色(焼き締め)		褐色			赤色				平瓦合計	灰色	褐色	赤色		
狭端部	筒部	広端部	狭端部	筒部	広端部	筒部	狭端部	狭端部	筒部	広端部	広端部～狭端部	狭端部	筒部	広端部		筒部	筒部	筒部		
1	5	7	29	63	77	1	1	51	59	73	10	68	38	57	540	4	7	3		822

第40表　瓦観察一覧

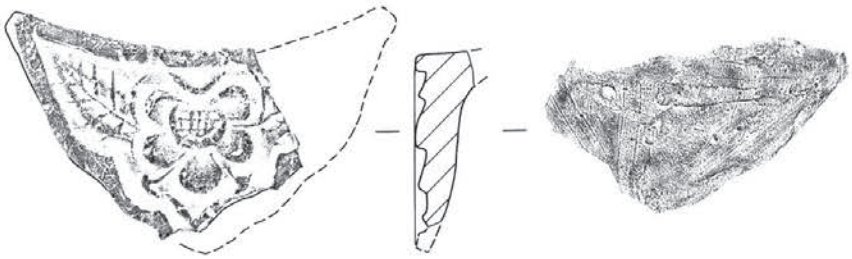
挿図番号 図版番号		種類	部位	観察事項	年度	出土地
第60図 図版51	166	軒丸瓦	瓦当部	明朝系軒丸瓦。色調は褐色。漆喰と炭が付着している。上原：円覚Ⅲb01式（側視2型）。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱
	167	軒丸瓦	瓦当部	明朝系軒丸瓦。色調は赤色。上原：円覚Ⅲa01式（側視2型）。	H20	三門北 撹乱
	168	軒平瓦	瓦当部	明朝系軒平瓦。色調は灰色。上原：円覚ⅢBa01式（側視1型）。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱
	169	軒平瓦	瓦当部	明朝系軒平瓦。色調は褐色。平瓦部と瓦当面に漆喰の付着が見られる。上原：御茶ⅢBa01式（側視1型）。	H19	トレンチ4 撹乱
	170	軒平瓦	瓦当部	明朝系軒平瓦。色調は赤色。上原：御茶ⅢBa01式（側視1型）。	H21	三門北 撹乱
第61図 図版51	171	丸瓦	玉縁～筒部	明朝系丸瓦。色調は灰色。玉縁部には角が1あり。筒部凸面と側面側に漆喰あり。玉縁部頂部に左上から右下方向への斜め1本線のヘラ描きが見られる。	H19	トレンチ4 撹乱
	172	丸瓦	玉縁～筒部	明朝系丸瓦。色調は褐色。玉縁部には角が2つあり。筒部凸面と側目側に漆喰あり。	H20	三門北 撹乱
	173	丸瓦	玉縁～筒部	明朝系丸瓦。色調は褐色。玉縁部には角が1つあり。筒部凸面と側目側に漆喰あり。	H19	トレンチ4 撹乱
第62図 図版52	174	丸瓦	玉縁～筒部	明朝系丸瓦。色調は褐色。筒部凸面と側目側に漆喰あり。	H19	東西トレンチ 撹乱
	175	丸瓦	玉縁～筒部	明朝系丸瓦。色調は赤色。玉縁部には角が1つあり。玉縁端面と凹み面に漆喰あり。	H19	トレンチ4 撹乱
	176	丸瓦	玉縁～筒部	明朝系丸瓦。色調は赤色。凹み面に布目圧痕が見られる。	H19	トレンチ5 撹乱
	177	丸瓦	玉縁～筒部	明朝系丸瓦。色調は赤色。玉縁部には角が1つあり。玉縁部にはマンガン釉が施釉されている。筒部には3本一組の筋が走る。	H19	トレンチ5 撹乱
第63図 図版52	178	平瓦	広端部	明朝系平瓦。色調は灰色。桶紐綴り圧痕が4つ見られる。	H19	東西トレンチ 撹乱
	179	平瓦	広端部	明朝系平瓦。色調は灰色。桶紐綴り圧痕が4つ見られる。凹面左上部と側面に漆喰あり。	H19	トレンチ4 撹乱
	180	平瓦	狭端部	明朝系平瓦。色調は灰色。凸面広端側に横方向の沈線が見られる。凸面筒部に垂直方向の一本線のヘラ描きあり。縫目糸痕も見られる。	H19	東西トレンチ 撹乱
	181	平瓦	広端部～ 狭端部	明朝系平瓦。色調は赤色。広端部には桶紐綴り圧痕が6つ見られる。広端部には角が2つ、狭端部には角が1つあり。	H20	三門北 撹乱



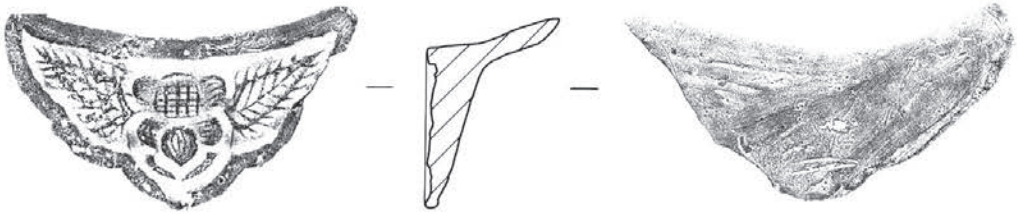
166



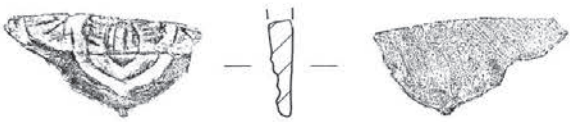
167



168

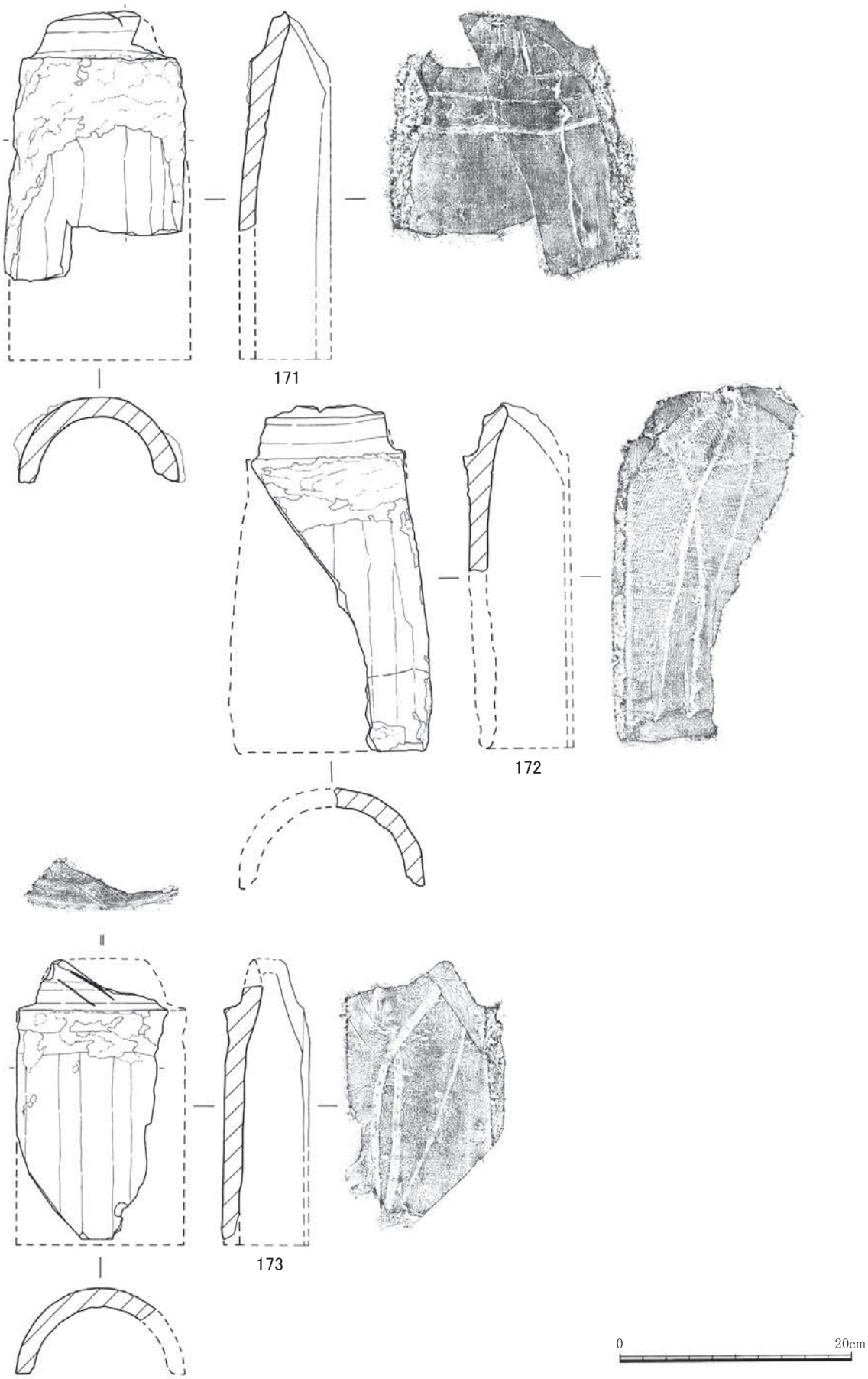


169

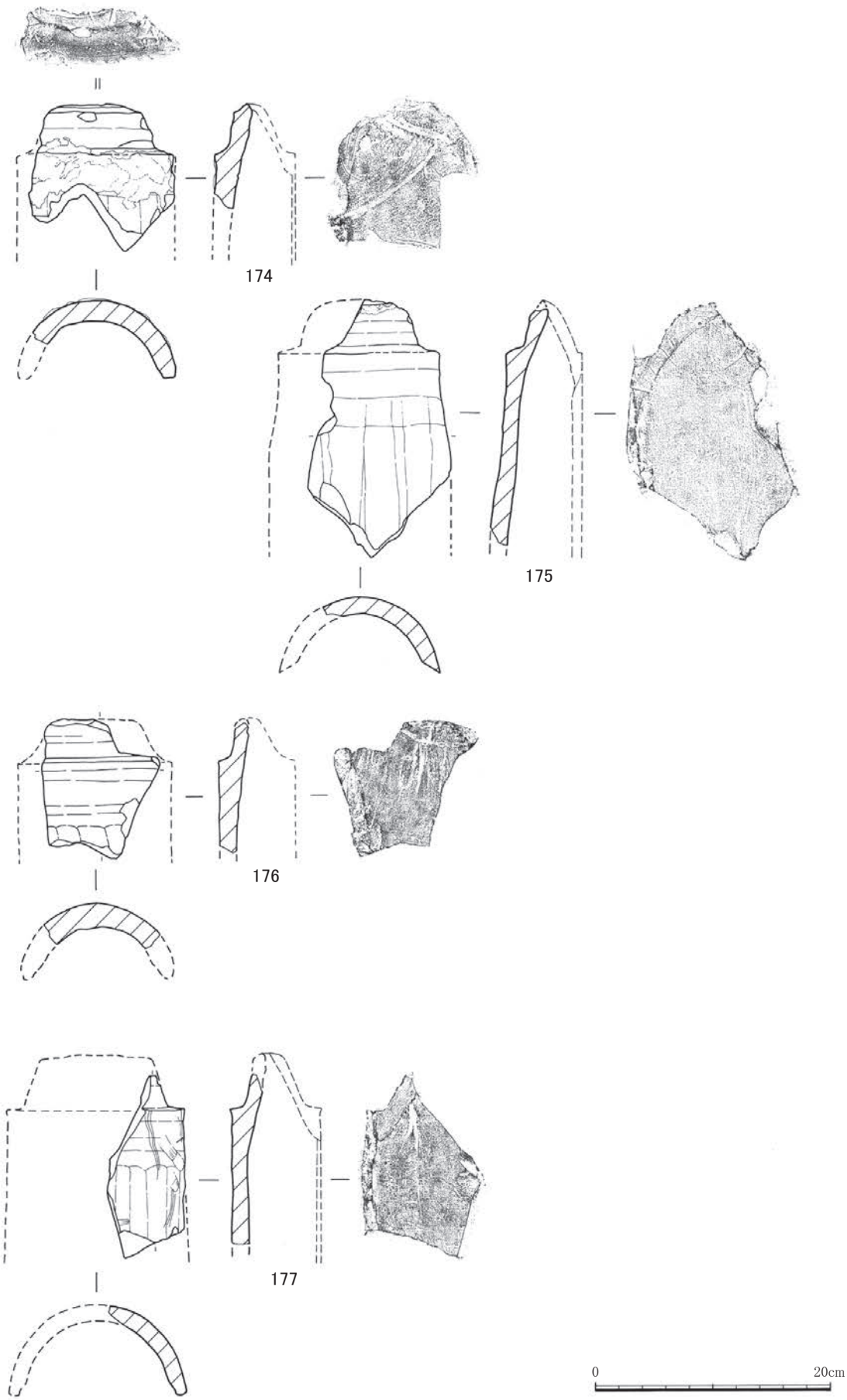


170

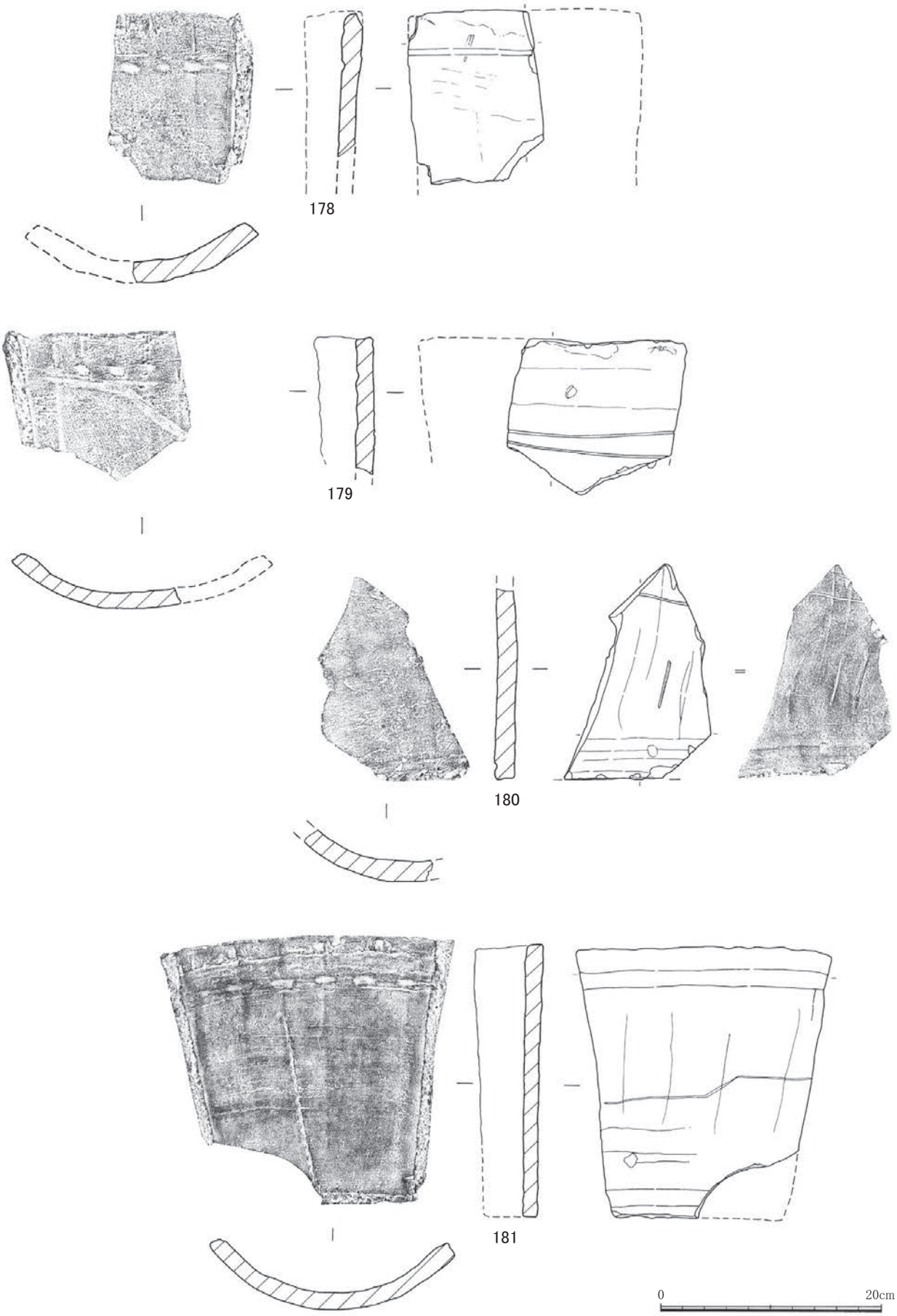
第60図　瓦1



第61図　瓦2



第62図　瓦3



第63図　瓦4

図版 51　瓦1

図版 52　瓦2

26. 塼（182～197）

塼は総数 409 点が出土した。その平面形態から分類して４タイプが得られている。なお、分類は上原静氏の分類（上原 2011）を参考にした。個々の特徴については観察表に記載する。

Ⅰ式：平面に敷き並べるタイプ（182～193）

平面形が正方形と三角形を呈するのが基本形態である。地面及び壁に設置し、床や壁の舗装化粧材として使用されたと考えられる。還元焼成炎の灰色系製品と、酸化炎焼成の赤色系製品の二群に分け、その厚みで細分した。

①灰色製品

1. 正方形

Ａａ類：一辺の長さが 24～26cm で、5～6cm 台の最も厚いタイプ。

Ａｂ類：3～4cm の薄手のタイプ。

2. 三角形

Ｂａ類：5～6cm 台の厚みのあるタイプ。成形には基本的に四角塼を対角線から切り取って二枚にしたもので、切り取った側面に横方向の線状痕が見られる。

Ｂｂ類：3～4cm 台の薄手のタイプ。

②赤色製品

1. 正方形

Ａａ類：一辺の長さが 24～26cm で、5～6cm 台の最も厚いタイプ。

Ａｂ類：3～4cm の薄手のタイプ。

2. 三角形

Ｂａ類：5～6cm 台の厚みのあるタイプ。

Ｂｂ類：3～4cm 台の薄手のタイプ。

182～187 は平面形が正方形を呈する。189～193 は平面形が三角形を呈する。

Ⅱ式：積み重ね用タイプ（194）

平面形が長方形を呈する。地面状に積み上げて設置し、壁に使用されたと考えられる。色調により赤色と灰色があり、その大きさ、厚みなどから数タイプに分けられる。

①灰色製品（褐色製品も含む）

還元焼成炎の灰色製品で、大きくＡ～Ｃの３タイプに分けられる。そしてそれぞれに厚みによる違いが認められる。

Ａ類：短軸約 12cm、長軸約 24cm、厚み 3.4cm のもので、現時点では最小塼である。

Ｂ類：短軸約 17cm、長軸約 31cm、厚み 3.3～3.4cm。また、厚みが 3.3～3.9cm をＢ１、4.0～4.4cm をＢ２に細分できる。

Ｃ類：短軸約 22cm、長軸約 33cm、厚み 3.5～4.4cm。また、厚みが 3.5～3.9cm をＣ１、4.0～4.4cm をＣ２に細分できる。

②赤色製品

酸化炎焼成の赤色製品で、Ａ～Ｄの４タイプに分けられる。そしてそれぞれに厚みによる違いが認められる。

Ａ類：短軸約 11cm、長軸約 31cm、厚み 4.0～4.5cm のもので、灰色側に比べると縦長の形を呈する。

Ｂ類：短軸約 17cm、長軸約 33cm、厚み約 3.6cm の薄手と、4.3cm の厚いものがある。このグループには側面の角を取り除いて丸くしたものがある。

Ｃ類：短軸約 18cm、長軸約 33cm のもので、厚みにより 2 タイプに分けられる。ａ類は 3.0

～3.6cm の薄手と、b 類は 4.0～4.5cm の厚手がある。なお、前者の a 類は僅かであるが、厚み 2.8cm と極薄の種類も見られる。この類型の大きさは灰色群にはみられないものである。
D類：このタイプは完全形は得られていない。短軸が約 19.8cm と最も長く、厚みは約 3.2cm のものと、もう一つは短軸が約 20.5cm、厚みが約 4.3cm のものである。この種類も２種類に細分できる。

194 は平面形が長方形を呈する。

Ⅲ式：端部噛み合わせタイプ（195）
平面形が一般的に長方形で、長軸の側面か短軸の両側面に段を形成し、それぞれを噛み合わせて使用される。地面及び地中に設置し、排水処理施設に使用されたと考えられる。

195 は長軸の側面に段を成形する。

Ⅳ式：下駄状タイプ（196）
棒状やカギ状に整形された下駄状の突起を有する。屋上に設置し、雨水処理に使用されたと考えられる。
196 は長軸に対して垂直に中央に下駄状の突起が付く。

出土塼には窯印の刻印とヘラ印があり、これらは生産工程における生乾きの状態時に記された。刻印は印鑑のような工具による押印文で、ヘラ印は箆状工具により手書きによる点や線状の描き線である。刻印を有するものは１点、ヘラ印を有するものは７点確認できた。以下に特徴を記載する。

１．刻印
188 は側面に圏線が確認できる。圏線内の文字は不鮮明。

２．ヘラ印
182・184・190・192・193 は側面に長い横位の一本線に、斜めの短い一本線が確認できる。
185 は側面に長い横位の一本線に、斜めの短い二本線が確認できる。
191 は側面に横位の一本線を確認。

今回の調査では煉瓦も出土しており、ここでふれておく。煉瓦は 19 点出土し、中には両面と側面に漆喰が付着しているものも確認された。

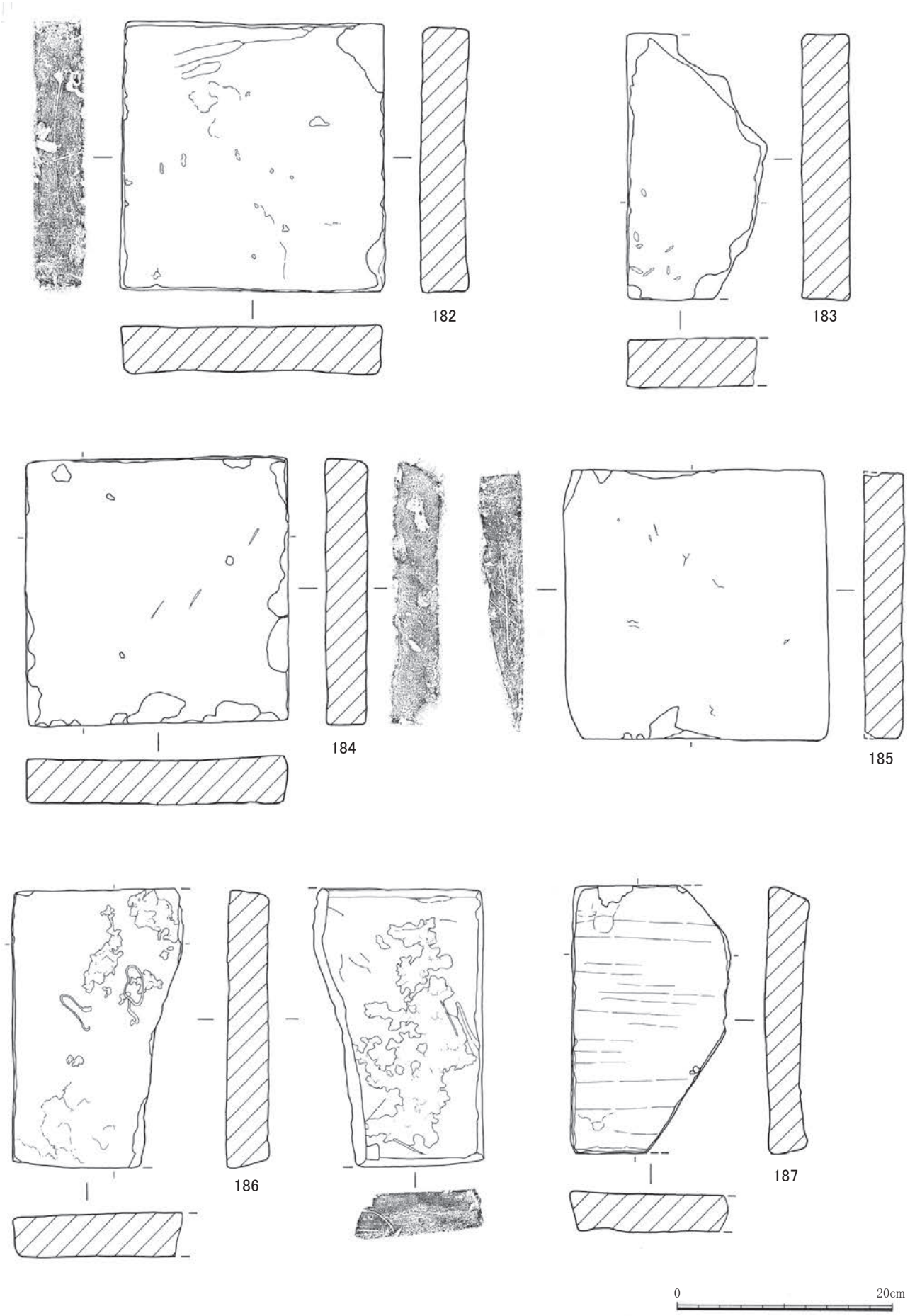
第41表　塼出土状況

灰色									褐色									
ⅠAa	ⅠAb	ⅠA･Ba	ⅠA･Bb	ⅠBa	ⅠBb	Ⅲ	Ⅳ	分類不明	ⅠAa	ⅠAb	ⅠA･Ba	ⅠA･Bb	ⅠBa	ⅠBb	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	分類不明
2	5	13	30	1	4	4	5	17	2	26	24	111	2	5	1	7	4	59

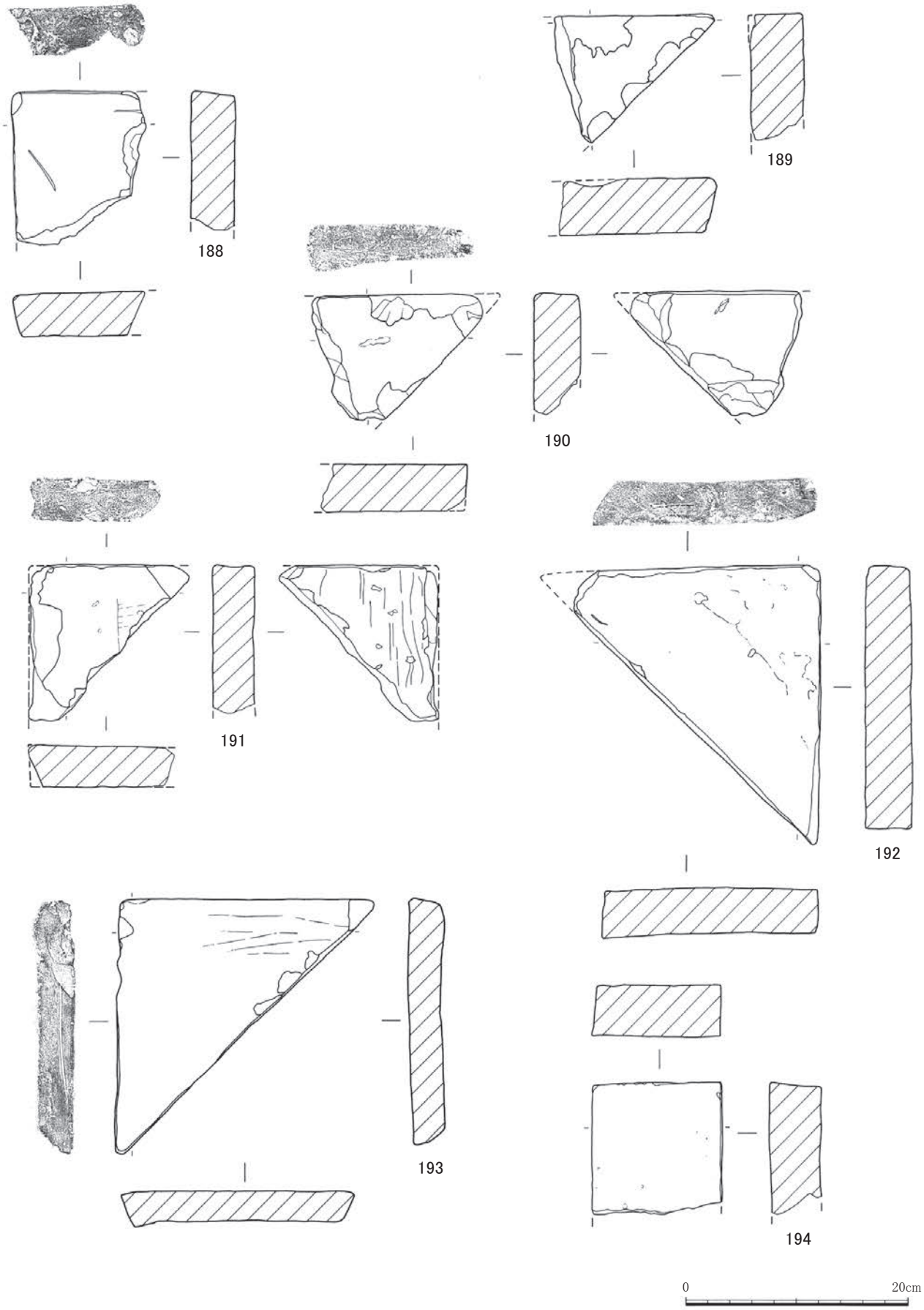
赤色					合計
ⅠAb	ⅠA･Ba	ⅠA･Bb	ⅠBb	分類不明	
26	2	42	2	15	409

第42表　塼観察一覧

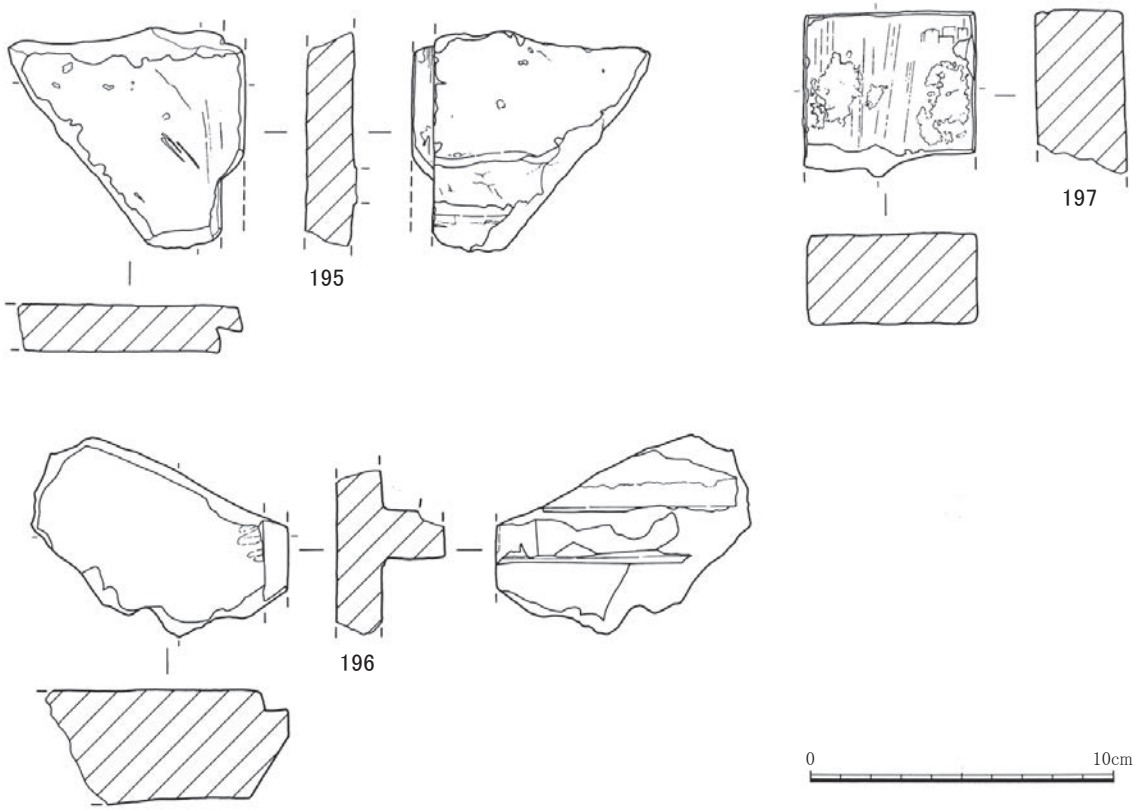
挿図番号 図版番号		種類	部位	観察事項	年度	出土地
第64図 図版53	182	塼	角4有り	ⅠAa式。色調は灰色。表面は撫で調整は良好。裏面は粗面。側面にヘラ印あり。	H20	三門北 撹乱
	183	塼	角2有り	ⅠAa式。色調は灰色。表面は撫で調整が良好で、滑らかである。裏面は粗面。	H19	東西トレンチ 撹乱
第64図 図版54	184	塼	角4有り	ⅠAb式。色調は褐色。表面は撫で調整が良好。裏面は粗面。側面にヘラ印あり。	H20	三門北 トレンチ7 撹乱
	185	塼	角4有り	ⅠAb式。色調は褐色。表面は撫でが施され、やや凹面を呈する。裏面は粗面。側面にヘラ印あり。	H20	三門北 撹乱
	186	塼	角2有り	ⅠAb式。色調は赤色。表面は撫で調整が良好だが、やや凹面を呈する。裏面は粗面で、漆喰あり。	H19	東西トレンチ 撹乱
	187	塼	角2有り	ⅠAb式。色調は赤色。表面は撫で調整が良好で、滑らかである。裏面は粗面。	H24	トレンチ24 漆と一括 10a層
第65図 図版54	188	塼	角1有り	ⅠA・Bb式。色調は赤色。表面は平坦に仕上げられるが、風化の為か、アバタ状を呈する。裏面は粗面。側面に刻印あり。	H20	三門北 トレンチ10 石積1 撹乱
	189	塼	角1有り	ⅠBb式。色調は灰色。表面は撫で調整が良好で滑らかだが、やや凹面を呈する。裏面は粗面。	H19	東西トレンチ 撹乱
第65図 図版55	190	塼	角1有り	ⅠBa式。色調は褐色。表面は撫で調整が良好。裏面は粗面。側面にヘラ印あり。	H19	石敷 南側拡張部 撹乱
	191	塼	角1有り	ⅠBb式。色調は灰色。表面は撫で調整が良好で滑らか。裏面は粗面。側面にヘラ印あり。	H19	石敷 南側拡張部 撹乱
	192	塼	角2有り	ⅠBb式。色調は褐色。表面は撫で調整が良好。裏面は粗面。側面にヘラ印あり。	H20	三門北 撹乱
	193	塼	角3有り	ⅠBb式。色調は赤色。表面は撫で調整が良好で、滑らかである。裏面は粗面。側面にヘラ印あり。	H24	トレンチ24 漆と一括 10a層
	194	塼	角2有り	Ⅱ式。色調は褐色。表面は撫で調整が良好で、滑らかである。裏面は粗面。	H19	撹乱
第66図 図版55	195	塼	破片	Ⅲ式。色調は灰色。長軸の一端が斜めに伸びていることより、平面形は三角形になる可能性あり。長軸の側面に段を成形する。両面は丁寧に撫でを施し、滑らかである。	H19	東西トレンチ 撹乱
	196	塼	破片	Ⅳ式。色調は褐色。表面の撫で調整は良好。長軸に対して中央に垂直に下駄状の突起が付く。	H19	撹乱
	197	煉瓦		両面と側面に漆喰が付着している。	H19	トレンチ5 撹乱



第64図　塼1



第65図　塼2



第66図　塼3

図版 53　塼1

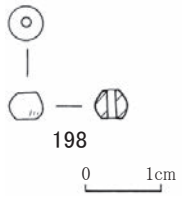
図版 54　塼2

図版 55　搏3

27. ガラス製品（198）

表土・撹乱層から出土したガラス製品は総数 104 点で、ガラスビーズ、皿、瓶、蓋、アンプル等が出土した。ガラスビーズ以外の製品については集計のみ行い、図化していない。なお個々の出土数については集計表を参照されたい。

ガラスビーズ（198）は円形を呈し、色調は緑色。螺旋状の筋が観察でき、保存状態は良好である。厚さ 0.4cm。



第 67 図
ガラス製品

図版 56
ガラス製品

第43表　ガラス製品出土状況

ビーズ	皿	瓶	薬瓶	目薬瓶	アンプル	蓋	撹拌棒	薬棒	ガラス棒	温度計	注射	ライターか	器種不明	合計
1	5	62	1	1	9	3	1	1	1	1	2	1	15	104

第４節　自然遺物

１. 貝類遺体

今回の調査では、貝類遺体も採集されている。その詳細について巻貝類等は第 44 表に、二枚貝類は第 45 表に示した。

＜貝の生息地の分類＞

外洋～内湾	水　深	底　質
Ⅰ 外洋・サンゴ礁域 Ⅱ 内湾・転石地域 Ⅲ 河口干潟・マングローブ域	0 潮間帯上部 （Ⅰではノッチ、Ⅲではマングローブ） 1 潮間帯中・下部 2 亜潮間帯上縁部（Ⅰではイノー） 3 干潮（Ⅰにのみ適用） 4 礁斜面およびその下部	a 岩盤 b 転石 c 岩礫底、砂泥底、砂底 d マングローブ植物上 e 淡水の流入する礫底
Ⅳ 淡水域	5 止水 6 流水	
Ⅴ 陸行き	7 林内 8 林内・林縁部 9 林縁部 10 海浜域	
Ⅵ その他	11 打ち上げ物 12 化石	

第44表　貝類出土状況1（巻貝）

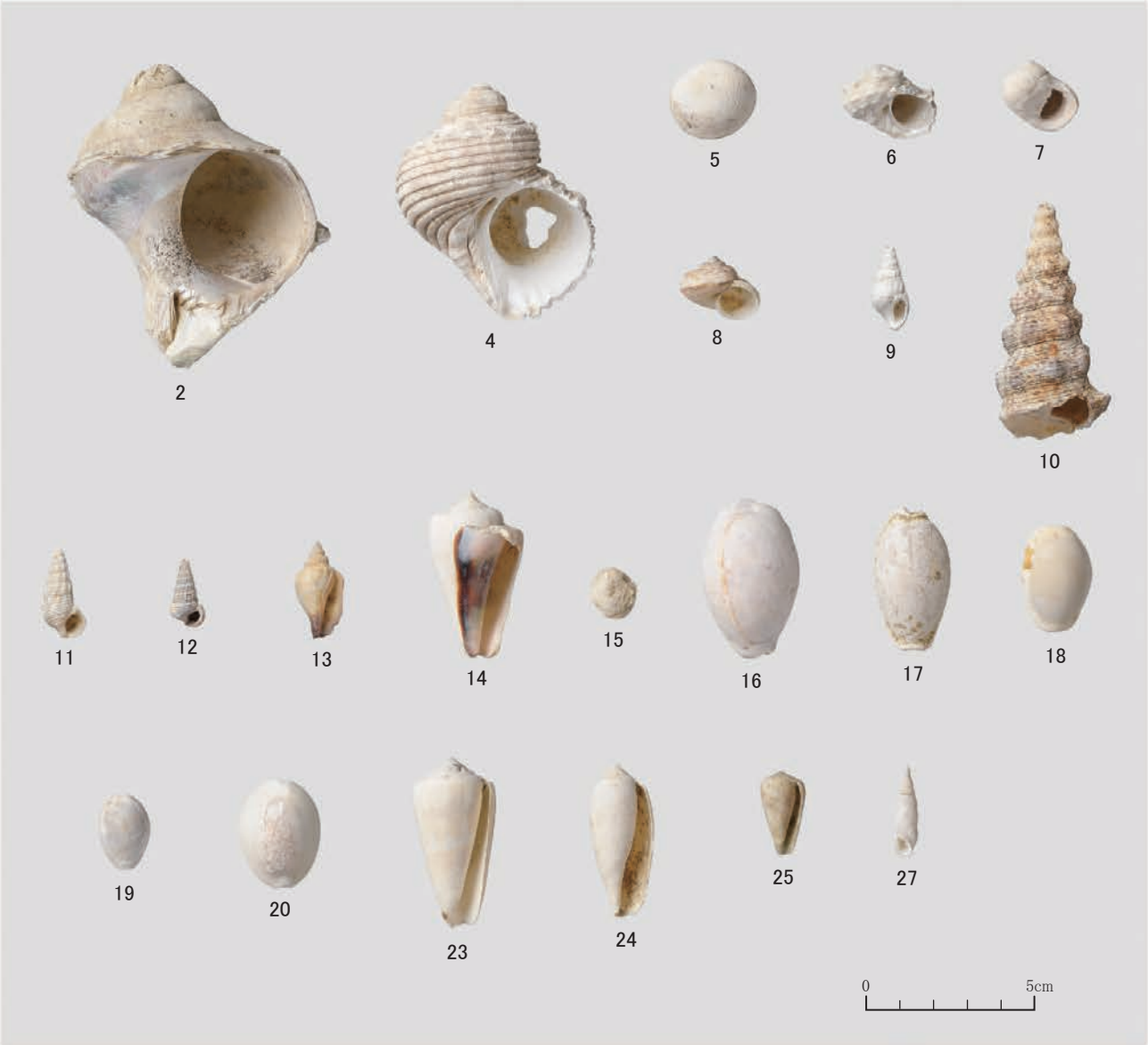
番号	網名	科名	種名	生息地	右掖門地区															南側石牆地区																														撹乱			合計			個体数
					トレンチ2 西端拡張部						石積み前			石敷き						トレンチ22			トレンチ23			トレンチ24																					不明									
					クチャ混じり造成土			炭混じり土			造成土			上面			清掃中			6層			7層			5層			5・7層			7層			7・9層			10a層			10a・10b層			15層												
					完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	
1	腹足綱	ニシキウズガイ科	サラサバティ	Ⅰ-4-a																																																2	0	0	2	1
2		サザエ科	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a																		1						1			1									1			1						1		3	10	0	3	16	3
3			ヤコウガイの蓋																												1												1			1					3	3	0	3	6	3
4			チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a													1							1								1									2	2				1			3	4	2	6	7	4	13
5			チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a				1																											1						2									4	1		8	1	0	9
6			カンギク	Ⅱ-1-b																																					1									2	2		3	2	0	5
7		アマオブネガイ科	コシダカアマガイ																																															1			1	0	0	1
8		ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8											1																																			4	1		4	2	0	6
9		トウガタカワニナ科	トウガタカワニナ	Ⅳ-5																												1											1										1	0	1	1
10		オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c																																															1		0	1	0	1
11		ウミニナ科	ウミニナ																																															1			1	0	0	1
12		フトヘナタリ科	ヘナタリ																																															1			1	0	0	1
13		ソデボラ科	オハグロガイ	Ⅱ-2-c																																														4			4	0	0	4
14			マガキガイ	Ⅰ-2-c																																														1	1	1	1	1	1	2
15		スズメガイ科	カワチドリ																																															1			1	0	0	1
16		タカラガイ科	ヒメホシダカラ																																															2		1	2	0	1	2
17			ヒロクチダカラ																																															1			1	0	0	1
18			コモンダカラ	Ⅰ-1-a																																														1			1	0	0	1
19			ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a																																					1									5			6	0	0	6
20			ハナマルユキダカラ	Ⅰ-3-a																																														2			2	0	0	2
21			タカラガイ科不明																															1																			0	0	1	1
22		フジツガイ科	ホラガイ	Ⅰ-4-a			1																														1															2	0	0	4	1
23		イモガイ科	ヤキイモガイ	Ⅰ-2-c																																														1			1	0	0	1
24			シロアンボイナ																																															1			1	0	0	1
25			アジロイモ	Ⅱ-2-c																																														1			1	0	0	1
26			イモガイ科不明																																																1	1	0	1	1	1
27		キセルガイ科	ツヤギセルガイ																																															3			3	0	0	3
28		アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ																																																	4	0	0	4	1
29		マイマイ科不明																																																		2	0	0	2	1
30	巻貝不明												1																																							4	0	0	5	1
合計					0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	2	2	0	1	1	0	1	0	0	1	4	2	5	0	0	1	1	0	1	39	17	32	49	21	48	76

※ 完形と殻頂を合計し個体数とした。但し、破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた。

第45表　貝類出土状況2（二枚貝）

出土地 番号/綱名/科名/種名/生息地					右掖門地区															南側石牆地区																									攪乱					合計					個体数
					石積み前					石敷き										トレンチ24										トレンチ24										不明															
					造成土					上面					清掃中					7層					7・9層					10a層					10a・10b層																				
					完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	
					左	右	左	右		左	右	左	右		左	右	左	右		左	右	左	右		左	右	左	右		左	右	左	右		左	右	左	右		左	右	左	右		左	右	左	右		左	右	左	右		
1	二枚貝綱	フネガイ科	リュウキュウサルボウ	Ⅱ-2-c																		1																												0	0	1	0	0	1
2		イタヤガイ科	ホタテガイ																																														1	0	0	0	0	1	1
3			イタヤガイ科不明											1					2															1															2	0	0	0	0	6	1
4		ウミギク科	メンガイの一種																																														1	0	0	0	0	1	1
5		イタボガキ科	カキの一種																																										1				2	1	0	0	0	2	1
6		ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c																																									5	5				5	5	0	0	0	5
7		ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ-2-c																																										1	1		1	0	1	1	0	1	1
8			カワラガイ	Ⅱ-2-c																																												2	1	0	0	0	2	1	2
9		シャコガイ科	ヒメシャコガイ	Ⅰ-2-a																																									1					1	0	0	0	0	1
10			ヒレシャコガイ	Ⅰ-2-c																				1					1									1										1		0	0	0	2	2	2
11			オオシラナミ																																										2					2	0	0	0	0	2
12			シャコガイ科不明																																														3	0	0	0	0	3	1
13		チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c																																1									1	1		1		1	2	0	1	0	3
14		ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅱ-1-c																																									1					1	0	0	0	0	1
15		シオサザナミ科	リュウキュウマスオ	Ⅱ-1-c																																													1	0	0	0	0	1	1
16		マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-1-c																																					1										1	0	0	0	0	1
17			アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c												1																													1	3		2		1	4	0	2	0	6
18			ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c												2																													2	2				2	4	0	0	0	4
19			オイノカガミ	Ⅱ-1-c																																										2				0	2	0	0	0	2
20			ハマグリの一種	Ⅱ-1-c					1																																	1									0	1	0	0	1	1
21			マルスダレガイ科不明																1																													1		0	0	0	1	1	1
22	二枚貝不明													2																																			3	0	0	0	0	5	1
合計					0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	3	0	0	3	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	14	14	1	7	15	15	19	2	8	25	40

※ 右殻、左殻それぞれの完形と殻頂を合計し多い方を個体数とした。但し、破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた。



図版 57　貝類遺体（上 : 巻貝　下 : 二枚貝） ※ 番号は表と一致。

２.脊椎動物遺体

今回の調査では、脊椎動物遺体も採集されており、魚類、鳥類、哺乳類が確認されている。詳細については以下のとおりである。

＜検出された動物遺体種名一覧＞

脊椎動物門　Phylum VERTEBRATA

軟骨魚綱　Class Chondrichthyes

メジロザメ目　Order Carcharhiniformes

メジロザメ科　Family Carcharhinidae

属・種不明　Gen.et sp.indet.

硬骨魚綱　Class Osteichthyes

スズキ目　Order Perciformes

ハタ科　Family Serranidae

属・種不明　Gen.et sp.indet

ベラ科　Family Labridae

コブダイ　*Semicossyphus reticulatus*

鳥綱　Class Aves

キジ目　Order Galliformes

キジ科　Family Phasianidae

ニワトリ　*Gallus gallus var. domesticus*

科・属不明　Fam.et gen.indet

哺乳綱　Class Mammalia

食肉目　Order Carnivora

イヌ科　Family Canidae

イヌ　*Canis familiaris*

偶蹄目　Order Artiodactyla

イノシシ科　Family Suidae

ブタ　*Sus scrofa var. domesticus*

ウシ科　Family Bovidae

ウシ　*Bos Taurus*

ヤギ　*Capura hirucus*

第46表　魚類出土一覧

種類	部位	左右	出土地	個数
メジロザメ	脊椎骨	―	撹乱	1
	脊椎骨	―	撹乱	1
	脊椎骨	―	撹乱	1
ハタ科	主上顎骨	左	右掖門地区 トレンチ2 西端拡張部 炭混り土	1
種不明	脊椎骨	―	撹乱	1

第48表　トリ出土一覧

部位	左右	残存部位	出土地	個数
橈骨	右	近位端	撹乱	1
尺骨	左	近位端	撹乱	①
	左	骨体	撹乱	1
中手骨?	不明	骨体～遠位端	南側石牆地区 トレンチ24　7層	1
脛骨	右	近位部～遠位端	撹乱	①
	左	骨体	撹乱	1
	左	骨体	撹乱	1
	右	骨体	右掖門地区 石積み裏込め内	1
趾骨	―	完存	撹乱	1

注　○：キズあり

第47表　ニワトリ出土一覧

部位	左右	残存部位	出土地	個数
烏口骨	右	近位部	撹乱	1
上腕骨	右	骨体	撹乱	5
	左	骨体	撹乱	2
尺骨	右	骨体	撹乱	1
		遠位端	撹乱	1
	左	骨体	撹乱	1
大腿骨	右	完存	撹乱	1
		近位端～骨体	撹乱	1
	左	骨体	撹乱	1
頸骨	右	近位部～骨体	撹乱	1
		骨体～遠位部	撹乱	1
		骨体～遠位端	撹乱	1
		遠位骨端のみ	撹乱	(1)
	左	骨体	撹乱	2
		遠位端	撹乱	1
中足骨	右	骨体～遠位部	撹乱	♀1
	左	骨体	撹乱	♀1
		骨体～遠位端	撹乱	♂1 ♀1
趾骨	―		撹乱	1

注　( ):破片、♀:メス、♂:オス

第49表　イヌ出土一覧

部位	左右	残存部位	個数	出土地
頭蓋骨	左～右	頭頂骨～前頭骨	1	撹乱
	右	鼻骨	1	
	左	鼻骨	1	
	—	蝶形骨体	1	
上顎骨	右	I^1	1	
		I^2	1	
		I^3	1	
		C	1	
		P^1	1	
		$P^{3,4}M^{1,2}$	1	
	左	I^1	1	
		I^2	1	
		$P^{3,4}M^{1,2}$	1	
下顎骨	右	C	1	
		$P_{2,3,4}M_1$	1	
		I_2	1	
		I_3	1	
	左	$CP_{1,2,3,4}M_{1,2}$	1	
		I_1?	1	
		I_3	1	
椎体	—	環椎	1	
	—	頸椎	2	
	—	胸椎	10	
	—	尾椎	4	
肋骨	右	近位端	7	
		近位端～骨体	1	
	左	近位端	5	
	不明	骨体	11	
		遠位端	4	
肩甲骨	右	骨体～遠位端	1	
	左	骨体～遠位端	1	
上腕骨	右	完存	1	
	左	近位骨端はずれ～遠位端	1	
橈骨	右	完存	1	
	左	完存	1	
尺骨	右	近位端～骨体	1	
	左	近位端～骨体	1	
中手骨	右	Ⅱ　完存	1	
		Ⅲ　完存	1	
		Ⅳ　完存	1	
		Ⅴ　近位部～遠位端	1	
	左	Ⅱ　完存	1	
		Ⅲ　完存	1	
		Ⅳ　完存	1	
		Ⅴ　近位端	1	
寛骨	右	腸骨部～坐骨	1	
	左	腸骨部	1	
大腿骨	右	近位端	1	
	左	近位骨端はずれ～遠位端	1	
脛骨	右	完存	1	
	左	近位端～遠位骨端はずれ	1	
踵骨	右	近位端～遠位部	1	
	左	完存	1	
距骨	左	完存	1	
中足骨	右	Ⅱ　完存	1	
		Ⅲ　完存	1	
		Ⅳ　近位端～骨体	1	
		Ⅴ　完存	1	
	左	Ⅱ　完存	1	
		Ⅳ　完存	1	
		Ⅴ　完存	1	
中手・中足骨	不明	骨体～遠位端	1	
基節骨	—	完存	8	
中節骨	—	完存	2	
末節骨	—	完存	1	
部位不明	—		1	
合 計			110	

第50表　ブタ出土一覧

部位	左右	残存部位	出土地	個数
下顎骨	左	下顎骨	撹乱	1
肋骨	左	骨体	撹乱	1
	不明	骨体	南側石牆地区 トレンチ24 10a・10b層	1
			撹乱	1
		破片	撹乱	1
肩甲骨	左	骨体	撹乱	1
	不明	骨体	撹乱	1
上腕骨	右	破片	撹乱	2
大腿骨	右	破片	撹乱	1
	左	破片	撹乱	1
脛骨	右	近位部～骨体	撹乱	1
		遠位部	南側石牆地区 トレンチ24 10a・10b層	1
	左	骨体	撹乱	1
踵骨	右	近位端はずれ～骨体	撹乱	1
	左	近位部～遠位部	右掖門地区 トレンチ2 西端拡張部 炭混り土	1
中手・中足骨	不明	骨体～遠位骨端はずれ	右掖門地区 北側サブトレ	1
中足骨	右	Ⅱ　遠位骨端はずれ	撹乱	1
	左	Ⅱ　近位端～遠位部	撹乱	1

第51表　ウシ出土一覧

部位	左右	残存部位	出土地	個数
下顎骨	右	M_1	南側石牆地区 トレンチ24　12層	1

第52表　ヤギ出土一覧

部位	左右	残存部位	出土地	個数
下顎骨	右	I_1	南側石牆地区 トレンチ24　7層	1
		$dm_{2,3,4}M_1$	撹乱	{①}
上腕骨	左	遠位部	右掖門地区 トレンチ2　西端拡張部　炭混じり土	1

注　○：キズあり、{　}:幼

第53表　種不明出土一覧

部位	左右	残存部位	出土地	個数
椎体	不明	椎体	撹乱	1
肋骨	不明	骨体	撹乱	1
大腿骨	左	破片	撹乱	1
中手・中足骨?	不明	破片	撹乱	1
部位不明	不明	骨体	撹乱	2
	不明	破片	南側石牆地区 トレンチ24 3層	1
	不明	破片	南側石牆地区 トレンチ24 10a・10b層	1
	不明	破片	撹乱	4

図版 58　脊椎動物遺体1

メジロザメ 1. 脊椎骨　**サカナ** 2. ハタ科 左 主上顎骨　3. 左 尺骨 キズあり　4. 左右不明 中手骨　5. 右 脛骨 キズあり　6. 趾骨　**ニワトリ** 7. 右 大腿骨　8. 右 脛骨　9. 左 中足骨 ♀　10. 左 中足骨 ♂　**イヌ** 11. 左右 頭頂骨～前頭骨　12. 右 上顎骨$P^{3,4}M^{1,2}$　13. 左 下顎骨 $CP_{1,2,3,4}M_{1,2}$　14. 環椎　15. 頸椎　16. 頸椎　17. 胸椎　18. 左 肩甲骨　19. 右　上腕骨　20. 左 橈骨

図版 59　脊椎動物遺体2

イヌ 21. 右 尺骨　22. 右 中手骨 Ⅱ　23. 右 中手骨 Ⅲ　24. 右 中手骨 Ⅳ　25. 右 中手骨 Ⅴ　26. 右 寛骨　27. 左 大腿骨　28. 右 脛骨　29. 左 踵骨　30. 左 距骨　31. 右 中足骨 Ⅱ　32. 右 中足骨 Ⅲ　33. 右 中足骨 Ⅳ　34. 右 中足骨 Ⅴ　35. 基節骨　36. 中節骨　37. 末節骨　**ブタ** 38. 右 中手骨 Ⅱ　**ウシ** 39. 右 下顎骨 M_1　**ヤギ** 40. 右 $dm_{2,3,4}M_1$ 幼 キズあり　41. 左 上腕骨

第54表　遺物出土状況

出土地		種類	中国産													タイ産			ベトナム産白磁	東南アジア産	薩摩か朝鮮産陶器	本土産							沖縄産施釉陶器	初期沖縄産無釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	硬質土器	土器	西洋陶器か	産地不明	漆製品	石製品	玉製品	骨製品	貝製品	円盤状製品	煙管	銭貨	青銅製品	鉄製品	大和系		明朝系					塼	ガラス製品	漆喰	石材	合計
			青磁	白磁	染付	青磁染付	褐釉陶器	無釉陶器	褐釉磁器	瑠璃釉	色絵	三彩	翡翠釉	天目	陶器	青磁	褐釉陶器	半練土器				青磁	白磁	染付	色絵	磁器	近現代磁器	陶器																		丸瓦	平瓦	役瓦（飾り瓦）	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	丸平不明				
右掖門地区	平成18年度	トレンチ1　石敷1　直上	3	3	9		1								1									2			1		6	1	3				2										3					3									38
	平成18年度	トレンチ1　石敷2　溝内	2	1	4		2																	1				1	1								1																					13
	平成19年度	トレンチ2　下層　造成土		2	2		1																						1		2				2																2					12
	平成19年度	トレンチ2　西端拡張部 炭混り土	1	1	3		3										1												1						1				1				1								5	3					21
	平成19年度	トレンチ2　西端拡張部 クチャ混り造成土			1																								1																												2
	平成19年度	西端側拡張部 クチャ混り造成土層																																											1											1
	平成19年度	石積み前																																	1								1								7		3				12
	平成19年度	石積み前　褐色土		2																																																				2
	平成19年度	石積み前　造成土	2		2		4	1									1																		1													1			2				8	22
	平成19年度	石積み　裏込め内			1																							2			1																							1		5
	平成19年度	石敷		2	5		1				1						1				4							1	6						2		1														3	2		2			31
	平成19年度	石敷　上面	1	5	8													1			1						1		4		1						1								1				1		1	6		2			34
	平成19年度	石敷　南溝西端		1			1																										2		2																11					17
	平成19年度	石敷　南溝西端 クチャ混層の下層	1		1		1										1																										1														5
	平成19年度	石敷　南溝西端 クチャ混層																															1																								1
	平成19年度	石敷　縁石南側下																																	1																						1
	平成22年度	トレンチ19　サブトレ1　6層	2		2		10																								1				3									1					1	2	10	8				4	44
	平成22年度	トレンチ19　サブトレ1　9層	2																																1															1	1		3			1	9
	平成22年度	トレンチ19　サブトレ2　6層					3																												1															1			1				6
	平成22年度	トレンチ19　サブトレ3　6層	1				1																																										3	4		1			1	11
	平成22年度	トレンチ19　サブトレ3　8層	1																																2															1	3		1				8
	平成22年度	トレンチ19　サブトレ3　9層					1																	1											1														1		1			5				10
	合計		16	17	38	0	29	1	0	0	1	0	0	0	1	0	4	1	0	0	5	0	0	4	0	0	2	4	20	1	8	1	2	0	20	0	3	0	1	0	0	0	0	1	3	3	2	0	0	0	7	2	26	49	0	18	1	0	14	305
南側石牆地区	平成22年度	トレンチ22　6層		2	7		5															1		1				5		4	14			1													1		1		8	15	1	7			1	74
	平成22年度	トレンチ22　7層直上																																																		2	1		1				4
	平成22年度	トレンチ23　7層	2	4	46		6		1															10			1	18	2	9	56	2										1					1	1			1	15	26		8			3	213
	平成24年度	トレンチ24　裏込め内			2		1			1																		2	1			1														1							1	2					1	13
	平成24年度	トレンチ24　3層		1	10		2			1																		6	4	1	13																			1		4	3		5			1	52
	平成24年度	トレンチ24　4層 上面			1		1																					1			5						2															2	2					14
	平成24年度	トレンチ24　4層			2		2		1								1											2		1	8						3															7	5		2			34
	平成24年度	トレンチ24　5層		1	4																			2						3	7								1						1	1						3	13		24			1	61
	平成24年度	トレンチ24　6層			1						1													1																																	3
	平成24年度	トレンチ24　5･7層		3	1		7																					7		6	12				1		11		1													10	35		12			2	108
	平成24年度	トレンチ24　7層	6	14	52		18	1		1							1		1		6			20		2	2	20	2	24	68	1	1	1				2							1					1	2	30	52		19			2	350
	平成24年度	トレンチ24　8層																																																1						1
	平成24年度	トレンチ24　7･9層	4	5	17		2				1													7		2		10	1	1	21	1			1		1														1	11	13		2		1	3	105
	平成24年度	トレンチ24　9層	1	1	12		1	1																1				7			8																			1		2	13		1			1	50
	平成24年度	トレンチ24　10a層	1	7	18		7									1								6				5		1	33				1			2			1				2			1	2		26	44	5	9			3	175
	平成24年度	トレンチ24　10a･10b層	5	10	35		15		2	1		2	1	1	1									26				26	9	20	82	2	2	1	1		1							2					1		1		30	42		16			8	343
	平成24年度	トレンチ24　漆一括　10a層	1	1	5																									1		1															2						4	5		2			1	23
	平成24年度	トレンチ24　10c層		3	2												1													2	1																					5	14		1			1	30
	平成24年度	トレンチ24　12層	3	2	2																										1		1		2																	6	6						23
	平成24年度	トレンチ24　13層					1																																														4					5
	平成24年度	トレンチ24　14層																																																		1		1				2
	平成24年度	トレンチ24　15層					5																							2	3																					3	10		4				27
	平成24年度	トレンチ24　16層					1																																																		1
	合計		23	54	217	0	74	2	4	4	2	2	1	1	1	1	3	0	1	0	6	1	0	74	0	4	3	109	19	75	332	8	4	3	6	0	18	0	6	0	0	0	2	2	1	3	4	1	3	1	8	4	170	305	6	114	0	1	28	1711
撹乱			84	78	264	2	89	11	5	8	14	2	1	1			3	1		3		1	3	39	1	3	351	97	551	39	359	67	10	1	28	1	2	1	14	3	2	15	14	1	33	37	97	2	6		35	16	268	540	14	409	104		72	3802
合計			123	149	519	2	192	14	9	12	17	4	2	2	2	1	10	2	1	3	11	2	3	117	1	7	356	210	590	115	699	76	16	4	54	1	23	1	21	3	2	15	16	4	37	43	103	3	9	1	50	22	464	894	20	541	105	1	114	5818

第５章　円覚寺跡の遺物の科学分析の結果

本多貴之、湯浅健太、宮腰哲雄
明治大学大学院理工学研究科応用化学専攻

1. 概要

本研究報告は、円覚寺跡から出土した「軟質の焼物の漆塗りの壺」と「赤色の木片」の２点について科学分析した結果についてまとめた。

2. 実験

2-1. 分析試料について

「赤色の木片」（試料 No.105-2）図版 60

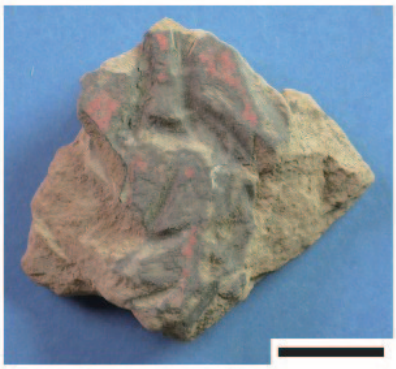
円覚寺三門北地区の撹乱層から得られた資料で、発掘の担当者は三門の建物に関わる可能性もあると考えて取り上げていた。

「軟質の焼物・壺」（試料No.196-2）図版61

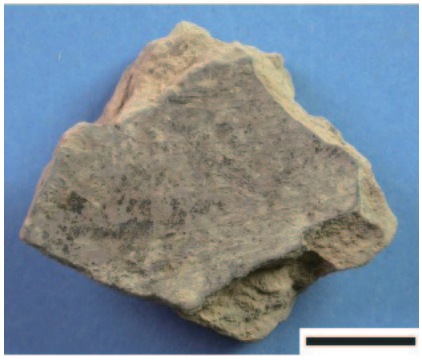
円覚寺跡の撹乱層から出土した資料で、土器外面は、牡丹と思われる植物と、格子文様が彫られ、この上に赤色が塗られていた。土器片の内外面は黒色を主体とし、外面の一部には赤色部分が残存する。内部の胎土は褐色を呈し、極めて細粒かつ緻密であり、粗粒な砂粒はほとんど見えずその粒径サイズは揃っていた。また、同資料と同一個体の資料について、胎土分析をおこなった。胎土分析の資料は図版62と図版63に示す。

図版 60 「赤色の木片」

図版 61 「軟質の焼物・壺」片



図版 62　分析土器試料(外面)
スケールは1cm



図版 63　分析土器試料(内面)
スケールは1cm

2-2. 日本・中国、ベトナムおよびミャンマー産漆膜の調製

分析の標品として用いた日本・中国、ベトナムおよびミャンマー産漆膜の調製は、福島県会津若松市郊外の漆窪地区に生育するウルシの木 *Toxicodendron vernicifluum* から得られた漆液、中国城口産生漆（市販品）、ベトナム TamThanh 県 Hung Hoa 市郊外の漆畑に生育するハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* から採取した漆液、タイ・ミャンマーに生育するブラックツリー *Gluta usitata* から得られた漆液を、それぞれ76μmアプリケータでガラス板に塗布した。その後、日本と中国産漆は25℃、70%RHで、ベトナムとタイ・ミャンマー産漆は25℃、80%RHの恒温恒湿乾燥器の中で乾燥させた。その後、常温で一年間以上経過したものを標品として用いた。

2-3. 科学分析の方法、装置および分析条件について

２つの試料に対してクロスセクション、熱分解−GC／MS 分析、蛍光 X 線分析（XGT-5200）および熱分解−GC／MS 分析および胎土分析でそれぞれ分析し評価した。

2-3-1. 塗膜断面（クロスセクション）分析について

断面分析は漆の小片をエポキシ樹脂に埋め込み、硬化させた後薄くスライスして顕微鏡で観察する手法である。厚さ数μm まで薄くすることで光を透過する様になるので、“下地に何を用いたか”や“何層に漆を重ね塗りしたか”などを明らかにすることが出来る。特に薄い塗り重ねの分析などに関しては有用な手法である。

2-3-2. 壺の胎土分析について

分析試料は次の方法で薄片を作製した。土器を切断機で3 × 2.5cm程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片にエポキシ樹脂を含浸させて補強し、土器の鉛直断面切片（厚さ 3 mm）を切断し、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチング後、コバルト亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートにした。また以下に示す方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.3 mm、短辺方向に0.4 mmとし、薄片で 2,000 ポイントを計測した。計数対象は、粒径0.05 mm以上の岩石鉱物粒子およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリックスに含めた。

2-3-3. 蛍光 X 線分析（XGT-5200）

走査型電子顕微鏡／エネルギー分散型X線分光法 (SEM／EDX) による塗膜の表面観察と顔料や金属の元素分析を行った。塗膜の表面や断面を1000倍以上の高倍率で観察することが出来る手法がSEMである。物質の凹凸が激しいものであってもかなり正確に観察することが可能である。また、同装置に付属しているEDXは元素の種類を判別できる装置であり、断面分析に用いた試料の断面の各層にどのような顔料や金属が利用されているかを解明することが可能である。

2-3-4. 熱分解-ガスクロマトグラフ／質量分析装置

漆器の剥落片の分析には、熱分解—ガスクロマトグラフ／質量分析装置を用いた。本装置は熱分解装置、ガスクロマトグラフ、質量分析装置およびデータ処理装置から構成されている。この分析は熱分解装置で、微量な漆膜片を瞬間的に高温にして熱分解し、得られた生成物をガスクロマトグラフのキヤピラリーカラムに導入し、各成分に分離する。その後質量分析計で各成分のパイログラム、マスクロマトグラムおよび質量スペクトルを測定した。

本装置名と分析条件を次に示した。

<分析装置>

熱分解装置はフロンティア・ラボ社製ダブルショットパイロライザーHP-2010D、ガスクロマトグラフはHP社製ガスクロマトグラムHP6890、質量分析装置はHPG 5972A、データ処理装置はHPG 1701AJ、キヤピラリー分離カラムは Ultra Alloy PY 1(100% methylsilicone), 30m 、直径0.25mmφ、膜厚は0.25μmを用いた。

<分析条件>

熱分解温度は500℃、イオン化電圧は70eV、ガスクロマトグラムカラム温度:40－280℃ (rate ; 20°

C /min)、インジェクション温度: 250℃、インターフェイス温度: 280℃、質量分析計室内温度: 180℃、カラム流量: ヘリウム, 1.0mi/minで測定した。

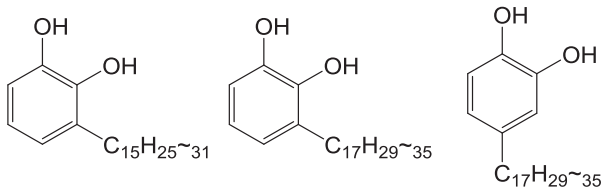
<熱分解−ガスクロマトグラフィー／質量分析計による漆膜の分析>

漆膜の一片1〜0.5 mg程度を熱分解装置の試料カップに入れ、500℃で１秒間加熱し、上記の分析条件で測定した。

3.　結果と考察

3−1.　東南アジアの漆液について [2, 3)]

漆は日本・中国のみならず東南アジアの諸国でも漆液は採取され、いずれも漆工芸器の塗装や接着剤に使われている。しかし漆は生育する地域によりその種類は異なり、含まれている成分組成も異なる。日本や中国に生育する漆は *T. vernicifluum* に属し、ウルシオール (分子量320) が主要な成分である。一方、ベトナムに生育しているはハゼノキ *T. succedaneum* でラッコール (分子量348) が主要な成分で、ミャンマーに生育する漆は *G. usitata* でチチオール (分子量348) が主要な成分の漆である（第68図）。これらを標品に用いて小櫃の熱分解−GC／MS分析の結果と比較することで漆の種類を同定した。



第 68 図　漆液の主要な脂質成分

：ウルシオール（左）、ラッコール（中央）、チチオール（右）

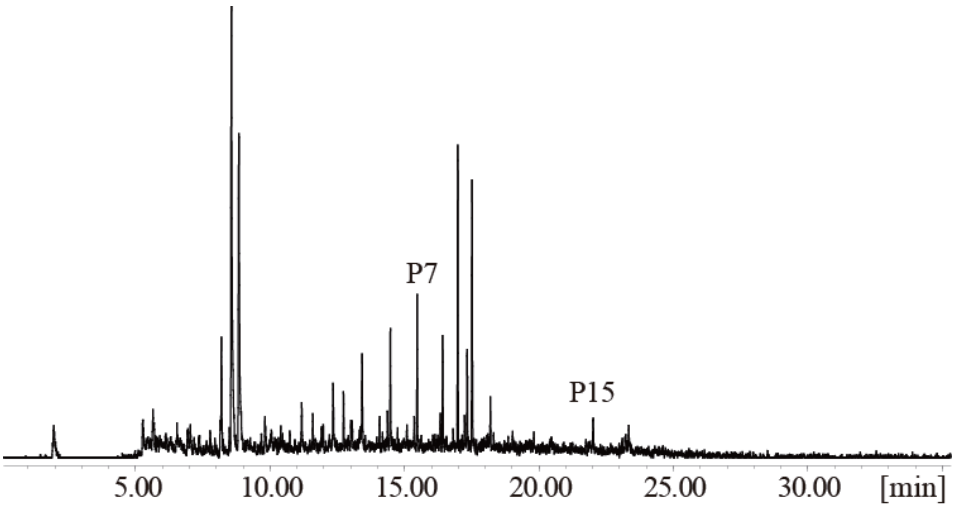
3−2.　本壺の「小片」を用いた分析結果と考察

3−2−1.　Py-GC/MS 分析の結果

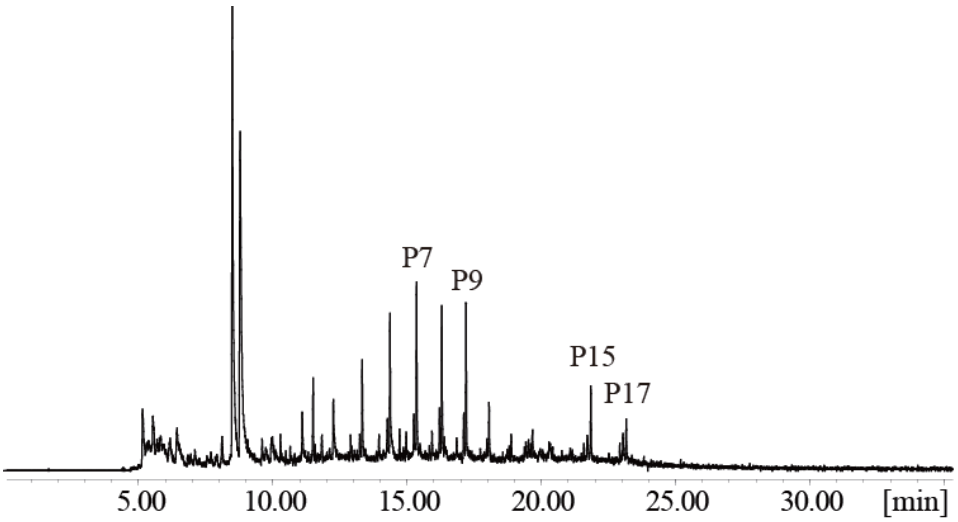
本壺の「小片」を熱分解−GC／MS 法で分析した。その結果漆膜中のウルシオール重合物が熱分解して得られる 3−ペンタデシルフェノール (P15・分子量 304) と 3−ヘプチルフェノール (P7・分子量 198) が確認された。また漆膜中のラッコール重合物が熱分解して得られる 3−ヘプタデシルフェノール (P17・分子量 332) と 3−ノニルフェノール (P9・分子量 226) が確認された。これらのことから本小櫃には日本や中国のウルシ *T. vernicifluum* の漆液だけでなくハゼノキ *T. succedaneum* の漆液成分が使われていることが分かった（第 69 図）。

この塗膜の１層目だけを注意して剥離し、熱分解—GC／MS 分析したところウルシオール由来の化合物が認められたことから、これには日本や中国の漆 *T. vernicifluum* が使われていた（第 70 図）。

以上の結果から漆塗りの壺に使われた漆液の一つはハゼノキ *T. succedaneum* で、この漆液は現在ベトナムや台湾に生育し、その樹液を利用して漆塗りに使われている。しかしハゼノキは琉球ハゼとも呼ばれ沖縄にもあるが、この木から漆液の採取は行なわれていない。ハゼノキは中国の東シナ海沿岸から南方にもあり、日本では九州や四国にあるが、これらの実は良質のワックスを含むことから木蝋と呼ばれるロウの採取が行われきたが漆液の採取は行われていない。かつて琉球ではどのような種類の漆液をどこから入手し、どのように使っていたかはまだよく分かっていない。今後多くの琉球漆器を科学分析することで、それらの問題を解明したいと考えている。



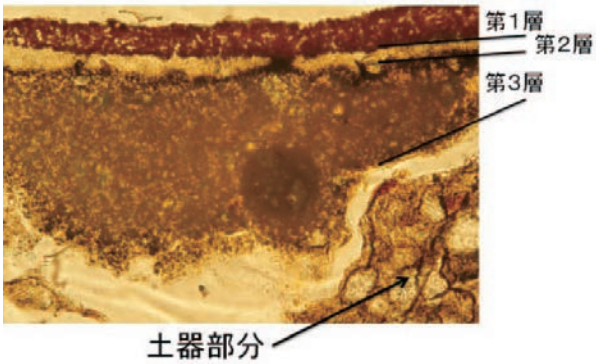
第 69 図　塗膜の熱分解－GC／MS　分析の結果



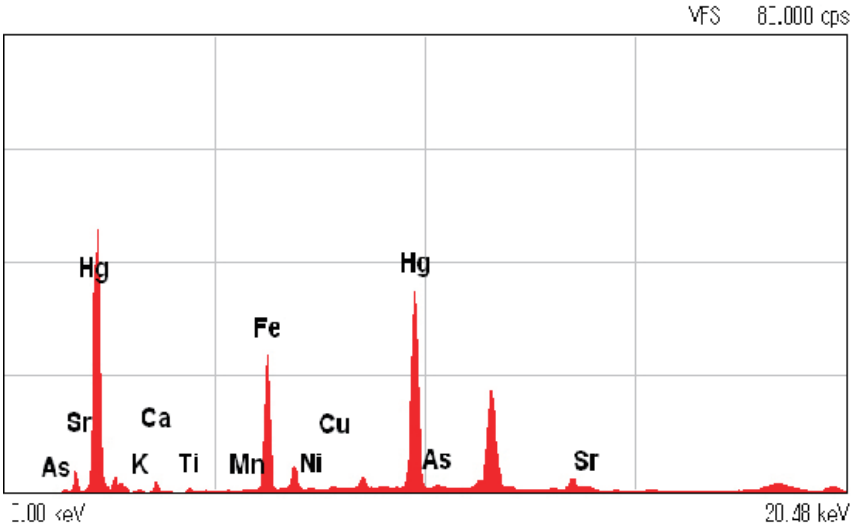
第 70 図　塗膜1層目の熱分解－GC／MS　分析の結果

3-2-2.　クロスセクション分析の結果

クロスセクションの観察から塗膜は３層からなり、この赤色の顔料は、X 線分析から水銀と鉄が認められたことから朱とベンガラが用いられていたと考えている。また X 線分析でヒ素 (As)が認められたことから雄黄（硫化ヒ素）も使われていたと考えている。



図版 64　赤色塗膜のクロスセクション

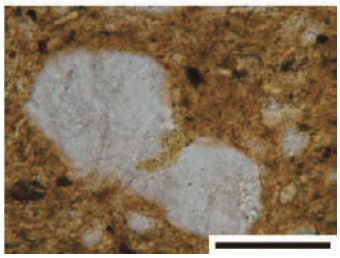


第 71 図　赤色塗膜の元素分析

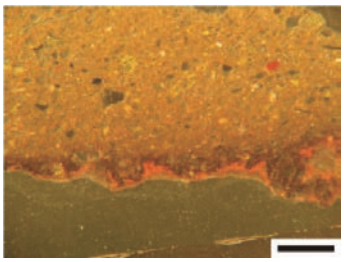
　またＸ線分析でマンガン（Mn）が認められたことから鉛丹（四酸化三鉛）も使われていたと考えている。

3-2-3.　胎土分析の結果

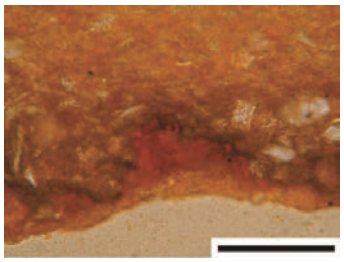
　漆塗りの壺の薄片断面における漆塗膜の状況：漆塗りの壺の薄片の内外面に漆塗り塗膜が残存していた（図版65～67）。



図版 65　漆塗膜の状況１



図版 66　漆塗膜の状況２



図版 67　漆塗膜の状況３

図版65：石英とカリ長石からなる花崗岩類、スケールは0.1mm、下方ポーラーだけ
図版66：内面、下地層、赤色層、褐色層の連続、スケールは0.2mm、落射光だけ内面、下地層、赤色層、褐色層の拡大写真、スケールは0.1mm、落射光だけ
図版67：写真図版66の拡大、スケールは0.1mm、下方ポーラーだけ＋落射光

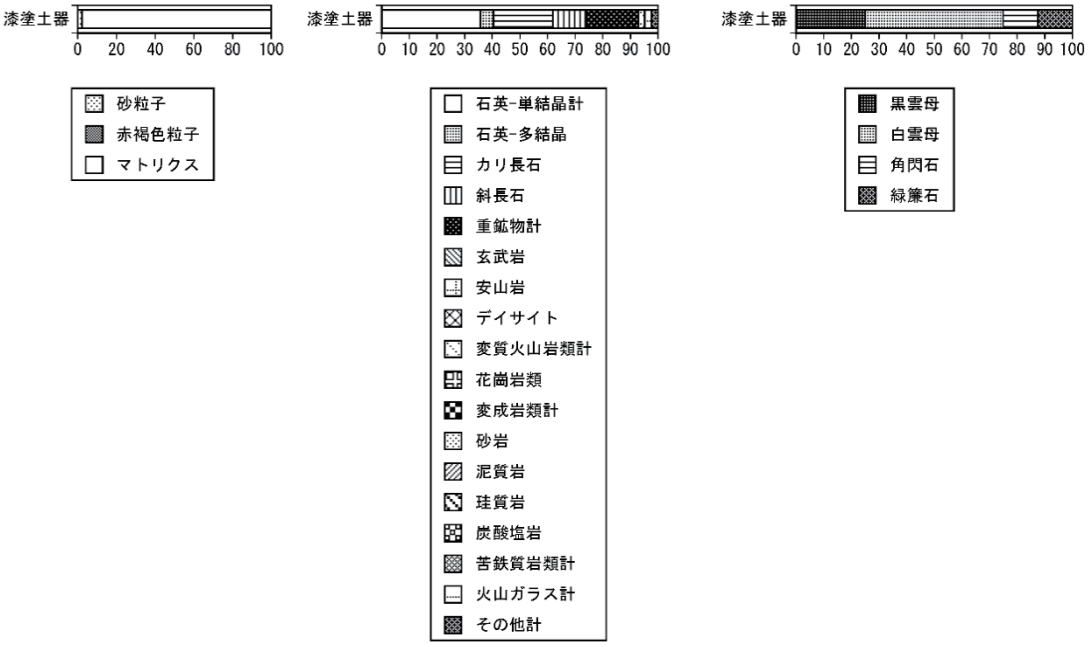
　偏光顕微鏡に斜め上方からの落射照明装置を組み合わせて薄片を観察したところ、外面は、土器胎土表面に厚さ100～150μmの黒褐色下地層が認められた。下地層の色調は表面付近が最も濃く胎土内部に向かって濃度が漸減した。下地層の上には厚さ5～10μmほど、最大25μmの透明感のある黄色層が重なっていた。黄色層の上面は平坦であり、その上位には、2μm以下の均質な細粒赤色粒子の集合からなる不透明な赤色層が最大 25μmの厚さで部分的に残存して重なっていた。赤色顔料の少ない部分では、赤色層の上部が無色透明となっていた。一方、内面は肉眼で黒色に見えるが層状構造を示し、中央部に赤色層を挟在していた。最下部の下地層は、厚さ50～70μmの黒褐色で表面に向かって色調が濃くなる。その上に1～5μmの淘汰の悪い赤色顔料を伴う不透明な赤色層が厚さ10～30μm、最大55μmで凹凸を伴って重なっていた。さらに上位に不純物を含む透明度の低い褐色層が厚さ10～30μmで重なっていた。これら内面の層状構造は保存状態が比較的良好で連続性に富んでいた。

胎土中の岩石鉱物組成分析結果を第55表に示した。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）および 砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第72図に示した。重鉱物組成は右側に基数を表示した。粒子構成に占める砂粒子の割合（含砂率）は、２％と極めて低いことが特徴である。大部分が粘土およびシルトサイズの粒子から構成されるマトリクスである。砂粒子における岩石鉱物組成は石英・カリ長石・斜長石の軽鉱物が70％以上を占め、重鉱物の割合は９％である。岩石は極めて少なく、変質火山岩類、無色火山ガラス、変質岩石が各１ポイントずつ計数され、ほかに花崗岩類と泥質岩が検出された。変質火山岩類はカリウムの染色反応を示すことからほぼ流紋岩質と推定される。重鉱物の計数は８ポイントで、組成図を作成すると白雲母が半数を占め、次に黒雲母が多く、緑色普通角閃石・緑簾石が続く。重鉱物の基数が少ないため詳細は不明であるが少なくとも白雲母が多い傾向は薄片観察から実感できる。白雲母は厚さ数～10μmで、長さが50～130μm程のものが普通に認められた。薄片による岩石学的情報によって原料産地を推定する場合岩石組成が有効であるが、今回は岩石粒子の含有が極めて少なく、原料産地推定が困難であった。しかし石英・カリ長石・斜長石・ 黒雲母・白雲母・角閃石などの鉱物とともに花崗岩類が検出されたことからマトリクスを構成する原料堆積物の給源地域には主に花崗岩類の関与が推定された。また岩石としては流紋岩質の変質火山岩類、無色火山ガラス、泥質岩の存在からこれらの岩石が混入するような火山岩と堆積岩を上流域にもつ堆積物が原料と推定された。

第 55 表　土器胎土中の岩石鉱物

試料番号	漆塗土器
石英-単結晶	15
石英-多結晶	2
カリ長石	9
斜長石	5
黒雲母	2
白雲母	4
角閃石	1
緑簾石	1
ジルコン	+
玄武岩	
安山岩	
デイサイト	
変質火山岩類	1
花崗岩類	+
変成岩類	
砂岩	
泥質岩	+
珪質岩	
炭酸塩岩	
苦鉄質岩類	
火山ガラス-無色	1
変質岩石	1
その他	
赤褐色粒子	1
マトリクス	1957
合計	2000
石英波動消光	+
変質火山岩類岩質	流紋岩質
火山ガラス形態	A'泡壁型Y字状
植物珪酸体	+

（数字はポイント数を、＋は係数以外の検出以外を示す）



第 72 図　組成図 土器胎土の岩石鉱物組成

そこで次に沖縄および東南アジアのわずかな資料を基にそれらを比較し原料産地の推定を試みた。沖縄島の基盤岩は四万十累帯の南西への延長と考えられており、石灰岩・チャート、緑色岩・千枚岩・ 粘板岩・頁岩・砂岩などが分布している。これらの基盤岩を覆って後期中新世から前期更新世にかけて堆積した主に泥質・砂質堆積物からなる島尻層群が広く沖縄島に分布する。これらは不整合で琉球層群が覆う。琉球層群は石灰質の琉球石灰岩と非石灰質堆積物の国頭礫層と段丘砂礫層から構成される。また琉球列島の深成岩類については白雲母を含む花崗岩類が奄美群島、徳之島、屋久島などで知られている（日本の地質『九州地方』編集委員会 1992）。

沖縄島南部の南城市武芸洞右阿サキタリ洞出土の縄文土器の胎土分析により石灰岩や方解石が含まれず変成岩片や雲母類が観察されることから遺跡周辺の堆積物を用いて製作されたものでないことが推定され、砂粒の供給源として沖縄島中北部の名護層や嘉陽層に由来する堆積物が候補であることを示されている（2011山崎ほか）。一方南城市ヤローヤ洞穴出土グスク土器胎土からは海洋性生物遺骸や方解石などが含まれることから地元原料を用いて土器が製作された可能性が推定された。また石垣島大田原遺跡・波照間島下田原貝塚出土の下田原式土器を分析し、チャート・ホルンフェルスを含むＡ類、片岩を含むＢ類、石英粒のみを含むＣ類に分類し、各遺跡の周辺地質がこれらの胎土の特徴とは異なることから土器の移動や原料の移動によってもたらされた可能性が指摘された（2012　山崎ほか）。ただし石垣島にはこれら関連地質が分布していることから島内での土器作りの可能性もある。以上報告された土器では大部分が粗い砂粒を含むこと、琉球石灰岩分布地域においては海洋生物遺骸や方解石などの炭酸塩鉱物が多く含まれていることなどの点で漆塗りの壺とは異なる。しかし含砂率が低くマトリクス主体の土器もわずかに存在すること、石英が含まれる土器が少なくないこと、白雲母を伴う花崗岩類が琉球列島において存在することなどから漆塗り壺との共通性が認められることから沖縄産の可能性がある。黒雲母と白雲母との割合については沖縄で報告された胎土中の雲母類が風化していることもあり現状では把握されていないが今後データを蓄積することにより産地推定の手がかりになる可能性がある。今後漆塗り壺と時期の近い沖縄産土器の胎土を比較することで産地を推定する必要がある。

一方ベトナム南部ホーチミン市周辺の土器ではRach Nui遺跡出土縄帯文深鉢土器、An Son遺跡出土暗色磨研土器、Go Cao Su 遺跡出土赤色スリップ土器などの胎土マトリクス中に石英・白雲母・黒雲母などの鉱物の混入が認められる（註１）。ホーチミン市周辺はサイゴン川による沖積低地とその西側のメコン川による沖積低地とが連続する地域に位置するが、アンナン漆を産する地域ではなく、ビルマ漆の分布域下流に相当する。前述のホーチミン市周辺土器は粗粒粒子が混入することから、漆塗り壺とは胎土の構成が異なるもののマトリクス中の鉱物に共通性がみられることは重要である。また漆塗り壺の粒子サイズが揃っていて分級が良好なことは大きな沖積低地における堆積物の特徴と共通性が認められる。ただし今回比較したホーチミン市周辺出土土器は極めて限定的な資料であり、産地が確定しておらず遺跡周辺地質を反映した胎土か不明であること、新石器時代の土器など漆塗り壺土とは時期差が大きいことなど不確定要素が多い。ホーチミン市からカンボジアにかけては玄武岩が広く分布しているがホーチミン市周辺の上記土器胎土にはそれらの影響を認められないことから土器が移動している可能性も否定できない（Fontaine 1971）。したがってホーチミン市周辺土器との比較結果は、漆塗り壺が広く東南アジア産の可能性があり得ることを示唆する程度のものとして解釈できる。さてベトナム・ハノイ周辺の紅河上流は中国雲南省であるがベトナム国内の紅河流域には花崗岩類、片麻岩、堆積岩などが広く分布し結晶片岩を伴う。上流域に花崗岩類がほとんど分布しないホーチミン市周辺地質よりも紅河平野における堆積物の方が漆塗り壺の胎土組成に近いように考えている。今後の多くの試料を用いて比較調査することが待たれる。一方アンナン漆の分布する台湾においては花崗岩類の分布はほとんどなく、片麻岩・結晶片岩などが分布するのは東部の山岳地域が主体であり、台湾西南部の平野を構成する河川上流域には堆積岩が広く分布している（経済部中央地質調査所 2000）。これらの表層地質の状況から判断すると漆塗り壺の胎土との類似性の高い堆積物が台湾西南部の沖積低地に分布している可能性は、ベトナム北部に

比較して低いものと推定されるが、沖縄島に近いアンナン漆の産地であること、および堆積岩中の鉱物粒子の再堆積の可能性も否定できないことから、今後更なる確認調査が必要である。

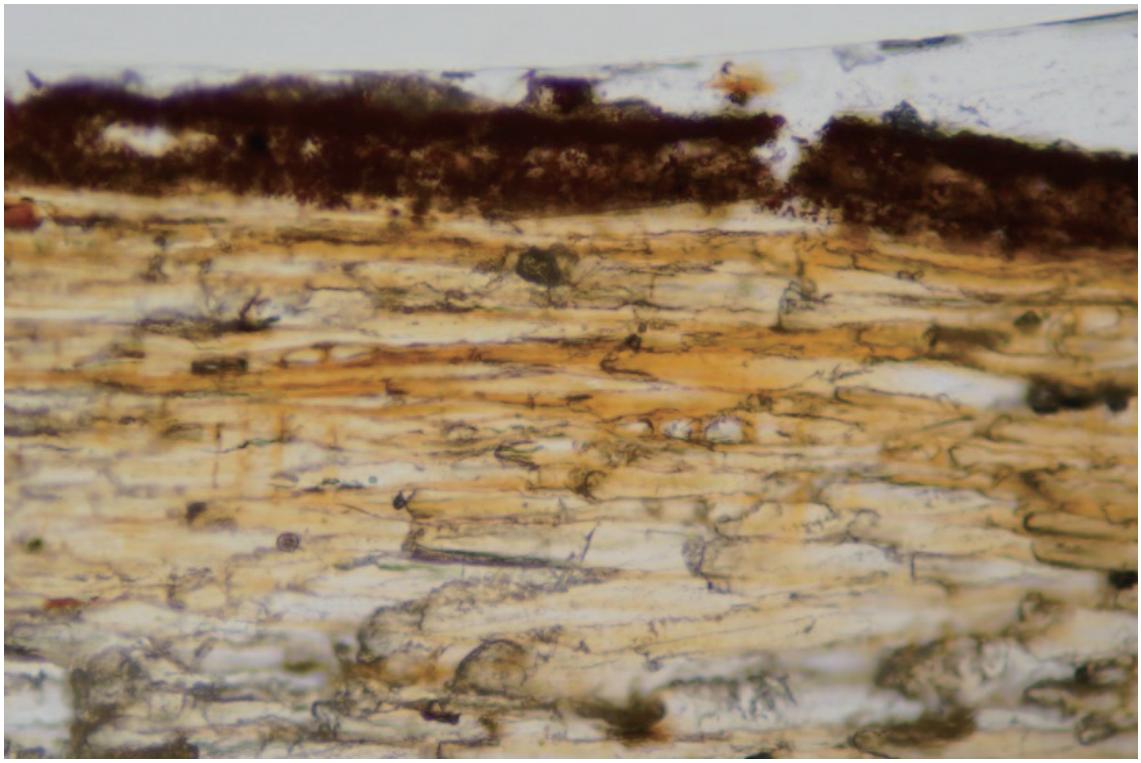
以上のことから首里城跡周辺遺構から出土した漆塗りの壺を胎土分析した結果、含砂率が極めて低く、石英・カリ長石・斜長石を主体とし白雲母・黒雲母・角閃石・緑簾石を伴う鉱物組成と変質火山岩類・火山ガラス・泥質岩・花崗岩類をわずかに伴う特徴が認められ、マトリクスを構成する原料堆積物の給源地域には主に花崗岩類の関与が推定された。沖縄出土土器との比較では類似性の高い土器の存在は認められなかったが類似性が見いだせる地域的特徴があり、漆塗り土器が沖縄産である可能性があり、今後の調査で産地推定の可能性を探りたい。一方ベトナムホーチミン市周辺土器との比較ではマトリクス中に石英・白雲母が存在することで共通性が認められ漆塗り土器が広く東南アジア地域の土器である可能性が示唆された。地質図との比較により漆塗り土器の原料産地の可能性はアンナン漆が生育するベトナム北部の紅河平野の可能性が高まり、台湾の可能性は低いと考えている。今回の調査は予察的なものであり産地推定の精度も低いことから今後の調査で精度を高めたいと考えている。

註１　故西村昌也氏から 1996年に提供された試料であり、分析の結果をベトナム語に訳して1997年9月の考古学会議に報告したいとの私信をいただいていたが、その後の経緯については不明である。

3-3.　円覚寺三門北地区から出土した「赤色の木片」

3-3-1.　クロスセクション分析の結果

円覚寺跡から出土した赤色の木片のクロスセクションを観察したところ、木片に塗料を１層だけ簡単に塗った塗装構造であった。



図版 68　赤色塗膜のクロスセクション

赤色の「木片」は、樹種細胞観察により「イヌマキ属」*Podocarpus macrophyllus* Sweet であった。イヌマキは琉球の高級建築材で、当時農民は使用できなかった。

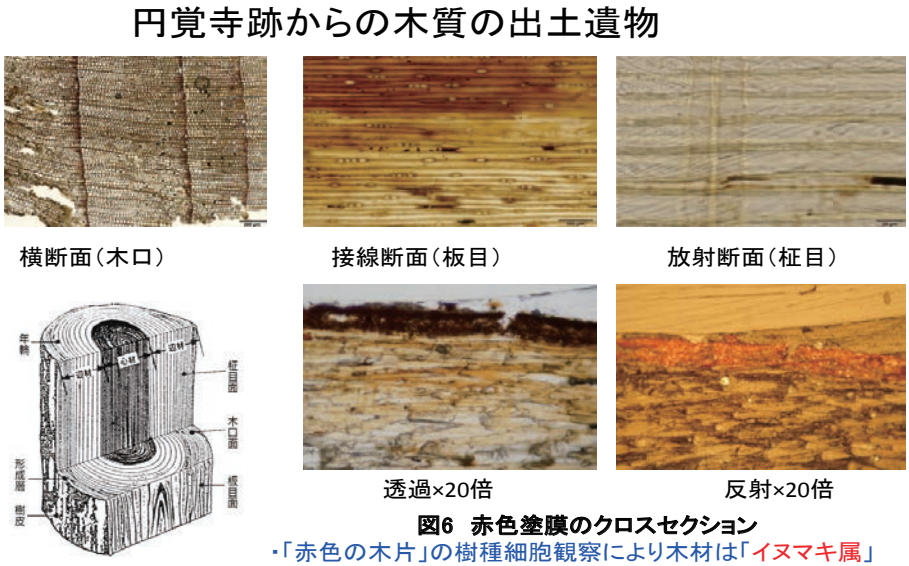


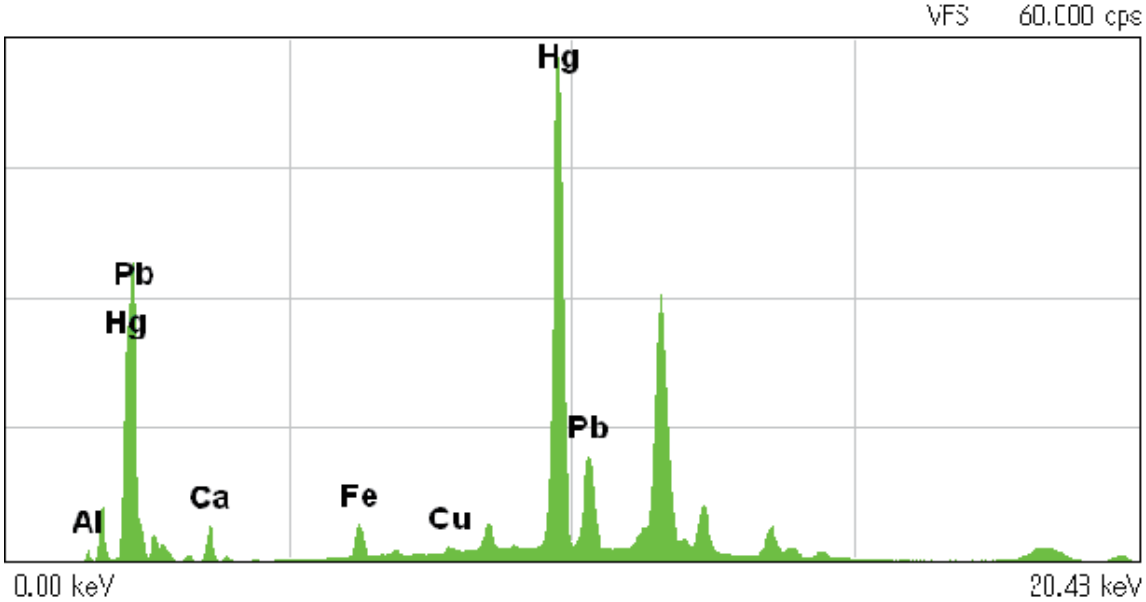
図6　赤色塗膜のクロスセクション

・「赤色の木片」の樹種細胞観察により木材は「イヌマキ属」（イヌマキ、ナギ）であった。
・イヌマキは琉球の高級木材で、農民は使用できなかった。

第 73 図　赤色塗膜のクロスセクション

3-3-2.　蛍光 X 線分析の結果

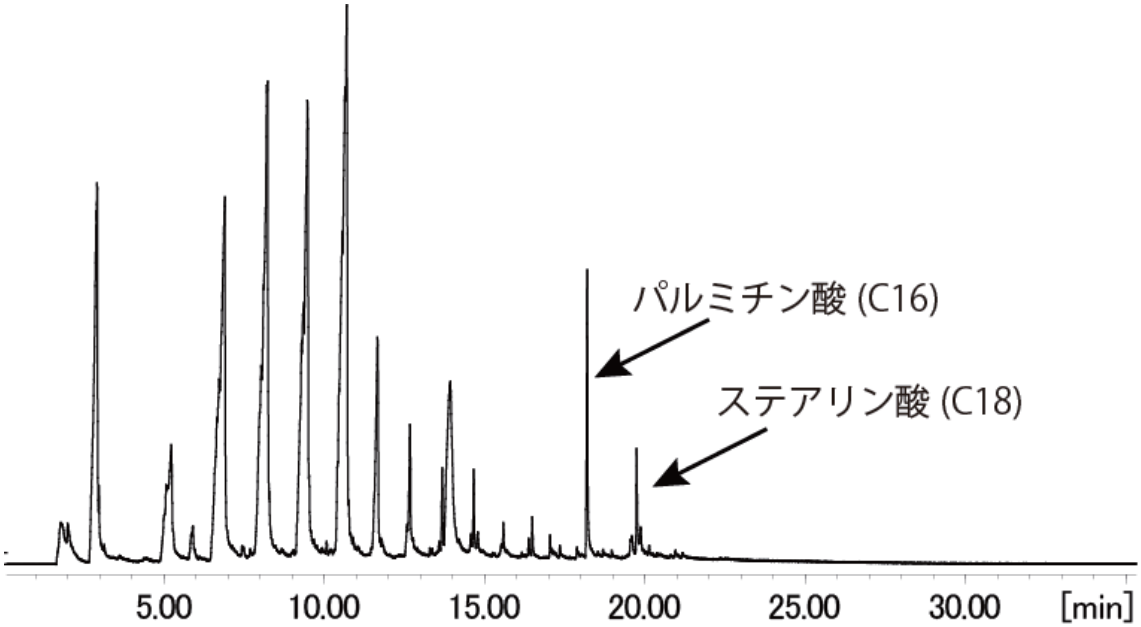
赤色の木片を蛍光 X 線分析で分析した結果、主として水銀（Hg）、鉄（Fe）および鉛（Pb）が認められた。このことから赤色顔料は朱、ベンガラと鉛丹の使用が考えられた。



第 74 図　赤色塗膜の元素分析

蛍光 X 線分析の結果から鉛（Pb）の存在が認められた。この鉛は「黄褐色の顔料である鉛丹（四酸化三鉛）の利用」が考えられるが、塗料に油（グリセライド）が用いられたことから、油を直接木材に塗ると乾燥硬化に時間がかかることから、いったん乾性油をボイル油（重合油）として、それを用いることが一般的であり、その際鉛丹を含むドライヤー（光明丹）が用いられたことも考えられる。

3-3-3.　Py-GC/MS 分析の結果



第 75 図　塗膜の熱分解－GC／MS　分析（m/z 60）

顔料分析から赤色顔料は朱であり、塗膜の熱分解—GC／MS 分析から脂肪酸類が認められたことから、塗料には油（グリセライド）が使われていて漆は使われていなかった。

4.　結論

4-1.　赤色痕付きの「軟質の焼物・壺」片

円覚寺跡の撹乱層から出土した壺は、表面に牡丹と思われる植物が描かれ、格子文様が彫られ、この上に朱漆が塗られていた。その漆は、日本や中国の漆液 *T. vernicifluum* とアンナン漆（ハゼノキの変種）*T. succedaneum* が使われていた。

なぜウルシの木 *T. vernicifluum* の樹液だけを使われずにハゼノキ *T. succedaneum* の樹液が使われていたのか、その漆液はどこで採取された漆液か、どんな経路で入手して使われたのかなどの疑問は、今後多くの琉球漆器を分析し、データを収集し、比較検討する必要があると考えている。これに関係して、例えば琉球では 15 世紀ころ日本から生漆を輸入し、漆器を中国に輸出していたという記録もあることから、海外から漆液を輸入していたと考えられている。しかし、これ以前の 14 世紀には東南アジア諸国との交易の中で、文物の交流があったということを考えると、東南アジアから漆液を輸入していた可能性もある。本小櫃は 1500 年ころのもので、以下の記述は小櫃と直接関係ないが、17 世紀初頭から 18 世紀半ばに八重山諸島で漆を植林していたとする史料もある。近世後期における琉球王府貝摺奉行所の漆器の製作仕様を記録した貝摺奉行所文書には「吉野漆」「和地漆」「唐地漆」など漆の名称が記入されており、日本産や中国産の漆を使用した可能性があるが、これらの漆がどのような種類の漆であったか、またどこで採取された漆を使ったかなどについては解明されていない。このように「琉球漆器の製作にどのような漆液が用いられたのか」という疑問について歴史的な古い漆器を用いた科学分析で漆の産地同定を行うことは意義が深い。この問題が解決すると琉球漆器の材料の調達先や生産体系が明らかになると考えている。

また一方、漆塗りの壺の胎土分析の結果から壺を構成する岩石鉱物組成分析で含砂率が低くマトリクス主体の土器もわずかに存在すること、石英が含まれる土器が少なくないこと、白雲母を伴う花崗岩類が琉球列島において存在することなどの点で漆塗り壺との共通性が認められることから沖縄産の可能性がある。ただ黒雲母と白雲母との割合については、沖縄で報告された胎土中の雲母類

が風化していることもあり、現状では把握されていないが、今後データを蓄積することにより産地推定の手がかりになる可能性がある。漆塗り壺と時期の近い多くの沖縄産土器の胎土を比較することで産地を推定する必要がある。一方、ベトナムホーチミン市周辺土器との比較では、マトリクス中に石英・白雲母などが存在することで共通性が認められ、漆塗り土器が広く東南アジア地域の土器である可能性があり得ることが示唆された。地質図との比較により漆塗り土器の原料産地の可能性は、アンナン漆が分布するベトナム北部の紅河平野では可能性が高く、台湾では低めに予想される。今回の調査は予察的なものであり、産地推定の精度もかなり低いものであることから今後の調査によってさらに精度を高めていく必要があると考えている。

4-2. 円覚寺三門北地区から出土した「赤色の木片」

顔料分析から赤色顔料は朱であり、塗膜の熱分解—GC／MS 分析から脂肪酸類が認められたことから、塗料は乾性油（グリセライド）が使われていて漆は使われていなかった。
これは日射の強い琉球では漆は紫外線で劣化しやすいため、外用の塗料として乾性油が利用されたのではないかと考えている。

謝辞

円覚寺三門跡から出土した木片の樹種同定は（独）森林総合研究所能城修一先生に鑑定していただき、壺の胎土分析は帝京大学文化財研究所の河西学先生に分析評価していただきました。両先生に感謝いたします。また琉球漆器に関する文献と資料を提供していただいた浦添市美術館宮里正子館長に御礼を申し上げます。

本研究の一部は、平成 24 年度科学研究費補助金基盤（B）（研究代表者：宮腰哲雄）と平成 25 年度漆の戦略的研究基盤形成事業（研究代表者：宮腰哲雄）の助成を受けたものである。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

1) 『浦添市美術館紀要』第１号(1991年) ～第９号(2000年)。
2) 本多貴之、宮腰哲雄、宮里正子、岡本亜紀、歴史的な琉球漆器の科学分析と漆工技術、よのつぢ「浦添市文化部紀要」、第８号、37-46 (2012)。
3) 宮腰哲雄、永瀬書助、吉田孝『漆化学の進歩』アイピーシー出版2000年。
4) R.Lu, X. Ma, Y. Kamiya, T. Honda, Y. Kamiya, A. Okamoto, T. Miyakoshi, J. Anal. Appl. Porolysisi, 80(2007), 101-110.
5) 荒川清和、徳川義宣『琉球漆工垂』日本経済新聞社1977年。
6) 琉球漆器研究会「八重山における漆関係史料(『参遺状』より)」『琉球漆器』第１号(1983年)。
7) 「鼻緒奉行所関係」那覇市企画部文化振興課編『那覇市史資料編第１巻10琉球資料(上)』 275-350真所収1989年。
8) 「貝摺奉行所文書」沖縄県史料編集所編『沖縄県史料前近代１首里王府仕置』 319-426頁所収1981年
9) 経済部中央地質調査所（2000）『台湾地質図(1:500,000)第二版』。
10) 西村昌也、『ベトナムの考古・古代学』同成社、360pp (2011)。
11) 日本の地質『九州地方』編集委員会 (1992)『日本の地質 9 九州地方』共立出版、371pp。
12) 宮腰哲雄、「漆の不思議とジャパン」『考古学の挑戦—地中に問いかける歴史学』岩波ジュニア新書、 岩波書店（2010）。
13) 山崎真治・宮城直樹・仲里健、「沖縄先史土器の胎土に関する基礎的観察」沖縄県立博物館・美術館、 博物館紀要、No.4、36-52（2011）。
14) 山崎真治・仲里健・仲座久宜、「胎土分析から見た下田原式土器」沖縄県立博物館・美術館、博物館紀要、 No.5、37-50（2012）。

第６章　総括

平成18年度～22年度、24年度に実施した右掖門地区及び南側石牆地区における調査成果の報告を行った。ここでは遺構、遺物に大別し、総括を行う。

１　遺構について

右掖門地区

本地区にて検出された遺構は、石牆及び石牆に伴うと考えられる溝遺構や石敷、建物の基壇の周囲に敷かれていたと考えられる石敷、そして参道の石敷などがある。

石牆は円覚寺跡を取り囲んでいる石積みで、前回調査では未確認であった御照堂付近から西側の右掖門方向へ向かって検出された。右掖門周辺でも石牆が検出されたことで、石牆の延びるラインを捉えることができた。この平成18・19年度の調査により、円覚寺の北側においても石牆が残存している状況が確認できたことで、平成14年度から実施していた石牆の復元整備に有効な手がかりを得ることができた。また、石牆の前面には、溝と考えられる石敷（石敷２）や、排水を良くするために敷いたと考えらえる石敷（石敷４）が広がる状況も確認できた。このような状況は、境内内部にて確認されている。境内外については、石列１が石牆の根石で、溝状遺構1がその前面の溝となる可能性も考えられるが、周辺の破壊が著しく遺構のつながりが確認できないため、判然としない。

続いて、建物の基壇の周囲に敷かれていたと考えられる遺構は、平成18年度の調査で見つかった石敷１で､前回調査成果を参照すると､獅子窟の基壇北側で見つかった石敷に似ていることによる。近世段階にはこの石敷の上に珊瑚石灰岩を砕いた砂利が敷かれていたことがわかっている。獅子窟は第二尚氏の宗廟として創建時から近世にかけて使用されたとされる。よって、この石敷は近世あるいは近世より古い段階に築かれたものとも考えられる。

次に、参道と考えられるのが石敷３である。右掖門から東側へ約17m延びる。東側は後世の撹乱によって残っていないため、往時はどの範囲まで敷かれていたのかについては判然としない。石敷３の直下の造成層からは近世相当の遺物が得られていることより、近世段階に築かれたものと考えられる。

南側石牆地区

本地区にて検出された遺構は、石積み、石敷、石列がある。これらは時期で大きく三時期に分けられる。新しい遺構から取り上げていく。

まず戦後に構築されたと考えらえるのが石列２である。旧琉球大学に伴う構造物の可能性が考えられる。続いて、戦前まで残っていた円覚寺の遺構と考えられるのが方形状の遺構である。17世紀後半から18世紀代の造成土の上に築かれていると考えらえることより、この方形状の遺構は、近世段階に築かれた円覚寺の内部遺構で、戦前までは残っていたものと考えられる。機能については水溜遺構の可能性が考えられるが、詳細については今後の調査によりたい。

そして、方形状の遺構より下部にて検出された遺構が、石積み１・２、石敷５、石列３・４である。これらの遺構の年代については、上面に堆積していた遺物包含層は17世紀から18世紀代の遺物が主体であったことより、近世に築かれたか、あるいは近世段階にはすでに築かれていた遺構と考えられる。これらの遺構のうち、石積み１（石牆）については、「首里古地図」にみられる。

今回検出された遺構の中で、特に石牆については整備対象となっていて、現在も整備事業を進めているため、もう少し詳しくまとめたい。

石牆は平成9～13年度までの調査で、円覚寺の東側にて検出されていた。その後、石牆の復元整備が決定し、平成14年度からはこの残存が確認された東側の石牆から復元整備を進めてきた。そして平成18年度からは、未確認であった箇所における石牆の確認調査を再び実施し、平成24年度までに

北側の右掖門地区における石牆と南側における石牆の残存状況が判明した。現在行われている整備は、これらの成果を基に実施している。

石牆について、今回の調査で明らかになった特筆すべき事項を２つ挙げる。一つは、石牆の構築方法に関することで、石牆は石灰岩の切石を用いた相方積みで、根石をクチャの地山直上に据えている箇所と、根石を造成土に据えている箇所がある。後者の場合、地山より地盤が弱いため、石牆の強度が弱いと考えられる。そこで石牆の強度不足を補うために、石牆の前面に石列を構築して石牆を補強するなど、強固な石牆を築くための工夫を垣間見ることができた。

二つ目は、石牆のラインに関してである。石牆は「首里古地図」に描かれていることは第４章でもふれた。「首里古地図」では南側の石牆は左掖門方向に真っ直ぐ延びずに、首里城側（南側）へカーブを描いて曲がる様子が描かれている。今回、平成24年度のトレンチ24の調査の結果、検出された石牆の西端がやや首里城側へ曲がるような状況を確認することができた（図版69）。この石牆が本当に首里城側へカーブして曲がっていくのか、それとも左掖門方向へと延びていくのか、石牆の続きのラインを確認することが必要である。しかし、今回の調査では明確に確認することができなかったため、今後の課題としたい。もし今後の調査によって、石牆が首里城側へカーブを描いて曲がる状況が確認された場合、「首里古地図」と符合するため、円覚寺の復元整備にあたっては、同資料は大きな手がかりとなる。

石牆西端（北から）

石牆西端（東から）

図版 69　南側石牆地区

また、その他特筆すべき事項として、円覚寺の地形を合わせてみていくと、円覚寺の地形は不透水層であるクチャが基盤となっており、しかも周辺の地形は、石灰岩丘陵で南北に高まりを持つ凹地になっていた。この石灰岩丘陵に含まれた天水は石灰岩層の下部を通って円覚寺方向へ流れ込む様相を呈しており、当地は湿地帯か、水はけの悪い土地であったことが想定される。そのような状況では､排水機能の強化が重要となってくるため､今回確認された石牆の前面の溝あるいは石敷は、排水の工夫の一つと言える。実際、トレンチ24の調査の際、降雨でトレンチ内が水没する事態が何度かあり、水中ポンプで水抜き作業を行っても、石敷５付近から水が湧いてくる状況がみられた。この湧水は西側へ流れていく状況であったことより、円覚寺は全体的に東側から西側へ緩い傾斜をもって造営され、境内に流れてきた水は、西側の放生池側へ向かって流れるように設計されているものと考えられる。前回調査においても近世段階の遺構で、排水のための石造りの溝が縦横に検出されており、円覚寺における排水機能の強化の一端がうかがわれる。

右掖門における復元の様相

円覚寺は戦中及び戦後の撹乱によって、往時の建物等はその姿を留めていなかったが、戦後、旧

琉球政府文化財保護委員会が中心となり、昭和43（1968）年に総門、放生池、右掖門、左掖門などが復元された。その内、右掖門については、トレンチ19の調査によって復元の一端も確認できたのでここでふれたい。

サブトレンチ３の掘削の結果、門の根石と考えられる石の上に厚さ６～15cmのコンクリートを張り付けて、門を復元していることが判明した（図版70）。つまり、実際の門の高さよりかさ上げされて復元されていた。また、門と石敷３の間にある石段が置かれている土には現代遺物が混ざっていた（第９図 第３、４層）。そのため、この石段は、円覚寺往時に造られたものではなく、門の復元の際に設置されたものと考えられる。石段の設置理由については、門の接地面が往時の高さよりも高く復元され、石敷との間の高低差が広がったために、石段を設置したことが考えられる。右掖門については、境内側が写った古写真などがなく、かねてから石段については、往時から設置されていたものか、それとも戦後の復元時に設置されたものかが判然としなかった。しかし、今回の調査によって、戦後の復元時に設置されたものということが判明した。

トレンチ 19 サブトレ3

根石検出状況（東から）

図版 70　右掖門地区

２　遺物について

本報告の対象となったの右掖門地区、南側石牆地区及び三門地区の表土・撹乱層からは約6千点近い遺物が出土している。遺物の種類は多種に及ぶが、円覚寺は戦前まで使われていたこともあり、近世～近代の遺物が大半を占める。

出土遺物の中で最も多いのは、陶磁器類である。産地別にみると、沖縄産陶器が最も多い。国外は中国・タイ・ベトナム産、国内は肥前産を中心に、薩摩産、備前産、関西系などの製品がみられる。最も多く出土した沖縄産陶器について補足すると、施釉陶器と無釉陶器が出土し、中でも無釉陶器が多い。無釉陶器は御内原北地区出土資料や中城御殿跡地出土資料などを参考に、大きく二つに大別した。一つは、那覇市湧田古窯跡を中心に焼成されたことが考えられる資料で、その中でも薩摩焼の影響が強く認められる一群と平成19年度に実施した首里城跡御内原北地区発掘調査の際、17世紀前半に位置づけられるゴミ穴（シーリ遺構）からまとまって出土した一群を初期沖縄産無釉陶器として分類し、もう一つは初期の無釉陶器とは区別して、17世紀後半以降に焼成されたと考えられる製品を無釉陶器として分類した。初期の製品は一定量出土しており、碗、皿、鉢、擂鉢、壺、火炉、香炉などがみられる。

陶磁器以外で特徴的な遺物として、漆製品が挙げられる。漆製品は、軟質の土器である。これまでに見つかっている漆製品はその多くが木製のものであり、今回見つかった漆製品のように、焼物に漆を塗布した製品の出土事例はほとんどなく、非常に珍しい資料である。科学分析の結果、日本や中国に生息するウルシの漆液とベトナムや台湾に生息するハゼノキの漆液（アンナン漆）が使われていることが判明しているが、壺の表面に彫られた「易」？、「南」、「安」もしくは「案」？

という文字との関連が気になるところである。また、胎土分析に関しては、漆塗りの壺と年代の近い資料との胎土の比較が必要であり、今後も分析数を増やすことで産地などの詳細が判明してくるものと思われる。

また、三門地区の撹乱層から出土した赤色の木片については、イヌマキ属と判明した。イヌマキは琉球の高級木材とされる。この木片は、三門の建物部分の破片の一部である可能性も考えられ、近い将来、復元整備が計画されている三門に関する資料として、重要な結果が得られた。

続いて、特徴的な遺物として、沖縄産陶器の香炉がある。第31図144の香炉など、初期の製品で器形や文様にこだわりを感じるものがみられた。

また、その他に特徴的な遺物として玉製品が挙げられる。玉製品は光沢や透明感などの美しさやその希少性から珍重され、主に首里城跡周辺を中心に出土がみられるが、今回、円覚寺において玉製品が数点見つかったことは特筆される。

これまで特徴的な遺物を抜粋してみたが、円覚寺から出土した遺物は、首里城跡周辺で出土する遺物と類似する傾向もうかがえることや、類例の少ない貴重な資料も得られている状況からは、第二尚氏の菩提寺として、格式の高い寺院であった様相の一端をうかがうことができる。

最後に、発掘調査及び資料整理作業にあたっては、多くの方々に指導助言・協力を賜った。記して感謝を申し上げたい。

＜引用・参考文献＞

第１章

第１節　調査に至る経緯

沖縄県立埋蔵文化財センター2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター

第２章

沖縄県教育庁『円覚寺跡基本整備実施計画書』沖縄県教育庁

沖縄県教育委員会 2000『旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書』平成11年度沖縄県史料調査シリーズ第２集 沖縄県文化財調査報告書 第140集 沖縄県教育委員会

知名定寛 2000「古琉球王国と仏教」『南島史学』第56号 南島史学会

沖縄県立埋蔵文化財センター2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター

第３章

沖縄県立埋蔵文化財センター2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター

第４章

第１節　右掖門地区の遺構と遺物

沖縄県教育委員会 1993『湧田古窯跡（Ⅰ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書 第111集 沖縄県教育委員会

佐賀県立九州陶磁文化館 1998『平成10年度企画展　沖縄のやきもの－南海からの香り－』佐賀県立九州陶磁文化館

沖縄県立埋蔵文化財センター2007『渡地村跡－臨港道路那覇１号線整備に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（３）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2013『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（４）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第67集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第68集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会
新垣 力・瀬戸哲也2005「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理　付.14～16世紀の青磁の様相整理メモ」『沖縄埋文研究』３ 沖縄県立埋蔵文化財センター
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城　靖・宮城弘樹・安座間　充・松原哲志2008「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－」『沖縄埋文研究』５ 沖縄県立埋蔵文化財センター
石井龍太2009『琉球近世物質文化の多角的研究』
上原静2008「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第11巻第２号 沖縄国際大学総合学術会
上原静 2011「琉球の塼と煉瓦」『南島考古 』第30号 沖縄考古学会
上原静 2013『琉球古瓦の研究』榕樹書林
瀬戸哲也2010「沖縄における12～16世紀の貿易陶磁－中国産陶磁を中心とした様相と組成－」『貿易陶磁研究』第30号日本貿易陶磁研究会
早坂優子2000『日本・中国の文様事典』視覚デザイン研究所編

第２節　南側石牆地区の遺構と遺物

沖縄県教育委員会1999『湧田古窯跡(Ⅳ)－県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書 第136集 沖縄県教育委員会
佐賀県立九州陶磁文化館1998『平成10年度企画展　沖縄のやきもの－南海からの香り－』佐賀県立九州陶磁文化館
沖縄県立埋蔵文化財センター2001『天界寺跡（Ⅰ）－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第２集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2003『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第14集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2007『渡地村跡－臨港道路那覇１号線整備に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（３）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第68集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
鹿児島県立埋蔵文化財センター2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(106) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会
江戸遺跡研究会2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房
備前市歴史民俗資料館2006『備前歴史フォーラム　備前焼・海の道・夢フォーラム2006～備前焼の歴史と未来像をもとめて～』備前市歴史民俗資料館

第４章

第３節　表土・撹乱層の遺物

１.中国産青磁

京都国立博物館・読売新聞社(編) 2013『特別展覧会 魅惑の清朝陶磁』読売新聞社
大阪市立東洋陶磁美術館(編) 2011『国際交流企画展 碧緑の華・明代龍泉窯青磁－大窯楓洞岩窯址発掘成果展』株式会社アサヒワールド
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

２．中国産白磁

沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（３）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

３．中国産染付・青磁染付

沖縄県教育委員会 1993『湧田古窯跡（Ⅰ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書 第111集 沖縄県教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（３）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

早坂優子 2000『日本・中国の文様事典』視覚デザイン研究所編

三杉隆敏・榊原昭二 1998『≪新装版≫陶磁器染付文様事典』柏書房

４．中国産褐釉陶器・無釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

京都国立博物館・読売新聞社(編) 2013『特別展覧会 魅惑の清朝陶磁』読売新聞社

５．その他の中国産陶磁器

沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2001『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第１集 沖縄県立埋蔵文化財センター

大分市歴史資料館 2003『平成15年度秋季（第22回）特別展　豊後府内　南蛮の彩り～南蛮の貿易陶磁器～』大分市歴史資料館

京都国立博物館・読売新聞社(編) 2013『特別展覧会 魅惑の清朝陶磁』読売新聞社

７．本土産磁器

沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（３）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会

(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター2007『窯跡出土の“近代陶磁”－瀬戸・美濃の近代１－』(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター編

瀬戸市歴史民俗資料館 2002『特別企画展 大正二年のせともの屋』瀬戸市歴史民俗資料館編

８．本土産陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（３）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書(106) 鹿児島県立埋蔵文化財センター

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』九州近世陶磁学会
中里太郎右衛門 1989『唐津　日本陶磁体系 13』平凡社

９. 沖縄産施釉陶器

沖縄県教育委員会 1995『湧田古窯跡(Ⅱ)－県庁舎会議棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書 第 121 集 沖縄県教育委員会
佐賀県立九州陶磁文化館 1998『平成 10 年度企画展　沖縄のやきもの－南海からの香り－』佐賀県立九州陶磁文化館
沖縄県教育委員会 1999『湧田古窯跡(Ⅳ)－県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書 第 136 集 沖縄県教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター2001『天界寺跡(Ⅰ)－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第２集 埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2002『天界寺跡(Ⅱ)－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第８集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(２)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(３)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(２)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

10. 初期沖縄産無釉陶器

新垣力 2009「16～17 世紀における琉球での陶器生産の様相とその周辺」『沖縄考古学会創立 40 周年記念シンポジウム　考古学からみた薩摩の侵攻 400 年』沖縄考古学会
新垣力 2011「無釉陶器の成立と展開」『琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館
沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(３)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(２)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

11. 沖縄産無釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(２)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(３)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(２)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 69 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

12. 陶質土器

沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)－』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 54 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(３)－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 63 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

13. 瓦質土器

沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)－』沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第 54 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
瀬戸哲也 2011「沖縄の瓦質土器について」『琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館

14. 土器・硬質土器

沖縄県立埋蔵文化財センター2001『天界寺跡(Ⅰ)－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第２集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡―県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書(２)―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 58 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡―県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（３）―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡―御内原北地区発掘調査報告書（２）―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

16. 石製品

沖縄県教育委員会2000『旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書』平成11年度沖縄県史料調査シリーズ第2集　沖縄県文化財調査報告書 第140集 沖縄県教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 埋蔵文化財センター

18. 骨製品

沖縄県教育委員会1998『首里城跡－御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告－』沖縄県文化財調査報告書 第133集 沖縄県教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター2002『天界寺跡（Ⅱ）－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第８集 沖縄県立埋蔵文化財センター

19. 貝製品

沖縄県立埋蔵文化財センター2002『天界寺跡（Ⅱ）－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第８集 沖縄県立埋蔵文化財センター

20. 円盤状製品

沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

21. 煙管

沖縄県立埋蔵文化財センター2004『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 19集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2006『首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第34集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2001『天界寺跡（Ⅰ）－首里杜館地下駐車場入口新設に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第２集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

22. 銭貨

沖縄県立埋蔵文化財センター2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2002『天界寺跡（Ⅱ）－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第８集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2010『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター

23. 青銅製品

沖縄県立埋蔵文化財センター2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2004『首里城跡－城の下地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター 第18集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2007『首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第45集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県教育委員会2008『沖縄の金工品関係資料調査報告書』沖縄県史料調査シリーズ第４集　沖縄県文化財調査報告書 第146集 沖縄県教育員会
沖縄県立埋蔵文化財センター2009『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 沖縄県立埋蔵文化財センター

24. 鉄製品
沖縄県立埋蔵文化財センター2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

25. 瓦
上原静 2013『琉球古瓦の研究』榕樹書林
沖縄県立埋蔵文化財センター2012『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（３）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター

26. 塼
上原静 2011「琉球の塼と煉瓦」『南島考古 』第30号　沖縄考古学会
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

27. ガラス製品
沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

第６章　総括

大堀皓平・金城貴子 2011『沖縄いしの考古学』（図録）沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県教育委員会 2000『旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書』平成 11 年度沖縄県史料調査シリーズ第２集 沖縄県文化財調査報告書 第140集 沖縄県教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2011『中城御殿跡－県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第58集　沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2013『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第69集 沖縄県立埋蔵文化財センター

報 告 書 抄 録

ふりがな	えんかくじあと に
書　　名	円覚寺跡2
副 書 名	右掖門地区・南側石牆地区の遺構確認調査報告書
巻　　次	一
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第70集
編 著 者 名	金城貴子、井上奈々、玉城 綾、宮里知恵、山城 勝、山本正昭、本多貴之、湯浅健太、宮腰哲雄
編 集 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　　TEL　098-835-8752
発行年月日	平成26(2014)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
円覚寺跡 (えんかくじあと)	沖縄県那覇市首里当蔵町 (おきなわけん なは し しゅりとうのくらちょう) 2－1	472018	『那覇市歴史地図』(1986)207.円覚寺	26° 21′ 82″	127° 71′ 90″	20060801～20060919 20070620～20071012 20080714～20080829 20090701～20090909 20100701～20100908 20120702～20120928	755㎡ 平成18年度:約15㎡、 平成19年度:約200㎡、 平成20年度:約300㎡、 平成21年度:120㎡、 平成22年度:70㎡、 平成24年度:約50㎡	史跡整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
円覚寺跡	寺院跡	グスク時代～近代	石牆 石積み 石敷 石列 溝状遺構 方形状の遺構	中国産陶磁器 タイ産陶磁器 ベトナム産陶磁器 本土産陶磁器 沖縄産陶器 陶質土器、瓦質土器 土器、硬質土器 西洋陶器 漆製品、石製品、玉製品 骨製品、貝製品 円盤状製品、煙管、銭貨 青銅製品、鉄製品 瓦、塼、ガラス製品 漆喰、石材 貝類・脊椎動物遺体	復元整備対象である円覚寺を取り囲む石牆が、前回調査では未確認であった南側(井戸地区周辺)でも確認された。 また、素地が粘土からなる漆製品など、出土事例のない貴重な遺物なども出土した。

要 約	第二尚氏の菩提寺であった円覚寺の復元整備を目的として、遺構確認調査を行った結果、円覚寺を取り囲む石牆が見つかった他、参道と考えられる石敷遺構、溝状遺構、その他石積みや石列など、様々な遺構が見つかった。そのほとんどが近世相当の遺構と考えられる。また、出土遺物は中国や東南アジア、日本、沖縄産など、各地の製品が得られ、中には寺院遺跡を特徴づける遺物や類例のほとんどない貴重な遺物なども出土した。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 70 集

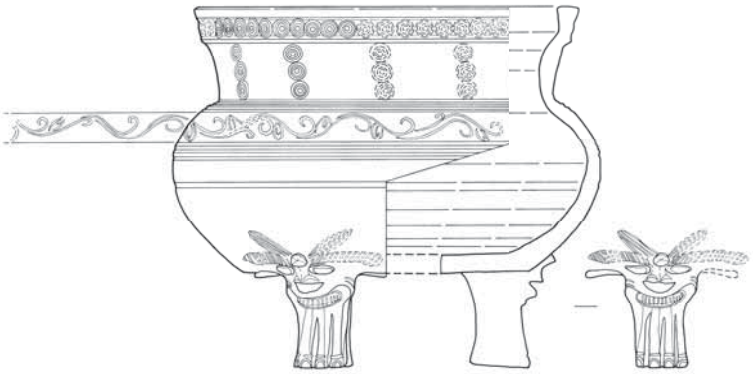
円覚寺跡（2）

－右掖門地区・南側石牆地区の遺構確認調査報告書－

発行年　平成 26 (2014) 年 3 月
発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL　098 (835) 8751・8752

印　刷　株式会社　尚生堂
〒901-2114　沖縄県浦添市安波茶 1-6-3
TEL　098 (876) 2232
FAX　098 (876) 2332

© 沖縄県立埋蔵文化財センター　2014　Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる



表：漆製品（壺）
裏：初期沖縄産無釉陶器（香炉）